
鉄槌と清風

deburu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄槌と清風

【Nコード】

N8696S

【作者名】

deburu

【あらすじ】

遙か昔古代ベルカの時代、鉄槌の騎士と共にあつた清風の騎士、一度は閉じたはずの物語が、再び動き始める。海鳴の街で再び始まる物語…遙かな時を越えて絆は再び結ばれるのか……？

1：八坂良彦（前書き）

初投稿です。魔法少女リリカルなのはFFで、一応メインヒロインはヴィータ。

主人公は、転生なし、最強ではないオリ主物になります。

開始時期はA's少し前から。

拙い文章で、更新はランダムになりますができればStriker'sと、その後までいければと思います。

1：八坂良彦

夢を見ていた……西洋のお城のような場所、嗅ぎ慣れないのに、何処か知っているような匂い……。

辺りは薄暗い、空を見れば少しだけ靨く空が見える、其処以外は雲が厚く立ち込めている……。

ふと視線を上げると、そこに赤い髪の少女が空を見つめていた……
そつだ、彼女を探して居たんだ、と、何故かわかる。

「……、此処に居たのか、探したよ」

「んだよ、なんのようだよ？」

「そんなに気を荒げるなよ、……、ほら」

持ってきていた、果物……リンゴに似ているけど一寸違う気がする……それを放る、少女はそれを受け取り。

「はんつ、こんな無駄な戦いばかりじゃ嫌にもなるっつーの」

そんな言葉を漏らす……今は戦乱の時代……彼女とその仲間……

（は、その戦争で先陣にたち、幾度もの戦を繰り返している。）

「ごめんな、俺らが弱いばかりに、……達に頼ってばかりで」

「お前らのせーじゃねーよ、主がこの戦いに勝ちたいッツアーから、戦ってるだけだ」

「……ん……でも、俺ももつと強くなつて、
と一緒には戦える
ようになるから、もう一寸がんばってくれよ、
もう少いで、前線に出る許可貰えそうなんだ」

「はっ、お前じゃ、出てきても足手まといだっつーの」

「んだよ、おれだって頑張ってるんだぞ、これでも だからな、
何時までも守られっぱなしじゃなくて、今度は守ってやんよ!」

「はいはい、楽しみにしてますよー、つと……さて、さつきから
呼ばれてツからもう行くぞ、これ、あんがとな」

「ああ、気をつけてな、」

少女は果物を手に飛び上がる…逆の手には鉄槌を持って……………。

「……………夢か、つてか、よくわかんない夢だったな、何処だろ、
あれ」

少年……………八坂良彦^{やまか よしひこ}は、一人布団で目を覚ます、時間を見れば午
前5時、普通ならまだ寝てる時間だが、
良彦にしてみれば、いつもどおりの起床時間だ。

「んー…つと、よしいくか」

布団から抜け出し、トレーニングウェアに着替えると、庭に出て
ゆっくりと、全身を解すようにストレッチを30分ほど繰り返し返す。

「ん…ふう…そろそろ時間かな」

その後は家を出てる、すると、一人の青年と少女が、良彦に声をかける。

「よつ、良彦、おはよう」「良彦君、おはよー」

「おはようございます、恭也さん、美由希さん」

高町恭也、高町美由希…隣の家に住む兄妹で、良彦の保護者をしてくれている高町士郎の子供で、良彦自身も小さい頃からお世話になっている人達だ。

「じゃ、今日もいくか」

恭也の掛け声で、3人揃って走り出す、良彦がこちらに戻ってからは毎朝の恒例となった出来事の一つだ。

八坂良彦…現在9歳、私立聖祥大附属小学校3年生で、高町家の次女、高町なのはと同級生、幼い頃両親をある事件で無くし、数日まえまで祖父の家で生活していた。

その祖父が先日世界、他の親類縁者はなく、以前から親交のあった、高町士郎が保護責任者となり、両親が生存していた頃に使っていた家で生活する事になった。

家は高町家の隣で、基本的な家事などは自分で行っている物の、週に何度かは高町家で食事などをご馳走になったりしている。

また、八坂の家は古くから続く古武術…八坂流合気術…を継承してきた家で、良彦も祖父から一通りの稽古をつけてもらっていた。それもあってか、朝から基礎的な修行を毎日の生活の一部としていて、こうして恭也や美由希とも朝のランニングや、偶に道場での稽古にも混ぜてもらっている。

現在は7月の終わり、学生はみな夏休みなのだが、生活リズムが既に出来上がっているため、休みであってもランニングなどの時間は変わったりはしていないのだが。

「そういえば、良彦くん、母さんが今日は家で朝ごはん準備するっていったから、寄ってってね」

「あ、うん…わかりました」

「というか、毎食家でも、いいんだぞ、父さんも母さんもそういつてるじゃないか」

「うーん、でも、自分でもできるから、大丈夫だよ恭にい、でも、あんがとな」

「まあ、何か合ったら直ぐ言えよ、良彦」

「俺の手に負えないことだったら、直ぐ言っつてば」

「ま、今日は来てくれるんだし、いいじゃない、ほら、はやくい

「」

そんな会話と共に、ランニングは町内を軽く一周して終了、高町家の庭で、ゆつくりとクールダウンしていると

「お兄ちゃん、おねえちゃん、よしくん、ごはんだってよー」

高町家の次女、なのはが声を掛けてくる。

「おはよ、でもよしくんはやめてくれ、なのは」

「えー、でも昔からよしくんだし？」

「ま、いいじゃないか、ほらいくぞ」

「あ、はい」「はい」

高町家のリビングでは、ご飯の準備を終えた、高町士郎と、高町桃子がまっていた。

「おお、きたな、すぐ食べれるから席についてくれ」

「おかえりなさい、恭也、美由希、良彦君…なのはもご苦労様」

「にははは、呼びにいったただけだね」

「なのはも少し走ったほうがいいんじゃないか、運動苦手なのは

知ってるけど」

「いや、なのはは、普通に走って転ぶからな、逆に危ないような」

「そ、そんなことないよ、全力疾走じゃなきゃ、よろめくくらいだもんっ」

「悪い、前言撤回するわ」

「ちよ、よしくん、なにそれっ!」

「はいはい、おちついて、なのは、ごはん渡してあげて」

「あ、うん、お母さん…はい、お兄ちゃん、よしくん」

「「「ん、ありがとうなのは」

「よし、皆いきわたったな、それじゃ」

「「「「「「いただきます」

リビングに食事に対する感謝の言葉が響き渡った。
夏休みの一日が又始まって行く。

2：『凧』を目指して

八坂流合気術：八坂の家に古くから伝わる武術で、通常の合気にくわえ、古流の柔術や中国拳法という所の纏絲勁などを取り入れており、より実践的な流派である。

5歳の頃から、約4年間の間、祖父から毎日のように基礎を積み上げられ、幾つかの技を習ったが、どれもまだ未熟であり、それを自分でもわかっているため、できる限りの時間を修行に充てているのであるが：夏休み明けに転校予定のため、宿題が無いのもありがたかったが。

祖父がいつていた、基礎にして奥儀：『弾き』という纏絲勁、『捌き』という歩法・体術：というか、それ以外はほとんど教わる前だった。

一応、他の技に関しては古くから伝わる書があるのだが：これ何語？というレベルで達筆すぎて全く理解できなかったのだ。

「まあ…とりあえず爺ちゃんがみせてくれた、『凧』は使いたいよなあ」

『凧』とは、祖父が見せてくれた『弾き』と『捌き』を合わせた業で、自分に向かってくるあらゆる物：サイズの限界はあれど…を、弾き、かわしていくという業で、達人は銃弾さえ弾き、かわす事ができるらしい。

実際祖父は、弓矢や、丸太などを時には弾き、時にはかわしてみせた…弾く手はほとんど見えず、かわしたときは、残像が残ったきがするが。

しかもそれを、半径1mの円から出ずに行っていったのだ、それを見て、良彦は感動し、自分も身に付けたいと望んだ…その先に待っていたのが地獄に近いとは知らず。

「えっと…このくらいでいい、かな」

人のあまりこない、海浜公園の片隅、地面に大きめの円をかき、廻りには枝からブラ上がったロープ、その先に木材が付いたものを複数。

端から見れば、何をしてるのやら、という光景だが、少年である良彦に、これ以上の道具などは準備できず、かといって高町一家に手伝いを頼めず、結果として、この仕掛けを作る事になったわけで。

「おし…んじゃ、いくかつー！」

近くにぶら下がった木材を、強く殴りつける…適当に繋がったロープ同士がそれでひっぱられ、無差別の軌道で、良彦へと殺到する。

その木材を、ある特定範囲…手で打ち払える範囲…に来た瞬間、拳に捻りを加え、『弾く』…『弾く』…弾ききれないものは上体の動きだけで、『捌く』のだが。

段々と弾けなくなり、さばけなくなり…こーんっ、と良い音と共に一本の木材が、後頭部に当たり…痛さのあまりうずくまってしまふ。

「んっ…っ…っ…っ…！」

後頭部を抑え、声も無くうずくまる事数分…気を取り直したように立ち上がり。

「もいつちよー!」

再び同じ事を繰り返して始める、良彦、だが彼はわかっているのだろうか: 『凧』とは、『制空圏』といわれる、一種の個人結界にもた、武術家としての感覚も大事だという事が: 『弾き』 『捌き』
: 『そして、『制空圏』、視覚だけに頼らず、五感すべてを研ぎ澄まし見えてくるものが必要だと。

何度も繰り返す、修行: 毎回毎回死角からの木材で失敗する、いまだ視覚に多くを頼り、その先に進めていない、その証拠: 『そして、それを見てる者がいることにも気付いていない。

赤い髪をした少女と、青い毛の大型犬: 此処暫くで町内の名物の一つになった光景だ: 大型犬を散歩するのは、引っ張られればそのままいくらでも引きずられそうな少女なのだ。

「あつちーぞ、ザフィーラ、これ帰りにアイス買ってもはやてゆるしてくれるよな?」

「(お前はアイスが食べたいだけだろう、ヴィータ)」

呆れたような念話が少女の言葉に返される。

「うっせ、んじゃお前はアイスいらねーのかよ?」

「(それとこれとは話は別だ: ん?」

「どうした?」

「いや、あちらから呻き声が聞こえた気がしたんだが」

「ん？…たしかに、なんか聞こえるな、いってみるかっ」

「構わんが、厄介ことなら直ぐ離れるぞ、主に心配をかけられん」

「わーってる、つーの」

少女…ヴィータと、大型犬…ザフィーラは、声のほうに近づいていく。

少し木々の中に入った所でうずくまる少年、その回りには、ロープでぶら下がった木材があり、ロープ同士もつながっている。

「なんだ、あれ？」

「（……ふむ）」

二人が見ているのに気付いていないのか、少年…良彦…は、再び立ち上がり木材を殴りつけ、襲い来る木材を『弾き』『捌き』…死角からきた木材に当たり、うずくまる。

「（あれ、何してんだ？）」

「（恐らくは、あの木材を避ける事による修行、なのだろうが…目にはかり頼って、死角からの物に対応しきれていない、な）」

「（はあっ、てか、ガキ一人でんなことやってんのか？）」

「（少なくとも、基礎はできてるように見える…拳のうちかた、体さばき、上体の動かし方などはしっかりしているな）」

「（つつても、ただの木材とかじゃ、あの年のガキじゃ、よけれねーんじゃね？）」

「（ああ、指導者がいれば、別だろうが…あの少年は、視覚に頼りすぎている、木材には殺気などないし、五感で感じねば無理だろう）」

「（まあ、いいや…そろそろ、もd）」

きびすを返そうとした瞬間…何かに気付いたかのように、少女の視線が少年と重なる。

「頼むぜ鉄槌の騎士！」

「そつちこそな、清風の騎士！」

一瞬の幻影、見たのはどちらか…少年か、少女か、此処に、鉄槌と清風の物語が、再び交差を始める。

2: 『凧』を目指して(後書き)

短めですが投稿。

『凧』は制空圏の一種です、魔法を使うようになると少しかわります。

次は良彦とヴィータの会話辺りの予定です。

3：邂逅…そして、会話？

その出会いは、偶然か、必然か…されど、交わった二つの軌跡は、物語を描き始める。

「ったあー…つて、みた、みたのかいまの!？」

「ああ、なんか変な声したから、来たんだけど、何してんだお前?」

「何つて…修行だよ、実験とか、自由研究にみえるか？」

「いや、修行つて普通こんな所でやるもんじゃないだろ？」

「仕方ねーじゃん、家でやるには場所が無いんだし」

「だったらどっかの道場とかないのかよっ!」

「道場は遠いんだよ、車で何時間かかるし、教えてくれる人もいねーし」

「はあ?、んなことやつてたら、怪我するぞガキ一人じゃ」

「んあっ!?!、何言つてんだそっちだつてガキじゃねーか、しかもんなでかい犬一人でとか、あぶねーし!」

「(……………狼、なんだがな)」

「んだと、こら、あたしはガキじゃねーですー」

「だったら、俺もがきじゃねーよ、ほらっ」

近づき、ぽんぽんとヴィータの頭を叩く少年…良彦…どう見てもヴィータの方が年下である。

「てつめっ、なにすんだ!」

ばしんと手が払われ、脛につま先がたたきつけられる。

「痛っー、手目、なにしてくれんだ、いきなり!」

「そっちがわりーんだろ、はっ!」

「(……ヴィータ、いきなり何をしてるんだ)」

「(だってよ、ザフィーラこいつ、なんか蹴りやすいんだよ)」

「(すまん、意味がわからん)」

「何処がわりーんだよ、一寸頭叩いただけじゃねーか?!」

「何で気安く、頭とかたたくんだっての」

「叩きやすかったんだよ!」

「意味わかんねーぞ、お前!」

「お前じゃねー、良彦って名前があんだよ、ガキ!」

「こつちだつてガキじゃねー、ヴィータツツー名前があるっての
！」

お互いの顔を思いつきり近づけ、いがみ合ったかと思うと

「はっ、修行の時間損したつツーの、まったく、さっさとどっか
いけよヴィータ」

「悪かったですよー、良彦、勝手に頭に木材打ちまくってる馬鹿、
目で見ただけじゃなくて耳とかも使っただなっ！」

お互いがふいっと、別れ、良彦は再びロープで吊るされた木材の
囲いの中へ、ヴィータはザフィーラを連れて、歩き出していく。

怒りと共に修行を再開する良彦、怒りに任せて強く木材を殴り飛
ばし、反動で強く木材に打ちつけられるのをくりかえしていた。

「まったく、なんだつツーのヴィータとか言うガキは、アイツにあ
つてから調子わりい、つつの」

ごろんと、地面に横たわり……痛みが治まるのをぶつぶつと呟き
ながら待ち……ふっと、木の間から差し込む日差しに目を瞑る。
いらだつていた心がゆっくりと落ち着き……

「そっういや、耳がとかいってたな……」

手を伸ばして、木材を軽く放るように動かす…微かながら、葉のざわめきとは違う、木材が空を切る音。

「木材が、動く時にする音、か…：それだけじゃないな、ロープからも少し音がする、ふむ」

暫くしてようやく立ち上がり

「もいつちよー！」

がつんと、木材を殴りつける…『弾き』はせず、目で見て、音を聞いて『捌く』…：死角の木材も、音を聞き、振り向いて…：受け止める、『弾く』暇がない。

だけど、受けられはする、目と耳をできる限り動かす…：目で見て音を聞いてできる限り『捌く』、間に合わないものは受ける…：何度も繰り返し、

等々死角から気付き切れなかった木材に頭をうたれる。

「つてえー…でも、いままでで一番長くできたな」

うずくまりながらも満足そうに呟く…

「耳、か…音も大事、つてことかあ…：はあ」

少女…ヴィータ…の言っていたのはこれなのか、と…：納得半分、納得できない部分半分で、溜息が出る。

「でも…：一步すすんだんだな、なら、礼はしないとな」

微笑笑のなか、良彦は呟いていた

「ヴィータ、だっけ…翠屋のシュークリーム辺りで喜ぶかな」

「ったくなんだってのあのガキは、生意気なっ」

「（あの少年も、上手く行かなくて気が立っていたんだろう、落ち着けヴィータ、騎士たるもの常に冷静にな）」

「判ってんだよ、でも、あの良彦とかいっつのは、なんか…」
「うっ、
なあ」

「…ふむ、しかし珍しいな」

「あ、何がだ？」

「（お前が一度で名前を覚えるのが、な）」

「はあ、あたしはそんなに頭わるくねーぞ？」

「（いや、此方の人の名前は覚えづらいと以前いつていた気がするが？）」

「偶々だろ、偶々」

「（それに、怒っているのにアドバイスをするというのも珍しい）」

「あ、あれは、あの馬鹿が、これ以上馬鹿にならねー用にだよっ」

「……………そうか、しかし」

「しかし、なんだよ？」

「（お前があれだけ初対面の相手と会話するのも珍しいと思ってな）」

「なんか、あたしの事どう思ってるかききたいんだけどな、ザフィーラ」

「（ふっ、さてな…ともあれ、急がないと夕食に間に合わんぞ）」

「そりゃやべえ、急ぐぞザフィーラ、ギガうまな料理が待ってる」

大型犬…ザフィーラ…と少女…ヴィータ…が掛ける、これもまたこの町の新しい日常のページ。

「（…しかし、なんであいつの目見た瞬間、なんか変な感じしたんだ、初めてあったはずなのに）」

ヴィータの思いは誰にも伝わる事無く、心の内へしまわれていった。

3：邂逅…そして、会話？（後書き）

3話目です、誰がどの台詞か一応はわかるように書いてるつもりですがどうでしょうか？

次も、会話回ですが、他のキャラも一寸であるかもしれません。

5 / 2

一寸予定変更して、魔法覚醒関連を先にいれます。

4：魔法覚醒（前書き）

デバイスの台詞などは、作者の語学能力の問題で、全て日本語にします。

4：魔法覚醒

良彦とヴィータが出会ったその日の夜：途中修行で無茶した為、何時もより擦り傷などが多く、桃子さんなどには心配されたり、風呂が沁みたり…で、その風呂で。

風呂場の鏡を、じっと見る…其処に写るのは、年齢より少し幼く見える顔、目つきはそれほどきつくは無いものの意志の強さを感じさせる。

髪は光に透かすと判るのだが、濃い青で、瞳は良く見なければ判らないが、右は黒、左は濃い翠の色をしている…体型は、鍛えているのに、がっちりとした感じはなく、無駄な筋肉も無いすらっとした体。

父も祖父もあまり大きくなかったので、心配なのは身長が何処まで伸びるか、だったりする。

「せめて170ほしいな、爺ちゃんも父さんも165くらいだったし…」

そんな事を言いながら、お湯にゆっくりと浸かってその日の疲れを解きほぐして行く。

風呂をあがってから、いつもの用に寝る前に仏前に座り、その日の事を両親と祖父へ、報告をしていた。

「……って、感じで、今日も『凧』の修行してみたんだけど、まだまだだったよ、それに途中でヴィータとかって、変なガキが」

思い出しているのか、良彦の表情が、羞恥や怒り、喜び、感謝など、くるくると変わっていき。

「変なガキだけど、そいつの一言で少しだけ、『風』が判った感じだったんだ、生意気だけど、一寸感謝してる…（それに、なんか…かわ…いや、ない）ないない」

途中から内心が一瞬もれるが聞いている人も居ないのでまあ、問題ないのだろう。

「まあ、今日も元気だったから、心配しないでくれな、爺ちゃん、父さん、母さん」

ぱんつと手を合わせ、立ち上がるうとした…その時。

『固有波動確認、キーワード認証、魔力反応確認：起動準備』

そんな声が室内に響く、それと共に、仏壇に置いてあった箱…祖先から伝わる物で何が入ってるかは判らないのだが、一族が代々受け継いできた品だ…が薄っすらと光っている、いままで何をしても開かなかった…気になって何度もあけようとしたのだ。

その箱が、開く…目に映るのは、箱の中にある、ミニチュアの籠手、それが薄っすらと青い光を放っている。

「……………って、なんか箱開いてるーっ！」

慌てて、思わず籠手を手に取る良彦に構わず、声が続く。

『汝、清風の継承者よ、我を持ち告げよ…清風は常に友とあり、かせ

友を助くは清風の勤め、清風は我が腕にあり…と』

「…清風は…常に友とあり…友を助くは…清風の勤め…」
『清風は我が腕にあり!』」

『セビュロス
西風、起動』

声に導かれるように呟く、最後の一言は、謎の声と被るように、告げる…次の瞬間、部屋を青色の光が包み込んだ。

良彦が、籠手から溢れた光に包まれた頃、隣の高町家…なのはは、驚いていた、眠る前にレイジングハートに手伝ってもらって、イメーゼトレーニングをしていたら、突然近くで魔力反応が感じられたからだ。

『マスター、魔力反応を感知、直ぐ近くに突然出現しました』

「うん…でもなんだろう、この魔力しってるような?」

『距離は、10数m程です』

「そっか…えと」

ふと、窓の外を見る、暗い中見える隣の家…八坂家、その一室から青い光が漏れている…というか、あの家には今、良彦しか居ないはずだ。

「た、大変だよ、よしくんの家からだ、それっ」

『たしかに、あそこから強い魔力を感じます』

「そんなこと言ってる場合じゃないよ、いってみよ」

『了解、マスター』

家族に見つからないよう、こっそりと家を抜け出し、庭の片隅から八坂家へ…所謂子供だけが通れる抜け道のような穴が壁にあけてあつたりする…光の元と思われる部屋を覗く。

其処には、空の青のような光を放ちながら立つ、良彦…両手に鋼色の籠手を付け、青い色の長袖のジャケット、ズボン、縁は白で彩られていて、飾り気はほとんど無い…身じろぎ一つせず、段々と光が収まり。

前触れも無く、崩れる用に倒れこむ。

「ええー！、ちよ、大変だよレイジングハート、助けなきゃ！」

『魔力の放出のせいで、一時的に魔力が尽きたものと思われます』

「いやいや、原因じゃなくて、あー、っもう、いくよっ」

勝手知ったるなんとやら、お互いの家の出入りも多い、関係上、なのはも八坂家の鍵の隠し場所をしまっていたので、玄関をあけ、中に飛び込んで、良彦の下へ。

「おじやましまーす、つて、やっぱりよしくんだ…えっと、クロノ君に伝えた方が良いのかな？」

『自然に起きるとは思いますが、魔法関連なら、そのほうがよ
しいかと』

「だよね…えっと」

なのはの近くにウィンドウが表示され、数秒の後に、少年の顔が
映し出される。

「どうしたんだなのは、こんな時間に突然？」

「ごめんね、クロノ君、一寸問題が…」

暫く後、八坂の家から今度は白い光が一瞬漏れ、静寂が訪れる。

光に包まれている間、良彦は夢を見ていた。

古い西洋風の城…辺りには数は少ないが皆でだれの 達、近く
には 達もいる。

皆が見ている空の上、見られているのは自分だ…自分の、これは
試験なのだろうか、相對している人物と、戦っているのか。

「はっ、腕を上げたな 、これをしのげれば合格って事にして
やる、いくぞっ!」

赤い髪の少女が、腕を振り、現れるのは4つの鉄球…2度目で、
それが8つに増える。

「来いよ、 、今日こそ止めてやる!」

「いくぞ、
… ルベ・フリー ツ！」

鉄球を持っていたハンマーで殴りつける、同時に赤い魔力光につつまれ、四方八方から殺到する、魔法弾。

「この程度ならっ… みせてやるよ、修めた業をっ」

言葉とは裏腹に、心は静かになっていく、自分の周りに小さな領域を設定…腕が届く範囲での風の結界、その中は完全な無風状態…して、飛び込んでくる魔法弾がその領域に飛び込んだ瞬間。

風が一瞬動きを封じ、繰り出される纏糸勁…腕をねじり、力の流れを変える業…と、小さくし強度を上げたシールド、両方の力で魔法弾を打ち砕いていく。

打ち砕くのが間に合わない物は、一瞬できる風での遅延を利用し交わし、再び戻った所を打ち落としていく。

「どうだ、
、これが だっ！」

全ての魔法弾を打ち砕き、吼えるように宣言する。

「はんっ、この間よりはましになったんじゃねーの、この間は後頭部にくらったもんな」

「てめ、あんときは、一寸制御に失敗したんだっつの、これがほぼ、完成形だっ」

「ほぼかよ、じゃあ早く完成させるよっ」

「修練じゃ多分無理なんだよ、この先は… のやり取り、実戦じ

やないと」

「んだよ、それ、ならちゃんと完成させて…死ぬんじゃねーぞ？」

「当たり前だ、そんなきもねーよ」

いつの間にか空の上で、二人は近づき、赤い髪の少女の頭をぼんぼんと叩いていた。

「あと、ぼんぼん叩くな、縮むだろっ！」

少女の言葉と共に、脛に衝撃。

「ってー、それ以上ちぢまねーよっ！」

「んだと、てめえ、もう一回やんのか？」

「上等だよ、かかってこいよ、ち…」

「そこまでだ、試験は終了だ、は次の戦から

戦場に出ることを認められた」

近づいてきたのは、がっしりした褐色の青年…青い獣の耳と尻尾…守護獣の、だ。

「おっしやー！」

「ちっ、しやーねー、足ひっぱんなよな」

「には、清風の騎士の名が与えられる、名に恥じぬようにな」

「おう、あんがとな、 いやー、 とは大違いの大人の対応だな」

「はんっ、ガキが何言ってるんだ、あたしだって大人相手なら相応に対応しますよーっての」

「んじゃ、おれは、ガキだって言いたいのか…ん？」

「「……………やんのか、こ」「」

「やめないか、ふたりとも」

くつつきそうなほど顔を近づけた二人に、台詞と共に落とされるのは、拳骨。

「「っつてーっ」「」

「まったく、戦場ではいがみ合っているには生き残れないぞ、覚えておけ」

拳骨の痛みと、青年の苦笑、皆の笑い声…少女の痛そうながら、楽しそうな顔、それが、印象的だった。

4：魔法覚醒（後書き）

魔法覚醒、記憶継承の一部です、名前や魔法なんかは、”一応”伏せています、ばればれですが。

今回は、アースラでの魔法に関する説明などになりそうです。

5：アースラにて

目が覚めた時見えたのは、白い無機質な天井で。

「知らない、天井だ……」

と、とりあえず、良くある台詞を吐いてみて、むくりと起き上がる…格好は寝る前だった為、長袖で薄手のパジャマ。

「て、というか…知らない部屋ってか？」

周りを見渡せば、白い壁、一寸した机、椅子くらいしかない、そして、見覚えが全く無いのだ。

「……何処、此処？」

「ああー、よしくん、起きて平気なの？」

「よしくんて、いうなっ、なのはー！」

扉が開いた音だったのか、プシュツと少しだけ音がした直後、聞きなれた声が掛けられる。

「つか、此処何処だよ、病院じゃないっばいし、なんでなのはがいるっ？」

「えーとね…此処は」

「その質問には、僕が答えよう」

なのはの後から、声がかかる、同じ年くらいの少年、黒い髪に目、真っ黒な服には両肩に棘が付いている。

「えーと、どちら様…あ、俺は八坂良彦っていいいます」

思わず、一礼しつつ答える、祖父から名前を聞くなら自分がまずなのれ、と、何度もいわれていたのだ。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ、ここは時空航行艦アースラの医務室になる」

「クロノ…はらうおん？」

「ハラオウン、だ…八坂だったか、詳しい話をしたいが良いだろうか？」

「あ、良彦で良いよ…んで、詳しい話って、なんだ？…というかなのはがなんとか管理局と、関係してるのか？」

「にやはは、えっとね」

「其処も含めて、僕が説明しよう、こちらも聞きたい事があるし、なのはが困った顔で、頬をかく中、冷静に言ってくる少年^{クロノ}。

「おっけ、俺も訳判らないし、説明頼む、聞きたい事ってのは判る限り答えるよ」

「すまない、とりあえず、何か飲みながら話そう、一緒にきてく

れ

「あいよー」

クロノ、なのは、良彦の順番に部屋を出て歩き出す…。

暫く歩いてたどり着いたのは広い空間に、机が変な形に並んでいる部屋で。

「何か飲みたいものはあるか？」

「俺はお茶で」

「私もお茶でいいよ」

「わかった、端にでも座っていてくれ」

良彦となのはが座る間にとってきたのか、持ってきたお茶を二人の前において、クロノ自身も自分の前にカップを置く。

「さて、まず何だが…君は魔法を知っているか？」

「……魔法って、火をばーんって撃つたり、氷の槍で敵倒したりとか、ゲームとか漫画でよくある？」

「まあ、そういう事もできるが、此处で言うのは…そうだな、見もらったほうが早いかな？」

カードを取り出し、そのカードに声を掛けると、一瞬でカードが消え、杖？が現れる。

良彦の目の前には、いま其処にいるクロノと、20歳くらいの青年が、訓練なのか、戦っている様子が写しだされる。光る弾や、ナイフを打ち合い、避け、時には光る壁で受け止めたりしている。

「この、弾や光の壁、他にも色々あるんだが、これが僕が言う魔法だ」

「…あー、あれ…なんか、知ってるような気がする、さっき夢でみたような、使い方もなんとなく、判るかも？」

「夢で…ふむ、もしかして記憶遺伝？…いや、あれは普通ではありえないし、そも彼の家は…」

「よしくん、夢って？」

「ああ、それがな…」

先ほど見た夢、それに何度か見た恐らく同じ城を見たときの夢を説明していく。

「ッて、感じで空飛んだり、色々…みたんだけど」

「そうなんだ、凄いな」

「いやまってくれ…良彦、使えるかもとっていたけど、後で実際確認させてもらって良いか？」

「ああ、良いけど…できるかは知らないぞ、気がするだけだし」

「それで構わない、じゃあ、次は管理局についてだけど…」

結構きちんと説明してくれたのだが…良く判って無い顔をしていると。

「確かね、警察と裁判所が一緒になったようなかんじなんだよ！」

と、いうなのはの一言で、良彦はなるほどッ！、と納得しクロノが苦笑していたり。

「なのはについてだが…」

と、P・T事件の概要、細かい部分は抜きで、なのはが偶然魔法に出会い、結果管理局に協力、現在も囑託扱いでいることなどを説明されて。

「ああ、なんか、俺がこっち戻ってくる前に学校暫く休んだとか、恭にいが言ってたあれかっ」

とか、納得したりしていると…クロノの横にウィンドウが一つ開き、茶色の髪の悪戯っぽい笑顔を浮かべた少女が映し出される。

「クロノ君、検査結果でたよー…っと、こんにちは、エイミィ・リリエッタです、気軽にエイミィって呼んでね」

クロノに一声掛けた後良彦に向かい声を掛ける。

「あ、八坂良彦です…検査って？」

「ああ、君の検査だよ、なのはから連絡を受けた時、君は気絶してたし、念の為にね、結果を聞いておくと良い、自分の事だし」

「なるほど、んじゃお願いします」

「はいはい、えっとね、バトルには特に異常はなし、健康そのものだね、潜在魔力はAA+、なのはちゃんよりは少ないけど、結構多いかな」

「えーと、良く判らないけど、なのははどんくらいなんだ？」

「なのはちゃんは、AAAクラスかな、かなり多いよ」

「なのはに、まけた…だと、運動が壊滅的な、なのはに」

「ちょ、運動と魔法は関係ないよっ、よしくん!」

「え、でもさっきの訓練見ると、ちゃんと体術とか、杖術っぽい動きしてたぞ、しかもしっかり修行した感じで」

「あはは、なのはちゃんの場合は、相手の攻撃を受けきってから、大威力砲撃で落とす、『砲撃魔導師』だからね」

「戦車みたいな感じなのか？」

「ちょっ、エイミィさんっ!、よしくんも変な事言わないでよっ!」

「ごめんごめん、あと、良彦君は、変換資質もあるみたいだね、

風の資質、あんまりないんだけどね」

「良く判らないけど、珍しいのか？」

「まあ、僕も風の変換資質に関してはあまり聞かないな、多いのは炎や電気だし」

「ふーん、まああって困らないならいいんだけど」

「あ、そだあとね、良彦君のデバイスなんだけど…これってアームドだよ、どうしたの？」

「デバイスって、なに？」

「魔法使うための道具だよ、レイジングハート」

『了解、起動』

声と共に、なのはもっていた赤い珠が杖に変わる。

「そのレイジングハートや僕のS2Uがデバイスだ、ミッド式は基本杖になる事が多い、後レイジングハートは……」

とりあえず、インテリジェンスとストレージの違いを教わったが、まあ会話できるのがインテリジェンスくらいしか判って無い。

「で、アームドデバイスなんだが…昔、ミッド式と勢力を2分していたベルカ式という魔法のデバイスで、カートリッジシステムという特殊な機構を使って、一時的に魔力を引き上げたりできる」

「んで…俺のがそのアームド？」

「ああ、籠手型らしいな…」

画面にウィンドウが一枚開き、鋼色の籠手が写される…シンプル
な籠手で、手の甲辺りに数本のスリットが入っている、肘位まであ
る腕甲の途中に、スジが入っていて、其処が開いた映像も写され
ている。

「腕の方のスリットが、カートリッジの装填場所だな、恐らくこ
のサイズだと、両手合わせて4本くらいが最大だろう、手の甲のス
リットはよくわからないけど」

「ふーん…まあ、とりあえず、話は大体判ったし、この後どうす
るんだ？」

「ああ、そうだった…魔法の事の確認もあるし、訓練室へいこう、
そこでデバイスも返すよ」

「おおっ、魔法使ってみろってことだな、おっし、早くいくぞっ」

すくつと立ち上がり、食堂を飛び出し…次の瞬間、戻ってくる。

「訓練室って、何処だ？」

「よしくん…駆け出す前にきづこうよ？」

「良彦…落ち着きが無いつて言われないか？」

「あはは、まあまあ、クロノ君あんないしてあげなよ」

良彦の行動に3者3様に答えるのだった。

5：アイスラにて（後書き）

今回は、良彦が時空管理局とかについての知識を得たというお話、途中かなりはぶいてますが。

次回は、実際に魔法を使用する予定です。

6：良彦の魔法

アースラ艦内の訓練室、殺風景で、壁は白、触ってみると一寸柔らかな気がする。

「さて、そういうえばさっき話が途中だったが、このデバイス何処で手に入れたんだ君は？」

「そうそう、デバイスの説明になっちゃってそっちが途中だったよね」

クロノとエイミィが待機状態の籠手型アームデバイスを差し出しながら、エイミィと共にもう一度聞いてくる。

「何処でって、うちに昔から伝わってた、開かずの箱から出てきた」

「開かずの箱って、よしくんのお爺さんとかが見せてくれた、あれ？」

「そうそれ、なんか夜いつもどおり報告したら、いきなり光って開いたんだよ、で、中にこれがあって…焦って手にとって、その後覚えてない」

「まってくれ、報告と聞いていたが、その時他に人はいなかったのか？」

「ああ、報告したのは、仏前に、だから、俺今一人暮らしというか、天涯孤独だから」

「…それは、すまない事を聞いた」

「いや、良いって、土郎さんとかが良くしてくれるから、気にして無いから」

手をひらひらとさせ、クロノを留め、デバイスを受け取る。

籠手二個をミニチュアにし、それを細いチェーンで留めたネットクレスのような感じのものだ。

「んで、これがデバイスか…あー、なんか…判るきがする」

「判るとは？」

「使い方が…ゼピュロス、セットアップ」

『了解、マスター』

良彦の声に答えるデバイス…ゼピュロス西風…その声の次の瞬間、良彦の体が青く輝き…鋼色の無骨な籠手、青を基本にし縁を白で彩った、ジャケットとズボンという格好に変わる。

「それが君のバリアジャケットなのか…魔法はどうだ、さっき使えそうだって言ってたけど」

「ああ、多分できる…ええと、ゼピュロス…風を」

『了解』

声に応え、良彦を風が包むと、そのままゆっくりと浮かび…

「おっし、いくぞっ!」

掛け声と共に、飛び出し、訓練室の中を飛行し始める。

「おおっ、ゼピュロス、加速っ!」

『了解』

更なる一言と共に、更に速度が上がる。

「なのはより少し早いくらいか?」

「そうだね、それでフェイトちゃんよりは一寸遅いかな」

「というか…良彦君だっけ、初めてなはずなのに普通に飛んじや
ってる方が凄いよ」

「そういえば、そっだな…良彦、他にできそつな事はあるか?」

クロノの声に、一旦とまり…

「んっ…ゼピュロス、俺の拳を」

『了解』

声に答えるように、良彦の両拳に風がまとわり付く。

「これが、攻撃用だと思う」

「風による、強化か…ターゲットだから、試してくれ…エイミイ」

「はいはい、それじゃ、模擬戦用のスフィアだすよー」

それに答えて、何個かの小型スフィアが壁から出現。

「いくぞ、ゼピュロスっ！」

『了解、マスター』

一気に近づき、風を纏った拳に捻りを加え、撃ちぬき…

「風速加速！」

『了解』

次のスフィアでは、手の甲に合ったスリットから、目に見える勢いで風が噴射され、速度と威力を一気に引き上げた一撃…

「『貫き…』」

『了解』

そして、全身に風を纏い…一瞬の超加速、進路上に居た小型スフィアを風圧で弾き飛ばす。

「クロノ、攻撃もさせてみてくれ、なんか、できそうなことがあるっばい」

「わかった、エイミィ最低出力で、攻撃を」

「りょうかーい、落とされた分をついかして、出力は最低で攻撃設定」

小型スファイアが、白い光に薄くつつまれ、攻撃位置をとり、射撃を開始する。

「……………『凧』」

『了解…領域設定、空間把握開始、領域内魔力把握、領域内風速、風圧制御』

言葉と共に、良彦の周りが魔力、風の流れ共に停止する…端から見ればそこに突然薄い青の光でできた球形の物体が現れたかのような感じで。

スファイアの攻撃が、青い球体との境界を越えた瞬間、その動きが何かに邪魔されたように遅くなり…良彦の風と青い魔力でできた小さな魔法陣…恐らくは魔力分散が破壊の効果を持つ…につつまれた拳で打ち消される。

何発か間に合わない物は、動きが遅くなっている間にかわされ、通り過ぎて行く。

「…せつ！」

一度目の攻撃が終わった後、一瞬で距離をつめ、幾つかの小型スファイアを殴り壊し…二度目の攻撃も先ほどの焼き増しのように、攻撃を打ち落としかわし、距離をつめ、撃ち落とすの連続で、数回繰り返した後。

スファイアは全て打ち落とされている。

「うー、つかれた」

言葉と共に、クロノとなのはのいる場所に戻ってきて、着地…一寸汗をかき、少し息が荒い。

「すごいね、よくん…でも、殴って全部落としたのは何で？」

「…いや、遠距離攻撃も多分あるけど、此処じゃ、というか、普段は使えない感じだったんだ…んで、それ自体は一種類しかなくて、後は殴るか、精々蹴るか、突っ込むか、しかなかった」

さらつとある意味での重要部分を言ってしまう良彦と、そっかー、と、それを簡単に納得するなのは。

一方で…

「エイミィ、さっきの凧というのは、解析できたか？」

「ああ、うん…えっとね」

エイミィの説明曰く…ある程度の空間の魔力と風を押しとどめ、そこに入ってきた攻撃や物にたいし、魔力攻撃なら魔力でしぼり相殺し、実体弾なら風で縛り、動きを遅くさせるもの、らしい。

「で、その後で風による拳圧強化と、破壊系の魔力拳で、魔法でも実体でも打ち砕くか、弾くか、避けるかするみたいだよ」

「それは…普通の魔法じゃなくて、希少技能レアスキルなんじゃないか？」

「そうだねー、普通そんな事できないし、聖王教会のほうと合わ

せて調べて見るよ」

「ああ、頼m…」「あぁー！」「…どうした、なのは？」

「もう、真夜中だよ、早く帰らないと朝居なかったら心配かけちゃう」

「そういえば、地球ではそんな時間か」

「へ…何時だ今？」

「えっとね、午前2時だよ、ほら」

なのはが携帯を見せる。

「おおい、後3時間くらいしかねねーじゃん、これじゃー！」

「わたしのせいじゃないよ、とにかく早くもどろつっ」

「おう、ツーわけで詳しい話は今度又頼む、戻らないと色々問題が…（恭にいとが、なのはと一緒に夜中にいたとか、ばれたらやばいっ）」

「わ、わかった…転送でおくるからポートにいこう」

何か良彦の焦りを感じたのか、クロノも微汗をかきつつ、先にたって歩き出す。

魔法という未知に出会った好奇心よりも、身近にある恐怖（怒れる恭也）のほうに勝った、そんな一瞬だった。

6：良彦の魔法（後書き）

基本良彦に中遠距離攻撃はありません、近づいてなぐるか…切り札クラスの遠距離殲滅魔法くらいです。

魔法による『凧』は、合気術の『凧』とは微妙に違う上、まだ未完成です…魔力光がみえたら、攻撃をしなければすむだけというあ、大欠点付きですので、そのうち透明になるはずです。

今回は、公園での修行シーン2回目、ヴィータとの会話辺りの予定です。

7：必殺ザフィーラ固め

結果から言えば…ランニングには間に合ったものの、寝不足と魔力を初めて使った事によるダブルの疲れで、顔色が悪いから今日は休んでおくと、恭也にいわれ、体も確かにだるいので結局ランニングは休んだ。

で、少しでも体動かすために、軽い柔軟だけは、と思って庭でやってたら、連絡を受けていたのか、桃子さんが着て、直ぐに止められて高町家のリビングに拉致され、椅子に座らされた。

土郎さん、曰く…「疲れがちゃんと取れて無い時に無理をすると、体を壊す」…だ、そうだ。

結局午前中は、朝食を食べた後、少し眠って、午後何時もと同じ位の時間に、飲み物と、おやつとして翠屋のシュークリームを分けてもらって公園へ。

待機モードのゼピュロスを首にさげ、何時もの場所で、いつもの用に修行を始める。

ただ、今日は柔軟を朝して無いので、此処で時間を多めに取って柔軟から入り、基礎の『弾き』と『捌き』を暫く黙々と繰り返し…体がすっかり暖まった所で、枝から吊るした木材を、揺らし始め、『凧』の練習に入る。

「…すうー…はあ…」

心を沈め、自分の周りに球を思い浮かべる…魔法で行った『凧』あれをイメージする。

「はっ…っ！」

球を抜けたものから、『弾き』…『捌く』…昨日よりも判る、目耳だけじゃなく、もつと別な感覚、言葉にしづらいが、第六巻のよ
うなものだろうか、其れで判る…が、それに動きが付いてこない。
気付けても『弾き』きれず、『捌き』きれない…結果、こーんつ、
と良い音を立て、後頭部に木材が当たる。

「うーん…今の所イメージできるのが、自分の手の届く範囲だから…気付いてからの時間が短いのと、動きに無駄があるって事なのか…？」

自分で、自分を評価するのは難しい…そもそも、自分の動きが客観的に見れないから余計だ。

良彦の年齢…9歳…を考えれば、そもそも『制空圏』をイメージできるだけでも十分、体が出来上がっておらず技個々の練りもまだまだなのだ。

それを指摘してくれる師がおらず、誰かに頼らない事で、少しの歪みができてしまっているのだ。

そして、昨日と同じようにそれを見ている者達もいた…赤い髪の少女、ヴィータと、青い大型犬（狼）、ザフィーラ。

「なあ、ザフィーラ…アイツの動き昨日よりかなりよくなって無いか？」

「（体の動きはあまり変わらないが…確かに、感知する精度があがっているようだ、それに…）」

「それになんだよ？」

「（極わずかだが、拳に風がまとわり付いている…昨日はそんな事は無かったと思うが）」

「マジか？……ほんとだ、少しだけ殴るのと同時に風が動いてやがる」

「（それに、魔力も強く感じられる、昨日は微弱だったが）」

「はあ？……って、昨日も微弱ながらあったのか？」

「（気付いてなかったのか？）」

「んなもん、蒐集もしてねーのに気にしねーっての！」

「（……というよりも、あの少年が気になって、気付かなかったのではないか？）」

「な、んなわけねーだろっ！」

思わず声がかくなるヴィータ…そして、昨日の繰り返しのように、声に気付いた良彦の視線とヴィータの視線が合わさる。

「あーっ、昨日の暴力女っ！」

「誰が暴力女だ、ヴィータって名乗っただろ、この木材頭突きや

るー！」

「好きで後頭部で頭突きしてねーよ、それに俺は良彦だ、八坂良彦っ」

がーっとお互いがかなりあい、又顔を近づけて行く…その二人の間に大きな体を入れ、少し引き離すのは青い大型犬（狼）ザフィーラ。

「（落ち着けヴィータ、何故いきなり其処まで熱くなる）」

「（だってよ、なんかこいつ…こう、乗りやすいつて言うか？）」

「つて、なんだわんこ…やめろつてか？」

間に入ったザフィーラに気を取られ、一旦落ち着く良彦…それを静かに見つめるザフィーラ。

「判った、わんこに免じて落ち着こう」

「わんこじゃねーよ、ザフィーラって名前があるんだこいつには」

「そうかー、ザフィーラよろしくな」

大型犬に恐怖もないのか、ザフィーラの頭をなでる良彦。

「もふもふだな、この時期暑そうだけど」

「はっ、ザフィーラはそんな弱くねーし、落ち着いてんだよ」

「ああ、確かにヴィータに比べたら、天と地ほど落ち着きが違
な」

「はあん、あたしが落ち着いて無いつてののか？」

「落ち着いてる奴は、直ぐ突つかかってこねーよっ！」

「よし、判った…てめえはあたしに喧嘩うってるんだな」

「そりゃこつちの台詞だ、やんのか？」

「上等、ぶちのめしと、「」「へぶっ」「」

再び顔を近づけ、一触即発になった瞬間…ヴィータと良彦の頭に
ザフィーラの前足が叩きつけられる。

「いってーな、ザフィーラ何すんだよ！」

「（先ほどもったが落ち着け）」

「ってー…犬に静止食らったのは初めてだ、賢いな」

と、おかしな感心をする良彦、そして…

「はあ、なんか疲れた…ヴィータとザフィーラだっけ、一寸待っ
てるよ」

「あ、ああ」

たたたと、木陰に走って行き持ってきたのは小型のクーラーボツ

クス。

「休憩すツから一寸付き合えよ」

「まあ、別にかまわねーけど」

クーラーボックスから、取り出すのはあまり冷えてないスポーツドリンクと、翠屋のシュークリーム。

「ほいよ、良かったらどうぞ…んっ、ぶぁぁ」

スポーツドリンクを一気にのみつつ、シュークリームを差し出す。

「くれるっつーなら貰うけどよ、いきなりなんでだ？」

「昨日ヴィータが耳を使えって、最後言ったじゃねーか、あれで今してる修行が少し進んだんだよ、その礼だ」

「そんな事言ったか？」

「（たしかに去り際にいつていたな）」

「覚えてねーのかよ、じゃぁシュークリーム返せっ」

「はっ、一度もらったもんは、かえさねーっつの」

はむっと、食べ始めるヴィータ…次の瞬間…

「なんだこれ、ギガうまじゃねーかつ！」

はむはむっと、一気に食いきり…良彦がまだ食べていないシュークリームに視線が釘付けになる。

「そうだろう、これは翠屋っていう喫茶店の大人気シュークリームだから…な…?」

視線に気付き、なぜか差し出さねば危険という感覚を抱き。

「…く、食つか?」

恐る恐る差し出すと、

「食う、あんがとな良彦っ」

と、嬉しそうに笑いながら、奪うように受け取って、あっという間に食べ切ってしまうヴィータ。

「あ、ああ…てか、食うのはや、とらねーからゆっくり食べよ! (…笑顔、かわいーじゃねーか、ちきしょー)」

「美味いんだから仕方ねーだろう、とまんねーんだって」

「つか、口、クリームついてんぞ」

持っていたタオルでクリームをふき取り。

「おう、さんきゅーなっ、ってなにしてんだっ!」

「クリームふき取ったんだが?」

「何で、てめえがすんだよ、良彦！」

「…まずかったか……はっ、まさか、そのクリームまで舐めたかったとか！」

「ちげーよっ、他人に拭いてもらうと恥ずかしいだろうがっ！」

「気にするな、俺は大丈夫だ、ちびっ子相手だしな」

「誰がちびっ子だ、てめえだって、身長そんなちがわねーだろ！」

一瞬の静止…

「ヴィータ、お前は言うてはいけないことを言ったっ！」

「良彦、てめえこそ、わかってんだろうな？」

そして、対峙…しようとした瞬間、ばしぱしつと、叩く音が響き、立とうとしていた二人がバランスを崩し地面に転がると、その上にザフィーラがいい加減にしろとばかり、乗りかかる。

「（本当におかしいぞ、ヴィータ…何時も以上に激しやすい）」

「ちよ、どけザフィーラ、重いっ」

「うおお、どいてくれザフィーラ、俺はヴィータに怒りの一撃をいれねばーっ」

二人はじたばたと暴れるが、暑さに加えザフィーラの毛皮による加熱で、段々と動きが鈍くなり。

「おーけい、ざふいーら…おねがいだから、どいてください、けんかはしません」

「あっちー、もう無理だざふいーら、どいてくれ」

と、降参宣言をきいて、のそりっと二人の上からようやく動くザフィーラ。

「うあー…暑い……確かアイスの屋台があた、け…かな、いくかな」

「まで、あたしもいく…この暑さじゃ…アイスでもくわねーとやっつてらんね」

「おー…んじゃ、いくか」

のそりと動き出す二人、その後を歩く大型犬…だが、アイスの屋台で…注文がかぶり、しかもそれが最後の一個だったため、アイス争奪戦が勃発…しそうになった所を、再びザフィーラ蒸しにされる事を二人はまだ知らない。

「（こちらも、中々暑いのだがな、これは）」

と、ザフィーラも思っていたとか、いないとか。

7：必殺ザフィーラ固め（後書き）

今回はほぼ、ヴィータとの会話回でした。

次回は、他の守護騎士や、はやてなどもだしてみたいですね。

8：爆撃機来襲

ザフィーラ固めで、K・Oされた翌日：その夜に、なのは経由でクロノから連絡があつて、管理局への登録とかいわれたのだが、面倒なので「任せた！」で、すませてたりする。

ともあれ、何時もの時間に、何時もの修行をやっていたのだが…どうも、何やら騒がしい声が近づいてくる事に気付いた。

「…はあ、はあ…なんだ？」

一旦動きを止め、声の方を振り向くと…ヴィータが車椅子を押し、その横にザフィーラが、車椅子には茶色の髪をショートにした少女が一人、ヴィータと会話しながら近づいてくる様子だ。

「んで、ヴィータが言った男の子ちゅうんは、この辺りにいるんか？」

「だから、あんな奴見たつてしょうがないと思っただけど、はやて」

「何言つてんねん、シュークリームご馳走になつたんやろ、そのお礼はしなくちゃあかん」

「でも、アイツがくれるつて言つたんだぞ」

「それでもや、それにヴィータがよく話す、爺ちゃん婆ちゃん以外ちゅーんがきになるねん」

「結局そつちが、本音k「今日はどうしたんだ、ちびっ子？」…」

んだと、良彦でめえいきなり喧嘩うつてんのか、シュークリーム一個で買ってやるぞ!」

近づいてくるので声をかけたら、反応がこれでした。

「あほか、毎日シュークリームもってこねーよっ、つか、あれは特別に回してもらったんだ…あ」

「特別…だった、のか？」

「ちげっ、あれ自体は翠屋の普通のだ、ただ、一寸おやつようにだな」

びつくり?しているヴィータと、慌てる良彦を交互に眺め、にやりと笑う少女…次の瞬間には、笑顔で…

「こんにちは、八坂良彦君やよね、ヴィータの保護者の八神はやていいます、よろしくな」

「ん、ああ、よろしく…って、保護者？」

「せやよ、ヴィータの保護者で、ザフィーラの飼いまやで」

「(主…私は守護獣なのですが)」

「(しゃあないやん、そんな事普通の人にいえんし)」

「(くくっ、そうだぞ、ザフィーラ、いまは我慢…あはは)」

「ん、どうしたんだ？」

「ああ、なんでもないよ、ただヴィータの彼氏が優しそうな人かなあ、っっておもてな」

「か、彼氏ってなんだよ、はやて！」

「ちょ、まつ、やさしっ…てか、俺にもえらぶけん…ふぐお…てめ、ヴィータなにしゃがる」

良彦の言葉の途中で、脛に蹴りが入れられる。

「てめっ、いま変な事言おうとしたろ？」

「何言ってた、当然のけんりいつ！？」

再び脛蹴り。

「てめ、こら、何発蹴る気だ！」

「よしひこが、あやまるまで、けるのをやめない！」

「てっ、いてえっつて、わかった、悪かっただからけるな、結構いてえっ」

「はっ、わかりやいいんだよ！」

二人のやり取りを見ていたはやては、くすくす笑い…

「仲ええなー、家のふつつかなヴィータをよろしくなあ」

爆弾を投下した。

「なあー、なにいつてんだ、なんでこれとよろしくっ?!」

「そ、そっだよはやて、なにいつてんだよ!?!」

「せやかて、仲よしさんにしかみえんし、いまも息のあった漫才みせてくれたやんか」

「「漫才じゃねえ」「」

「ほら、いまも息ぴったりや」

「ばばっと、お互い向き合い…ふと気付けば、お互いの顔が目の前で

「「うわっ」「」

ざっつと離れ、距離をお互いに取り合う。

「つーか、八神さんだっけ、結局からかいにきたって、事でいいのか?」

距離を取り直して落ち着いたのが、最初の頃の疑問が出てくる。

「ああ、ごめんなあ、二人の反応が楽しくてわすれとったよ…って、私の事ははやてで、ええよ、同い年くらいやろし」

「楽しいって、はやてえ…何処が楽しいんだよ」

「全部や…ま、それは置いといてなんやけど、良彦君、昨日はあ

りがとうな、ヴィータがなんやごちそうなつたみたいで」

「ん、ああ…別にいいよ、あれだってもともと礼のつもりだったんだし」

「せやけど、良彦君の分まで食ったんやろ、ヴィータ？」

「だってよー、あのシュークリームギガうまだったんだよ」

「まあ、翠屋さんののは、美味しい言う噂やしな、そっちは置いて、や…良彦君、良かったらなんやけど、明日にでも家きーひん？」

「それは、あれか…逆なんっ…ってえーな、ヴィータ！」

「お前馬鹿だろ、はやてが逆ナンとかしねーっての」

「んな事はわかってるよ、小粋なジョークだよ気付けよっ」

「はっ、鼻の下のばしてなにいつてんだ」

「伸びてねーしっ、つかなんでお前が怒るんだよっ」

「そりゃ、おまえ、あたしははやてのs.y」

何か言おうとしたヴィータを、ザフィーラが昨日のように抑えつける。

「おもっ、あつっ、どけよザフィーラっ」

じたばた、じたばた、じた…ばた…ばたっ。

「あれ暑いんだよな…」

昨日の事を思い出したのか、冷や汗をたらりと流す良彦。

「まあ、あつちは置いていてやね、どうやら、お家の人心配するなら、こつちからも連絡入れてもええけど？」

「置いてくなくなよっ…と、まあ別に俺は平気だぞ、というか一人暮らしだしな、世話になってる人がいるからそつちだけ、断ってけばいいし」

「その年で、一人暮らししてるん？」

「ん、つか…天涯孤独でな、だから一人、隣の家の方が世話してくれてるんだ…そろそろ助けないとヴィータ動きとまったぞ」

「そうなんか、変な事聞いてごめんな…あ、ザフィーラ退いてあげてんか」

「……………あつぢい」

「ああ、気にして無いから、そつちも気にしないでくれ…ほら、これでよければ飲んでけ」

スポーツドリンク差出…

「うー、あんがとな……………ぶあ、ってぬるいな、これ」

「冷たすぎると体に良くないんだよ、そういうのは」

「そんなもんか？」

「そんなもんだ」

「ほな明日また、此処に迎えにくるから、同じくらいの時間でええかな？」

「ああ、この時間なら此処にいるとおもつから、おっけーだ」

「ふう、ほらこれ返すよ、良彦」

「いや、全部飲んでから返されてもな、捨てとけよ、キャップと本体はばらしてな」

「ちっ、めんどくせーな」

「ヴィータ、折角間接ちゅーなんやから、もっと喜ぶもんやで？」

時間差で、爆弾の第二弾が、着弾。

「か、かんせつ…って、これ飲みかけかつ！」

「一本しか、持ってきてなかったからな、というか目の前で飲んでたし…てか、はやてお前気付いてていわなかったろ」

「か、かんせつ…てめえ、よしひこー！」

「ちよ、待て、命の恩人になしてくれらんだっ」

げしげしつと脛蹴りの連射。

「あはは、ヴィータがそない楽しそうなのは、良い事やな」

「笑ってねーでとめるよっ…てか、ヴィータもいい加減にしろ、
いてえっての」

「うっせ、しねっ、ちきしょー！」

顔を真っ赤にして、ペットボトルをもったまま、突然駆け出して
しまっ。

「て、おい、蹴り逃げかよっ！」

「まあまあ、良彦君、あとで”ちゃんと”言い聞かせとくから

「その、ちゃんと、が信用できそうに無いんだが？」

「大丈夫や、任せとき…ほな、又明日な」

「ああ…又な…って、良ければ押していこうか？」

「ああ、大丈夫やよ、一寸いったら、ヴィータも待ってるやろっ
し」

「ん、そうか…んじゃ、又あした」

「うん、ほなな」

爆撃機は、車椅子を自分で動かして差って行く。

「…疲れた」

どっときた疲れと、脛の痛さに、ゆっくりと木の根本に腰を掛ける…今日あった事を思い出し、苦笑しながら。

「…すっかり忘れられていた気がするな」

ヴィータとはやての後をゆっくりと追いかける、大型犬はちよつとさびしそうだった。

8：爆撃機来襲（後書き）

今回ははやて登場、そして爆弾投下していきました。

今回は、管理局関係の話をしようかと思えます、囑託関係とか。

9：立場と弾丸

はやてから誘われた日の夜、偶にはという事で高町家で夕食をこ馳走になり、その後なのは何か用事があるというので、引っ張ってこられた。

やはり、眠かったからといって、「そっちに全部任せる、あとよろしくっ」、は通用しなかったようだ…今から転送するから、アイスラのトップの人とも話合って、どうするかちゃんと決めてくれ、との事だ。

「話は判ったけど、クロノがトップじゃなかったのか？」

「違うよりインディさんって言う、クロノ君のお母さんが艦長さん、この間は色々いそがしかったみたい」

「ふーん、クロノの母さんってことは、俺の母さんとかと同年代かね」

「あ、それなんだけど、クロノ君で、14歳なんだよ」

「……え、マジで、なんか俺クロノに親近感が湧いてきたよ」

「にやはは、よしくん、背きにしてるもんね」

「なのはじゃなかったら、一発いつとくか？ってコースだったな、うん」

「あわわ、ごめんごめん、さっき念話で連絡したから、もう直ぐ連絡くるよ」

「念話？何それ？」

「あれ、したことないっけ…えーとね、（よしくん、きこえる？）

「

「うおっ！、頭に声が」

「（これが念話、魔導師なら、誰でもできるはずだっていった

よ）

「なぬ…どうやるんだ」

「（相手を思い浮かべて、心の中で念じるか…緊急時とかは、誰でもいいからー、って考えると聞こえる範囲の人には聞こえるって）

「

「ほっほっ、えーっと…（なのはーきこえるか、こっか？）」

「（そうそう、聞こえてるよ、これで授業中もお話とかできる

よ）

「（なるほど、便利ではあるな、ウィンドウが出るのは話しやす
いけど、誰かに見られると、まずいんだろっし）

「（そそ、だから近くに人がいる時はこれだね）」

「（了解、しかし、そうするとこれ、結構遠くまで届くんだな）」

「（そうだね、あ、そろそろ転移させるけど良いかって）」

「ん、ああ、そっちに連絡がきたのか、こっちはオツケーだ」

「(うん…じゃあ、クロノ君おねがい)」

そして、室内が光に一瞬包まれて。

次の瞬間には、アースラの転送ポートに出現する。

「いらっしやい、なのはちゃんと、八坂良彦君よね？」

出てきて直ぐにかかった声は聞き覚えが無い女性の声で、緑の長い髪の毛を、後頭部でくくっている、若い女性…額になんか文様がある。

「あ、はい、八坂良彦です」

慌てて、一礼。

「ご丁寧にも、私はリンディ・ハラOWN提督です、このアースラの艦長をしています」

そういうリンディの後には、なぜか困った顔のクロノが立っていて、肩を落としている、何かあったんだろうか？

「ささ、こちらへどうぞ、話合いの席を用意してあるから」

そういって、リンディさんは歩き出すので、遅れないように歩き出しながら、小さい声で…

「クロノ、いきなり一番偉い人がきたっばいんだけど、なんで？」

「かぁ…提督は、そういう人なんだ」

「苦労してるっぽいな」

「ははは…なれたよ」

暫くして、一つの部屋まで案内されていった。

部屋に入った瞬間感じたのは違和感…白い未来チックな壁に対し、床には赤い敷物、見える位置に盆栽、茶の湯の席でみられる日よけの傘、室内なのにししおどしの音が響いてていたのだ。

「なぁ、なのはこの勘違い日本感バリバリな空間はなんだ？」

「そつときけば」

「リンディさんのお部屋で、私も最初迎えられたときはこうだったよ、たしか『現地の人の慣れ親しんだ空間を作ること、会話を潤滑にする』とか」

「なれてないから、というかびっくりだよ！」

「どうしました、二人とも…どうぞ、座ってください」

「あ、はいほら、よしくん」

「はあ、わかりました、お邪魔します」

二人も、正座で其処へ座り。

「はい、どうぞ粗茶ですが」

と、しっかり立てられた抹茶と羊羹をだされたので

「あ、ありがとうございます」

素直にお礼をいいながら、固まった。

あれは何をしているんだろう…抹茶に砂糖とミルクを入れている。

「なのは、なのは、あれは？」

「リンディさん、甘いのが好きなんだって」

「だが、あれはないだろう…いや、個人の好みか」

小声で言い合い、クロノもそのようすを見て苦笑している。

「それで、お話なんですけれど」

「あ、はい…なんででしょう？」

「良彦君、魔導師登録はいいのだけれど、一般の魔導師登録だと、地球では魔法が使えない事になるんだけど良い？」

「えーと、詳しくおねがいします」

「ええ、まず地球はこちでは管理外世界にあたるの、管理外世界では基本的に管理局の許可無く魔法を使用できないの、あと管理外世界への渡航も禁止されています」

「ふむふむ」

「なので、管理局に一般魔導師登録すると、魔法はつかえませんが…渡航は、元々地球の人だから、そこに居ることはできるのだけだね」

「それじゃ、一般じゃなくて、魔法とかも使えるようにするには？」

「そうね、管理局に入局するか、なのはさんみたいに囑託魔導師になるか、ね」

「入局は、学校もあるし、パスで、囑託っていうのは？」

「現地での協力者ね、何か事件があったときは局員の指示で動いてもらう事になるわ…ただし、局員が居なくても魔道士などが自分のいる世界で事件を起こしたら、独自にもうごけるの」

「ようするに、囑託なら…俺以外の魔導師、たとえば、なのはが街を破壊した、とかしたら、魔法使つてとめても良いと？」

「ちよっ、よしくん、わたしそんなことしないよ！」

「たとえば、地球でなのは以外魔導師しらないから」

「まあ、その場合も魔法使用は許可できるわ、後は次元犯罪者な

んか逃げ込んで事件起こした時なんかも」

「ふむ…所で、囑託って年齢とかいいんですか、なのははなってるみたいだけど、俺も9歳だよ」

その瞬間一瞬クロノからの視線が優しくなった気にするが無視。

「ええ…哀しいけど、管理局は慢性的な人手不足で、ある程度実力があれば、子供でも就労できるようになってるの」

「なるほど」

「とはいえ、此処は管理外世界だし、そうそう次元犯罪者がきたりはしないから、魔法を使わないなら、一般でも十分よ?」

「……いえ、囑託でおねがいます…魔法は使いたいですし、一応なのはも心配だし…なにかどじしそうで」

「つて、どじとかしないよ、酷いよよしくん」

「そうだな、どじはしないが、無茶はするんだよな」

「く、クロノくん、しー!」

「ほほう、無茶はしたのか、後でそこ等辺くわしく頼むな、クロノ」

「ああ、実例は知ったほうが良い」

「ふう、判りましたじゃあ、八坂良彦君…時空管理局囑託魔導師

として、登録します、此処にサインと、こっちに掌をおしつけてね」
出てきたウィンドウに、渡されたペン？でサインし、大きな円の部分に掌を乗せる。

「はい、これで完了よ…それで、他に質問とかあるかしら？」

「あ、そつだ…これって、なんですか？」

言われて取り出したのは、ゼピュロスが出てきた箱に入っていた、ケースで、開けると中には細長い筒が12本入っている。

「これって…」

リンディは一本を取り出し眺め

「エイミィ、これ…あれかしら？」

ウィンドウが現れ、人懐っこい笑みを浮かべたエイミィが映し出される。

「そうですね、ベルカのカートリッジだと思いますけど…いま管理局にあるのとは、一寸規格がちがいますね、ゼピュロス用じゃないでしょうか？」

「やっぱりそうよね…良彦君、ベルカ式カートリッジシステムの事は聞いたのよね？」

「はい、でもこの間此処で魔法使った時は、ゼピュロスにカートリッジ無かったみたいで」

「そう、これがゼピュロスのカートリッジよ、一応使い方の説明をさせるから、聞いていってね」

「はい、ありがとうございます」

「これが、カートリッジなんだー…なんか、テレビとかで出てくる拳銃の銃弾みたいだね」

「そうだな、俺もあの箱にはいってなきゃ、そう思ってたと思うぞ」

「ああ、地球では質量兵器が使われてるんだったな」

「そうね、とはいえ管理外世界だから此方からは手を出せないわね」

「とりあえず、カートリッジの使い方と準備方法、どっちも一緒にやっちゃおうよ、クロノ君」

「そうだな、訓練室でいいだろう、いこう」

「頑張って頂戴ね、良彦君」

「はい、がんばります」

艦長室を出て、思わず

「なあ、なのは…リンディさんて、14の息子がいるんだよね？」

「そうだね、クロノが14歳だから」

「桃子さんも若いけど、あの人も若いなあ」

「にははは、たしかにそうかもね」

などと、のんきな会話をしながら、訓練室へ。

カートリッジへの魔力の込め方、カートリッジの使用訓練を行ったのだが、『貫き』は危険だった、上がった魔力分速度もあがり、訓練室の壁に衝突したのだ…

「カートリッジ使って『貫き』はもうしねえ」

とは、壁に打ち付けられ戻ってきた良彦の一言だった。

また、カートリッジは使用后、吐出するのだが…予備がないため、排出はやめて、後で抜き取り、入れ替える、という手間のかかる方法になった事も付け加える。

管理局のカートリッジは、規格外で使えなかったかららしい…どうやら、形式が古く、聖王教会辺りじゃないと無いだろうといわれた。

「で、聖王教会って、なんだ？」

だが、それを聞くには時間切れ…前回の反省を踏まえ、0時前にはなのはと一緒家に帰ったのであった。

9：立場と弾丸（後書き）

今回はアースラメインスタッフが一応登場…クロノはあんまり会話はなかったものの、一寸通じ合いました。

次回は、はやての家への及ばれ予定です。

10：八神家（昼）

二度目のアースラ訪問の翌日：午前中は何時も通りに柔軟、ランニングなどの基礎をこなし。

八神家に御呼ばれする為に、土郎さんに報告と、桃子さんからお土産として、ミニシユアの詰め合わせを預かって出かけることになった。

午後、普段なら修行をしている時間、何時もの木陰で、ぼーっと迎えが来るのを待っていると赤い髪の少女と、青い毛の大型犬が歩いてくるのが見えた。

「おいーす、ヴィータ、ザフィーラ、今日はよろしくな」

「はんっ、はやてが言うから迎えに来ただけだけだっけな」

「（…昨日は楽しそうに、良彦のことを）」

「（うっせ、ザフィーラ、楽しそうじゃねーよ、シグナムとかシヤマルに聞かれたからだろ）」

「はいはい、とりあえず、早めに案内頼むよ、生もの預かってるんだ」

翠屋の箱をもちあげ、ヴィータの頭にのっける。

「何乗っけるんだよっ、たく、仕方ねーな」

がしっとしっかりとそのはこを掴み、

「こつちだ、早く来いよ、良彦」

すたすたと、箱を持ち嬉しそうに歩き出す。

「つて、現金すぎだろ、おまえ」

「うっせ、美味しい物を美味いまま食うのは大事なんだよ」

「（ともあれ、良彦は不案内だ、歩速を合わせたほうが良いと思うが）」

「（そ、そんならい判ってるよ）」

まあ、足は遅くないし体力もあるので、遅れる事は無いのだが。

「しっかし、知らない人の家いくのって緊張するよなあ」

「どう見ても何時もとかわんねーだろ、お前」

「何を言う、スッゲー緊張して、足もがくがくだぞ」

「はっ、ならホントにガクガクにしてやんよっ!」

「ほう、できるのかよ、ん…下手に揺らすと中身ぐちゃぐちゃになるぞ?」

「ちっ、命拾いしたな、良彦」

そんな軽口を言い合いながら、暑い中を歩き…結構大きな一軒家、八神家にたどり着く。

「へー、結構大きいし、バリアフリーなんだな」

「そうじゃねーと、はやての生活が大変だろ」

「ま、そりゃそうだ」

すたすたと門の中にはいっていき、玄関をあけて

「ただいまー、良彦もついでに連れてきたぞ」

「俺はついでかよっ」

「ついでで十分だっつもの」

奥から誰か来る気配が、して

「お帰り、ヴィータ…いらっしやい、良彦君」

はやてが車椅子で出迎え、その後にピンクの髪をポニーテールにした隙の無い女性と、金髪のほんわかした感じの女性が付いてきている。

「主はやてから話は聞いている、良く来たな…私はシグナムと言う、よろしく頼む」

「いらっしやいませ、八坂良彦君…ヴィータちゃんから話は聞いているわ、私はシャルマっています、よろしくね」

「はい、八坂良彦です、今日はお招きありがとうございます」

ぺこりとお互いに一礼しあい

「ほな、挨拶も済んだし、どおぞあがってや」

スリッパを準備しながら、招き入れるはやて

「おう、お邪魔します、っと」

スリッパを履いて、すたすたと歩いていく、それを見て

「（ふむ…話には聞いていたが、歩き方に芯が通っているな、基礎はそこそここできているということか？）」

「（そうだな、だが…師が居ないらしいからな、これ以上は中々難しいだろう）」

「（とはいえ、無手のようだし、我らの中では、ザフィーラくらいしか教えられまい）」

「（…俺では、体の使い方がかなり違う、あの少年の動きは、独特だな…何処かで見たとような気もするが）」

「（まあ、ヴィータの友人だ、そこ等辺は気にしないでいいだろう）」

「（そうだな）」

と、念話でのやり取りがあったりして、リビングへ

「ああ、そつだヴィータが持つてる箱、お土産だから皆出でござ…何人いるか判らないから、ミニシユー詰め合わせにしたけど、甘いもの平気だよな？」

「ありや、あんがとなあ、こつちがお礼するのにこれじゃ、あべこべやわ」

「へんっ、良彦にお礼とかいらねーっていったじゃん」

「こら、ヴィータ、お世話になつたらお礼はせんとあかんよ、昨日だった飲み物もらつてたやろ、間ちゅーで」

「ちよ、そんな事h「あらあら、それは聞いてない話ですね、どういふ事ですかはやてちゃん」…シヤマルっ！」

「昨日ヴィータが汗だらだらで、べてツとしてた時、良彦君がスポーツドリンクあげたんや、飲みかけの」

「そんなことがつたんですか、じゃあ、ちゃんとお礼しないといけませんね、ヴィータちゃん」

「んな必要ねーよ、こんなのにっ」

「まあ、俺もちびっ子にお礼強請るほど困つてないしな」

「誰がちびっ子だ、何回も言うけど、おめえもあんまかわんねーっつのっ！」

「ほほう…又言いやがったな、ヴィータア！」

「言ったがどうした…やんのか、あつ！」

「上等だつ、表で「やめやめ、お互い恥ずかしいからで、喧嘩しちゃあかんよ」…恥ずかしくねー、ってか、八神のせいだろこれっ」

「そかなー、まあそうしとこか、ごめんなヴィータ、良彦君…ほな、こつちどうぞ」

結構広いリビングに通され、おやつに、という事で持ってきたミニシユーと、紅茶が用意されたのだが、それを持ってきたヴィータが…所謂メイド服を着て、真っ赤になっていると言う光景が見られた。

「お、おまたせしました」

真っ赤になりつつ、メイド服…普通は黒や紺色の部分が、赤で、ヴィータの髪の毛と、勝気な感じに似合っている。

「あ、ああ…あんがと、てか、なんでメイド服？」

「あたしにいうな、はやてとシャマルが、これのほうがいいって無理矢理」

「ふーん…まあ、可愛いんじゃないか、何時もそんな感じなら、もっといっ、つつあっ！」

「何言ってるんだ、この馬鹿っ」

おなじみ脛蹴りが、炸裂し、更に真っ赤になったヴィータは、お茶とかを置いて、脱兎の如く台所へ駆け込んで行く。

「ってー…褒めたのに何でだ」

「ヴィータは恥ずかしがりやさんやからな、ごめんなあ、良彦君」

「精神的に幼くてな、すまなかつた良彦」

「ごめんねー、でも可愛かったでしょ？」

「…ま、まあ…なんか新鮮だったけど」

少しして、着替えたのか普段の格好のヴィータが戻ってくる。

「まったく、もつけないかな、あんなの！」

「なんでやー、良彦君も可愛いってたやんか？」

「あんな格好はずかしいんだっての！」

「ふーん、そういう事にしとこか、ほな、おやつにしよか、その後ゲームでもどうやる？」

「俺は、其れで構わないけど、あんなゲームした事無いぞ？」

「だいじょぶや、乱闘系のゲームとかなら難しくないしなあ」

「へへ、良彦集中攻撃で即効潰してやんよっ」

「はっ、できるもんならやってみるよっ」

「……確かにヴィータが他人と此処まで言い合いするのは珍しいな」

「そうね…良彦君と仲良しなのね」

「「仲良しじゃねー」」

「タイミングぴったりに言われてもなあ？」

「ええ、確かに」 「そうねえ」

はやて、シグナム、シャマルに弄られる、良彦とヴィータ。

その間も我関せずと、餌入れのシュークリームを食べ、はやてのそばで待機しているザフィーラ。

八神家での、ある種の力関係が見える一幕であった。

10：八神家（昼）（後書き）

今回、守護騎士が全員でてきましたが、書き分けで来てるかが心配です。

今回は、八神家（夜）…夕食とか、お風呂とかあるかも？

11：八神家（夜）

なんだかんだとTVゲームや、ボードゲーム、なぜかオセロや将棋などで色々遊んでいたら、日差しが赤くなってきた。

時間をみれば、18時過ぎ…普段なら、そろそろ食事の準備の間だ。

「あー、もうこんな時間か、そろそろ帰るよ」

「え、別に泊まってけばええやん？」

「うえ、なんでこんな奴を？」

「そうね、いまからじゃ遅くなっちゃうし、そのほつが良いんじゃないかしら？」

「シャマルまで何いってんだよ！」

「いや、流石にそれは」

「子供があまり遠慮はしなくて良い、何より既にその予定で買物もしてしまっている」

「聞いてねーぞ、シグナム！」

「そうだったか、ああ、ヴィータは迎えにいらっていたからな、言い忘れたのだろう」

「そういや、言ってへんかったなあ、ごめんなあ、ヴィータ…そ

ういうわけで、帰られると食材が無駄になるんやけど」

「う…と、とりあえず士郎さんに電話してくるから、待ってくれ
じりじりと、後退し玄関のほうへ、走りさる良彦。」

「シャマルの言うとおり、良彦君、こういうのは苦手っばいなあ」
「素直な子みたいですからね、そこ等辺を読むのは簡単ですよ」
にこつと、一寸黒い微笑みで返すシャマル。

「はあ、あたし以外はその予定で動いてたんだな」

「（ヴィータは先に知っている、顔にでるしな）」
「うっせ、隠し事なんか騎士のすることじゃねーっての」

「そうだな、だが、主が決めた事に従わないのは騎士としてどう
だ？」

「う……わかったよ、あれが泊まるのを認めりゃいいんだろ」

「ええこやなあ、ヴィータ…一寸嬉しそうやで？」
ぱっ、と顔を触り確認するヴィータ。

「うそや、でもその反応は…」

「わー、ちが「おまたせ…どうしたんだ？」…なんでもねえよ！」

「何だよ、いきなり、とりあえず士郎さんからオツケー貰ったから大丈夫そうだ、というわけで、今晚よろしくおねがいます」

「よかったわあ、ほなご飯準備しよか、シヤマル、切るの手伝ってや」

「はい、わかりました」

はやてとシヤマルは、台所へ行ってしまふ。

「あー…シグナム、一寸庭借りていいかな？」

「ん…構わないが、どうするんだ」

「いつもなら食事前に、少しからだ動かすから…動かさないと落ち着かなくて」

「そういうことが、それくらいなら問題ないだろう、こつちだ」

シグナムに連れられて八神家の庭に

「結構広いな、これなら普通にできそうだ」

「ふーん、でもあの変な木材とかないぞ？」

「この時間にあんなの使うかっての、とりあえず基本だけだつて」

庭に立ち、軽くストレッチ…軽くとはいえ、20分位してるが…してから、つま先で地面に円を描く…大きさは直径2m程度だろう

か。

「一寸離れててくれるか」

一言かけて…その円なかで、小さくダッシュ、円の境ぎりぎりですり足で移動…など、体術の修練と思われる物を行っていく。

数分かけて、終了…その後、足跡をみて、円から出て無いかを確認…何回か出ていることに気付いて、一寸気落ちしたっばいとお。

「今のは…良彦の納める武術の動きか？」

「ああ…本当はこれの半分の円で、あれ以上の動きできないといけないんだけど、まだまだなあ、ってね」

「その年で、其処までできれば大したものだろうに」

「つか、変な装置の時より動き良いんじゃないか？」

「今のは『捌き』だけだからな、『弾き』も入れると、腕も振る分色々動きが変わるんだよ」

「ふーん、体術関連はよくわかんねーな」

「んじゃ、何か判るのかよ、ヴィータは？」

「そうだな、こっこのヴィータ、主はやてが呼んでいるぞ」「…ん、そうか？」

「んじゃ、後でな良彦」

「おう…所で、シグナムは何かやってるよな、とりあえずずっと隙が無いし」

「ああ、私は剣をな」

「そっかー…そのうち模擬戦してくれないか？」

「まあ、今度な…そろそろ、食事ができるぞ、戻ろう」

「おうっ」

戻ると、ダイニングのテーブルには鍋が置かれている。

「おかえりー、人数多いし、すきやきにしたで」

「へー、美味そうだな…てか、これもしかしてはやてが？」

「私もお野菜とか切りましたよ」

「味付けとかはわたしやな、其処座ってや」

開いてる椅子に座らされ

「ほな、どうぞ」

すきやきを碗に持って差し出してくれる。

「いただきますっ」

皆にいきわたった所で、声が響き、皆で食べ始める。

「うお、うまつ、美味しいな、これ」

「あたりまえだっつの、はやての飯はギガつまなんだからな」

「えへへ、そういつてくれると嬉しいナァ、お代わりもあるから、たくさん食べてや」

「おう、んじゃ、お代わり頼む」

「はい、どつぞ」

シヤマルがご飯を、はやてがすき焼きを取ってくれる…和やかに食事は終了。

グイータははやてといっしょに片付けしに台所へ。

「では、良彦君お風呂さきどつぞ」

「ん…いや、俺汗かいてるし、後でいいよ」

「だめですよ、お客さんなんだから遠慮しちゃ…はいいきますよ
シヤマルにつかまれずりずりと引っ張られていく。

「ちよ、まつ、何でひっぱるんだ」

「このまま、はいりましようね」

「いや、一人で入れるから」

「子供は遠慮しないんですよ」

そんな台詞と共に、風呂場に消えて行く。

「ヴィータ、お風呂先入ってええよー」

「はやてはどうすんだ？」

「わたしは、シグナムがいれてくれるて…暑いし、お風呂上がりのアイスは美味しいで？」

「そっか、んじゃ先はいるな」

と、ヴィータが扇動されている事を良彦はしらなかった。
一方、風呂の中では…

「頭とかは一人でできるってば」

「まあまあ、いいじゃないですか、はいお湯かけますよ」

「うぶ…ぶあ、って、背中は大丈夫だって」

その後背中を洗われ、湯船に入れられ、シャマルも入ってくる。

「って、何を？」

「何って、大きいお風呂だから、大丈夫ですよね？」

「いや、そういう問題じゃないっ…！」

「あいすーっ、アイス」

「げえっ…この声は」

がらつと風呂の扉が開き入ってくるのは、タオルを持ったヴィー
タ…当然、隠しても居ないので丸見えで…

「ちよ、まで」

「……………よしひこっ!？」

「あら、いらっしやいヴィーたちゃん」

「何で良彦が入ってるんだ!」

「シヤマルさんにひっぱられたんだよ」

「てか、こっちみんな」

びしっと、タオルで良彦の顔を叩く

「いって、てか、もうみてねーよ」

「もうって、ことは見たんだな!」

「……………」

お互い真っ赤になっている二人に

「じゃ、私は先出ますね」

と聞いて、ささっとシャマルは出て行ってしまふ。

「ちょ、まてシャマル！」

「なあ、何で出て行く！」

風呂場に残された二人は、真っ赤になつたまま固まり。

「…俺もできるよ、ヴィータはゆっくり入っとけ」

「いいよ、もう…つか、こっちみんな…」

ざばつと湯船に入ってくるヴィータ。

「何はいつてきてんだよ！」

「こっちのほうが見えねーだろ！」

背中合わせに湯船に浸かる二人……熱さか恥ずかしさか、どつちか、両方かで、真っ赤になつて…結果、茹で上がりという名の、のぼせ状態が二人出来上がった。

出てこない二人を、興味津々…心配して、見に来たはやとシャマルによって発見され救出、直ぐに飲み物とアイスが振舞われた。さらに、この一件を仕組んだのがシグナムにばれ、はやととシャマルはきつちりと絞られるのだが又別の話。

「（今回も、ほとんど出番はなかったな）」

とか、ザフィーラが一寸寂しそうだったようにみえるのは気のせ

いだろじ。

11：八神家（夜）（後書き）

夕食から風呂のお話…ご都合満載です。

今回は、誰かと模擬戦とかがいいかな、と…ただ戦闘描写は苦手なので、どうなるやら。

12：八神家（朝）

驚愕のお風呂イベントから少し…のぼせているヴィータと良彦は居間で、アイスを食べたり冷たい麦茶を飲んだりして涼んでいたのだが。

ゆっくりしている所へ声が掛かる

同じようにお風呂から上がったばかりのはやてからだ。

「なあなあ、良彦君…そのペンダント見たいのなんやの？」

風呂に入る前の良彦は、シャツの中に待機状態のデバイス…ゼピュロスを入れていたのだが、風呂上りで頭もぼうつとしていて、入れなおすのを忘れていたのだ。

それに、魔法を知らない人には説明しても判らないだろうという判断もあつたのだろう。

「あー、これが…昔から家に伝わってるもので、まあお守りみたいなもんだよ」

首にネックレスのように掛けたゼピュロス…待機状態のため、ミニチュアサイズだが…を、はずし。

「みてるか？」

「ええの？」

「別に困るもんじゃないしな」

と、はやてに差し出している…はやては、

「へー、無骨なかんじやね、でもなんかこんなちっちゃいとかわいいわ」

と、感心し、詳しくそれを弄り回しているのだが…守護騎士達はそれを見た瞬間、驚きと警戒を強める。

「（あれは、ベルカ式のアームデバイス…ではないか？）」

「（しかも、結構古そうなタイプよね）」

「（恐らく古代ベルカの時代のものだろうな…だが、あのデバイス何処かで見たような）」

「（つつーか、良彦がなんで古代ベルカのデバイスもってんだ？）」

「（判らないが…魔力量も低くは無い、もしや魔導師か、我らに気付き接近してきたか？）」

「（んー、でも…それなら、デバイス簡単に見せた上、人にわたすか？）」

「（少なくとも、普通は渡さぬだろうな）」

「（そうすると、本当にお守り代わりなのかも知れないわね）」

「（……主はやてに、書をなそうとする気配も無いし、いまは様子を見よう）」

結局シグナムのこの一言で、この場は様子を見ることができなくなった。そもそも、のぼせて、ぐったりしている良彦に何かできそうには思えず、はやてが喜んでいる状況で詰問するわけにも行かず、相手が此方を騎士と認識してるかもわからない為、此方から魔導師関係の話も振れなかったのだ。

「はい、あんがとな良彦君」

「ん、いって、見せて滅るもんじゃないし」

向こうでは満足したのかはやてが、デバイスを返し、それを良彦が又首に掛けている。

「あー、しかしのぼせたな…まだあつついよ、なあ、ヴィータ？」

「ん、ああ、そうだな、暑いな…」

「どうしたよ、いきなり元気なくなつて…あれか、アイスがまだ食いたいのか？」

「ちげーよ、なんでもねーよ」

「何でもねーって、顔はしてねーだろうよ……はっ、そうか、わりいヴィータ…早めに忘れるからな！」

「…忘れるって、なにをだ？」

「いや…そりゃ、お前…ヴィータのはだ」今すぐ忘れるー！」「ぐぶうっ」

再び真つ赤になったヴィータの鉄拳が良彦の腹を打ちつけ、悶絶する良彦。

「はあはあ、あたし、もう寝るかな、直ぐ忘れろ、ってか、記憶を失えっ！」

記憶を奪う為か、頭にも一発お見舞いし、ずんずんと寝室へと、歩きさるヴィータ。

心配そうに近づいてくるはやとシヤマル

「大丈夫かあ、良彦君：ヴィータも照れてるんやと思うよ」

「そうですね、あんなに真つ赤になってましたし」

ダメージで床に転がって呻いている良彦は、それを聞いて

「…仕掛けた張本人二人が何を…言ってる…つか、不意打ち過ぎてかなり効いた」

「ふむ…だが、さっきのは良彦にも問題があったな、女性に対してはもう少し言葉や行動を考えたほうが良い」

苦笑しながらシグナムがそういって、良彦をソファに座らせる。

「とはいえ、あの二人の被害者でもあるしな、いまは少しゆっくりすると良い、少し休んだら寝室へ案内しよう」

「あんがとシグナム、頼むよ」

「ほな、いまのうちに良彦君の使うベット、準備しとかなあかん

な
」

「そうですね、私もてつだいますよ、はやてちゃん」

はやてとシャルマルはそういって一室へ消えて行く。

その後は大したイベントも無く、就寝となる。

翌朝：何時もの癖で、5時半には起きてしまった良彦、日課のラ
ンニングに出かけようかと思っただが、流石に他人の家から勝手に
外に出て戻るわけにもいかず断念。

結果、かなり暇な時間ができた為に、そつと庭にでて、ストレッチ
や柔軟だけは、と：みつちり時間を掛けていたら、そこに声が掛
かる。

「随分早くに起きるのだな、良彦は？」

動きやすいジャージを着たシグナム：手には竹刀を持っている。

「シグナムこそ、早いな」

「朝の内に少し体を動かすのは習慣でな」

「俺ももう、何年もこうだから、朝目がさめちゃってさ：折角だ
し、一本どうかな？」

ぐっと握った拳を、シグナムに向ける：それを見てシグナムは

「5分まっしてくれ、軽く体を解す」

と、答え、軽いストレッチと素振りをしていく。

「あいよ…こつちも、準備ツと」

先ほどまでのストレッチや柔軟で体はほぐれているので、軽く整理運動のような感じで、熱が冷めないようにだけ気をつける。しばらくして、シグナムが声を掛けてくる。

「よし、此方も準備はいいぞ」

「おう…よろしく願います」

「ああ、此方こそよろしく頼む」

お互いに一礼し、構える。

シグナムは剣道の手本のような正眼：大して良彦は、左手を顔の少し斜め前に拳ではなく軽く指を曲げる程度にかまえ、右手は腰のあたりで、同じように軽く指を曲げ、腰は重心をぶれさせないように少し落とし気味、足は肩幅に開き地面をしつかりと捕らえる。

一瞬の静寂から…シグナムが竹刀を振り上げ、踏み込みながらまっすぐ振り下ろす…それを良彦が、左足を一步踏み込んで、左の拳でシグナムの持ち手に対して『弾き』を仕掛ける。

『弾き』により、左へ少しずれた竹刀が、良彦からそれ振り下ろされ、その間に良彦は続けて右足で一步踏み込み、右拳をシグナムに打ち込もうとする、が…振り降ろしを途中で止めたシグナムの竹刀が、そらされた軌道から逆袈裟気味に切り上げられる。

それに気付いた良彦は、撃ちこむ為に踏み込んだ右足をつま先を

内側に向け着地、その捻りを利用して体を左に回転させ、ぎりぎりで切り上げから逃れる。

切り上げで、できた右脇腹を狙った、良彦の追撃、先ほどの左回転の勢いに乗せた右拳が、当たる…が、来たのは硬いものを殴った衝撃…拳を受けたのは竹刀の柄…一瞬の停滞、後にお互いが距離をとるために、弾かれたように離れる。

「流石に、まっすぐ過ぎたか？」

「真っ直ぐでも十分はやいけどな…てか、やっぱり強いなシグナム」

「良彦も予想より上だ、もう少しいいこうか」

「ああ、よろしく頼む」

その後暫くは、お互いの竹刀を、拳を体に当てさせることは無く、端から見れば約束組み手のようにもみえたかもしれない。

が、段々と良彦のほうに疲れが見えて来る…シグナムの剣速ははやく、集中しなければ、反応しきれず、反応しても一本がきまらない焦り…経験の少ない少年は、その中でスタミナをどんどん奪われていっている…そして。

良彦が焦って繰り出した拳をシグナムの竹刀が、パアンと良い音をさせ弾く、次の瞬間には竹刀の先が良彦の胸へ吸い込まれ…もう一度パアンという良い音が響く。

その音と共に、後に倒れる良彦…が、疲れは見えるものの顔は笑っているように見える。

「はあ、はあ…あー、疲れた、久しぶりに人と組み手したけど、やっぱりいいな」

「そうだな…良彦は普段は相手が居ないのか？」

「あー、うん、基本一人暮らしだし、お世話になってる人は剣術の達人だけど、流石に普段から組み手はしてもらえないから、なにせあの人は木刀でやってるんで、子供にはまだだめ、っていわれてさ」

「そうか、偶にでよければ、私が相手をしようか？」

「良いのか？」

「やめといたほうがいいぞ、良彦」

がばつと起き上がった良彦に聞きなれた声が掛けられる、眠そうな顔のヴィータだ。

「何でだよ、ヴィータ」

「シグナムは戦闘好き（バトルマニア）だからな、お前強くしてもっとぎりぎりで戦いたいんだよ」

「むっ、いや、私はだな」

「いや、俺はそれで問題ないんだけど？」

「良彦もシグナムの同類かよ、たくしゃーねーな…怪我すんなよ？」

呆れたようにそう言って、ばいばいと何かを放って部屋へ戻って行く。

投げられたのは、タオルに包まれたスポーツドリンクで、良彦とシグナムに一組ずつ。

「おう、サンキューなヴィータ」

「あれも素直ではないな」

受け取って早速一気に飲みきる良彦、苦笑し、汗を軽く拭うシグナム。

「ヴィータって、判りやすいし、素直なんじゃないのか？」

「……そういう意味では、素直なのかもしれないな」

良彦のピントがずれた言葉に、微苦笑を浮かべるシグナム。

この後、朝から汗をかいた良彦はシャワーを浴びるように命じられ、一度は拒否するも、なぜかシグナムにつかまって一緒に風呂場へ連れて行かれる事になったりするのだが、それは又別な話。

12：八神家（朝）（後書き）

というわけで、流れるにシグナム相手になりました。

次回は、一寸時間を飛ばして夏休み明け辺りを書こうかとおもいます、アリサやすずかを、そろそろだそうかと。

13：転校生

結局夏休みは、魔法との出会い…使い方や戦い方の為に、なのはやくロノとの模擬戦等をしたりした、このとき一寸思った事があるが、それはそのうち明かされると思う。

さらには、はやてたち八神家との出会い、シグナムとは組み手を何度も繰り返し、シヤマルに偶に危険物質をくわされ、ザフィーラの散歩にでかけ、ヴィータと一緒にはやてにからかわれたり。

雨でも降らない限り、公園での修行はしていたので、ヴィータとはほぼ毎日あつてたきもする…。

その夏休みも終わる、今日からは学校が始まるのだ。

私立聖祥大学付属小学校3年への編入、試験は休み前に受けて合格はしている、着慣れない制服に袖を通す。

「小学生で制服とか、めんどくさいよなあ」

呟きつつも、間に合わなくても困るので、外へでると、土郎さんが待っていてくれた。

流石に転校初日なので、保護者同伴なのだ。

「おはよう、良彦君、似合ってるぞ」

「おはようございます、土郎さん」

「遅れるといけないし、早く出ようか」

そういうと、車に乗り込んで出発…校長先生に挨拶して、担任の先生…女性で、谷街先生という…に挨拶、始業式前の教室へ連れて

行かれて。

「はい、今日からクラスに新しい友達が増えます、八坂君どうぞ」

と、うながされ、好奇の視線のなか、壇上に上がって一礼、黒板に八坂良彦と、かかと書いて向き直り。

「始めまして、今日から転校してきた、八坂良彦です、よろしくおねがいします」

と、もう一度一礼し、教室を見渡せば、見覚えのある顔が一人、あっちも一寸驚いている様子だ。

「はい、この後直ぐ体育館で始業式になりますから、移動してくださいね、八坂君への質問なんかは、終わった後でね」

先生の声と共に移動が始まる…一応合格した時に手続きとかで着て、大体の場所は案内受けたがいきなり体育館に、とか言われても思っていると。

「よしくん、こっちこっち」

と、聞きなれた声。

「だから、よしくんは、やめろってのなのは」

苦笑と共に振り返れば、なのはと、金髪で気の強そうな少女、紫の髪で大人しそうな少女が立っていて。

「あ、よしくん、友達のアリサちゃんとすずかちゃんだよ」

「よろしく、アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです、よろしくね、八坂君」

「ああ、よろしく、八坂良彦だ、良彦で良いよ」

との挨拶に

「そう、じゃあ良彦、私もアリサでいいわよ」

と、アリサ

「うん、それじゃ良彦君…私もすずかかってよんでね」

と、すずか

「判った、アリサにすずかだな…んで、体育館行かないといけな
いんだよな？」

「あー、そうだった急がなくちゃ、いこ、アリサちゃん、すずか
ちゃん、よろしくん」

「あんたは走らないの、なのは、どうせこけるんだから」

走り出そうとするのはをがしっと捕まえるアリサ

「何時もこけるわけじゃないよ、3回に2回くらいだし」

「十分だ、てかやっぱ今度から一緒にランニングするか？」

「あ、朝あんな時間におきれないよ」

生徒の流れに合わせて歩きながらの会話

「朝：何時に起きてるの良彦君？」

「5時かな、色々していると直ぐ学校の時間だし」

「5時？…どんだけ早起きよあんだ」

「これが普通になってるからな、苦でもないというか、制服来てるほうが嫌だ」

「少しなのはから聞いてたけど、良彦、あんだ変わってるわ」

「アリサちゃん」

困った顔で微笑むすずか

「まあ、ある程度自覚あるから、きにしてないぞ？」

アリサの言葉を受け入れる良彦。

で、なんだかんだで、体育館に到着し、始業式…校長の話やら会ったが割愛…教室に戻ると、なにやら微妙に殺気やら怒気を含んだ視線を感じる良彦。

ちなみに用意されてた席はなのはの隣だった。

「…なあ、なのは、俺嫌われてるのかな？」

「はにゃ、そんな事無いと思うけど?」

「そうか?」

で、まあ…その後先生の話があつて、その日の日程は終了…と同時に、何人もの生徒が良彦の近くに集まってくる。

浴びせられる矢継ぎ早な質問…どれから答えたもんかと思つていると。

「はいはい、聖徳太子じゃないんだから、一人一個ずつ順番にしないよ」

と、アリサが割つて入ってくれる。

「んじゃ、前に居たのつて何処?」

「…奥の山奥、4歳くらいまでは海鳴りにいたけど」

「じゃじゃ、何で転校を?」

「んー、爺さんが死んで独りになって、保護責任者になつてくれたのが、土郎さんで、こつちに家もあつたから、近い方がいいだろつて」

「土郎さんて?」

「高町土郎さん、爺さんも父さんも、友人だつたんだ」

「高町との関係は?」

「幼馴染だな、偶にこつちきてたし、そんなときはあつた」
等々、色々と聞かれた。

結果…疲れている良彦が机に突っ伏している。

「おつかれさま、よしくん、大丈夫？」

「おう…人の相手は疲れるな」

「転校生とか、珍しいからじゃないの、良彦もきちんと答えてる
し」

「会話は大事だろう、いきなり脛蹴りとかされない限り」

「ええと、それは会話にならないんじゃないかな？」

「だから、されない限りだって、すずか」

はふうと、某暴力少女を思い出し溜息…すくつとたちあがり。

「さて、もう帰っていいなら、帰るか」

「そだね、アリサちゃんと、すずかちゃんは今日は何がある？」

「特に無いわね」

「私もないよ、なのはちゃん」

「じゃあ、家にこないかな、転校のお祝いするっていったから」

「なに、聞いて無いぞなのは、なんだそれ？」

「はっ、秘密っていわれたのにつ！」

「あはは、ま、そういう事ならお呼ばれしましよ、楽しそうだし」

「うん、私もお邪魔するね、なのはちゃん」

良彦がなのはにつめより、それを見て微笑むアリサとすすずか、平和な時間が流れているのだった。

13・転校生（後書き）

夏休みあけです、殺気と怒気は主に男子生徒から、美少女3人と仲良くしてねばーというやつですね。

今回は、一寸閑話を一話、時系列は無視してください。

閑話 1 死角のお話（前書き）

キャラ紹介も一寸いれておきました。

閑話 1 死角のお話

一寸キャラ設定。

名前：八坂 良彦（やさか よしひこ）

性別：男

年齢：9歳（A・S開始時）

誕生日：6/14

血液型：O型

魔道師ランクAA+相当

変換資質：風

希少技能：『凧』

天涯孤独の少年、保護責任者は高町士郎、基本一人暮らし、血に宿る記憶を受け継いでいる。

魔力変換資質は風、希少スキル『凧』は、自らが反応でき迎撃または回避できる空間を自分の周りに展開する、

これは、自分の周囲魔力の把握と操作、風を無風にし、その空間を掌握する。

その空間で起きる乱れに反応し、魔力攻撃は魔力で実体攻撃は風で、一瞬動きをとめるスキル。

現在の所未完成、周囲に良彦の魔力光（青）で球体ができるため、直ぐにわかってしまう。

八坂流合気術は『弾き』：纏糸勁、『捌き』歩法体術が基本で、後に幾つかの合気投げや、当身締め技などを覚える。

こちらの『凧』も、少しずつ、完成していく予定。

閑話

これは、A・S終了時の、数少ない男性陣でのお話。

「空戦やつてるとき、相手の上もしくは、相手の死角を取る事が重要になるよな？」

と、良彦

「そうだな、基本はそうなるな」

「でも、それがどうかしたの？」

クロノとユーのがそれに答える

「いやさ、機動戦闘してるときはまあ、いいんだ。ただ、白兵戦とかで、瞬動系の魔法で死角つくときあるだろう？」

「ああ、ブリッツアクションや、フラッシュムーブとかか？」

「そう、俺の場合は『貫き』なんかがそうんだけど」

「それが、問題でも？」

「ああ…アルフとフェイトは、まあ良いんだ、ただ、ヴィータとかなのは、シグナム、はやて…此処らへんかな？」

疲れた顔で、4人ほど上げるシャマルは基本そつという戦闘しない

ので除外だ。

「…どういうことだ？」

「空中での白兵戦でも上下は基本そのままだ…そして、そこでの死角は結構すくない、真後ろは読まれやすいし、真上は影が落ちる」

「たしかに、そうだね」

「で、人って言うのは飛ばないのが本来だから、真下ってというのは結構隙がでしやすい」

「それに問題があるのか？」

わからないような顔で、クロノとユーのは首を捻る。

「…スカート」

「「は？」」

「あいつら、全員騎士甲冑もバリアジャケットもスカートなんだよ…」

「…なるほど、問題だな」

「そう、だね」

「しかも俺の『貫き』は、高速移動＋風の結界つきだ…真下からの攻撃は色々問題がな」

「もしかして、誰かに言われたのかい？」

「ヴィータと模擬戦やって、したから攻撃したら、な」

「そうか、大変だったな…で、色は？」

「赤と白のしm…みてねーよっ!？」

「冗談だ、まあ…真下は取らないほうがお互いの精神衛生上良さそうだな」

「そうだね…いえばいったで、問題になりそうだしね」

「ああ、俺ももう真下は取らないようにするよ」

という、男性陣の苦悩があったとかなかったとか？

閑話 1 死角のお話（後書き）

まあ、騎士甲冑とかバリアジャケットの一部だから問題ないのかも
しれませんが、男子からすると、というお話：アルフとフェイトを
抜いたのはアルフは元々パンツスタイル、フェイトは普段からあれ
出し、ソニックはさらにあれなので。

今回は、ヴィータ辺りと軽く会話が、とばしてA・S開始か、だと
おもいます。

14：良彦とヴィータ

2学期が始まった最初の週末、久しぶりに公園で修行する良彦の姿があった。

夏休みの初めに比べるといくらか長く『凧』を続けていられる様子である、シグナムとの組み手や、基礎を繰り返した事、魔法を覚えた事で並列思考マルチタスクができるようになったのも大きいのかもれない。ともあれ、迫る木材を弾く音が木々の間に響き、良彦に触れる事が無かった木材がひゅんつと音を立てて行き過ぎる。

それを、じつと見つめるのは赤い髪の少女：ヴィータだ。

何時も通りにザフィーラの散歩にきたら久しぶりに良彦をみつけ、なんとなく見学していたのである。

そして、かこーんつという良い音と共にうづくまった良彦、そしてふと上げた顔：お互いの視線が絡まり。

「あっははは、また、また後頭部かよっ！」

「うっせ、てか何時からいやがったヴィータ！」

後頭部を痛そうに抑えながら立ち上がり、つかつかとヴィータに歩み寄る。

「一寸前から、つか、公園なんだから何時から居てもいーんじゃねーか？」

「いや、まあそうなんだけど…ともあれ、久しぶりだな」

「おう、つつても数日しかたってないけどな、夏休みはほぼ毎日

あつてたから、なんか長いようにかんじっけど」

「そっういやそっうだな、今日は一人なのか？」

「ザファイラは、シャマルが散歩してくるっつーから、暇つぶしにな、どうせ良彦のことだから学校休みならいそっうだったし」

タオルで汗を拭き、スポーツドリンクをあおり、軽く会話を交わす。

「つか、俺はどんだけ修行好きだと思われてんだ？」

「シグナムの同類レベルじゃね？」

苦笑しながらの問いに、素で返すヴィータ。

「マジでか、其処までじゃねーだろう」

「いや、あたしらの中じゃ、それが通説だぞ」

「んなふうと思われてたのか…はあ、ま、いいや…んで、暇つぶしってんなら、何か目的とかあつたのか？」

「良彦をからかおうと思つてきた」

「ほう…此処一ヶ月の修行で落ち着きを身につけた俺をか」

「身長はのびなかつたよな」

ぴきつと良彦の笑顔が固まり、米神に十字路がつかぶ。

「ほ、ほほう…どうしてそうおもうんだ、ヴィータ」

「夏休み終わる前にザフィーラ相手に、哀しそうにかたってたじやねーか」

さらっと言われる言葉に顔を赤くしながら

「まさか、みてたのか？」

「ああ、撮つといたぞ」

「今すぐそれを消去しろ、そして記憶からも消せーっ！」

「だが、断る！」

ただっとな良彦が駆け出し、それに対して逃げるヴィータ。

「くそ、相変わらず足がはえー、だが」

公園の中を走り回る少年と少女、ゆっくりとだが、その差が縮ま
って。

がしつと、良彦がヴィータを捕まえる…両手で、少女のわきの下
からもちあげて。

「ちよ、離せ、つか、あつっいっ！」

「なら、消去するって約束しろ、約束しないなら自爆をも辞さな
いぞー！」

真っ赤になつて暴れるヴィータ、しっかりと抱きしめている良彦。ザフィーラは居ないものの、いまだ蒸し暑い季節、このまま引っ付いているだけでもどちらとも体力を奪われていく。

「つか、女相手にこんなことすんな」

「はあ?...ちびっこあいてのまちがついいい!」

振り上げられた少女の細い足が、振り下ろされ、人体の中でも難しい部位である、踵が、良彦のひざに打ち下ろされる。痛さのあまりうずくまる良彦、抜け出すヴィータ。

「良彦はいつつもそんな扱いだよな、あたしのこと!」

「どつという意味が判らんけど、いまのは流石に痛いんだが、イヤ、普段、脛蹴られるのもいてーけど」

「はっ、朴念仁には良いおしおきだつっの」

「いや、ごめん、意味判んねーから」

「ったく、てめえは...はあ、疲れたし喉渴いたから、アイス、トリプルな」

「...は?」

「良彦の驕りで」

「なんでだ?」

「はっ、てめえで考えろっつの」

「む…判らないが、まあいいか、俺も喉渴いたしな」

「はあ…この修行馬鹿が」

何故か深い溜息をつくヴィータ。

「んじゃいくか、いつものアイススタンドでいいよな？」

「おう、バニラとチョコミントとオレンジな」

「はいはい、つかトリプルとか腹一杯にならないのか？」

「アイスは別腹だっつの」

「それでよく腹痛くしてんのだれだっけ？」

「うつせ、今日は大丈夫だよ、あんだだけ走って暑いし、喉渴いてんだから」

「ホントはそういう時はぬるいのとかのがいいんだけどな」

「修行馬鹿＋健康馬鹿か、お前は？」

「いや、常識だろ…違うのか？」

「多分あんまり知ってる奴はいねーんじゃねーか、良彦の年くらいだと」

「…爺さんから何時もそっぴいわれてたから、疑問にも思ってたな」

とことごと並んで歩く様は、端から見ると微笑ましい兄妹か、それとも…。

ともあれ、まだ暑い残暑の季節、アイスは冷たく美味しかったらしい。

事件らしい事件もない、そんな話。

14：良彦とヴァイタ（後書き）

まあ、短めですが、二人の会話を…事件前なので、まったりとしています。

次回はそろそろA・S開始の予定です。

15：実戦の洗礼

2学期もゆつくりと…平日は学校でかなり時間をとられ…その中には昼食を3人娘、なのは、アリサ、すずかと一緒に食べているので男子の殺気が鰻登りだったり。

休日は大抵一日修行…ヴィータが覗きにきたり、シグナムと組み手したり、無意味に長距離走ってみたり。

過ぎて、いつたりしてたのだが、此処暫くヴィータもシグナムも忙しいらしく、中々あえなかつたりもする。

そんな寒さも厳しくなり始めた師走の頃…この時期でも起きる時間や、ランニングの時間などは変わらない、一寸厚めに着込み、ライトを持つ程度の変化。

シグナムと組み手もできないので、美由希に相手してもらったりもしている…恭也と士郎は、相手にならなさ過ぎる、強すぎと言う意味で。

偶に興がのって、休みの日に八神家まで走っていても、はやて以外に一人くらいしかいなくて、一寸遊んで帰る、とかもしてたりする。

で、その日は平日でゆつくりしていたのだが…突然だった、辺り一体が結界に包まれたことに気付く。

何の結界かはわからないものの一切の喧騒が掻き消え、人の気配もなくなった…。

「なんだ、これ…」

いぶかしみながら外へ出ると、誰かの気配と共に叩きつけられるなにか…それが何か確認する前に、腕でうけようとして…接触、弾

き飛ばされ、道路へ転がされる。

ぎりぎり受身だけは取ったものの、腕の痺れと落ちた背中は少し痛む。

「つつうー、だれだ！」

一回転でたちあがり、気配に振り向けば、見たことの無い青年…落ち着いた感じの気配、青い髪で、青の獣耳、尻尾、籠手と脚甲…耳と、尻尾が、付いた半獣人とも言つ外見の相手が、空に立っている。

人の気配の無い結界、襲撃、空から…魔法関係と判断し、首に下げていた、待機状態のデバイス…ゼピュロス…を握り一言。

「ゼピュロス、セットアップ！」

『了解』

両手は鋼色の無骨な小手、長袖の青いジャケットにズボン、縁は白のシンプルなデザインの騎士甲冑を身にまとう良彦。

それをみて、構えを取る謎の青年。

「答えるきがないなら、それでもかまわねえ…捕まえて聞かせてもらおう」

『風よ』

良彦の意志に反応するようにゼピュロスが答える、風が集まり良彦を浮かばせる…左手を顔の前辺りに構え、右手は腰、どちらも拳ではなくかるく指を曲げる程度…足は軽く開き、どの方向へも一瞬でうごけるように。

お互いの視線が交錯し、動くのは同時…青年は空をすべるように右拳を打ち込み、良彦はそれに合わせるように左拳を纏絲をかけ、振りぬく…その拳に青年の拳が一瞬そらされる。

が、次の瞬間拳は開かれ、良彦の伸ばされた左腕を掴み、引き寄せて、右の膝を立てる…それに対し驚きながらも、ぎりぎりで右手を膝と体の間に入れ、同時に小さくシールドを展開。

膝を止められた青年は、右足で足払い…空戦に慣れてない良彦は、其れで一瞬バランスを崩し…そのまま左手をひかれ、一瞬背負われた後…近くの壁に向け一本背負いで投げられる。

「くっ…つくぞ」

予想外の方向への投げで遅れる受身の変わりにゼピュロスがバリアを自動展開、ダメージを軽減するも一瞬息が詰まる。

その体勢を立て直す前に、青年が、右の回し蹴り。

「『貫き』」

良彦の意志とゼピュロスの言葉が重なり、一瞬の加速でその場から回避し、一旦距離をとる。

「……………」

そのうごきを静かに見送り、構えなおす青年。

少し離れた位置で先ほどと同じように良彦も構えなおす…と、同時、今度は自分から動く。

空中で駆ける用に飛び、腰の入った右のストレート…青年は左手の籠手で受け止めながら、右足でのミドルキック。

その蹴りにあわせるように、左拳で『弾く』と同時、足首をもつて、体勢を崩させようと引く…わずかにずれた青年の体を軸にブラコンコのように自分を動かして、右足で青年の頭に向かいオーバーヘッドキックを放つ。

その蹴りを白い三角の魔法陣…シールド…で受け止め、一瞬止まった良彦の体に近距離から右拳を叩き込む。

それを此方も三角の魔法陣…色は青だが…で受け止め、そのまま距離を取り直す。

「つえーな、ちくしょう…なんか、遠くでピンクとか赤とか飛び交ってるし、まずいかね、これは」

一瞬の間…考えるが、この青年をどうにかしなければ向こうにも行けないだろうと思ひ直す。

「なら、出し惜しみは無しだな…ゼピュロス！」

『空間掌握開始』

薄っすらと青い球体に包まれる良彦

「……………」

それを見ながらも無言の青年…次の瞬間

「縛れ、鋼の軛！」

その声と共に、地面や壁から三角の牙のような魔法が飛び出してくる。

「はっ、このくらいならっ」

と、『凧』の空間に入ってきたその魔法を、一瞬の停滞のなか『弾き』で打ち砕き、『捌き』でかわす…が、それに意識を持っていかれる。

並列思考をしても、『凧』の制御に、身体操作、『弾き』の為の魔力そうさなど、多数の行動をいっぺんに行うため、未熟な良彦では、その先に繋がらない。

「その業は、まだまだ欠点が多いな……」

青年の声と共に、『凧』により、気付けても体が反応しきれない一撃が、後頭部へと打ち込まれる。

「ぐ、あ…?」

一瞬の衝撃と、なぜか浮かぶ光景

『その業は、まだまだ欠点が多いな』

そして、浮かぶのはそれを言った相手と、名前

『うつせ、ザフィーラ、判ってるから修行続けてるんだろ、最適な動作と、体を使わずに魔力だけで、止める方法を』

ザフィーラ…?

浮かんだ光景の中、服装は違うが、顔と声、台詞は一緒の青年が見える。

「ザ、フィー…ラ？」

頭部にだけ気をつけ、くらくらとゆれる意識の中、眩く名前に、青年は一瞬、苦渋と驚きの表情を浮かべる。

「すまないが、我が主の為に犠牲になってくれ… 『蒐集』」

「う、ぐ、が、あああつ」

いつの間にか取り出したのか、一冊の本を持った青年が一言唱えると、良彦の胸から青く光る球体が飛び出し、それが小さく、光も弱くなっていく。

ゆっくりとだったか、すぐにだったか、すでに良彦にはわからず、途切れそうな意識の中で。

「命までは取らない…が、暫くは動けないだろう、無理はするな」

青年のそんな声が聞こえ、意識が途切れる。

くたたりと落ちそうになる良彦を支え、ゆっくりと地面に横たえる青年。

その顔には苦渋が浮かび、だが、それを押し殺すように表情を隠すと、その場から空へと舞い上がって行く。

結界はいまだ解かれず、遠くではまだ戦っている気配、其処へ向かい飛び立つ青年。

その場には横たえられた良彦だけが残った…リンカーコアを食われ、意識を失っているなか、少年は夢を見ている。

その夢はかつてあった現実、受け継がれた遺志…そして、真実と希望…少年が起きる時にはそれを持つてくるのだろう。

だが、いまはただ、眠る…力を記憶を受け継ぐ為に、一時の休息

を。

15：実戦の洗礼（後書き）

と、言うわけでA・S開始です、が…いきなり違う場所でザフィーラとバトルです…というか、ザフィーラ以外は即効相手がわかるので、こうなりました。

また、これと同時に最初のなのはVSヴィータ戦という感じです。基本良彦が絡まない場面は、こういうことがあったよ程度の描写になると思います。

今回は、良彦の見てる夢のほうをお送りする予定です。

16：リヒトヴェッテル・ベシュテンバーク

ああ、これは夢なのだと判る時がある、いまの良彦もそんな状態だ。

誰かの視線で、それを眺めているのが判る、いまの自分よりも身長はあるのか、視界の高さに一寸違和感を感じている。

視界に写るのは戦場、幾人もの騎士が戦っている、その中で一際目立つのが…桃色の髪をポニーテールにし、片手には剣…レヴァンティン…を持つ、烈火の将シグナム。

赤い髪を三つ編みににして、手には鉄槌…グラーファイゼン…を持つ少女、ヴィータ。

この二人の騎士の前に、敵の騎士は倒れて行く。

また、少し後方では、金の髪をなびかせた女性…シャマル…が、味方の騎士を癒し。

その間皆を守るのは、青い髪青年、いや、守護獣…ザフィーラ…盾の字に表されるように、その守りは鉄壁。

彼らが、夜天の書の主を守護する、守護騎士…ヴォルケンリツター…たち、そして、更にそれをすべるのが。

白い髪をなびかせ、広域殲滅魔法をはなつ、名を与えられていない女性…夜天の書の制御人格…だ。

本来主をまもり、ユニゾンする事で更なる力を使う彼女だが、今の主は、自らの保身のため、この国の城主に自らを客将としてあつかわせ、彼女らを戦力として提供、本人は城の奥で彼女らを使役しているだけなのだ。

彼女らの近くで、共に戦っているのだろう、この夢の主は、迫り

来る剣や槍、矢などを見事に捌いてみせる。

剣を振るってきた騎士の手元を右手で『弾き』力の方向をずらし、相手の力を利用し軽く足を掛け、腹に左手を押し当てて背後へと投げ落とし、地面に背中が付くと同時、押し当てていた手の間に魔力と風が圧縮し、ドンツと衝撃をあたえ、騎士を気絶させる。

槍を突き刺そうと振るった騎士は、槍の穂先を左手で『弾かれ』前に体勢を崩した所へ、右掌に圧縮された魔力と風で顎をアツパー気味に打ち抜かれ、此方も意識を失う。

降り注ぐ矢は、一定の位置で風に巻かれ、一瞬動きが遅くなり、次々と手の中に集められ、数本纏めて、風をまとわせながら敵陣へ、投げ返す。

良彦が気付いたのは、それが自分が目標とする動きだということ、かつて祖父が見せた『凧』だということ…そしてこれこそが本来の『凧』であることだ。

自分がしていたのは、それとは程遠く、なんと未熟だったのか、それが実感できると共に。

『その業は、まだまだ欠点が多いな……』

そういったザフィーラの言葉を思い出し、確かにそうだ、と恥じ入るばかりだ。

そうして、少し意識を戦場から外していると場面が変わる。

目の前には今一緒に戦っていた騎士たち、ヴィータ、シグナム、ザフィーラ、シャマル、名も無き夜天の守護者もいる。

が、戦いの勝利に沸き立っている光景。

『どうだヴィータ、ちゃんと形になってきただろ?』

『はん、雑魚の騎士倒した程度でうかれんなっつーの』

『へっ、言ってる、シグナムとザフィーラはどう思っ?』

『そうだな、以前の試験の時に比べれば魔力も練れているし、反応もよくなっているな』

『ああ、あの時はまだ欠点が多かったが、いまはかなり安定しているようだ』

『ほらみる、わかる人にはわかるんだよ、んー、どうだねヴィータ』

『ほほう、そこまでいうなら、ギガント受けれるんだよな、』

『ちよ、まてや、あれは対個人にうつもんじゃねーだろっ!』

『うつせ、うつせ、自慢の業ならダイジョブだろ!』

『ほら、おちついてヴィータちゃん、も、あまりからかわないのよ』

『判ったよシャルル…悪かったなヴィータ』

『はっ、わかりやいいんだよ…まあ、でも、実際おめえのあれしっかりして来てるな』

『戦場でできるできないで泣き言いえないからな、やるしか無い、
って感じかな、シヤマルにも結構世話になったし』

『それが本領ですから、頼ってくれて問題ないわ』

と、会話をしていると、近くの騎士から声が掛かる。

『王子そろそろ、城へ戻りましょう』

『ああ、よし、凱旋だ、いくぞ』

その声に振り向いて歩き出そうとしたとき、城の方向で黒い光が
天に向かい伸び出す。

その光は城を取り囲むように伸び、真ん中に真っ黒なドームまで
できてくる。

次の瞬間、いま其処に居たはずの守護騎士の姿が消える。

そして、自らの体から何かが溢れぬように押さえ込もうとする夜
天の守護者。

『なにがあった、どうしてヴィータたちは消えた？』

『どうやら、書の主が城内で暗殺されたらしい、守護騎士が消え
たのは、そのためだろう…そして、あそこに見えているのは、夜天
の書の自動防衛プログラムだ』

『どういことだ？』

『夜天の書は改竄されている、蒐集にて666ページを埋めれば
大いなる力を与えるがその持ち主を殺す』

『そして、今代の主は、私が機能する400ページまで蒐集し、私と守護騎士を使い、客将となった』

苦しそつにしながらも、淡々と説明して行く。

『だが、主自身が死んだ為、自動防衛プログラムと無限転生プログラムが発動している』

『防衛プログラムは魔力がある限り消えず、無限転生プログラムが次の転生先を見つけるまで暴走する』

『なら、これだけの騎士がいるんだ、倒せば』

『無理だ主がいなくては、手のうちようがない…仮に倒しても、私がいる限りどちらも再生する、私を倒してもあれは止まらない…だから、逃げる王子、この星は滅びる』

『だが、父や兄たちはどうなる?!』

『既に書に食われているだろう、時間がない、私の意識ももう直ぐ消える、そうすれば近くににいる皆を攻撃し始める』

『…同盟国もしくは近隣の中立国へむけ、転送準備、急げ』

声に反応し、幾人もの騎士が魔力を集め出す。

『夜天の書が何処に行くかはわからないのか?』

『転生先はランダムに決められる、実際守護騎士が書本体を見な

『ければわからないだろう』

『そうか…ならば近くの国々に書の危険性を話しておかなければならないな…ヴィータ…いや、守護騎士達は、どうなる？』

『次の主の下で再生されるだろう、今代の記憶は無いが…記憶を受け継ぐのは私だけだからな』

『判った…準備できたものから転送せよ、私も直ぐ向かう』

自らの下に青い三角の魔法陣が浮かび上がる。

『では、な…名も無き友よ』

『ああ…元気で、リト』

別れを告げた瞬間、空間が振動し始める、防衛プログラムの暴走が次元震を引き起こしたのだ。

そんななか、リトと呼ばれた少年は姿を消す。

気がつけば、何処かの森の中だった…里と思われる場所に近づくと、恐れられ武器を持って追われた。

次元震は彼が目標としていた同盟国への転移に干渉、全く知らない場所へと彼は転送されていた。

言葉も通じず…夢の中の記憶だからか、良彦には言葉が日本語と判ったが…人里に近づけば追い立てられる。

リトは青い髪に黒と緑のオッドアイだった、昔の人には同じ人間

とは思えなかったのかもしれない。

いつしか、森の中を彷徨い、等々倒れた…次に目が覚めた時は、知らない場所、知らない人が近くに居て、どうやら助けられたらしい事が判った。

助けられ、生活をするうちに、言葉を教えられ、其処が山の中にある隠れ里だとした。

人の中で生きられなかった…外見や、性格などの為に…者達が集いつの間にかできた里らしい。

リトもそこで生活し、地を耕し、人と触れ合った…その中で一人の女性と出会い、子を儲け、自らの業を教えた…魔法は使えなかったが、武術としても十分のものだった。

そして、彼らの中で面白い考えと出会う。

【風は過去から未来まで常に流れ、人は死して風の中に魂をとかし、この世界を流転する、何時しか風は又一つになり、魂に新たな命を与える、風には今までの全てとこれからの全てが流れている】

輪廻転生をそんな風に捕らえる考え方…リトはそれを聞き、一つの魔法を思いつく…風に溶けた記憶を集める魔法…死の間際ゼピュロスを封印するとともに、その魔法を自らかけ、ゼピュロスへと記憶を集めさせる事にした。

『今、これを見ているのならそれは成功したのだらうと思う…私はベシユテンバーク公国第3王子…清風の騎士リトヴェッテル・ベシユテンバーク…親しいものはリトと呼んでくれた』

『この魔法は、ゼピュロスに記憶されている、そしてゼピュロスの起動には制限があった、いま此处で記憶を見てるならそれをクリアしたのだから』

『だから頼む、我が子孫よ…夜天の書を、守護騎士を、救ってやってくれ…書の力は消えるが記憶は残せる、せめて彼らに救いを』

『そのための魔法を、知識を、受け取ってくれ』

『清風の騎士の名と共に…我が友鉄槌の騎士を、その仲間守護騎士を、夜天の守護者に…どうか救いを』

その言葉とともに、良彦の中に知識が溢れる、リトが使った魔法や体術、古代ベルカの幾つかの知識。

そんな中で良彦は微笑む…全く知らない連中じゃない、寧ろ友人、友人を助ける為の知識なら喜んで受け取るうと。

知識は知識、実際に体術や魔法に反映させるには実践が必要だが、あるとないとじゃ大違いだ、『凧』だって、理想にちかづける、いやこのリトを追い越してみせる。

「先人を越えるのは、後に行く者の勤めって、爺さんも父さんもいつてたし、な」

そんな呟きと共に、夢は終わり、夢の無い眠りへと落ちる、記憶を整理し、体を回復させるための眠りへと……。。

16：リヒトヴェッテル・ベシュテンバーグ（後書き）

と言うわけで、記憶継承とリインフォースの救済フラグになります
… 実際何処まで救えるかはこの後次第で。

次回は目覚めてからのお話ですね、多分なのは、フェイトはできて
ます。

17：良彦の目覚め

目が覚めた時に見えたのは、白い天井で。

「…何処だ、此処？」

それが良彦の最初に疑問：記憶はザフィーラに倒され蒐集された部分で途切れ、夢で得た多分先祖の記憶と知識は、なんというか、並列思考で読み出せる辞書のようで、今一実感が薄い。

とか、考えて、部屋を見渡してみると、清潔な感じに白をメインにした部屋で、あまり大きくない：病室か？、と思ったとき。

ふしゅっという、何かが抜けるような音がして、扉らしき所が開く。

「ああああー、よしくん、起きてる！」

そちらに顔を向けると、驚いて、駆けってくる幼馴染：なのは…と、その後には、長い金髪をツインテールにした同じ年位の少女と、オレンジの長髪をした女性、ただ耳と尻尾が付いてるので守護獣だろうと良彦は判断した。

それともう一人、此方も金髪の少年が一人、更にその後から入ってきている、のを確認した段階で、良彦に衝撃。

「つつあーっい、何するんだなのは！」

「ああ、ごめん、驚いて止まるの忘れてた」

忘れたというより…駆け出して止まろうとしたが止まりきれなかったという所なのだろう、なのはの運動神経は悪い意味で切れてる

から。

「まったく、気絶するくらいは、恭にいたちと修行しててもあったらうっ。」

「ちがう、ちがうよ、よしくんは3日寝込んでたんだよ！」

「……は？」

「3日寝てて、起きなかったの、お医者さんは、体には問題ないし、リンカーコアも回復してるから、なんで寝てるかわからないって…あ、ただ、最初の頃は脳波がなんちゃらで、夢みてるんじゃないか、っていつてたよ」

細かい説明は、多分されてもわからないので3日寝ていた事実だけで十分だが…

「3日も修行さぼったのか…？」

なぜかそんなことに愕然とする良彦。

「ちがうでしょ、驚くのもそっちじゃないよ！」

「何言ってるんだなのは、3日だぞ3日、一日サボるとその分取り返すのに3倍かかるんだぞ、てことは元に戻すのに9日かかるんだぞ？」

「うにゃー、この修行馬鹿ー」

と、良い感じに混沌としてきた所へ、助けが現れる。

「あの、なのは…起きたなら看護師さん呼んだ方がいいんじゃないかな？」

金髪の少女の控えめな進言。

「ああ、そうだった、ありがとうフェイトちゃん」

それに、ようやく気付くなのは、呼びにいこうとして、既に廊下のほうから医者と看護師がはいつてくる所だった、金髪の少年もいるから、彼が呼んできたのだろう。

一旦良彦以外が部屋をでて、医者がよくわからない機械で良彦を診察…結果、リンカーコアも、体も何も問題ないとのことで、再度先ほどの皆が入ってくる。

今度は落ち着いていたのはから、皆の紹介をつける。

金髪ツインテールの少女が、フェイト・テストロツサ…思い出したのは以前見せてもらったビデオレター、良彦もなのはにたのまれ、それで自己紹介とか送ったな、と思い出した。

オレンジの髪をした、守護獣がアルフ…フェイトの使い魔だそうだが、ミッドでは使い魔っていうんだつけど、以前クロノから教わった事を思い出す。

金髪の少年は、ユーノ・スクライア…なのはに魔法をおしえた少年で、結界魔導師とかいうらしい…あの砲撃とかおしえたのか、と驚いたら、魔力コントロールや魔法自体について教えただけで、砲撃とかはなのはの努力のものだと知った。

「なるほど、じゃあこつちも…なのはから聞いてるかもだけど、八坂良彦、9歳だ…ベルカ式の魔法を使える、あつと、良彦でいいぞ」

「よろしくヨシヒコ、ベルカ式って今回なのはを襲った相手もたしか？」

「そうだね、よしくんが知ってたからそこは驚かなかつただけど、あの子強くて、後カートリッジで上がる魔力があそこまでとは思わなかつたから」

「あ…俺カートリッジあんまり使つて無いしな、魔力込め面倒だし、カートリッジ入れ替えも面倒だつたから」

そう、只でさえ管理局のカートリッジは規格にあわず、良彦の元にあるのは12発、しかも自動射出すると拾うのが面倒で取り出しも再装填も手動なのだ、結果良彦はあまりカートリッジを模擬戦などで使わなかつた。

「そういやさ、デバイスからしてミッドとベルカじゃ違うんだよね、ベルカのは実際どんな感じなのさ？」

「確か、ベルカ式はアームデバイスっていったよね、あの時の相手が持ってたのは剣と槌だつたと思うけど、アルフが相手した使い魔は素手だつたね」

アルフが疑問をなげ、ユーノが見た事を話す。

一旦考えてから良彦は

「基本、ベルカのアームデバイスは、魔力が無くても十分武器

として使えるし、頑丈だ…カートリッジシステムの上昇する魔力を用いた攻撃に普通のミッド式の杖とかだと耐えられず自壊することもあるみたいけど」

クロノから教わった事と、自分の知識を混ぜて教える。

「そのためか、アームドデバイスを使うベルカの魔導師は、おのずとそのデバイスを武器として使う武術を修めてることが基本になる」

「じゃあ、少なくとも相手は剣術と、槌を使う武術、後は無手の体術なんかが使えるってことかい？」

「そうなるなあ…俺も無手の方だけどな、デバイスがこれだし」

ベット横にあったミニチュアの籠手を見せながら、苦笑。

「これがヨシヒコのデバイス、なんだね…名前は？」

「ゼピュロスだよ、かなり古いけど今でもしっかり使えるご先祖様の贈り物、かな」

フエイトの問いに答え、微笑。

それにユーノが反応する。

「ご先祖様って、どういう事、というかそもそもヨシヒコって、地球の人なのに何でアームドデバイスと魔法を？」

「なんか、家にずっと伝わってた箱があったんだけど、夏休みはいつて直ぐにそれが開いて、中にはいつてた…んで、なんとなく使

い方が判ったから使ってたんだけど？」

「普通は、それじゃ使えないんだけどね、まあなのはも似た感じだけだ」

その答えに苦笑するユーノ。

「なんか、普通じゃないって、言われてる気がするよ」

「いや、言われてるだろ、確実に」

「ち、ちがうよ、規格外だなとは思ってるけど」

「やっぱり、普通じゃないって思ってたんだ！」

じりじりとユーノににじり寄るなのは。

「…ごめんなのは、私も話を聞いたとき普通じゃないっておもったよ」

其処に横からフェイトが一撃、崩れ落ちるなのは。

「ま、ヨシヒコも回復してよかったじゃないか、なのはもかなり回復してるし、レイジングハートもバルディッシュももう直ぐ治るんだろ？」

少し笑いながら、なのはを立ち上がらせるアルフ。

その言葉に、良彦が

「そういえば、何があったんだ、あの日」

4人に向かって問いを投げかける。

それに答える4人：最初は赤い髪の少女：敵同士の会話でヴィータと言う名前は判明：からなのはが襲撃されたこと、その猛攻で、後少して倒されそうになった事。

其処へ、裁判も終わりなのはに合いに着ていたフェイト、アルフ、裁判の証人として本局へいつていたユーノが、襲撃されているのを知り援護に、ぎりぎりでののはを救出。

逆にヴィータを追い詰めたが、更なる増援：剣を使う女性、フェイトとの戦闘中に名をなのつたらしい、烈火の将シグナムと…と使い魔が一体。

これをフェイトがシグナムを、使い魔、ベルカでいう守護獣をアルフが、ヴィータをユーノが相手取るのだが、おされ気味な上、転送しようにも結界が厚くできない。

救援され、小型の守護回復結界にいたなのはが、スターライトブレイカーで、結界を撃ち抜くことを決め、カウントダウン開始。

カウント終了直前に、突然なのはの胸から手が生え、リンカーコアから魔力を奪われる…が、そのままスターライトブレイカーを撃ち、結界を破壊。

結界を破壊された敵は、それぞれ撤退し、魔力を奪われたなのはと、自宅付近で同じような状態だった良彦…なのはやヴィータ達の戦闘とちがい、此方はあまり大きな魔力の動きが無かったため、なのはの方が決着した後発見された。

ふたたりを、時空管理局本局へと移送し、医務局で検査休養させた、というのがありました。

また、アースラが整備中で、他の艦船も借りれなかった為、地球

のとあるマンション…翠屋にほど近い…に、仮設ながら指揮所を、他のクルーも数班に分かれて、海鳴りに滞在しているようだ。

どうやら、魔導師の連続襲撃事件が地球を中心に起こっているため、その担当になったアースラスターフが動きやすいようにらしい。

それを聞いて良彦は、守護騎士が蒐集をしている事に気付く、リトの残した記憶がそれを教えてくれる。

記憶を毎回抹消される彼らは、書の完成が主…はやてだろう…を死へ追いやる事を覚えていないはずだ、そして、はやての性格からして、蒐集をはやてが望んでいるとは思えない。

さらに、守護騎士達も命じられず、自分から蒐集するとは思えない、ならばなにか緊急事態がおこったのか、と思うが…実際に話さないと其処はわからないと考える。

できれば、誰かと一対一ではなせれば…だが、ザフィーラが動いていた、倒された時の此方の言葉で、良彦が相手に気付いたのはばれた可能性が高い。

それ以前に、夜天の主がはやてと判れば管理局もほつつておかないだろう、守護騎士と全面戦争になりかねない。

ならば、何処かで彼らと話すしかない…結局は、自分も彼らの逮捕に協力するのが一番か、と考えを纏める。

「なるほど…なら俺もクロノに頼んで手伝うかな、自分を倒した相手とか、きつちり捕まえたいしな」

「私も協力するってクロノ君にいつてあるよ、レイジングハートももう直ぐ戻ってくるし」

「これで人数的には、こっちが一人多いから、動きもとりにやすい

ね

「ああ、今度あつたらぶうちめてやる」

「気をつけてね、僕は支援とかしかできないけど」

5人がそれぞれ意志を固め、守護騎士に対し相対することを決めるのだった。

17：良彦の目覚め（後書き）

地味に戦っていたので救援は遅れた感じですが、使った魔法が極端にすくなくですし…で、まあ良彦の思考はリトの知識と経験が混ざるので一寸大人びています。

次回は、カートリッジを搭載したレイジングハートとバルディッシュが戻ってきた時の戦闘でしょうか…誰対誰にするか、微妙に悩ましいですが、多分本来とは違う組み合わせになります。

18：守護騎士との邂逅

良彦が目覚めて数日…この間にフェイトが転校してきたりした、アルフ子犬モードは可愛かった、ユーノはフェレットモドキになつてた…なんでだ？

まあ、数日後、なのはとフェイトのデバイスの修理完了との知らせ、管理局海鳴り出張所指揮所である、マンションでエイミーさんから、それを受け取った時、アラートが鳴り響く。

海鳴り市内を警戒していた武装局員が被疑者二人を補足、強装結界に閉じ込めたとの連絡…また、執務官であるクロノもすでに現場に到着しているという。

「エイミーさん、俺らも向かいます」

「デバイスの説明、まだなのにい、でも急いで行ってくれ、二対一じゃクロノ君も危険だから」

「はい、いこうフェイトちゃん、よしくん」

「うん、急ごう」

転送ポートから結界内へ転送…その間に応援を送った事へと通信結界内にいたのは、ヴィータとザフィーラ…クロノが足止めしているものの、二対一では、確かに部が悪そうだ。

「とりあえず、俺は先に上がる、そっちも気をつけるよ、なのは、フェイト」

青い魔力光に身を包み、騎士甲冑…長袖の青いジャケットにズボ

ン、縁取りは白い…に身を包み風を纏ってクロノのそばへと飛んでいく。

目の前にはヴィータとザフィーラ…応援が来た事にか、良彦を見てか、ふたりとも苦渋の表情をしている。

「クロノまたせた、あつちの赤い方は俺が抑える」

「判った、なら、僕は使い魔のほうを抑える」

と、行ってる間に後で、ピンクと金の閃光…螺旋型の魔法陣につつまれ、なのはとフェイトがセットアップしていく…その手には新しいデバイス。

遠目ながら気付くのは、両方ともカートリッジシステムを搭載してる事。

「って、ミッドのデバイスにカートリッジは危険なんじゃないのか？」

ヴィータを牽制しながら、クロノに声を掛けると。

「レイジングハートもバルディッシュも望んで、あの二人も望んだ…とめれるか、それ？」

「…無理か、まあいい…今はこっちが先決、抑えるぞ」

「ああ、いこう」

と、言っている所へ、結界上部から紫の閃光がヴィータ、ザフィーラたちとの間にあるビルへ落下…煙が晴れた其処には、烈火の将シグナム。

「だー、一人増えた」

「だが、こっちは更に二人増えたな」

その間にアルフとユーノも駆けつけ、状況だけ見れば三対六…倍の戦力になる。

「（なら、クロノ、こっちは抑えるから、クロノとユーノで、もう一人探してくれないか、この間の記録見たけどバックアップ多分一人いるよな？）」

「（そうだな、あの三人は書を持ってない様子だし、判った）」

念話で良彦とクロノが簡単に相談し、すぐさまクロノが指示を出す。

「（なのは、フェイトはあの剣を持つ女性を、アルフは使い魔を、良彦は少女を抑えてくれ）」

「つーわけで、其処のちびっ子、相手は俺だけど、良いよな？」

指示に従い、ヴィータへと挑発するように、手招き…なんかフェイトとなのはが一寸納得行かないような顔をしているが無視。

というか…シグナムが本気になったら、恐らくあの二人でも負ける可能性はあるし、書を先に確保できれば、やりようはあると考えていた。

「はっ、上等だよ、アイゼンの落ちにくい鎧にしてやらあ」

挑発に乗り飛び出してくるヴィータ…他の皆から離れるように少し距離をとって、相對する。

その間に、シグナムへ一気に接近するフェイト、それを支援するように射撃や砲撃を繰り返すのは…ザフィーラに肉弾戦を挑むアルフという構図が出来上がる。

三人の気を引いている間に、クロノとユーノは周辺探索へ、向かった様子だ。

「へっ、できるもんならやってみる！」

一気に距離をつめる、初手は良彦…手の甲にある噴射口から、圧縮した風を吐き出し、威力速度を増した右ストレートを放つ。

ヴィータはそれをシールドで弾き、アイゼンを右手で一閃…良彦から腕一本分の辺りでアイゼンに掛かる抵抗が一気に増し、風が絡まる。

動きの鈍ったアイゼンの棒の部分を左手で『弾き』力の方向を上にずらす、一瞬でアイゼンにかかっていた抵抗と風が解け、一瞬ヴィータのバランスが崩れる。

崩れたヴィータの腹に向かい、風を纏わせた膝をカウンター気味に打ち上げるが、ヴィータの左手がそれを押さえ、同時にシールド_ド。

一瞬二人とも動きが止まり。

同時に距離を取る…にらみ合いながら、お互いなぜか少し笑っているようにも見える。

良彦が何時もの構え、左手を軽く曲げ、拳を顔の前に、右手は腰の辺りで力をためるように引き、両足は肩幅。

ヴィータはアイゼンを右手でさげもち、直ぐにでも動けるように

両足はやはり肩幅。

「清風の騎士八坂良彦、こっちは西風のゼピュロス」

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフアイゼン」

「「勝負」」

一旦のし切り直しと、名乗りをへて、再び相對する。

ヴィータの左手、指に挟まれ鉄球が4個：それを空に並べ、アイゼンで薙ぐ。

「くらえっ！」

『シュワルベフリーゲン！』

ヴィータの掛け声と、アイゼンのコマンドが重なり、飛来する4個の鉄球、赤い魔力光につつまれ、多方から飛来する。

が、先ほどのアイゼンのように、良彦から腕一本のあたりで、動きが鈍り風がまとわり付く：動きが鈍った鉄球左側に合った2個を、左手で『弾き』打ち砕く。

右側2個は『流し』魔力を減衰させ、1個はそのまま落とし、右手で一個は掴み：青い魔力光と風を纏わせて、投げ返す。

「いらねー、つつか、お釣りだどつとけ！」

『流し』：リトの記憶を得る事で覚えた、新しい魔法であり業、射撃魔法や武器の威力魔力を『凧』の範囲にある魔力、風で減衰し止める。

実体弾なら、それをつかんで風と共に投げ返す事くらいは可能：

ただ、射撃魔法の適性は低い為、投げ返すだけで誘導とかはできない。

「こんなもんっ」

なので、簡単に打ち落とされる、が…

『『貫き』』

その一瞬で高速移動、ヴィータの懐へ潜り込み…左拳で牽制のジヤブ…は、シールドに軽く弾かれ…ヴィータの左拳が良彦の腹にアツパー気味に撃ちぬかれる。

それを右手で受け止め、反動で一旦離れる。

「しつっこいな、ならこいつで…どうだ」

『カートリッジロード…ラケーテンフォーム』

グラーファイゼンが姿を変える、片側に突起がつき、反対に噴射口、次の瞬間噴射口から炎を噴出し回転し始めて

「ラケーテンハンマー！」

その推進力を持って突撃…が

「そいつを、待ってた！」

『カートリッジロード…貫き』

ボシュツと言う音と共に、手の甲から排気煙があがり、一瞬で消

えるように高速移動：現れたのはヴィータの懐：そのまま、アイゼンを右手で強く『弾き』突進の方向をずらす。

と、共に左手で、ヴィータの腕をつかんで、ラケーテンハンマーの突進力を利用し、投げ飛ばす。

「はっ、空中じゃ意味、がふっ！！」

「『盾』」

それは良彦もわかっていたこと、なので…投げるヴィータの体を自分で作ったシールドへと叩きつける。

「意味がなんだって？」

「ちつきしよやるじゃねーか」

たたき付けたまま、顔が直ぐ近く…にやっと笑いあい…

「（おい、ヴィータ…はやてになにかあったのか？）」

「（てめえには関係ねーよ、良彦、つか、管理局に協力とかしてんのか、お前）」

「（こっちにも事情はあんだよ、夜天の書のこと少しは判るし、はやてのこともしってる、あの子は蒐集を良しとしないだろ、なのになんでお前らは蒐集してんだ？）」

「（夜天の書？…ってか、敵のお前にいう事はねーつつってんの！）」

ヴィータの顔が怒りで赤くそまり、ぐいっと、体勢を立て直し、少しお互いの距離が離れる…近くで無いと念話も察知される可能性がある。この距離じゃ念話できない。

そも、ヴィータは夜天の書の名前が判って無いのか…しかも直情型だけに、敵の言葉はなかなか届かない。

「ん…ちっ、時間切れた…良彦、今度あつたらぶつ潰す！」

ふと、顔を一瞬結界の上部に向け、アイゼンを良彦に向け突きつける。

「時間？…どついう」

「でっけーのがくるからな、さっさと避けるよ」

疑問に答えず、中心部から離れるように離脱…それを追う良彦…が、次の瞬間結界の天井部を突き抜けて、巨大な雷撃が落ちてくる。

「なっ、これの事が…」

『盾』

衝撃と閃光…それが収まった頃には、ヴィータ、シグナム、ザフィーラは消えていた。

結局、シグナムは二対一にもかかわらず、なのはとフェイトを抑え、ザフィーラとアルフも決着付かず…ヴィータにも逃げられた。

また、結界外に居たサポート要員…シヤマル…は、クロノが発見、逮捕しようとした所、仮面の魔導師により邪魔され、あの巨大な雷撃を撃たれたらしい。

一人も捕まえる事はできず、そして…その時の戦闘映像から、相手が闇の書の守護騎士であると断定されるのであった。

18：守護騎士との邂逅（後書き）

基本はそのまま、シグナムが二対一、良彦はヴィータとにしまった。

話はほぼA・Sにそって進めます、相対する相手を微妙に変えていく予定です。

今回は他次元世界での戦いか、戦闘以外で守護騎士とコンタクトか、どちらかの予定です。

19：無限書庫にある知識

翌日の朝、良彦は数日寝込んでいた後始めての実戦だったので、念のためという事で本局で簡単な検査を受ける事になったのだが。その時クロノとユーノも何か用事があるとかで、一緒だった。

「朝から検査とかめんどい、つか、ランニングの時間が」

「念の為だ、君の場合は数日寝込んだんだしね…そっちのフェレットモドキにもついでに頼みたい事があつたし、そのついででもあるけどね」

本局とか、良彦は一人なら迷う自身満々である。

「だが、フェレットもどきだ、僕にはユーノ・スクライアって言う名前がだな」

「まあ、落ち着いてくれ、スクライア一族は調べ物にはつよいだろ、本局無限書庫で闇の書について、調べて欲しいんだ」

「無限書庫って、なんぞ？」

上がった単語に良彦の疑問の声。

「ああ、本局にあるデータベースで、知られている次元世界全ての知識があるって言われてる、んだけど…資料が多すぎて普通じゃ使えないんだ」

「僕らスクライア一族は、文献調査用の検索魔法とか得意だから、

要するにクロノは、得意分野の仕事をしろって言ってるんだよね」

「前線は、良彦もいれば、人数は互角、使う武器の性能差もあまり無いからな、なら裏方仕事をする人間も必要だ、僕も少し調べたい事があるしね」

「そんな場所があるのか、凄いな…なあ、少し調べ物増やしてもらっちゃまずいかな、急ぎじゃなくてもいいんだけど、個人の事だし」

「僕はいいけど、クロノは？」

「まあ、最優先は闇の書で頼む、空いた時間位はいいんじゃないか、細かい判断は君に任せるよ」

「了解、でヨシヒコ何を調べれば良いの？」

「えーと、リヒトヴェッテル・ベシュテンバーグっていう、古代ベルカの騎士なんだけど」

「古代ベルカの騎士で、しかもそんなに名前まではっきりと…っていうか、なんでヨシヒコが騎士の名前とかしってるのさ？」

「前も思ったんだが、良彦…君はもしかして、記憶継承をしてる一族なのか？」

「記憶継承？つて、なんぞ？」

「古いベルカの王族の末裔なんかで偶にいるそうなんだが、古代ベルカ戦乱の時代何人も王と呼ばれた人達、その中で数少ないな

がら子孫に自分の思いを伝えるかのように、記憶を継承してる事があるらしい」

「ほー…まあ、ちかいつちゃ、ちかいのかな…細かい事はその人の事わかってからでいいか、俺もそこ等辺自信ないし」

「まあ、今は闇の書の情報と、対処が大事だしな…」

ふと、遠くを見つめるクロノ…その少しの時間で、良彦はユーノに近づき小声で

「(ユーノ…闇の書は、本来夜天の書って言う名前だ、後自動防衛プログラムって言うのと無限転生プログラム…まだ出てきて無いけど管制人格っていうのがいるはずだから)」

「(ヨシヒコ、なんでそんな事してるのかな?)」

「(さつきクロノがチラツと行ってたけど、記憶継承、だっけ…そののなかにあったんだ、それ以上細かい事はわからないし、キーワードがあれば少しは違うかなっと思っただ)」

「(はあ、で、クロノには知られたくない、と?)」

「(なんだかんだ聞かれるのが、めんどくさい…後さっきの騎士も、キーワードで使えるかもだぞ?)」

「(判ったよ、キーワード候補としてありがたく使わせてもらおうよ、クロノには、だまっておくね)」

「(さんきゅー、ユーノが実は人だって、恭にいと土郎さんには

だまっとくな」

「（あははは）」

「さて、良彦、診察はこの先でもらえる、ユーノは僕の知り合いで、手伝ってくれる人がいるから合いに行こう」

良彦とユーノの間で密約が成立したころ、とりあえず分かれる場所に着いたらしい。

「おう、んじゃさくつと終わらせて、少しでも体動かさないとな」

「君は本当に修行マニアなんだな」

「ああ、なのはもそういつてたね」

「寝込んだ三日分まだ取り戻して無いんだぞ、今日休んだらまた取り戻すのに時間かかるんだぞ！」

「判った判ったから、なら診察を早く受けて来い」

「あはは、がんばってねヨシヒコ」

見送りを受け、診察室に駆け込む良彦、中からは看護師さんの怒鳴り声が聞こえていたとか。

で、それから又数日、守護騎士たちは地球から遠い世界で蒐集し

ているのか、中々補足すらできない状況が続いている。

ずっと待機してるのも疲れるので、基本的には、フェイト、良彦は緊急時以外自由になってる。

先日は、フェイトも携帯あった方が便利だろうということ、なのは、フェイト、アリサ、さすが、良彦で買いにでかけた。

フェイト以外の3人の意見がばらけるなか、フェイトは自分の好みの携帯を結局は買ったらしい。

ちなみに良彦は、通話とメール機能くらいしか使わないのに、何か性能はトップクラスの携帯だ…なのはおすすめのを買ったところだった。

で、又それから数日…その日は良彦は自宅にストックしている食材が切れそうなのでスーパーへよることにして、なのはとフェイトは待機兼宿題で出張指揮所へ向かった。

買い物をしている良彦の目に、見覚えのある女性…金髪で優しそうな顔をした、少し前は良くあっていた…シャマルを見つける。

買い物速攻ですませて、出口へ急ぐ良彦、ぎりぎりシャマルが出て行くのに間に合う。

「おーい、シャマル」

かけられる声にびくっとするシャマル、振り向き…諦めと焦りが浮かんだ顔で

「よし、ひくくん？」

今買った荷物を持ったままあとずさる。

「おう……てか、大丈夫何もする気ないし、ただ話したいんだけど、いいかな？」

「え、でも……良彦君、管理局に協力してるんでしょ？」

「管理局にはまあ、協力してるのは確かだな、でも皆と戦いたい訳じゃない」

「……とりあえず、此処じゃなんだし、あそこの喫茶店にいきましようか」

「ああ、そうしよう」

近くにあつた喫茶店に、買い物袋を持ったまま入る二人……端から見ると親子？とか思われてるかもしれない……シャマルには内緒だ。注文をすませ、直ぐに暖かい飲み物が出てくる。

「で、お話って？」

「ヴィータにも少し聞いたんだけど……はやてになにか、あつたんだろ？」

「何でそうおもつのか？」

「前普通にあつてたときは、皆毎日家にいた、てことはあの時は蒐集はしてなかったんだろ……でも、10月の終わり頃から、休みの日とかいってもはやてとザフィーラだけとかになつてた」

一旦、頼んだココアを飲み続ける

「で、管理局の方で聞いた話しじゃ、その頃から蒐集の被害らしきものが報告されてる…はやては、あの性格からして、蒐集を命じる子じゃない、じゃあ守護騎士はどうか」

「……………」

「これも主の命無く蒐集をするはずは無い…けど、いま実際にしている、なら…そこには何かの変化があったはず、守護騎士の皆は代わったように思えなかったら、はやてに何かあった、そうかんがえたんだけど？」

じつと、シャマルの目をみて、理詰めというには穴だらけの理論で尋ねていく。

「闇の書…夜天の書に何か、関係してるのか？」

「…はやてちゃんのリンカーコアを闇の書が浸食をしているの…それではやてちゃんのマヒが上に広がってきている…だから、闇の書を完成させないと、いけないの」

「……………そう、か…でも、判ってるか、夜天の書は完成させると破壊しか生まないぞ？」

「そんな事…そんな事ない、はず」

「守護騎士の記憶は、転生のたびに消える、たしかそうだよな」

「何故、そんな事を知ってるの良彦君？」

「管制人格から、聞いたことがある…まあ、俺じゃないけど」

「管制人格のことまで…貴方は、何を知っているの？」

「俺が知ってるのは、夜天の書は完成すると破壊を生むこと、書自体は自動防衛プログラムに守られていること、無限転生プログラムがあること、管制人格がいること、位だよ…どうすれば良いのかは判らない」

「それでも今のままじゃ、はやてちゃんが、危険なの、恐らく残り時間はかなり少ないはずよ」

「こっちでもいま、急いで調べてもらってるから…ぎりぎりまで最後のページを蒐集するのまっしてくれないか…頼む」

「……………とりあえず、皆に話してみるわ、良彦君、嘘言ってなさそうだし」

「ああ、俺もできる限りの事はするから…っと、一寸ごめん」
話していると携帯がなる。

「はい、八坂ですけど」

『良彦君、エイミイだけど、大変なの、急いで人気の無い場所へ、転送するから』

「あ、ああ…わかった」

携帯を切り、シャマルに向き直り、自分の分のお金を机に置いて。

「ごめん、シャマル、緊急事態っぽいからいかないと、これ御代ね払いおねがい…後さっきの話も頼むよ」

そういつて、にもつを持って外へ飛び出していく。

残されたシャマルは、困った顔をして、暫く考え込んでいたが、支払いをすませ家路へと付いた。

エイミイの言う緊急事態とはほぼ同時のタイミングで二つの次元世界で、守護騎士、シグナムとヴィータが補足され、それぞれフェイトとなのはが、捕獲に向かったとの事であった。

が、良彦が指揮所へ転移させられ、エイミイの元にたどりついた時には、システムがハッキングされ、どちらの世界の状況も不明になってしまふ。

それほど掛からず回復したかと思えば、なのはからは仮面の魔導師の邪魔でヴィータを逃がしたと言う連絡…フェイトの方は、連絡がなく、バイタルを確認したら、魔力がほとんどなく。

リンカーコアの反応も弱かった為、蒐集されたと判断、直ぐに医療班が回収へむかった。

バルディッシュに残っていた記憶から、こちらも仮面の魔導師が関係というか、そいつがシグナムに蒐集をうながしていた。

守護騎士のほかに仮面の魔導師についても注意が必要という、結果に落ち着いたのだが。

エイミイさんは簡単にシステムがハッキングされたせいでと落ち込んでいるし、アルフも一緒に言っていればと悔やんでいた。

仮面の魔導師はほぼ同じ時間にかなり遠い次元世界に現れていた、腕の良い魔導師なのだろう。

ともあれ…夜天の書を完成させれば、はやてだけでなく地球も危

険、だけどもやても助けたい。

そんな矛盾する事を考えながら、良彦はどつするべきか幼い頭で考えていた。

19：無限書庫にある知識（後書き）

前半は、リトからの知識をユーノに、後半はシャマルに…両陣営の頭脳担当に教えた格好です…リトもあんまり詳しい事はしらないので、判断材料の一個程度にしかならないと思ってます。

次回は、はやてのお見舞い第一弾でしょうか…守護騎士たちは隠れている時ですね。

20：お見舞い

フェイトが蒐集された二日後：フェイトも学校にこれる程度には回復したので、その日は良彦、なのは、フェイト、アリサ、すずかの5人で昼食になった。

このさい、良彦が強い殺気？怒気？などを多数感じていたが、それはまあ、ある種仕方の無いことなのだろう。

ともあれ、その席で…。

「あのね皆、今日一寸放課後時間、あるかな？」

と、珍しくすずかが切り出す。

話を聞いてみると、少し前に図書館で知り合った子が、先日入院したので、お見舞いに行きたいという事だった。

昨日そのこの保護者にメールで確認した所、大丈夫なので、今日行きたいのだという。

「ん、俺は大丈夫だな」

「私も大丈夫なの」

「わたしも、いけるよ」

「あたしも当然、だいじょぶよ」

「じゃあ、皆大丈夫だね…良かった、メールに写真添付して、5人でいくって言ったから」

嬉しそうに微笑むすずか。

「それで、なんて子なの、その」

情報を引き出すアリサ。

「えつとね、八神はやてちゃん「ぶふっ」ていって、私達と同じ年なんだけど、一寸今は病気で学校に入って無いんだって…どうしたの良彦君？」

「ああ、いやなんでもない…一寸飲み物が気管に」

「ふうーん、そうなんだそれじゃあーっと明るくしてあげたほうが良さそうね、良彦、あんた帰りひとつ走りして翠屋でシュークリーム買ってきなさいよ」

「ん、いいぞそんなくらい、丁度いい運動だし」

「…丁度いいんだ、よしくん、やっぱり」

「そうだね、ヨシヒコはやっぱり」

「」「」「修行マニアだ（ね）（わ）（よ）（ね）」「」「」

「つか、なのはは少し一緒に走った方がいいんじゃないのか？」

「な、なんで私だけー」

「いや…すずかとフェイトは、ぶつちやけ、学校でもトップクラ

あの運動神経だろ、アリサだって普通よりは上…でもなのは、なあ」

なのは以外を見渡す良彦…頷くアリサに、苦笑しているすずか、フエイト。

「うう、味方がいないのー」

「ま、無理にとはいわねーけど、少しはしないとふと」……（びくんっ）」

これ以上言うと、危険があると本能が告げるように、体が震える…自分以外の少女から黒いオーラが。

「ま、まあ…適度な運動は体にいいんだぞ？」

「……ソウダネ」……」

危機一髪で被害を回避、したとおもいきや。

「……ドノクライガ、チョウドイイカ、オハナシシヨウカ」……」

無理でした。

で、まあ放課後、ゆっくり来る少女4人と別れ、翠屋まで走る…お見舞いという事で10個セットのシュークリームを昼の間に予約

しておいたので、受け取り、病院へ…これもまた走ったりしてるが、途中連絡もとってあって、ほぼ同時に病院前で合流。

「ほい、貰ってきたぞ」

「アンタあんまり汗かいて無いわね、本当に丁度いいくらいなのね、これで」

「前に早朝ランニングの内訳きたけど、おかしかったよ」

「私も一度一緒に行かせて貰ったけど…あれは無理だよ」

「お疲れ様良彦君、はいこれ」

「お、さんきゅー」

アリスが呆れ、なのはが苦笑し、フェイトは顔を青くし、さすががスポーツドリンクをくれる。

ちなみに内訳だが、1時間程度のランニングのうち、最初と最後5分以外は、ほぼ全力疾走、途中50mダッシュを20分ほど連続で行うなどである、これは学校がある日のパターン。

学校が休みの日は、倍以上に延長も珍しくない。

「ま、いいわ…お見舞いきましよう」

「……おー」「」「」

お見舞いの受付で病室の番号を聞いて向かう。
さすががノックして、中へ。

「こんにちは、はやてちゃん、お見舞いに来たよ」

「こんにちは、始めまして、すずかの友人のアリサ・バニングス
「よ」

「始めまして、高町なのはです」

「こんにちは、フェイト・テストロッサです」

4人がそれぞれ挨拶し…良彦が入りながら

「いよう、始めまして、はやて」

いきなり一言

「皆よろしくなあ、八神はやていいいます、はやてでええよ…んで、
はいはい、始めましてやな、良彦君」

「もう一寸おどろかないのか、はやては」

「昨日貰ったメールに、見覚えのある子が写っててん」

「…おう、そうだったな」

そのやり取りに、4人娘はぼかーんとし

「ちよ、よしくん、はやてちゃんと知り合いなの？」

「そ、そうだよ、なんか仲良さそうだけど」

疑問を浮かべるのはと、追隨するフェイト。

「てか、知り合いならそういつておきなさいよ!」

「良彦君てはやてちゃんと知り合う機会なさそうだけど?」

突っ込むアリサ、首を傾げるすずか。

「夏休みの頃にな、公園で偶々」

「うん、せやね、うちの子があつてんよ」

「でかい犬とかの散歩もしたことあるし」

「へー、そうなんだ」

納得する皆

「ほれ、これお見舞い、翠屋のシュークリームだ」

「おお、ありがとなあ、これ大好きなんよ」

「だとき、なのは」

「にやはは」

嬉しそうに微笑むはやてと恥ずかしそうに微笑むなのは。

「翠屋って、なのはの親御さんがやってるのよね、シュークリームはお母さんの桃子さん作よ」

注釈を入れるアリサ。

「そうなんかー、退院したら、実際にいきたいなあ」

「うん、その時は歓迎するよっ」

「それなら、退院記念でパーティとかどうかな？」

「うん、それいいね」

「んじゃ、まずははやて病気治さないと、な」

ぼむぼむとはやての頭を軽く叩く。

「はいはい、まあ、ちょちょいと治したるわ」

「うん、まってるの」

「とりあえず飲み物買ってくるよ、何が良い？」

と、皆に声をかけ、注文を聞いて、病室を出て行く。

出て直ぐに近くの柱に隠れた怪しいコートの人に近づき。

「シヤマル、めっちゃあやしいよ？」

「!？」

「ばればれだし、というか…気配が隠れてないし」

「うー、仕方無いじゃないですか、他の皆これなかったんだし」

「ま、いいけど少なくとも今日は何もしないだろ…というか、俺ら蒐集されてるからもうできないし」

「はあ、写真見て注意してきたんですけどね…あんまり意味なかったかもですね」

「ま、こつちも今、夜天の書どうしたらいいかしらべてるから」

「此方は、ヴィータちゃん以外はある程度聞いてくれました」

「ヴィータは、まあ…頑固だからな、あつたらもう一回話すよ」

「ええ、じゃあ私はこれで」

シヤマルを見送り、ジュースを買って帰る。

結局、その日は楽しくお見舞いは終わった…良彦も楽しみながら、どうすれば良いのかと頭を悩ませて居たのである。

20：お見舞い（後書き）

お見舞い遍その1です、まあ、一休みな場面ですね。

今回はクリスマスイブ、決戦前になると思います。

21：夜天の真実

はやてのお見舞いから数日、ユーノから闇の書、夜天の書についての連絡が入る。

無限書庫の凄さとか、手伝ってくれたリーゼ姉妹という使い魔の話もあつたが此処では除外。

結果から言えばやはり夜天の書：より正確には夜天の魔導書：は、改竄による改竄により修復不可能なほど壊れてしまっているらしい。管制人格を無視し起動する防衛プログラム、近くにある生物、無機物関係なく取り込み無限に増殖を続ける、コアは強力な魔力の固まりで、コアがある限り無限再生する。

無限転生プログラム、書の主が死んだ段階で発動し、次の主をラウンドム：ある程度以上の魔力を持つ者：に選び出す。

書自体は完成と共に主を飲み込み、蒐集で得た魔力と魔法で破壊をまきちらし、防御プログラムにのまれ、魔力が尽きるまで暴走、転生する。

完成の段階で基本的に主に意識はなく、一切の制御のない防衛プログラムとその影響で破壊衝動に飲み込まれた管制人格の中に存在するため、外部からの手出しもできない。

蒐集完了から、管制人格の起動、防衛プログラム起動までは、それぞれ少しずつの時間があることも判明。

これらの事は、管理局関係者、なのはやフェイト、良彦にも伝えられた。

「でもこれだと守護騎士の人達はなんで蒐集を続けてるのかな、一生懸命に：自分の主人をその、殺しちゃうんだよね、完成したら

「？」

「そう、だね…彼らは凄く一生懸命だ、完成することで何かをしたいのだろうけど、これじゃ破壊しか生まない」

「……ないんだよ、記憶が」

なのはとフェイトの疑問に、悔しそうに答えるのは良彦。

「良彦、どういふことだ」

「守護騎士は、転生するたびに記憶をリセットされる、全ての記憶を持つのは管制人格だけだ」

「それが、本当だとしてどうして知ってるんだ？」

何かを抑えるようになかおで聞いてくるクロノ。

「順番に話すよ、ユーノ…リヒトヴェッテル・ベシュテンバーグ
については？」

ディスプレイ越しに尋ねる。

『一応判ったよ、あまり多くは残ってなかったけど』

リヒトヴェッテル・ベシュテンバーグ：古代ベルカ戦乱期に辺境にて【拳王】と呼ばれた武王が修めたベシュテンバーグ公国の第三王子。

上二人の王子は知に優れており、政をつかさどっていた、3人兄弟の末っ子で、一番父王の武を受け継いだ人間。

清風の騎士の名を持ち、戦に出るようになってからは常に最前線にたち、鉄槌の騎士とともに敵陣を切り裂いたという。

ベシュテンバーグ公国自体は、突如城より発生した謎の現象により壊滅、その生き残りの証言では、王子が最後まで戦場に残っていた事が判っている。

その後謎の現象は公国のあった惑星事態を壊滅させ、多大な犠牲…大規模な魔法による現象の殲滅…により収まる。

この結果、ベシュテンバーグの家系は完全に絶えた事になっている。

『一応これくらい、かな…古代ベルカ語は難しくて』

「まあ、大体あつてるな…んじゃ、正確な話をしよう」

胸元から待機状態のゼピュロスを取り出す。

「このゼピュロスは、リヒトヴェッテル第三王子のデバイスだ…俺のご先祖様でもあるらしいけど」

「さて、第三王子も公国壊滅の時に死んだんじゃないのか？」

「いや、転送魔法を使って、ぎりぎりだが星をはなれてるんだ、けど」

「「けど？」」

なのはとフェイトが首を傾げる。

「転送の瞬間、次元震が小規模ながら起きた、転送事故で見知ら

ぬ場所にとばされたんだ」

「見知らぬって…何処？」

「あんな、俺がこうしているんだぞ、地球に決まってるんだろ」

「でもなぜ、彼は戻らなかったの？」

「あー、第三王子な、リトでいいと思うぞ呼び方長ったらしいし、本人もその呼び名をきいてたしな…んで、戻らなかった理由な、まず地球の座標を知らなかった」

「はにや、それは関係ないんじゃないの？」

「まあ、ちゃんときけ…んで、公国の合った座標は飛ばうとしても失敗した、星がなくなっただからだろうな…で、此処で最初にいった地球の座標だ」

「そうか…自分のいる場所がわからないから、どの次元界へ行けば良いかも判らない、そういう事だな良彦」

「概ねそうかな、適当に近くへ飛んで探しても良かったんだろうけど…国が滅んだ事がわかったから、其処まで行く気にならなかつたって言うのもあるらしい」

『それでヨシヒコが守護騎士を知ってるのはなんで？』

ユーノが映していた報告書の一文を指し示す。

「此処、【鉄槌の騎士とともに敵陣を切り裂いた】、判るか？」

「鉄槌の騎士って、ヴィータちゃん?!」

「そう、公国が滅んだ謎の現象は、防衛プログラムの暴走だ…細かくは今度話すけど、その前までリトは守護騎士や管制人格と前線に何度もでてるんだ」

「というか、その言い方だとやはり良彦は、記憶継承をしてるのか?」

「クロノの言うのと同じかは知らないけどリトの記憶と知識はあるな…でもこれ、リトが地球に来て作った最後の魔法だぞ?」

少し納得するように頷くクロノ。

「なるほど…それで何故守護騎士の記憶の事をしってるんだ?」

「公国の滅んだ時まず防衛プログラムが城を覆った、同時に守護騎士は消え、管制人格…リトたちは夜天の守護者っていつてた、がな…状況の説明とか時間ある限りしてくれたんだ」

「と、いうことは、ある程度のことは既にしっていたのか?」

「黙ってたのは悪いと思うけど、俺の記憶にしかない事を言っても何処まで信用されるか判らなかつたからな」

『確かにヨシヒコが普通知ってる事じゃないしね、実際僕も調べると大変だったよ』

うんうんと頷くユーノ。

「なら、そのことを守護騎士さんたちに言った方がいいんじゃない？」

「言っている…ただ、それでもとまらないってことはよほどの事情だろうな」

「はあ、君は何時彼らと接触したんだ？」

「いや、戦闘中に、近距離会話で…ヴィータは昔から頭固いんだよな」

「まあいい、とりあえずこの件については、守護騎士とあつたら皆も伝えてくれ」

それぞれ頷く、なのは、フェイト、良彦。

「それじゃ僕は調べる事があるからいくよ、何かあるときはエイミーから連絡が行くと思う」

「あいよ、おつかれさん」

「うん、了解なの」

「ん、わかった」

もう一度頷く三人

『もしかしたら、なんだけど…防衛プログラム暴走前に書の主の意識がもどれば、書をコントロールできるかもってのを覚えておいてくれないかな』

「どういう意味だ？」

『これまでは、書が完成した段階で主の意識が飲み込まれて、そのまま暴走してるんだ、だから逆に暴走までのその数分の間に意識を戻せれば、って思ったんだけど』

「ふむ…たしかに可能性はあるかもしれない」

「まあ、一応おぼえとくよ」

頷くクロノと良彦、

「えーと…おきろーっていつてあげればいいのかな？」

「…ダメージで起こす？」

何処かずれてるなのはとフェイト。

「書の完成時近くにいさえすれば、何かできるだろ…多分」

苦笑しつつ、なのはとフェイトの意見を賛成はしないが、反対もしない…そもそも取り込まれた主…はやて…を起こせるかどうか。此処の所悩んでばかりだな、と思う良彦であったりします。

21：夜天の真実（後書き）

くりすます前に、夜天の書についてと、良彦の記憶について一寸説明いれました、ある程度事情を知らせておかないと、ご都合を起こしにくいので（まで

で、次回こそクリスマスイブの予定です。

5/22【拳王】を【風王】に訂正。

22：クリスマス・イブ

12月24日：クリスマス・イブ：聖人の誕生を祝う前日、小学校も終業式のみだった為に、サプライズではやてのお見舞いに行こうという話になっていた。

プレゼントは皆で少しずつ小遣いを出し合い、ケーキは翠屋で予約し、取ってくるのはいつもどおり良彦の仕事、いつもの用に病院前で合流し、いつもの用にはやての部屋へ向かう。

違っていたのは、はやての家族：守護騎士達：が、その日、初めていた事だろう。

一瞬で走る緊張のなか、良彦はなのはと、フェイトと目を合わせ、二人も小さく頷く、此処では騒ぎを起こさないようにと。

守護騎士側も、一瞬反応を見せるが、シグナム、シャマル、ザフィーラは直ぐにそれを隠し：ヴィータだけがはやてにぎゅっと抱きついて、そこから良彦をじろつと睨んでいる。

「皆今日はどないしたんや？」

「クリスマスだから、サプライズのお見舞いきただけど、まずかった？」

はやての問いにアリサが答える。

「そんなことないよお、めっちゃうれしいわ」

「よかった、はいこれ皆からのプレゼント」

答えるはやてにすずかが安心したように大きな箱を渡す。

「ほれ、クリスマスケーキだ、いつもどおり翠屋のだぞ、今日も俺が走らされた」

「それで良いって毎度いつてるのはアンタでしょ良彦」

「良彦君は、修行すきなんやなあ、ほんとマニアさんやね」

「だから、マニアじゃねーっていつの」

「はいはい、わかったからな」

軽い言い合いの後、お互いの自己紹介：守護騎士4人と、なのは、フェイトは何処かぎこちなく、アリサは普通に、良彦ははやての知り合いだと初めてでばれていたし、軽く久しぶりだな、程度。

その場はお互い事を荒げるような事はせず、時間が過ぎる…：ヴェイタの視線が尖ったままではあったが。

数時間後、病院近くのビルの屋上…：守護騎士達と相對する、良彦、なのは、フェイトの3人。

口火を切るのは良彦。

「久しぶり、になるかな、全員にあうのは」

「そうだな、蒐集を始めていらいなかなか全員が揃う事が無かったからな」

「つか、良彦、なんで邪魔すんだ…書を完成させねーとはやてが」
「だめだよ、完成したら…はやてちゃんが、死んじやう！」

ヴィータの言葉に、はやての危険を叫ぶのは。

「…シャマルから話は聞いた、だが闇の書について一番知っているのは我らだ」

「じゃあ、なぜ…闇の書って呼んでいるんですか…本当の名前があったはずなのに」

悩みながらも、自分達の意志を通そうとするシグナムに、フェイトが指摘する。

「そうだな、シャマルにも言ったと思うけど、守護騎士の記憶は毎回リセットされる、多分残ってる記憶は書にとって都合の良い部分だけだと思っぞ」

「それならば、どうすればいいんだ、主はやての命はかなり危険なのだぞ、すでに」

「……あれ、一寸待ってくれ俺大事な事を、忘れてる気がする」

守護騎士達と言い合いながら、良彦はリトの記憶を探る…リトと管制人格、夜天の守護者と呼んでいた彼女との会話…引っかかっていた部分を直ぐに思い出す。

『夜天の書は改竄されている、蒐集にて666ページを埋めれば

大いなる力を与えるがその持ち主を殺す』

『そして、今代の主は、私が機能する400ページまで蒐集し、私と守護騎士を使い、客将となった』

400ページを越えれば…管制人格は、機能する…今まで完成後のことばかり考えて、その前に管制人格を起こすという事を考えてなかったのだ。

「あつた、ぞ…もしかしたらいけるかも知れない方法が」

「…どういうこと？」

「えつと、何か判つたの良彦君？」

良彦の声に代表するように、なのはとシャマルが尋ねる。

「たしか、管制人格は400ページ分書がたまつてれば起動できたな」

「ああ、だが…主の承認が必要だ、それに完成しないとリンカーコアへの浸食がとまらない」

「でも、だ…管制人格が起きれば書にアクセスできる、防衛プログラムとかを止めたり、書完成時に意識を飲まれないようにできるんじゃないか？」

シグナムの答えに更に言葉を重ねる良彦。

「……可能性は、無いとはいえないな、完成し覚醒した主でなく

ても、書の主ならば、ある程度の干渉ができるはずだ」

「んじゃ、良彦がいつてたことがホントだとして、今良彦が言ったことができるなら、それも何とかなるっていうのか？」

少し考え、書に対する考察を述べるザフィーラと、実現できればはやてが助かるという事実を欲するヴィータ。

「ああ…まあ、そのためにははやてに蒐集のこととか、管制人格のこと、夜天の書のこと全部言わないとだけだな」

「確かにそうなるが、主はやての命が今の我らの最重要課題である以上、主に怒られようと主の危険の少ない手を取るべき、か」

はやてに話をしないといけないと語る良彦に、怒りに触れようとも、はやての命を重視するシグナム。

「なら、急いで戻って、はやてちゃんにお話ししようよ」

「うん、早い方がいいよ」

危険が少ない方法で救えるかもしれないと判り、喜び、急ごうと動き出すのは、フェイト。

「ああ、でも…面会時間過ぎてるから、明日の朝時間きたら…なんだっ?!」

なのはとフェイトをなだめ、落ち着かせようとしている良彦…3
人の周囲を小型ながら結界が覆う。

「結界、だれがこんな」

「うにゃ、ヴィータちゃんたちがいない」

「隔離型の強装結界…わたしたちだけを閉じ込めた？」

急なことに慌てる良彦、守護騎士が消えたことにびっくりするのは、すばやくサーチャーを使ったのか、結界を確認するフェイト。

「くそ、このタイミングってことは、誰かっていうか、仮面の魔導師か、抜けそうか、これ？」

「私のスターライトブレイカーか」

「私のジェットガンバーなら…問題は、その後魔力が」

「どっちにしても、キツイか…よし、ならちと危険だけど賭けにしよう、ふたりともセットアップだ…ゼピュロス！」

『了解、セットアップ』

ゼピュロスを取り出しセットアップする良彦、なのはとフェイトも直ぐにセットアップを行う。

結界の上部境界あたりまで、飛び、なのはとフェイトを振り返る。

「二人とも俺に向かって、アクセルシューターとプラズマランサー、あんまり速度あげないで、10発ずつ位撃ってくれ」

「え、そんなことしたらよしくん、あぶないよ」

「そっだよ、危険だよ、ヨシヒコ」

「まあ、そうなんだけど、ちゃんと作戦はあるから、な…頼む」

真剣に頼む良彦に、しゅしゅとスフィアを形成していくのはとフエイト。

「じゃあ、私からいくよ…レイジングハート！」

『了解、アクセルシューター！』

桃色の魔力弾が、良彦に順番に発射されていく。

良彦の近く、腕の届く距離にきた魔力弾が動きを鈍らせ…それを良彦が掬うように右掌で受け止める、それが10回繰り返され、右手には桃色の大きな魔力光でできた球が出来上がる。

「つぎ、フエイト！」

「う、うん…バルディッシュ！」

『イエツスサー、プラズマランサー！』

黄金の槍とも言つべきプラズマランサーも、先ほどのアクセルシューターのように、動きを鈍らせ、良彦の左掌で受け止められていく…出来るのは黄金の魔力光でできた、球体。

「くっ…きつつ…いな、これは…でも…ゼピュロス…いくぞ」

『了解…魔力掌握開始…魔力喪失率10%…魔力収束開始…喪失率15%…マスター』

手の中で暴れるのはとフェイトの魔力が次第に桃色と金色から青にかわっていく…『流し』の応用、本来は打ち消す魔力を受け止め、無理矢理自分の魔力属性に書き換える。

時間がかかるし、損失は大きいし、戦闘時には全く使えない、が…今この状況なら。

「ついでだ、俺の魔力もおまけでっ」

両手の魔力をあつめ、頭の上に掲げる…其処に更に注がれる魔力により辺りが青色に光る。

『魔力圧縮完了…最終喪失率18%、準備完了』

「なら、いつけー！」

射撃とか砲撃、そんなことは関係のない、ただ魔力を無理矢理かため圧縮したそれを、結界に向かい投げつける。

「伏せる！」

声と共に、二人を守るように覆いかぶさる…次の瞬間、ただ圧縮した魔力は結界にあたり、青い光が爆発する。

結界内に暴風が吹き荒れ、3人を吹き飛ばそうとするなか、二人を地面に押さえ込み、何とか耐える、それも数秒…青い光は消え、風も収まり視界が戻る。

其処に見えたのは、絶望の表情を浮かべたはやて、車椅子からおち、回りには紫の魔力光がベルカ式の魔法陣を作り出している。

なにがあつたのか、なにがおこるのか、それでも今判るのは…良

くないことが起っている、これだけだった。

22：クリスマス・イブ（後書き）

一寸本来と違いますが、大きな流れは一緒です。今回の良彦の技は、本来打ち消すはずの魔力を打ち消さず、無理矢理あつめて、自分の魔力にする、荒業ですが、本文の通り時間がかかりすぎる事と、オーバーフローで自滅の可能性があるため、普通は使いません、あくまでも普段は実体弾を投げ返す程度です。

次回は管制人格との戦闘になるとおもいます。

23：夜天の守護者1

結界を破り、外にでてみれば、絶望の表情をし、足元に紫の魔力光でベルカ式魔法陣を描いているはやて…その顔の前には、夜天の書。

はやての近くに守護騎士の姿はなく、シグナムとシャマルの着ていた服だけが風で飛ばされていった。

呆然と見守る三人：良彦、なのは、フェイト…の前で、それが始まる。

はやてが苦しみながら紫の魔力光に包まれていく、その姿は身長が伸び、スタイルも変わって…銀の長髪に赤い瞳、黒のジャケットを纏い、全身に刺青のような帯を浮かべた、女性。

「夜天の守護者…」

良彦の口から漏れるのはかつてリトが彼女を呼んでいた名前。瞳を開けばそこにはかなしみ…そして怒りと絶望が浮かんでいる。

「また、全てが終わる、主も守護騎士も、全てが消えていく」

「諦めるな、はやてを起こせば！」

「そうだよ、まだ手はきつとあるよ！」

良彦となのはの言葉にゆっくりと首をふる、管制人格。

「すでに闇の書は完成してしまった、後は破壊だけが残るのみ」

「なぜ、そんなに直ぐ諦めるの!」

フェイトが叫ぶ。

「永い永い時、幾度も同じ事を繰り返してきた…もう止まらない」

ゆっくりと両手を掲げる、管制人格：夜天の守護者。

「我は闇の書、我が力の全ては、主の願いのそのままに」

ベルカ式魔法陣が広がり、夜天の守護者の両手の間に闇が広がっていく。

「闇に、染まれ」

『デアボリック・エミッション』

その闇が広がっていく。

「空間攻撃か、距離をつ」

良彦の言葉に、一気に離脱する3人、闇は広がり辺りを飲み込んでいく。

「フェイトちゃん、よしくん!」

「なのは、ヨシヒコ!」

「なのは、フェイト!」

闇に飲み込まれる瞬間、桃色のシールドが闇をうけとめ、フェイトがシールドを張ったのはをひっぱり、二人を庇うように抱きしめた良彦が、『貫き』を発動させる。

なのはのラウンドシールド、フェイトの機動力、良彦の『貫き』による風の結界…結果、高層ビルの影で3人はその闇に何とか耐え切ることができた。

「いまのは、やばいね」

「うん、もう一寸で、落ちる所だった」

「夜天の守護者は、広域殲滅型の魔法が得意だからな…俺とは相性最悪だな」

フェイト、なのは、良彦がそれぞれ感想を言い合い。

「とはいえ、はやてをたたき起こさないといけねーし、な…ワンパンくれてやるか」

「そうだね、まだ諦めたくない」

「うん…まだきつとまにあうよ」

『フェイト、なのは、良彦、無事かい？』

『3人とも、大丈夫？』

諦めない事を確認していると、アルフとユーノから連絡。

「ああ初撃はなんとかしのいだ、そっちは？」

『直ぐつくよ、書は完成したみたいだね』

「守護騎士との会話に集中してたら、結界はられて、その間に
…ま、諦めてやる気はないけど」

『当然っ、フェイトもなのはもいるし、良彦もいる、あたしらも
直ぐ付く、諦める理由とか無いよ』

とっていると、アルフとユーノも合流。

「ユーノくん、きてくれてありがとね」

「ううん、なのはは大丈夫？」

「うん」

師弟コンビはお互いの無事を確認し。

「フェイト、怪我はないかい？」

「大丈夫だよ、アルフ」

主従はお互いを思いやり。

「んじゃ、アルフとユーノは、二人の防御と支援を、なのは、フ
エイトは、攻撃を頼む…俺は隙をみて、攻撃するから」

「それだとよしくん一人になっちゃうよ？」

「急造で、支援とかは逆にタイミング合わなくて危険だし…何より俺が一番この戦いじゃ、足手まといになる」

「…なんで？」

「フェイトはしらなかつたっけ…射撃も砲撃も素質ないんだ、広域攻撃が得意な相手に近接オンリーとか、かなり危険だろ？」

「そっか、そうしたら…その分け方のほうがいいね」

「そういう事…遠距離は一個だけあるんだけど、撃つのに時間かかるからこの状況じゃ無理だしな…さて、そろそろいくか」

ぱんつと拳と掌をたたき合わせ、気合を入れる。

その掛け声と音を合図に、周囲に散開する5人。

「いくよ、ユーノくん」

『アクセルシューター』

レイジングハートの声と共に桃色のスフィアが形成され、誘導弾を放つ。

「いいよ、なのは…チェインバインド！」

アクセルシューターを片手のシールドで弾く夜店の守護者…其処に巻きつく鎖状の捕縛魔法。

逆側では

「プラズマランサー…」

『ファイア』

金色の槍が撃ち放たれ、同じようにシールドで弾く所を

「そこだよ、チエーンバインド」

アルフがユーノと同じ魔法で食い止め。

「いくぞ、ゼピュロス！」

「『貫き』」

高速移動で、飛び込んだ良彦が、腕の使えない夜天の守護者に殴りかかる、その拳は青く光り風を纏う。
が、

「パンツァーガイスト」

紫の魔力光に包まれた夜天の守護者の防御魔法で弾かれ…その間にチエーンバインドは砕かれ、再び自由を取り戻す夜天の守護者。

「シールドも鎧もえらくかたいな…んじゃっ」

弾かれた拳を引き、自由を取り戻したばかりの夜天の守護者の右腕をとり、鎧の魔力を『流す』、鎧は少しずつ光りを失い始め…る、所で、守護者の左拳が良彦に振るわれる。

紫に輝く拳を、掴んでいた腕も放して両手でシールドを張って受け止め、そのまま後方に距離をとり。

「なのは、フェイト！」

溜め作っていた二人に声を掛ける…二人が同時にはなつのは、直
射砲撃。

「デイバイーン…」

『…バスター』

「プラズマ…」

『…スマツシャー』

桃色と黄金の砲撃が逆方向から、守護者へ襲い掛かる。
守護者はそれぞれに手を掲げ。

「盾」

一言となえ、二枚のシールドを形成し、砲撃を受け止めながら。

「刃以て、血に染めよ。穿て、ブラツディダガー」

『ブルーティガードルヒ』

一言唱える…良彦の、なのはの、フェイトの周囲に魔力でできた
短剣が現れ一瞬で殺到する。

それぞれ煙に巻かれるなか、3人ともぎりぎり防御したのか、飛
び出し、構え直す。

その間に、守護者は次に行動に移っている。

片手を高くかかげ、ミッド式の魔法陣を作り出す、手の先には桃色の光り。

「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

それは、なのはの持つ最大攻撃魔法。

「いけない、距離をとらないと」

受けた事のあるフェイトはすばやく判断する…

「え、なんで？」

「至近じゃ防御の上からでも落とされる」

「くっ、皆距離を」

良彦の掛け声で、フェイトがなのはを、アルフがユーノを抱えて高速で距離をとる、良彦もなのはとフェイトの方向へ離脱。

「サー、この先に動態反応、誰かいます」

離脱中にバルディッシュからの警告。

「はあ？…此処って隔離結界だろ、誰がいるんだ？」

『距離接近中、目視距離ちかづきます』

その言葉に、フェイトはなのはを離し、なのはは足を滑らせながら着地して土煙が上がる、フェイトはそのまま信号機の上におりた

ち、良彦は上空で停止。

その間も、桃色の光は強さをましていて。

煙が晴れた其処には、金色の髪の少女と紫の髪の少女、見覚えのある制服をきた、見覚えのある二人…アリサとすずか。

「アリサちゃん、すずかちゃん、なんで？」

「なのはに、フェイト…？」

「二人ともなんで、此処に」

「わからないの突然…」

「言ってる場合か、くるぞ」

お互いを認識し混乱する4人に声をかけ、一番手前に着地する良彦。

「良彦まで？、なにやってんのあんたら、そんな格好で！」

「ごめん、話は後で」

バシユバシユつとカートリッジが2発ロードされ、黄金の半球がアリサとすずかを包み込む。

『ディフェンサープラス』

バルディツシュの音が響く。

半球の前にたち更にシールドを張るフェイト、その前でこちらも2発カートリッジをロードしたなのはとレイジングハートが

「守ってレイジングハート」

『ワイドエリアプロテクション』

なのはの前方に桃色の障壁が出来上がる。

更に前方、両手を組み合わせ、此方も2発カートリッジロード。

「ゼピュロス…風を！」

『風の大盾』

青い魔力光でできた巨大なシールドの中心から外へ向かい風が流れる…受け流す事を目的とした大型防御壁。

そして、紡がれる光りの呪文。

「貫け！閃光！ スターライト・ブレイカー！」

空の一点から、桃色の光りが広がって、結界内を埋め尽くす…全ては光りに飲み込まれて……………。

光りが収まったあとには……………。

23：夜天の守護者1（後書き）

管制人格覚醒から、スターライトブレイカーまで…。

今回は、その後の戦闘とはやて覚醒までいけるかどうか、です。

24：夜天の守護者2

桃色の魔力光りに包まれる中、青い大盾がその一部を引き裂いている…圧力に押されているのかその足は地面に食い込んでいるのが判る。

更にそれで止められない衝撃が、桃色の盾に弾かれ…金色の盾に止められ、金の半球に触れる頃には威力もなくなっている。

受け止めている方には長く感じた時間…実際には数秒だろう…が、過ぎ、ゆっくりと桃色の魔力光が晴れていくと、最前衛で受けた良彦は荒い息をあげ、なのは、フェイト少し疲れたように息を吐き出し、アリサ、すずかはほっとしていて。

一瞬の安堵から反転、アリサが

「あんた達、いまのなんなのよ、もうっ！」

吼える。

そんななか

「（こちらエイミィ、そっち大丈夫？）」

3人に念話、アリサ、すずかへの説明は視線でなのは、フェイトにぶんなげて

「（一応皆無事だけど、アリサとすずかがなんか結界内にいる、安全区域まで退避させてくれ、後なんて連絡無かったんだ、今まで？）」

良彦が答と疑問を投げかける。

「（ごめんねー、結界にジャミング成分もあつたらしくて、貫くに時間掛かったんだ）」

「（なら仕方ない、早い所退避よろしく、なのはとフェイトが困ってる）」

オープンチャンネルの念話で言っているものだから、説明に苦労しているふたりが、ならてつだえ、見たいな視線でみってくるが、無視。

「（うん、直ぐ転送するね、暴走予想まで結構短いから気をつけて）」

「（了解）」

念話は終わり、なのはとフェイトが、アリサ、すずかに安全な場所に移動するから、と伝えた所で、ミッド式の魔法陣が二人の足元で輝いて転送していく。

「みられちゃったね」

「そうだな」

「説明、ちゃんとしないと」

なのは、良彦、フェイトが眩き。

「（ユーノ君、二人のこと頼めるかな）」

「（アルフもお願い）」

「（でもフェイト…）」

「（アルフいこう、3人が集中できる方がいいよ）」

「（……わかったよ、3人ともきをつけなよ）」

「（ありがとう、ユーノ君、アルフさん）」

アリサ、すずかはバックアップの二人に頼み。

「とはいえ、まずはこつちを片付けなとな、もういっちょ気合入れて」

良彦が、もう一度気合を入れなおす。

其処に割ってはいる声。

「もう諦めろ、少年、少女達…我は主の望みを意識あるうちに叶えたい」

「望みって、なんだよ？」

「主が望んだのは、この悪い夢のような世界の消去、守護騎士達を苦しめた者たちの消去」

「はっ、はやてが本気でそんな事とぞむとは思えないな…それに、夜天の守護者、お前はなんでそんな顔してるんだ」

「覚醒の時主が望んでいたのはただそれだけ、私は道具としてそ

れを叶えたい、それだけのためにいる」

言葉と共に地面が割れ、数十本の触手のような生物が顔をだし、それに驚いた3人が巻きつかれる。

「う、あ…じゃあ、なんでそんなに悲しそうに顔してるの、道具ならそんな顔しないよ」

締め上げられながら反論するのは。

「これは主の悲しみ、私のものではない」

そんな言葉に、フェイトが

「バルディッシュ、ジャケットパージ」

『イエス・サー』

バリアジャケットをソニックフォームへと変化させる、その時の余剰魔力で、自分となのはを捕らえていた触手を消滅させる。

「道具なら、なぜ泣いてるの、貴女には心があるんでしょう?」

「私の思いは守護騎士と主のモノだ、私自身のものではない」

「うそ、いつてんなよ…俺は知ってるぞ、お前が喜びも悲しみも、全部判る事を、リトが知ってるぞ」

「……リ、ト…そうか、少年は」

一瞬良彦を見て、本当に一瞬だけ、顔が綻んだ気がする。
が、次の瞬間それもまた消え。

「我は魔導書、闇の書の主の願いを叶えるだけだ、そのための道具に過ぎない」

そう繰り返し、それを聞いたフェイトが

「この…駄々っ子！」

掛け声と共に、消えるような加速…ハーケンフォームから繰り出される鎌の一撃が守護者を襲うが、目の前でシールドに弾かれ、驚いた一瞬で。

「お前も永遠の夢で、静かに眠れ」

『吸収』

金色の光りに包まれながら、空間に解けるように消えてしまう。

「フェイトちゃん?!」

「くっ、フェイト…ゼピュロス」

『貫き』

自分の周りに風の結界を張って触手を引きちぎり、なのはの隣まで一気に移動。

「(エイミィさん!)」

「（今、確認中…フェイトちゃんのバイタル…健在、闇の書の内
部空間に閉じ込められたみたい）」

「なら、はやてたたき起こせば出せるかな、いけるか？」

「うん、フェイトちゃんを、はやてちゃんを助ける…そして、レ
イジングハートが言ってる…泣いてる子を救ってあげてって…だか
ら！」

覚悟も新たにした所で…結界内に火の手があがる、地面から真っ
直ぐに上へ向かう炎。

「暴走前に主の願いをはたしたかったが、もう余り時間がないよ
うだ」

それを見て、夜天の守護者は呟く。

「なら、その残り時間もらおうか！」

ダンッ、と空を踏み込んで、夜天の守護者と距離をとり、海の方
へ飛ぶ。

「（なのは、街から引き離すぞ）」

「（うん、わかった）」

なのはもその言葉で、直ぐに海の方へ飛んでいき、それを追うよ
うに飛ぶ夜天の守護者…ブラッディダガーや、誘導弾が二人を何度
も襲うが、それを避け、シールドで弾き、自分達から攻撃せずに距

離をとる。

その途中

「（遅れてごめんなさい、アースラも地球上空についたわ）」

リンディからの念話。

「（今管制人格を海に誘導中だから、都市部の火災を何とかしてください）」

「（ええ、災害担当が向かったからあちらは大丈夫）」

良彦の頼みに既に手を打っている事を知らせてくれる。

「（夜天の守護者さんは、頑固だけど、一応話しは通じるみたいなんでこのまま頑張ります）」

「（つか、はやてに呼びかけながらいくぞ、なのは…さっきまで焦りすぎて忘れてた）」

「（そ、そういえばそうだった、うん、それもあわせてがんばるよ）」

それを聞いたアースラでは、エイミィとリンディが困り顔で、仕方ないと言う呟きをもらしたとか。

ある程度街から距離をとった海上…良彦となのは、夜天の守護者がお互いに向かい合う。

「とはいえ、念話だけじゃきつそうだな、攻撃通せるか？」

「わからないけど、カートリッジも残り少ないし…どうにか」
悩むなのはに伝える声

『手段はあります』

「レイジンググハート？」

『エクセリオンモードをお願いします』

「でもあれは、私が制御失敗したらレイジンググハートが壊れちゃう」

『私はマスターを信じます、マスターも私を信じてください』

愛機の声に、目を瞑り何かを決意するなのは。

「わかった、レイジンググハート…モードエクセリオン！」

『イグニツション』

なのはのレイジンググハートが姿を変える、丸かった先端は槍の用に変形し、持ち手も長くなっている。

「一気に決めるよ、よしくん、レイジンググハート」

「おう、威力ならなのはが上だしな、援護するぜ」

『了解、マスター』

「レイジングハート、A・C・S」

『A・C・S スタンバイ』

「ストライクフレイム！」

『オープン』

槍の先端から伸びる桃色の刃。

「なるほど…なら、なのは…先陣は任せろ！」

それを見て、動き出すのは良彦…夜天の守護者へ、『貫き』による高速移動…途中で2発カートリッジロード。

「おっしゃー、食らえっ！」

繰り出すのは、魔力と風を纏った右の拳…それをシールドで防ぎながら、反撃の魔法を放とうとする守護者。

だが、次の瞬間、目の前が青の光りに包まれる。

「セピュロス！」

『了解…範囲内魔力掌握、対消滅全力開始』

良彦の腕の届くであろう範囲、全てが青の魔力光で球形に発光し、両手を翳した良彦の前、守護者の紫の盾を削り取っていく。

「なのはー！」

弱まったシールドから手を離し離脱しようとする守護者へ

『風鎖』

至近距離…相手の腕へ青い光りとまとわり付く風による、バインド。

其処へ飛び込んでくる白い影…なのは。

「レイジングハート、チャージ！」

『了解』

腕を上げた良彦のわきの下辺りから、シールドへ突撃…弱つていたシールドを刺し貫いて…先端に集まる桃色の魔力光。杖から広がる6枚の翼。

「エクセリオン…バスター！」

『A・C・S』

超至近、シールドを貫いての直射砲撃…直撃し、もうもうと上がる煙、反動で弾かれる良彦となのは。

「ってー…この威力馬鹿、もう一寸手加減しろよ」

「全力でいかないと通りそうにないし、しかたないじゃん…でも、これでだめだと…」

煙がゆっくりと流れ、そこに佇むのは無傷の夜天の守護者。

「もう一寸頑張らないと、だね」

『ですね』

「ま、全然きいてねーってことはないだろうよ、しかし呼びかけに応答はないな」

一応念話ではやてを呼んではいるのだが、応答は今の所ない。じつと二人を見つめる夜天の守護者：その動きが突然変わる、さびたロボットのようになぎぎぎつと言う感じで腕を前に突き出し、焦点の合わない目で二人を見つめている。
何事か、と思っっていると

「（外の方、管理局のかた）」

「この声は」

「「はやて（ちゃん）」」

「（え、なのはちゃんに良彦君？）」

「ああ、今夜天の守護者と戦ってる」

「（そうなん？…なら、そのこ止めてくれる、そのこが走ってると管理者権限がつかえへんねん）」

「止めるって、どうすればいいの？」

その言葉に答えるのは、ユーノ

「（なのは、ヨシヒコ、判りやすく説明するよ…：相手を魔力ダメージでぶっ飛ばして、全力全開手加減無しで！）」

「さすがユーノ君、わかりやすい」

『全くです』

「つーと、完全になのは向けだな、俺の攻撃じゃ完全魔力攻撃ないし」

再びレイジングハートを守護者に向けるなのは。

「それじゃ、よしくん、さっきみたいに動きとめてくれる?」

「ああ、その方がいいだろう」

『マスター、ヨシヒコさんは、風の変換資質をおもちです、バルシヨットの強化を頼めれば』

「えーと、できそう?」

「風系なら、多分いけると思うぞ…：まあ、ダメそうなら風鎖もあるし」

「うん…：いこう」

話していると守護者が再び動き出し…：二人に向け魔法を放とうとする所を、オレンジのバインドが腕を捕らえ、緑の鎖が体を抑える。アルフとユーノのバインド。

「いまだ、なのは」

「うん、レイジングハート！」

『バレルショット』

レイジングハートの先端から見えない衝撃が走り、守護者を磔のように押さえつける。

そこへ

「ゼピュロス…風圧強化」

『了解、風圧強化』

守護者下方から接近した良彦が、押さえつける風を強め。

「いくよ、エクセリオンバスター…フォースバースト！」

レイジングハート前方に溜められたスフィアから4本の魔力砲撃が放たれ…守護者へ殺到、直撃し…最後にそれら全部をあわせるように一本の太い砲撃が直撃する。

爆発し煙に包まれる守護者…次の瞬間なかから白い光りが溢れ、金の光りが天に登っていく。

そこに現れたのは……………

。

24：夜天の守護者2（後書き）

対守護者戦は一応終了：一応説明しますと、記憶を継承してからの良彦は基本常に『凧』使用状態でした、演出などで気付いたかもしれませんが^^；

見えなかったのは記憶継承できちんとした『凧』の使い方、演算などを知った為です、今回光ったのは普段以上に『流し』により守護者のシールドを削る為、不可視のほうにまわしている魔力まで『流し』に回したためです、そのさいカートリッジも2発使っています。

今回は、フェイト、守護騎士復活、クロノ合流で、軽く会話辺りだと思えます。

25：夜天の帰還

白い光りと金の光り、その後ろには黒くよどんだ闇が大きくわだかまっている。

天に登った光りの中から現れたのは、金の巨剣を携えた少女…フエイト、それに気付いたのか、アルフが直ぐに向かって行く。

白の光りから閃光…そして現れたの白のベルカ式魔法陣の上に白く光る魔力光…その4方に立つのは守護騎士達。

「ヴィータちゃん？」

「シグナム」

驚いたように声が出る二人。

「ザフィーラにシャマル」

安心したように呼びかける良彦。
そして

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

静かにシグナムが口火を切る。
続くのはシャマル

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

静かに力強くザフィーラ

…そして

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

ヴィータが主の名を告げる…魔力光が弾け、そこに居たのは二本の足でたつはやて、黒のワンピースに黒の指貫手袋、黒い靴、十字架に輪を組み合わせた大きな杖を持ち、傍らには夜天の魔導書が浮かんでいる。

高らかに杖を掲げ、唱えるは新たな書の名前…

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風、リインフォース、セツトアップ！」

茶色だった髪が白にそまり、瞳は青く輝く…先ほどの格好に、腰から金色の腰飾りと黒いスカート、その後白の長袖ジャケットが展開し、頭には大きな白い帽子、背中には6枚の黒い翼…それがはやての騎士甲冑。

そして4人の守護騎士の真ん中に降り立つ…

「すみません」

「あのはやてちゃん、私達」

謝るシグナムに続き、声を掛けるシャマル

「ええよ、みんなわかってる、リインフォースが教えてくれた」

二人の声を止め…

「そやけど、細かい事は後や、いまは…おかえり、みんな」

静かに告げる。

その言葉に耐え切れないようにはやてに抱きつくヴィータ、涙を流し、はやての名を強く叫ぶ。

ゆっくりと近づくと、良彦、なのは、フェイト。

「おそよつさん、ねぼすけ、ようやく起きたか？」

「そやね、誰かさんたちが普通に寝かさへんから起きてもった…
ありがとな」

近づきお互いの掌をパンッと打ち合わせる良彦とはやて。

「よかったー、おかえりはやてちゃん、皆」

「うん…おかえり、はやて、シグナム」

嬉しそうに微笑むのはとフェイト。

「ほら、おちつけヴィータ」

はやてに抱きついたままのヴィータの頭をぼんぼんと叩き。

「それじゃまるで、子供みてーだぞ？」

にやにやししながら、からかう様に声を掛ける。

「なつ、誰が子供だ、あたしは大人だ！」

「は、だったら涙と鼻水ふいとけ、後目真つ赤だ」

「うっせ、嬉しいときはいいんだよ！」

ぽいつと投げられるハンカチで顔を拭くヴィータ、苦笑するはやと他の守護騎士、なのはとフェイト、アルフ、ユーノは一寸驚いている。

それを見たはやてが、軽く説明。

「あのふたりは、何時もあんなかんじや、仲ええよなあ」

「仲良くねえ！」

「ほらな？」

同時に全く同じ言葉を発し、それを苦笑でながされ、なのはたちには頷きで返されて、二人とも少し赤くなってる。

其処にもう一人空から近づくと、黒いコート状のバリアジャケットに身を包んだクロノが近づく。

「和んでいる所すまないが、時空管理局執務官クロノ・ハラオウなんだ…あそこの防衛プログラムをどうにかしないといけない、今の所、此方が考えてるのは二つ」

すつと指を二本立て

「一つ、強力な凍結魔法で凍結する」

「それは、無理だと思います、魔力がある限り無限に再生しますし」

「再生が始まれば周りを取り込んで、どんどん増えるしね」

シヤマルとユーノがそれを否定する。

クロノは軽く、頷き

「二つ、アースラのアルカンシエルで消滅させる」

「それもダメだろ、こんな所でうつつたらはやての家まで消滅しまうよ」

「アルカンシエルってそんな凄いの？」

ヴィータが両手で大きくばってんを掲げる…となりでは、なのはが疑問をあげる。

「撃てば半径百数十キロを反応消滅させる魔導砲っていえばわかるかな？」

「消滅させたら、その周りもかなり影響があるのか？」

「そうだね、影響は確実に出るよ」

ユーノの応えに更に追加して問う良彦。

「わたしも反対、それ危ないよ」

「うん、私も反対」

なのはとフェイトも反対し

「はやてちゃんの家がなくなるのは困るわ」

ピントがずれてるシャマル。

「そういう事じゃないだろう、でもそれならどうする？」

『はいはい、あんまり時間無いから会議は早く終わらせてね』

苦笑するクロノに、タイムリミットが迫る事を教えるエイミィ。

空の上で胡坐をかき、両腕を組んだアルフが、いらいらした感じで

「あー、めんどいね、ずばつとぶつ飛ばしちゃえばいいんじゃないかい？」

「いや、それじゃ再生しちゃうから」

暴言を吐いてユーノになだめられる。

「凍らしても倒しても再生、アルカンシエルは効果範囲が広すぎる…てか？」

どうしたもんか、と考え込む良彦。

「ずばつと、ぶつ飛ばす…？」

「何度でも再生する…」

「アルカンシエルは、範囲問題で撃てへん…」

なのは、フェイト、はやてがつぶやき、お互いの顔をあわせ何かに気付いたように顔を上げる。

「ねえ、クロノ君、アルカンシエルって何処でも撃てるの？」

「何処でも、とは？」

「たとえば、いまアースラがいる場所」

「宇宙とかやな」

なのはが確認する様にクロノへ問いかけ、フェイトとはやてが追随する。

「何を考えてるんだ？」

『撃てますよー、宇宙だろうと海中だろうと、何処でも』

困惑するクロノの代わりに、エイミィが応える。

「まさか…君達」

「うん、防衛プログラムを倒して」

「コアを捕らえて、アースラの前に転送」

「アルカンシエルで、消滅っちゅーことやな」

何かに気付いたクロノに、なのは、フェイト、はやての順に答え。

「はっ、それは判りやすく良いな、転送はユーノ、アルフ、シヤマルの3人でならいけるだろ？」

「そうだね、コアだけ捕らえられれば、いけると思う」

「ああ、そのくらい任せときなって」

「コアの確保も私ができますね」

良彦の言葉に、ユーノ、アルフ、シヤマルが答え。
考え込んでいた、クロノが顔を上げる。

「個人の能力頼りで、大きな賭けだけど、成功すればそれが一番か」

『とんでもない事を考える子達ね、でも…それでいきましょう、エイミー時間は？』

『後2分くらいです、艦長』

『そう、それじゃ、皆…こっちはアルカンシエルを準備してまってるから、ずばつとやっちゃいなさい』

リンディが、それに許可を出し、皆は自分のデバイスの確認などを始める。

良彦も使い切った4発のカートリッジを取り出し、込めなおす。

「うし…とりあえず、いけそうだ」

「て、良彦君、なのはちゃん、フェイトちゃん、シャマルお願い
や」

「はい、皆さんの治療ですネ…クラールヴィント本領発揮よ」

『了解』

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

紡がれる言葉と共に、柔らかい風が3人を包み、怪我やバリアジ
ヤケットのほつれなどまで癒し、直す。

なのはとフェイトが驚いているなか、良彦は安らいだ表情で風に
身を任せている…リトの記憶のなか、何度シャマルの癒しに助けら
れたらうと、多少内心苦笑しつつ。

「わ、凄い、ありがとうシャマルさん」

「湖の騎士シャマルと、風のリングクラールヴィント…癒しと補
助が本領です」

なのはのお礼に嬉しそうなシャマル。

その間小さい声で何処かと通信していたのか、会話を終えたらし
く、一枚のカードを中で回転させる。

『スタートアップ』

声と共に青い光りがカードを包み一本の杖に姿を変え、それを手
におさめるクロノ。

「だから、今を戦って未来を変えます」

決意の表情と共に言い放つ。

「防衛プログラムのバリアは物理と魔法の複合四層式、それを壊して」

「せーので全力砲撃！」

「コアを強制転送で宇宙へ」

はやて、なのは、フェイトも決意を固めるように言っ

「なら、さっさと終わらせるか、折角のクリスマス・イブだしな」

「だな、ケーキくわねーとならねえ」

「いや、別に絶対じゃなくても良いんだが」

「はん、特別な日にケーキは常識だろ、馬鹿じゃねーのか良彦」

「そこまでいうなら、一発でバリア壊せよ、そしたらケーキ奢ってやらあ」

「よし、言いやがったな、見とけよ」

夏休みの頃のように言い合う、良彦とヴィータ、こつんと拳同士を合わせ、お互いの指示位置に飛んでいく。

防衛プログラム暴走まで後少し、プログラムを打ち倒し平和を勝

ち取る為に、皆が全力を尽くす。

25：夜天の帰還（後書き）

フェイト、はやて、守護騎士復帰：久しぶりに良彦とヴェータの掛け合いをかけました。

次回は対防衛プログラム戦の予定です。

26：闇の終わり、旅の終わり

海上で黒くよんだドーム…その周りを取り囲むように闇の柱が立ち上がる、防衛プログラム暴走の瞬間。

よんだ闇のドームが頂点から消えていき姿を現すのは夜天の書を闇の書と言わせた闇…それはまるで巨体を尖った岩で覆い隠し、頭であるはずの部分に夜天の守護者にした上半身がフィギュアヘッドのように生えている。

回りには、陸上で出てきた触手や、蛇のような体をし、顔にレンズ状の器官を持ったモノが複数飛び出している…恐らくは蒐集された生物達の特徴なのだろう。

「まずは、4層のバリアを貫く！」

「ヴィータ、なのは、頼む」

クロノが作戦開始の合図を叫び、良彦が馴染みの二人へ声を掛ける。

「そのまえに、ストラグルバインド！」

「邪魔なのをとめないとな、チェーンバインド！」

「縛れ鋼の軛…づおああああつ…！」

触手を縛り断ち切り、蛇体をなぎ払う、できるのは一瞬に空白。良彦の声に顔を見合わせ、お互いに一呼吸いれる、ヴィータとなのは。

「ちゃんとあわせるよ、高町なのは」

「ヴィータちゃんもね」

まず構えるのは、ヴィータ

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

『了解：ギガントフォルム』

カートリッジ排出と共に、アイゼンの姿が変わる、先端に付くのは巨大な打撃部位。

「轟天爆砕：ギガント・シュラークツ！」

振り上げられるアイゼンは更に巨大に長大になり、その大きさは遠近感が狂うほどで：それを闇の書の闇：既に魔獣か：に振り下ろせば、一層目の物理バリアがガラスのように碎け散る。

それをみたなのはが、レイジングハートをくるつと構え。

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン…いきます！」

『ロードカートリッジ』

「エクセリオン…」

『バレルショット』

「バスター……………フォースバースト！」

無色の衝撃がバリアに打ち付けらる、それを追うように桃色の砲撃…4本の少し湾曲した砲撃がバリアへ着弾し、全てを束ねるよう一本の直射砲へと姿を変え…二層目を砕く。

次の指示をだすのは、守護騎士の参謀…シヤマル。

「シグナム、テストアロツサさん…次」

その声を受け、静かに佇むシグナム。

「刃と連結刃に続くもう一つの姿…レヴァンティン！」

『了解…ボーゲンフェルム』

長弓と化したレヴァンティンが、上下にできた排出口から、カトトリッジを二発吐き出す。

魔力でできた弦に指をかけ、静かに引き絞り…手の中に現れた矢に紫の魔力光が宿る。

「駆けよ隼！」

『シウトウルムファルケン』

放たれた矢は一筋の光りとなり、三層目に直撃、これを破壊する。その様をみたフェイトは、ザンバーフォームのバルディッシュをくるっと円を書くように振るう…金色のミッド式魔法陣がうかび、周りに小さな電撃が走る…バルディッシュを担ぐように構え。

「撃ちぬけ、雷神！」

『ジエツトザンバー』

長く、長く伸びた金色の巨剣が、四層目を切り裂き、本体である魔獣の巨体すら傷つける。

もだえ叫ぶ巨体、再び伸び魔力光を先端に集める蛇体。

【ア、アアアアッ！】

「盾の守護獣、ザフィーラ…攻撃なんぞうたせん…でやあああああッ！」

叫ぶザフィーラ、海中から伸びた蛇体の下から白の魔力光のできた軌が、蛇体を刺し貫く。

そこで出来た隙に追撃…はやてが、杖…剣十字、シユベルトクロイツを左手で掲げ、右手には夜天の書を持つ…唱えるは石化の呪文。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」

はやての足元に白いベルカ式魔法陣が展開、あたりは逆に暗くなるなか、周りに6個の白いスフィアが発生し、そこから一本ずつ槍のように魔力砲撃が飛び出し、剣十字からも追加され、計7本。

それが、巨体に刺さり…刺さった場所から生物部分を石化、灰色に染めていき…次の瞬間、崩れ落ちるフィギュアヘッド、だが内側からまるで恐竜のような頭や蛸の様な足が現れ、グロテスクになっ
て行く。

「うわあ、なんか大変な事に」

『再生速度が速すぎて、あんまりきいてないよ！』

それに顔を顰めるシャマル、バイタルから様子を見ていたエイミイからの報告。

「それでもダメージは通ってる、続行だ…デュランダル！」

『オケーイ・ボス』

氷結の杖デュランダルを掲げ、唱えるクロノ。

「悠久なる凍土 凍てつく棺のうちにて 永遠の眠りを与えよ
凍てつけ！」

『エターナルコフィン』

唱えるそばから海が凍っていき、デュランダルの発動音で、魔獣全体が凍りつく…それでもなお再生し暴れる魔獣。

皆より少し上空、風の強い場所で、両腕を掲げる良彦。

「ゼピュロス…フルドライブ！」

『了解…カートリッジオールロード』

4発のカートリッジ全てを同時ロード…唱えるのは、清風に許された一つだけの対軍魔法。

「風よ集え、我が手中で踊り走れ、我が眼前にある全ての物を打ち砕け！」

『魔力及び風圧圧縮…圧縮…圧縮……目標との間に経路確保、目標周辺に真空結界』

呪文の後出来上がるのは、両腕の間にある発光円盤…放たれるのは、破壊の力、極限まで圧縮した魔力と風が混ざり出来上がる…高電離気体。

魔獣までの間に周りを真空で遮断した経路が作られ、効果範囲を狭める為に目標付近に境界を真空で作った結界を張る。

「くらい…やがれっ！」

『おおかみ
大神の槌』

良彦の腕の間…発光円盤…から打ち出された青いプラズマは作られた道を直進し、魔獣へと撃ちつけられ、そこで爆発…真つ青に光り、破壊を撒き散らす…だが、それでも表面から何割かを削った程度。

それでも再生のために動きは止まる。

「（いまだ、なのは、フェイト、はやて！）」

上空から念話と同時に叫ぶ…そして三人が構える。

「全力全開…スターライトー」

何発ものカートリッジをロードし、桃色の光りがレイジングハートの前方で膨らみ、その周りを帯状魔法陣がくるくると回る。

「雷光一閃…プラズマザンバー」

こちらにもカートリッジをフルロードし、金の光りと電撃がバルデイッシュを覆う。

「ごめんな、かんにんな」

闇の書の闇をみて、悲しそうに呟き目を一瞬閉じるはやて、次の瞬間覚悟を決めた表情で紡ぐ

「響け、終焉の笛…ラグナロク」

足元にミッド式の、手前にはベルカ式の魔法陣が浮かび、ベルカ式の三角の頂点それぞれに光りが宿る。

響くのは闇の書の闇を、撃ち砕く…三重奏。

「…ブレイカー！」「…」

桃色、金色、白色の魔力砲撃…飽和砲撃レベルの攻撃が闇の書の闇へと三方から放たれ…真っ白に辺りを染める。

そんな中、クラールヴィントで出来た円形の空間…旅の鏡…から、コアを補足するシャマル。

「捕まえ、たっ！」

同時に

「長距離転送！」

「目標軌道上！」

ユーノ、アルフが転送呪文を開始。

「…」「…」「…」

3人の魔法が、コアを軌道上へと転送させていく。

アースラでは、アルカンシエルの発射シーケンスをすでにおえ、既に準備は万全。

「防衛プログラムのコア、来ます…でも、凄い勢いで再生しています」

エイミィの声が響く

「コア、アルカンシエルの射程距離にです！」

男性乗組員の声が響き

「アルカンシエル発射後、直ちに安全距離まで退避します」

「了解」

「アルカンシエル…発射」

リンディの指示にクルーが答え、アルカンシエルの発射スイッチ…リンディの前に浮かぶ6面体、そこに差し込まれた鍵を捻る。

アースラの前方に凹面魔力圧縮空間が展開、本体から伸びる二本のアームの間から放たれる魔力を集中し、撃ちだす。

アルカンシエルの砲撃がコアに直撃…空間内の全てを破壊しながら、コアも消し飛ばしていく………全ての音が一瞬消え。

「アルカンシエルの直撃を確認……再生反応……ありません！」

エイミイの報告がとどくと、クルー全員の安堵の溜息が響く。

「警戒レベルを準一級に引き下げ、もう暫く反応空間の様子を見ます」

リンディがそう告げて、艦長席に座り込む。

『と、いうわけで現場の皆おつかれさまー、一応観測は続けるけど、とりあえずは、って事で』

エイミイからの連絡に、集まって上空を見つめていた皆も安堵の息を吐き出す。

「だー、つかれた、もう今日は休みてえ」

珍しくそんなことを言う良彦。

「は、んなこといって、戻ったらランニングとか行くんだろ？」

突っ込むヴィータ。

「いやいや、今日は朝と夕方はしつたからな……ああ、でも約束どおりケーキとってこねーとな」

「よしくん、歩いていいんだよ」

「うん、私もそう思う」

「まてまて、走ると思われたのかおれ、お前ら人を何だと」

「修行マニア」(全員一致)

なのはとフェイト、そして全員の言葉にがっくりとうなだれる良彦、響く笑い…そんななかではやて一人がゆっくりと力が抜けたように崩れ落ち、シグナムに支えられる。

重なる皆の声、はやてを呼び、心配する言葉…その言葉が静かになつた空に何度も響いていた。

26：闇の終わり、旅の終わり（後書き）

闇の書の闇との決戦、基本は大体本来どおりです。

良彦の使った魔法は、と禁の一方 行と、気象 霊記の主役が使った技に影響されたものです、魔力も3人娘と比べ少なく、カートリッジ全部でようやく可能、普通の魔導師か騎士ならまだしも、上位には防御される程度でしかありません、ただ結界を張らなければ範囲はもつと広く、結界分の魔力も威力に回せるのもう少し威力は上がるはず…総合威力はニアS程度と想定しています。

今回は、リインフォースとの会話と分解、自分なりの救済辺りの話になると思います。

27：新しい旅へ

結果としてはやてが倒れたのは、壊れた夜天の書を無理に使い、しかも初めてで広域殲滅級の魔法まで使ったことによる過労が原因と診断された。

今は、アースラの医務室でゆっくり寝ているはやて…其処には守護騎士と夜天の守護者…リインフォースだけがはやてを見舞っていた。

しばらくして、一様に少し暗い顔で出てくる守護騎士とリインフォース…ヴィータははやてに何かを告げるように扉の所で呟いて最後に出て行く。

艦長室へ向かうのか歩くリインフォースに後ろから良彦が声を掛ける。

「一寸いいか、えっと…リインフォースだっけ？」

「ん…ああ、君はたしか」

「八坂良彦…リインフォースに判りやすいのは、清風の騎士のほうかな？」

良彦がそういうと、じっとそのかおを見つめるリインフォース…暫くして少し頷き。

「青い髪に、黒と緑の虹彩異色…そうか、君はリトの子孫か」

「まあ、そうなるかな一応リトの記憶も大体は持ってるから、細かい説明はいいや」

「そうか、なら私がこれからどうするかも判ってるのか？」

「記憶が正しければ…防衛プログラムと転生プログラムだけじゃなくて、リインフォース…長いからリインでいいよな…も感染してるんだろ？」

「そうだな…なら」

「まあ、それでも一応聞きたいんだ…本当は居たいんだよな？」

お互いにはつきりした言葉は使わず、問いかけあう。

「…そうだな、あそこで皆と共にありたくないと言えば嘘だ、だがそれが主の為ならば私に後悔はない」

「ん、そっか…判った、あんがとな」

リインの意志を確認し、頷く良彦。

「では、艦長に報告しなければいけないので、行くぞ」

「ああ、それじゃな」

歩いていくリインを見送り…

「そつちに無くて、こつちにや大有りだつて…さて、クロノに頼んでおいた方はどうなってるかな」

小さく呟いて、此方も歩き出す。

その後、リインフォース自身から本人の破壊をなのはとフェイト、良彦が指名され、そこで感染についての真実も明かされる。

が、良彦はそれを拒否して、やる事があるから、と部屋を出て行く…その様子に怒りなのか、悲しみなのか複雑な表情を見せる、部屋の中の一瞬。

数時間後、まだ夜も明けきらぬ時間：はやては自宅で寝かし、海鳴りの丘の上でリインフォースを送る準備が始まる。

其処には真ん中にリインフォースが白いベルカ式魔法陣を引き、左右にはなのはとフェイトがそれぞれの杖を掲げ、その魔法陣に自分達の魔法陣を接続している。

三角の頂点の一箇所、リインフォースの後には守護騎士達が見守るように4人で佇む…ヴィータはシグナムに抱きつき、いまにも泣きそつに見える。

その場に居ない良彦は、その上空で騎士甲冑姿、手には青く光る頭くらの大きさの球体をもって、そのようすを見下ろしている。

桃色と金色、白色の魔法陣が輝きを放つなか…其処を指し進んでくる影が一つ…丘の上、しかも地面は雪で真っ白な其処を車椅子で駆けつけるはやて。

段差にタイヤを取られたのか転倒しつつ、リインフォースに近づく…駆け出そうとする守護騎士をリインフォースが留め…はやての前でひざまずく。

数言、おそらく別れと感謝の言葉を述べたであろう後で、リインフォースは中央に戻り。

レイジングハートとバルディッシュのコアが、数度光りを放ち…リインフォースは光りの粒へと姿を変え、天に立ち上る…少し後で

はやての前に落ちてくるちいさな剣十字のペンダント。

それをしっかりと受け止め、はやてのラインフォースを呼ぶ声が辺りに響く。

「ほれみる…そつちに無くてもこつちにはあるじゃないか」

その叫びを聞き、呟くように言った良彦が、左手に青い球体を捧げ持ち…詩の様に呪いを唱える。

『永久とこしえに流れる風よ、魂を癒す流れよ、その流れで清められし魂よ、魂の記憶よ、今此処に集え…その魂の名は…祝福の風…ラインフォース』

一文節毎に二発のカートリッジが使われ、右手で忙しく再装填しながら、全てを唱えきる。

良彦の周りを優しく風が舞う、それにあわせるように雪も一緒に舞い踊り、其処へ青い魔力光が広がって行き…ゆっくりと収束、手にささげ持っていた青い球体へと吸い込まれていく。

しばらく、目を瞑っていた良彦が満足げに頷き、上空から姿を消した。

夜が明けてクリスマス当日、昨日の事や魔法に関することでアリスやすずかに説明をするというのは、なのは、フェイト、はやて、良彦、全員一致で同意した。

また、なのはは夜に高町家の人とも話をするらしい…当然のように良彦も一緒らしいが。

と、いうわけで…アリス、すずかがクリスマス会をすると言うので説明はその時という事にして、まずはやてを迎えに病院へ。

流石に今回は良彦もバスだ…走るっていったら、なのはとフェイトが今日くらいは、と止めたのだ。
仕方なくバスに乗ってる良彦…椅子に座らずよく見ると踵が浮いてるのはきつときのせいだろう。

病室に行くとき私服姿で車椅子に乗るはやてがいた。

「あれ、もう退院なの？」

「ちやうよー、今日は外出許可もろてん、もう暫く入院患者さんやな」

「そつか、パーティの為だね」

「そういうことや」

なのはの問いに答えフェイトに微笑を返すはやての胸には、剣十字のペンダント。

「それ…リインフォースの？」

「せや、新しいデバイスをこの子に組み込んでもらおうとおもってん」

「はやてちゃん、魔導師続けるの？」

「折角あの子が残してくれた力やしなあ、せやから役立てたいんよ」

「そうか、いいんじゃないか」

フェイト、なのはの問いに応えたはやての言葉に、苦笑しながら肯定する良彦。

全員の視線が一瞬あつまり、ヴィータなんかは一寸怒りの視線だったりするが、全て気にしてない様に受け流す良彦。

「ほれ、そろそろ出ないと間に合わないぞ」

その声で再び動き出す皆：病室を出て、であったのはどうやら主治医の先生：シグナム、シャマル、はやてが今日はちゃんと戻るよと言われている。

「そういえば、昨日無断外泊だったんだよね、どうなったのかな？」

「めちゃくちゃ怒られた：シグナムとシャマルが」

「でも、あの先生：本気で心配してくれてるね」

「ああ、良い先生だ」

なのはの問いに、フェイトの呟きに答えるヴィータ。

すたすたと皆歩き出す：途中、フェイトとシグナムだけ一瞬とまって何か会話した後、シグナムがフェイトの頭をなでていたりした。

クリスマス会では結局、なのはが魔法に出会った事件：P・S事件：や、フェイトの事情、はやての事情、良彦の事情それに今回に闇の書事件の話などを二人にすることになった。

ふたりはそれを受け入れ、これからも友人であることに変わりはない。

無いと断言してくれ、会は楽しい雰囲気が終わる。

高町家では、なのは、フェイト、リンディ、良彦の魔法関係組と、士郎、桃子、恭也、美由希の高町一家に別れ、魔法の事これまでの事件の事：そしてこれからの事を話し合う。

なのはは、局入りは不明ながら囑託として魔法を役立てたいと良い、良彦もほぼ同じ答えだが：話だけ聞いているベル力自治区の方も言ってみたいと言う事を話した。

驚きながらも、それを聞いて、納得と心配を抱えながらも高町家の人達はなのはと良彦に、頷いてくれた。

その話の後夕食を食べ、良彦が家に帰ろうとすると士郎が声をかけてくる。

それは、良彦の祖父の話であり、父母の話だった：祖母も父もかつては要人の警護などの仕事を行っていた人間で、父母が死んだのは対抗する組織の陰謀であったと言う事実。

その組織も士郎と恭也により既に壊滅させられたという報告だった。

それを聞いて、士郎へと礼を言って、良彦は家に戻る。

仏壇に手を合わせながら、少ない父母の記憶や、祖父から受けた修行などを思い出した：布団に入って直ぐに寝たが、久しぶりに家族の夢を見た…。

父母も祖父もいて、修行は相変わらずながら、皆がいる安心感を思い出した。

明けて26日、クリスマス仕様から正月仕様へと一晩で変化した街を良彦と、フードの付いたジャンパーを着てフードを深く被る人

物：身長は150程度：が一緒に歩く、目標は病院。

先にシヤマルにメールを居れ守護騎士にも待つてもらっている、何度も足を運んだはやての病室：ノックの後扉を開ける。

守護騎士4人とはやての合計5人の視線が入口に集まり、良彦とフードを被った人物に集まる。

「おいつす、昨日ぶりだな」

「せやね、面会時間になって直ぐとか、どないしてん良彦君：それにそっちは？」

「そうだな、聞き分けが良すぎる融合騎：その今の姿かな、既に融合騎じゃないけど」

とぼけたように言う良彦に、はやては、守護騎士は、驚いたようにフードの人物を凝視する。

ゆっくりと外されるフードから溢れる銀色の長い髪の毛、開かれる瞳の色は赤：そして、飛び出す白い獣耳の12歳位の少女。

「リイン、フォース？」

思わず耳の辺りで疑問系になるはやて。

ゆっくりとそれに頷く、少女：よく見るとベルトのように白い尻尾が腰に巻きついていて

「はい：はずかしながら、戻ってきてしまいました」

「恥ずかしくないよ、でもどうして」

驚きと嬉しさで混乱するはやて。

「説明してくれるな良彦」

「そうだ、どういうことだ！」

静かに脅迫気味な迫力のシグナムに、詰め寄るヴィータ。
シヤマルとザフィーラも困惑気味だ。

「おちつけ、ちゃんと説明するから」

ヴィータの頭を押さえとめる良彦、反対の手には翠屋の箱を持っている。

「ま、少し長くなるかもだしこれ約束のケーキな、皆の分もあるから」

箱をヴィータに渡しどかっとな椅子に座る、皆を見渡しゆっくりと話だす。

「俺が受け継いだリト…リヒトヴェツテル・ベシュテンバーグの記憶の中に、彼が地球に着てから作った魔法がある…まあ、特殊な考えを持った人とあつたから考え付いたらしいけど」

「【風は過去から未来まで常に流れ、人は死して風の中に魂をとかし、この世界を流転する、何時しか風は又一つになり、魂に新たな命を与える、風には今までの全てとこれからの全てが流れている】

「こんな考え方だ…で、リトは風の資質を持ち魔力も高い騎士だった、魔法構築は苦手でその魔法作るのに何年も掛かったらしいけ

ど」

一気に語り一息

「どういふ魔法なんだよ、結局、ちゃんと言えって」

グイータが焦れる、それに苦笑しつつ

「魂が風に溶けるなら、記憶もって考えて…媒介、俺の場合はゼピュロスだな…に死んで直ぐに風に溶けた記憶を記録させる、そんな魔法だ」

「魔法構築とか俺には良くわからないんで、細かい事は言えないけど、それでもリトはそれを完成させ、俺が受け継いで…昨日の朝、リインフォースの記憶を集めた」

「今回媒介にしたのは、ある管理世界で保護された狐型の子供だ、アルピノで保護先でも死に掛けてたんで…管理局と交渉して助けるために魔法の媒介にした」

「事後承諾だったんで、昨日はクロノに預けて、交渉してもらったんだけどな」

なんともいえない顔で良彦を見る守護騎士、はやても呆れ気味だ…それを見てリインフォースが

「本来消えるはずだった記憶や感情など、大半が残っています…蒐集していた魔法はほとんど残っていませんが、問題…だったですよっか？」

「いや、そんなことないよ、でもその…今ってリインフォース、もしかして」

「はい、良彦の守護獣になっています…申しわけありません、主はやて」

すまなそうな顔で詫びるリインフォースに慌てて首を振るはやて。

「っていつか良彦君、なんでこれだまってん！」

「そうだよ、良彦、お前ちゃんと言っとけば昨日だって！」

何故か矛先が向く良彦、だが

「一応前々から計画してたけど成功するかわからなかったんだよ、ぬか喜びさせたくなかったんだっての…家族を失うのは辛い、それが助かるかもって所から、やっぱだめでしたじゃいやだろ？」

「むう、ま、まあそうだけだよ…あ、でもそれじゃ良彦とリインフォースって一緒に暮らすのか？」

「んあ、はやての家で生活してもらおう予定だけど、まずいか？」

「私はええけど、良彦君はええの？」

「リインとは守護獣の契約で繋がってるし、近くというか、隣が高町町家だからな、こっちは平気だ」

「そうか…ふーん」

良彦の説明に納得するはやてとヴィータ。

「でもさっきの魔法って魔法力もそうだけど、制御も難しかったんじゃない？」

「そうだな、話だけ聞くと簡単そうだが、ありえない系統の魔法だ」

シヤマルとザフィーラが首を傾げる。

「良彦の家系、この場合はベシュテンバーグ家だな…は、戦闘の素質がある魔導師は、皆制御力の素質が高い…で、なければ『凧』は使いこなせない」

「どういうことだ？」

リインフォースの答えにシグナムが疑問を投げる。

「ええと、『凧』ってというのは…ザフィーラは青い球で俺が自分覆うのみたよな？」

「ああ、蒐集のときだな…あの結界のような魔法か」

「そう、まああの境界を越える攻撃なんか…射撃なら魔力を相殺して、実体なら風で止める…まあ、実際には実体の場合は動きを少し遅らせる程度だけだな」

説明していると、ヴィータが顔をあげ。

「なあ、前に戦った時それ使ってたか？」

「ああ、シュワルベフリーゲ投げ帰したり、アイゼンの動きが急に遅くなつたろ」

「でも、そんなときはナンも見えなかつたぞ？」

「そこが、ベシユテンバーク…【風王】の家系の制御力が無いと使えない要因だ…本来『凧』とは無色でなければ意味がない」

「なるほど、俺の時のように魔力光が見えれば簡単に魔法を使っているとはれるな」

グイータの問いに良彦、リインフォースが答え、ザフィーラは納得する。

「魔力の高い制御力により、『凧』を不可視状態のまま使う…これが【風王】の武の基本だ」

「…それだけ高い制御力があるなら、射撃や砲撃は？」

リインフォースの答えに、シャマルが再び疑問。

「【風王】の家系は、えてして射撃、砲撃の素質は皆無だ」

言われた良彦はがっくりしているが

「だが、闇の書の闇に使った魔法があるのでは？」

「あれは、射撃でも砲撃でもない…風を集めて作ったプラズマを本来なら無差別広範囲にばら撒く、ただそれだけの対軍魔法だ」

「だが、あの時は」

シグナムの問いに非情に答えるリインフォース…食い下がるシグナムに

「道を作って、その先に結界まではつたんだよ、あれ…プラスマ砲撃にみえて、実際はただの力技、だから威力も今一だったし」

「そうなのか」

「そうなんだよ…というか、ザフィーラもヴィータも俺と戦った時、俺から肉弾戦以外しかけたか？」

「…しかけてないな」

「ねーな、シュワルベフリーゲン投げ返したのはあれはただの投擲だしな」

「そういうことだ」

悲しそうに答える良彦、ザフィーラ、ヴィータも納得した様子。

「ともあれや、リインフォースも予想外の格好やけどもどってき
た、八神家全員集合やな」

「そうですね、はやてちゃん」

「はい、主はやて」

「…ん」

「おう、よろしくなリインフォース」

はやて、守護騎士一同の歓待を受け、嬉しそうに微笑むリインフォース。

「てか、話して喉渴いたし飲み物買ってくるからケーキ食おうぜ、一日遅れだけどそれ、桃子さんに頼んで今朝つくってもらったんだからよ」

「良彦は空気読め！」

「ああん、んじゃヴィータはケーキいらねーのか？」

「んなわけねーだろ、あたしも食うにきまつてんじゃねーか！」

「だったら、文句言わずつきあえ、飲みもん買って来るぞ」

「ったく、しゃあねーな」

いつもの用にじゃれあいながら病室をでる良彦とヴィータ…はやて、リインフォース、シグナム、シャマル、ザフィーラはそれを苦笑しながら見送っていた。

27：新しい旅へ（後書き）

駆け足ながら、闇の書の闇破壊後のお話です：リインは、最後までデバイスコアにするか守護獣にするか悩みましたが、きちんと生活できる守護獣にしました：ご都合主義万歳。

一応A'sは完結です。

次回からは空白期で、聖王教会への訪問とか書こうかと思っています。

28：聖王教会

闇の書の事件が解決し、リインフォースもはやての家で暮らし始めて数日、年が開けて翌年…三が日が過ぎたころにクロノから連絡がはいった。

休暇がようやくとれたので、以前言っていたベルカ自治区聖王教会の知り合いに合わせてくれるそうだ。

クロノと共に転送ポートを乗り継いで付いたのはミッドチルダの一角、大きな教会が少し先に見える場所。

「でかつ、あれが聖王教会なのか？」

「正確にはベルカ自治区だな、教会はあの大きい建物で、付属の魔法学校もある」

「はあ…しかし、ミッドの中央とはなんか雰囲気違うな」

「建物は古い物がおおいからな、眺めていても仕方がない、いこうか」

「おうっ」

廻りには信徒なのか、住人が同じように自治区へ向かう人々。

近づいていくとクロノより少し身長の高い少年、髪は緑で伸ばしている…が、此方へ手を振っている。

「やあ、お久しぶり、クロノ君」

「ヴェロツサか、久しぶりだな…でも、今日来る事は知らせてな

かったと思っただけど？」

「ははは、そこはあれだよ、僕にも独自の情報網がね、そっちの子が…?」

「ああ、彼が」

「八坂良彦です、今日はクロノ執務官に聖王教会の案内をおねがいしています」

「うんうん、僕はヴェロッサ・アコース、一応査察官とかしているよ」

「基本あまり仕事をしてないから、肩書は無視してもいいぞ」

「ヴェロッサさん、よろしくお願いします」

「ああ、呼び捨てでいいし、口調も改まる必要は無いよ、面倒だろっ?」

「…んじゃ、ヴェロッサで、よろしくな」

軽い挨拶をしていると、ふとクロノが

「…なあ、良彦…僕るときは最初から呼び捨てじゃなかったか？」

「だって、14歳だとは思ってなかったし、同年齢位かと」

「…そうか、まあなれているからいいけど、君もなのはたちと同年齢には見えないぞ」

「…良く言われるよ」

お互い視線を合わせ、何か共感するように頷く良彦とクロノ。

「まあまあ、この後義姉さんの所に行くんだろっ?」

「ああ、その予定だが…一緒に来るのか?」

「まさか…シスターシャツハに怒られに行く予定はないよ、少し時間があつたから挨拶しに來ただけさ、一応この後仕事でね」

「そうか、では、そのうち時間があえば何処かでゆっくり話でもしよう」

クロノとヴェロツサが軽く会話して、ヴェロツサは楽しそうに転送ポートの方へ歩いていく。

それを見送ってから、クロノが

「さて、教会に向かおうか」

「りょうかい」

そういつて、案内する為に先導して歩いていく。

中世の西欧風建物の中を歩き大きな教会へとたどり着く、入口には紫の髪をしたいかにもシスターと言った少女がクロノに気付いて、此方に一礼。

其処へ近づいていき

「ごきげんよう、シスターシャツハ…お久しぶりです」

「ごきげんよう、クロノ執務官、お久しぶりです」

お互いに挨拶し

「こちらが、以前お話した…良彦、彼女はシスターシャツハ…さっきのヴェロツサとこれから会う人の世話係みたいな感じかな」

「よろしくおねがいします、八坂良彦です」

「丁寧にどうも、シャツハ・ヌエラ、修道女です」

手を差し出し握手……お互いの視線が合わさり、何かに気付いたように同時に微笑む。

「時間があれば、一度おねがいできますか？」

「ええ、此方こそお願いします」

良彦の突然の言葉にシャツハは普通に頷き…クロノは困惑。

「さてでは、騎士カリムも待っていますし行きましょう」

「あ、ああ、そうだな」

「はい、おねがいします」

すつと手を離し、シャツハ先導で教会の中へ…しばし歩いて、一つの扉の前に…シャツハのノックにどうぞと声がして、中へ入る。

中は執務室らしい部屋、壁には本棚があり、執務机では金髪の少

女が羽ペンで書類を書いていたのか、ペンをペン立てに戻した所だった。

「ごめんなさい、いま終わった所だから」

椅子から立ち上がり此方へ来る少女：紺色のロングスカート、ワンピースに、黒の長袖ジャケット、腰から鎧の腰垂れを左右のみ短くつけ、黒のスカートのようなもので左右から後を覆っている。

「聖王教会教会騎士団騎士、カリム・グラシアです」

初対面の良彦の綺麗に一礼。

「八坂良彦です、忙しい所申しわけありません」

良彦もいそいで、騎士の礼を取る。

「それじゃ挨拶はこれくらいにして、本題に入っていいかしら？」

「本題…俺今日見学のはずなんですけど」

「先日の戦闘記録をみてな、聞きたいことがあるそうなんだ」

「クロノ執務官…？」

「カリムは管理局の理事官であるからな、閲覧許可が下りたんだよ」

「そういう事が…それで質問とは何でしょう、騎士カリム」

苦笑しながらカリムに向き直る。

「クロノ執務官から多少の報告は受けていますし、記録も見ています。貴方は、清風の騎士リヒトヴェッテル・ベシュテンバーグの子孫だと言っているのは間違いありませんか？」

「とりあえず、俺が受け継いだ記憶が確かで、ゼピュロスが本物なら、そうなると思います」

「では、いくつか質問しますので答えてください」

と、カリムからリトの時代の事であろう質問をいくつかされ、それに答える良彦。ゼピュロスとカートリッジも実際に見せる。

質問の答え、ゼピュロス、カートリッジなどで、ようやく納得したのか、微笑むカリム。

「貴方は【風王】直径の子孫という事になりますね、清風の騎士の名はそのまま受け継いでください、此方でも登録しておきます」

「はあ、ありがとうございます」

「ごめんなさいね、突然こんな話して。古代ベルカの業と記憶を持つ人は希少なので、面倒でも確認を取っておかないと後でもめるのよ」

「まあ、なんとなく判るんで構いませんよ、騎士カリム」

苦笑しつつ答える良彦、ふと思い出す手土産。

「そういえば、これを忘れてました、よろしければどうぞ」

差し出すのは翠屋の箱、シュークリーム詰め合わせだ、クロノから案内のとき紹介する人がいると聞かされていたので持ってきたのだ。

それを差し出すと、カリムは嬉しそうに微笑み。

「シャツハ、折角だしお茶にしましょうか」

「では準備します、騎士カリム」

そういつて、お茶が用意され、早速シュークリームも準備される。ゆっくりとお茶を飲んでいると。

「そういえば、良彦さんは管理局に入るの？」

「んー…実際の所はなやんです、受け継いだ記憶があるんでベルカ自治区の方で騎士として、というのもありかな、と」

「では、私と同じように教団騎士としての叙勲と、管理局での仕事を両立と言う形にしては？」

「家柄とか無いけど大丈夫でしょうか？」

「では、私の直属の騎士になってもらって、管理局には派遣と言う形にすればどうでしょう？」

カリムと良彦の問答に、小さく頷くクロノ。

「それなら問題ないと思う、まあ、陸は良い顔はしないかも知れないけど、大丈夫だろう…それに清風の騎士の名を教会で認められ

る訳だし、カリム配下なのも問題ないだろう」

「問題ないならいいけどな…と、良いですけど」

言い直す良彦に微笑むカリムとシャツハ。

「なれた言葉使いで構いませんよ、騎士良彦」

「そうですね、見ていて違和感しか覚えませんし」

「おうふっ、じゃあ普段どおりで」

二人の好意に素直に甘える良彦、ふと疑問が浮かぶ。

「そういえば、シスターシャツハは…騎士ではないのです?」

「シャツハは、修道騎士ですね、シスターでありいざと言う時は騎士でもあります」

「ああ、やつぱり」

「やはり、とは?」

良彦の問いに答えたカリムがくびをかしげる。

「先ほど握手した時に、手の感覚で…武器を使っている人だと」

「私もそれは判りました、ただ騎士良彦は無手ですよね」

それに答える良彦とシャツハ。

苦笑するクロノ、カリム。

「そういう事でしたか、後で模擬戦でも行っおつもりで？」

「時間があれば、かな、俺は泊まりでもまだ学校が休みだからいいんだけど、クロノの時間が」

「今日だってやっと取れた休暇だったからな」

苦笑する良彦とクロノ、其処へ

「では、騎士良彦は此方が責任を持って送りますので、滞在が可能ななら数日泊まって行ってはいかがですか？」

カリムが、微笑みながら提案する。

「えーと、今日4日だから、2泊くらいはできるかな？」

「時間がおおければ、案内できる場所も増えますし、問題なければ部屋を手配しますが」

呟く良彦にシャツハが問い

「それなら、午後から僕は戻ってもいいかな、エイミィが時間あったら買い物行きたいとか言っていたし」

「ん、俺はいいよ」

その言葉にクロノが提案して、良彦はあっさりとそれを受け入れる。

「じゃあ、シャツハ部屋の準備と案内は任せます、私はもう少し書類を片付けないといけないから」

「判りました騎士カリム…では、騎士良彦、クロノ執務官、こちら」

お茶を切り上げ、立ち上がる一同

「ああ、騎士良彦…シユークリーム美味しかったですよ」

にこっと微笑んで礼を言うカリム。

「じゃ、又来る時買ってくるよ、騎士カリム」

答える良彦。

お互いに微笑みあい、3人は部屋を出る、クロノはそのまま良彦とシャツハに別れを告げて、外へ向かっていく。

「では、此方へ」

シャツハの案内で、教会の一室に通され。

「逗留には此方を使ってください、騎士良彦」

「ありがとう、シスターシャツハ…えと、此処って？」

「教会騎士団騎士の部屋です、いまは使う人が居ない空き部屋なので」

「そっか、了解…じゃ、ありがたく借りるよ」

小さく頷き、少ない手荷物、小さなバック程度だが、を置いて。

「んじゃ、案内よろしくシスターシャツハ」

「はい、では参りましょう」

そして、二人揃って歩き出す…向かう先を楽しみにしながら。

28：聖王教会（後書き）

はやてより一足はやく、カリム、シャツハ、ヴェロツサと対面。古代ベルカの記憶持ち、王族の血筋ってことで、ベルカの騎士で管理局出向みたいになりました。

次回は、案内と模擬戦でしょうか。

29：修道騎士シャツハ

すたすたと迷い無く歩くシャツハの後を少し早足気味に歩く良彦、教会の奥あまり人のいない方向に行ってる気がするが、不案内な良彦にはわかってない。

暫く歩き、通路から出た其処は広い運動場のような場所で数人の人達が、手にアームデバイスと思われる武器をもって、訓練しているように見える。

「あの、シスターシャツハ…此処って？」

「教会騎士団の訓練場です、この時間は自主訓練の時間なのでスペースは十分ですね」

「なるほど…さきにごっちから、ですか」

シャツハの目的に気付き、嬉しそうに微笑む良彦、シャツハも又微笑み

「折角ですし、見学は気がかりが無くなってからが良いかと思いまして」

「まあ、確かに約束して、何時になるか考えてるよりは、気が楽かな」

訓練場の片隅、ある程度人が居ない場所で、お互い距離をとり

「ああ、すいません騎士良彦…私は陸戦型なので、合わせて貰えますか？」

「了解、俺も陸戦の方が好きだから、問題ないよ」

「ありがとうございます」

お互い一つだけの取り決めを交わして…シャツハは橙の、良彦は青の魔力光に一瞬つつまれ。

「聖王教会修道騎士…シャツハ・ヌエラ、こちらはヴェインデルシヤフト」

黒のタンクトップ状のアンダーシャツに緑の丸首袖なしのびったりしたシャツとスパッツが一体になったようなスーツ、その上に腰に一枚の白布を巻きつけそれを抑える様に緑の帯…腕は二の腕まで黒の手袋、ただし指先は布地が無く、足はつま先から膝上までの黒い靴とストッキングが一体化したような、そんな騎士甲冑を身に纏う。

その両手には、トンファー型のアームデバイス…左手のデバイスを防御用としてかやや体の前方にかまえ、右手のは腰辺り。

「清風の騎士八坂良彦…それとゼピュロス」

いつもの用に、手には無骨な鋼色の籠手、黒のアンダーシャツに青い長袖ジャケットにズボン、ブーツは脛辺りまでのハードシエルのもので黒、良彦も騎士甲冑に身を包む。

此方はいつもどおり、左手は顔の前辺りに拳、握りこまず軽く曲げる程度、右手は腰、こちらにもぎりこまない。

「では、騎士良彦…」

「…ええ、騎士シャツハ」

「「勝負！」」

お互いが地を蹴り、一瞬で間合いが詰まる…良彦の右拳はシャツハの左のトンファアの柄部分で受け止められ…シャツハの右トンファアがくるつと回されながら迫る、それは、良彦の腕の届く直前で一瞬風に巻かれ動きを鈍らせ、風を纏った左拳がそれを外側に『弾く』。

一瞬の膠着から、お互いが一步バックステップし、左の回し蹴りを同時に放ち…交差、体型の差で良彦が少し押されるが、体勢を崩す事はなく…良彦は反動を利用し、右足を軸に回転、体を低くして左足で足払い。

シャツハはそれを片足を引くことで避け、引いた足を踏み込んで、正面から左右のトンファアをあわせ、振り下ろす。

速度威力の乗ったそれを『弾き』切れないと判断した良彦は、

「『貫き』」

風を纏い一瞬で離脱…訓練場の土が舞い上がり、自然と視界をさえぎる…が、『風』に反応、下方からの打ち上げ…それに気付いた良彦が、一瞬の停滞を利用し身を右に捻り『捌く』。

土煙が一閃で切り裂かれ、先ほどの振り下ろしから振り上げた姿勢のシャツハ…構えを戻す前に、良彦が右への捻りをりようし、踏み込みつつ右手で裏拳。

が、それを引き上げた左膝に小さなシールドを張って防ぐシャツハ…衝撃で距離をとる。

「なるほど、先ほどから貴方の近くで一瞬ながら動きが落ちる、

これが【風王】の希少技能ですか」

「しってるなら、話は早いかな…まあ、そういう事で、しかし騎士シャツハ…速いね」

「それが持ち味ですから、騎士良彦もしつかりと修練を積まれて
いるように」

「清風の騎士…初代の記憶のおかげもあるかな、目指すべき、越えるべき場所があるから」

お互いに、最初の構えに戻り…軽く言葉を交わす。

「ならば高みへと登る為に…」

「ああ、もつと高い場所へ…行く為に」

「行くぞ！（いきましよう！）」「」

恐らくお互いの最高速度…良彦は貫き、しかもカートリッジを一個使つての最高速…シャツハもカートリッジをロードし、良彦の眼前から消える。

『凧』に反応…右前方、右手に風を纏わせ、シールドを小さく張る…が、その速度威力はそれを上回る。

「烈風一迅！」

シャツハの掛け声と共に振るわれた一撃がシールドを砕き、『弾く』為に打ち出した拳を弾き飛ばし…停滞も物ともせず良彦の右脇腹を直撃、衝撃で良彦の体は吹き飛び、地面を数度転がる。

回転が止まった後、ゆっくりと…ゆっくりと立ち上がる良彦、足元はふらつき、構える手には力が無い、が…目はまだ死んでいない。相対する良彦とシャツハ…だが、かくんと良彦が膝から倒れる。

「騎士良彦!？」

駆け寄るシャツハ…良彦は既に気絶しており、先ほど立ち上がったのは恐らく意地なのだろう事をシャツハは気付く。

数時間後…

「知らない、天井だ…」

と呟く良彦の視界に、紫の髪をショートにした少女…シャツハが顔を覗かせ

「大丈夫ですか、騎士良彦」

「ああ、騎士シャツハ…いや、もうシスターに戻ってる？」

「意識はしっかりしてますね…痛みはありますか？」

「ん…脇腹が一寸痛いかな、それくらい」

「そうですね…良かったです」

周りを良く見れば貸し与えられた部屋のようで、自分の荷物があ
る。

すまなそんな顔をしたシャツハが、水とリングをくれて、頭を下げる。

「すいません、騎士良彦…あの一撃に反応されたうえに、防がれそうだったので…その加減を間違えました」

「いや、あのくらいじゃないと修行にならないから、良いよ…さっきの烈風一迅って、あれがシスターの決め技？」

「ええ、正確にはその前の移動魔法…旋迅疾駆からの連携です…大抵の騎士は反応しきれないのですけど」

「ああー、あの消えたように見えたあれもやっぱ魔法なんだ…確かに見えなかった、俺が反応したのは『凧』のおかげだし、結局止め切れなかったなあ」

「『凧』というのは、希少技能ですか？」

「そ、まあ、風と魔力の複合結界にちかいか、サーチ能力もあるから、境界を越えるものは全て気付ける…シスターシャツハの攻撃に反応したのはそれでだよ」

お互いに軽く答え合わせのような会話をしながら、笑い会う。

「今日は完敗だなあ、今度またお願いしてもいいかな？」

「ええ、此方こそ是非お願いします」

しばし、話したあと、再戦の約束…修行馬鹿と、バトルマニア2号…1号はシグナム…この後この3人が訓練場で良く見かけられる

よくなるがもう少し先の話。

結局、初日はシャツハとの訓練の後、訓練場や食堂などに居たほかの騎士と話たり、模擬戦したりして街や学校の見学はしなかった。まあ、それでも修行馬鹿は嬉しそうにしていたのだが。

仕事が終わったカリムがその様子を見て、夕食時に良彦をからかったりしたのは、余談である。

翌日からは予定通りに、見学というか観光を済ませ、2泊3日の聖王教会ツアーは幕を閉じる。

もう一つの余談として…仕事を抜け出し、サボっていたヴェロツサとも仲良くなり、クロノともども初日の話を聞いて、あきれていたとか、そんなことも合ったらしい。

29：修道騎士シャツハ（後書き）

シャツハとの模擬戦です…積んできた修行の時間の差でシャツハに軍配が上がってます、良彦理想の動きはわかってても体が出来上がっていない&修行不足で、体がついてきません、『凧』も不可視性を高めるため、他の部分の出力がおち、結果未完成です。

今回は、オリジナルの話を一本入れようかと思えます…管理局任務に従事するヴァイター辺りと絡ませようかと思えます。

30：本局航空隊1321部隊

聖王教会訪問から暫く、良彦自身は月に1、2度のペースで教会に出向き、後は教会の方から、というかカリムからの指示で本局航空武装隊に出向させられていた。

なのはとフェイトが武装隊の訓練校に入学するのにあわせ、良彦もそうしようと思っていた所：騎士団の方でどうやら横槍を入れたらしく、結果いきなりの実戦投入である。

新人研修とか、簡単に座学や、配属された部隊で受けさせられたが：配属先の隊員は微妙な顔をしていた、面と向かって言ってくる人は居なかった物の、模擬戦などは恐らく予定より多かったと思われる。

それでも、模擬戦である程度の能力を示した事や、古代ベルカ語の知識、航空魔導師としての高い適性を何とか認められたらしく、段々と部隊に馴染んできていた。

まあ、数多く交わされたヴィータとの口論という名のじゃれあいもその一因かもしれないが：そう、良彦が出向させられたのは本局航空隊第1321部隊。

ヴィータが闇の書事件の奉仕活動先に指定された部隊である。

そして、今も…

「んだよ、ヴィータ…なんか文句でもあんのか？」

「ああ、大有りだよ良彦…てめえ」

お互いににらみ合い…手に持つのは、大きめのトレー、上には昼食なのだろう、パンとシチュー、サラダ…そして。

「てめえのアイスのほうがけーじゃねーか、それはあたしが狙ってたんだぞ！」

「はっ、取ったもん勝だろ、此処の形式じゃよっ！」

昼食はバイキング形式で自分で取りに行くのだ、アイスはガラスケースに皿に盛って入れられている。

「…寄越せ」

「…断る」

正に一触即発…と、思っているのはお互いだけで、隊員たちはまたか、と微笑ましく見守っている。

「てめえ、この後顔貸せよ、ぼこぼこにしてやんよ」

「は、できるのか、ちびっ子？」

「てめえも十分ちびだろ…なのは達よりちっちえーじゃねーか」

「いつちゃ、いけねえ事をいったな、ヴィータ」

「真実だる良彦、後なあたしは成長しねえだけで、大人だっつの」

「大人なら、せこくアイスクれーで口出すなよ」

「それとこれとは…話が別だ、此処じゃアイスがデザートなんぞ中々ないんだぞ」

「なら、なおの事ゆずれっ」

言い合いをしていると、厨房の主であるおばちゃんに叩かれる。

「あんたらね、アイスが楽しみなのはいいけど、列とまってるし、溶けるよ…後男なら女に譲ってやるくらいの度量みせなっ」

そういつて、周りをみさせ、現状を認識させる、たしかに一寸邪魔になりそうな位置だし、アイスも溶けそうだ。

「いつつうー、わかったよおばちゃん…ほれ、ヴィータ」

「お。おつ、さんきゅな、おばちゃん、良彦」

結局アイスを交換し近くの開いてる席へ移動して二人。

1321部隊の名物と化して来ていた。

食事が終わり、書類の纏め方等を他の隊員やヴィータに教わりながら、時間をすごしていると、隊舎内にアラートが鳴り響く。

近くの管理世界で指名手配中だったテロリストの一団を発見、相手のアジトや行動などを捜査していた現地部隊がきづかれ、現在交戦中。

テロリストには空戦魔導師もいるため、応援を、との要請だった。

これを受け1321部隊長は、相手の規模と人数から2小隊10人を選出、出動させる。

片方の小隊には良彦とヴィータの姿もあり、転送ポートから急い

で転送、現場近くまでポートで乗り継いで其処からは飛行許可を貰い飛行。

要請から比較的短い時間で到着した、現場では魔法戦が行われているらしく、色とりどりの魔力弾が行きかっている。

小隊長の支持により、二人のいる小隊は上空警戒に当たる事になる、今の所上空に魔導師の姿はないが、現地戦力には航空魔導師がいないため、急ぎ航空征圧を命じられたのだ。

「んじゃ、いくかね」

「そうだな、へますんなよ？」

「まあ、他の人達もいるし、俺は出来る事だけするよ」

「ま、遠距離でもあたしなら対応できるから、直ぐ声かけるよな」

「おう、其処は頼りにするぜ、近接なら俺も仕事あるんだけどなあ、ドックファイトするレベルの魔導師とか中々居ないし」

言い合っている二人に

「さて、私語はそこまでだ、上がるぞ」

と小隊長から一言。

「了解」

と、5人の魔導師が空へ上がる、小隊長がセンターガード、フルバック1にウィングガード1、フロントアタッカー2の構成。

とうぜん、小隊の中で一番小さい…身長的に…ふたりがフロントアタッカーだ。

「今の所、まだ相手航空魔導師は上がってきていないが、下からの攻撃にも注意、なっ」

小隊長が指示を飛ばしている最中どこからか、緑色の魔力弾が放たれ、それを小隊長がシールドで弾く。

「襲撃、だがどこから…各自索敵及び防御を開始、気をつける」
すぐさま指示が飛び、各自が動き出す。

「ちつきしよ、隠密系の魔法もつかえるのか、相手は」
何発か、魔力弾…先ほどの緑だけではなく、茶色や黄色のものも飛んできている…を防御しつつ、辺りを見渡すヴィータ。

「しかも、撃った後直ぐ移動してるなこれ、反撃の魔法が全部外れてる」

「見えねー相手じゃ誘導しきれーからな」

良彦も気配を探るなか、シールドで弾き、何発かは『流し』ている。

「ヴィータ少し防御任せて良いか？」

「なんか手があんのか？」

「一応あるけど、その間防御できねーんだ」

「なら、早くやれよ、その間あたしが防御しとくから」

「ああ、サンキュ…ゼピュロス、『凧』を広域索敵型に術式変更」

『了解…魔力域及び風域拡散、動体反応集積』

2発カートリッジがロードされ、テロリストのアジトやその付近空域に、ふうつと風が優しく吹く。

その真ん中で、目を瞑り…何かに集中する良彦、放たれる魔力弾は約束どおりヴィータが叩き落してくれる。

「（小隊全員に通達、敵航空魔導師は4、動いていない魔導師が一人、恐らくこれが隠密魔法の使い手です、座標XX、YY…お願いします）」

良彦のその念話に答えるように…

「アイゼンっ…シュワルベフリーゲン！」

『了解』

指の間に現れた四つの鉄球をアイゼンで撃ちつけ、それが指定座標に着弾、ぎりぎりでかわしたのか一人の魔導師が着弾後の煙から飛び出す。

それと共に、空に現れるのは今飛び出した魔導師を入れて4人の魔導師。

「敵隠密魔法解除、一人ずつ抑える、支援を頼む」

フルバック以外の四人が、相手魔導師に一気に近づくと…良彦の前には隠密魔法を張っていた魔導師。

「ち、こんなガキが相手かよ、さっさと応援いかねーと後で文句いわれんな」

良彦をみて、そんな言葉を吐くテロリスト…良彦はそれを気にした様子も無く。

「此方は管理局だ、抵抗しなければ弁護の機会も与えられる、大人しく投降しなさい」

冷静に相手の権利を延べ投降を促す…

「ふざけんな、ガキが、ぶっ殺してやる！」

と、逆に激怒する魔導師。

「そうか…なら、無理矢理引きずっていこう」

いつもの用に、左手を前、右手を腰に構える良彦。

「はっ、ベルカ式なんざ、距離取っちゃまえばこっちのもんじゃねーか」

いって、距離をとり魔力弾を放つ、色は灰色…数は10個ほどか。

「…アホかお前…ベルカの騎士にはな、1対1で…負けはねーんだよー！」

飛来する魔力弾が良彦の間合いに入ると同時、スピードが落ちる…手の届く範囲のものは『弾き』で消して、届かないものは魔力を集め打ち消していく。

「な、に…何したんだガキ！」

更に逆上してただただ魔力弾を連射する魔導師…何回か、撃ち消している、相手に一瞬の隙…。

「『貫き』」

その隙を逃す事なく、高速移動魔法を発動、数初ほど残っている魔力弾は、風の結界を強め弾く…そのためにカートリッジを1発口ード。

逆上している魔導師の目の前に移動し、驚いた顔をした相手に…青の魔力光と風を纏った右掌底を振りぬく…ぎりぎりまで張られたシールドを青い魔力光が打ち砕き、掌底に纏わり付いていた風が掌の中に圧縮される。

「風拳・圧！」

シールドを砕いて叩きつけられた掌底、風の固まりが腹に撃ちつけられ、魔導師の体をくの字に曲げさせ…崩れた相手の腕を掴み、体を相手の懐に潜り込ませて…背負い投げ。

空の上での投げは…打ち付ける場所が無い為、魔導師からすれば悪手にしか写らなかつただろう、が。

「ゼピュロス！」

『盾』

ぐるんと回転する魔導師の背中普通なら地面のある場所にある場所に青いシールドが展開：其処へ思い切り叩きつけられる、油断していただけに衝撃が体を駆け抜け、動きが止まる。

その一瞬で魔導師の持っていた杖を蹴り、弾き飛ばす…シールドの上に乗った格好の魔導師へ。

「風鎖」

『了解』

青の魔力鎖と風により縛りつけ、鎮圧：周りもこの頃には征圧され空戦魔導師は全て捕まったようだ。

地上ももう一個の小隊が現地部隊と連携し、鎮圧は完了した様子…このテロリスト達のアジトは壊滅し、テロリストも全員捕らえられた。

現地部隊、1321部隊とも軽症者が数人程度で済んだそうだ。

隊舎にもどり、出勤隊員は報告書が終わり次第上がっていいという事になり、出向いた皆が協力し比較的早く書類は仕上げられた。書類をおわらせ、ぐうーっと伸びをしている良彦に…

「おっし、良彦、早く終わってたって連絡したらはやてが飯食いに来いってよ、くるよな？」

「おう、ありがたくお邪魔するぜ」

「なら、急げよ、転送ポートの利用届けはだしといたかな」

「あんがとな、騎士カリムに連絡して直ぐいくわ」

ぼんぽんとヴィータの頭を叩く。

「へっ、はやてが誘えって言うから、仕方なくだよ」

ふいつと横を向くヴィータ、少し頬が赤い。

「あいあい、一回家よって、翠屋よるか、シュークリーム食うだろっ？」

「あつたりめーだ、あたしも一緒にいってやるよ」

「はいはい、翠屋から走るけど、平気だろうな？」

「誰に言っただ、あたりめーだろ」

パンツと手を打ち合わせ、転送ポートに歩いていく二人…隊員たちからは相変わらず微笑ましい表情で見送られていた。

30：本局航空隊1321部隊（後書き）

1321部隊での作戦の一幕…このまま、なのは墮ちるまでは一緒だとおもいます。

なのはもすこし、救済を考えております、今回は祖の為の仕込みもあつたりします。

今回は、はやてが聖王教会に行く話でしょうか、リイン？も登場させられれば、と思います。

31：教会での一幕

そういえば、はやてだが：闇の書事件の後懸命のリハビリで、翌年の4月にはなんとか歩けるようになり、聖祥小学校へと転入してきた。

4人娘&良彦と同じクラスになり、その頃から管理局の仕事の話や、新しいデバイスの話をしたりしていた：リインフォースは、守護獣なので、ユニゾンできないし。

結果、新しいデバイスもユニゾンデバイスがいいだろうと言う事になり：そっち関係ならば、と聖王協会にクロノと良彦が紹介。

何度も足を運び、相談に相談を重ね：良彦もリトの記憶にあった、融合騎：ユニゾンデバイス：の話をしたりして、はやてに協力した。

まあ、専門分野じゃないので、参考意見になった程度だろう。

なんだかんだで、形になり、完成したのは闇の書事件から2年後、このころにはなのはやフェイトは既に魔導師として局で働き出していて、はやても頑張ったらしい。

また、なんども教会に出入りしたためか、カリムやシャツハ、ヴェロツサとも仲良くなっていた：その前から良彦、シグナム、シャツハの3人は会えばとりあえず模擬戦する仲になっていたが：。

で、まあ、久しぶりに騎士団訓練場でシャツハとの模擬戦を終わらせた良彦が、挨拶にカリムの部屋を尋ねると、そこにははやてと生まれたばかりのリインフォースツヴァイと一緒に茶を飲んでいた。

リインフォースツヴァイは基本サイズは人形：リちゃん人形位？：で飛行能力を持っている、セットでもつのは蒼天の書、青い夜天の魔導書といった感じの本型デバイスだ、特に氷結系魔法を得意としている。

「こんちわ、騎士カリム、はやて、ツヴァイ」

「いらっしやいませ、騎士良彦」

「お久しぶりやな、良彦君」

「あ、よしひこですよー、ごきげんようー」

3者3様の挨拶、シャツハも入ってきて、それぞれと挨拶をかわしていく。

「騎士良彦も、こちらにどうぞ」

カリムが空いていた椅子を勧めてくれる。

「んじゃ、ありがたく…今日は何の話してたんだ？」

「特に難しい話はしてへんよ、一寸ツヴァイの教育の事とか、シグナムが毎度毎度迷惑かけてます、て謝ってたんや」

「リインは、悪いことするとシャツハさんにおこられるのだそうです、がくがくぶるぶる」

シグナムの事当たりは良彦も苦笑をうかべ、シャツハについてはああ、まあ怖いよなとか思っている。

「騎士良彦、今何かおかしなことを考えませんでしたか？」

シャツハに一言尋ねられ。

「いや、なにも…うん、あれだツヴァイ、シスターシャツハはよほど変な事しなければそれほど怖く無いから」

「…では、少しは怖いと思っっているのですね」

「うあ、いや…ヴェロツサが怒られてる所見ると、つい」

「はあ、あれはヴェロツサが仕事をサボっているからです、騎士良彦もしているでしょう?」

「ま、確かにそうだな」

詰め寄られ、苦笑と共に軽い会話をして、場を和ませる。

「良彦もシスターとの模擬戦ようしとるよな」

「良い修行になって助かってる、シグナム共々ありがたい事だよ」

「ヴィータとはしてへんのか?」

「ん、ああ、ヴィータとは隊でしてるからな、普段はしないし、あいつここに中々こないからな」

「そうなんか、所で…主語抜かすとなんや、違う意味にきこえるなあ」

「ぶふっ、アホかお前は、いきなり何抜かす」

「ほほう、反応する言うことは良彦君、意味わかってるんやね」

「な…し、知っては居るけど…この話は此処までだ」

「なんのお話ですか？」

「ツヴァイにはまだ早すぎる」「」

はやてとも軽いジャブの応酬、リインフォースツヴァイにはさすがに教えられない、はやてといっしょだから早晩知ることになるだろうが。

苦笑しながら見ているカリムとシャツハ。

「はやて、ツヴァイちゃんの調子はどうなの？」

「今の所順調です、まだうまれたてで知識が少ないし、感情も安定してへんけど、それはゆっくり育つやろし」

「ふーん…まあ、がんばれよ、はやてもツヴァイも」

カリムの問いにははやてが答え、エールを送る良彦、ちっちなツヴァイの頭を軽くなでる。

「さて、一服したし…隊の方に顔出してくるわ」

「ん、そうなん？…てか、今日休みやったんと違うの？」

「さつき連絡があつてな、近々大きな共同作戦があるらしいんだわ、その打ち合わせだつてさ」

「そっか、ほなら頑張つてや、ヴィータにもよろしくいって

な

「あいよ、んじゃ、騎士カリム、シスターシャツハ、ツヴァイ、これで」

立ち上がり、軽く一礼。

「ええ、またいつでもいらしてください、騎士良彦」

「この次来た時も一手おねがいます」

「さよならですよー、よしひこ」

3者3様の挨拶で送り出される。

1321隊舎、本局武装隊との共同作戦の為に今日はいつもより騒がしく感じられる。

隊員がいきかい、整備班もフル稼働らしい。

資料をもらい、簡単な作戦会議：本格的なのは後日、武装隊と共に行う予定：をすませて、休憩スペースで、スポーツドリンクを飲んでいると。

「此処にいたか良彦、聞いたか？」

「ん：武装隊との共同作戦だろ、今回も小隊一緒ってのは聞いたぞ」

以前のテロリストの一件依頼基本的に小隊員が固定されている。

「ちつげ、そっちは毎回だろ、今回はなのはのいる部隊との作戦で、あたしらはなのは達とっしょだよ、ほら」

良彦のもっていた資料をひったくり、その話載っている部分を開く。

「ほんとだな、つかヴィータ…なのはって休んでるのか？」

「なんだよ、いきなり？」

「こつち来てない時とか、高町家でご飯食べることもあるんだが、いつもなのははいねーんだよ、聞いたら忙しそうだからって、桃子さんとか言ってるし」

「そういや、この頃あつてねーな…一寸待ってる」

ヴィータはウィンドウを開き、その先の相手となにやら話して…。

「あのやる、空き時間全部仕事はいつてんぞ」

「はあ？…全部って、休みの日は？」

「そこまで全部だ…よくねーな」

「ああ、休息も大事だ…というか、そんな事したら、体もだが、精神が参る…バランスを欠いた心身は簡単にぶっ壊れるぞ」

「今度の作戦は、人員の配備とかでまにあわねーだろうけど、そのあと引きずってでも休まずぞ、良彦」

「それに賛成だ、あの馬鹿っ」

憤るヴィータと良彦：作戦は数日後、その時はできる限りのサポートを、と二人で話しあった。

31：教会での一幕（後書き）

教会ではやてとリンツヴァイ、カリム、シャツハとの会話だけだと短いので、なのはが墜ちる話の引きです。

今回はなのはが墜ちる話になるとおもいます、少しだけ救済を。

32：墜ちる者

数日後、なのはの居る武装隊との共同作戦実行日がやって来た、とある管理外の無人世界での違法研究所の摘発、規模が大きい事と抵抗が予想されるため、結構多い人数だ。

良彦とヴィータの小隊はなのは達の小隊と共に、外部に多数存在する機械兵器の破壊だ、多数の科学者が雑多な種類の物を作っているらしく、統一性がなく、また、数も多い。

「遠くからでも数が多いことはよくわかるなありゃ」

「だな、でも機械あいてじゃ、あたし的には相性はいいってものだ」

「破壊と粉碎が本領ってか…ま、俺は何時もよりきつそうだけだな、その分」

「魔力攻撃じゃないだろうからな、飛び道具付けてるのも多そうだし」

「まあ、飛び道具の方はヴィータとなのはに任すよ」

「ふえ…あ、なにな、よしくん？」

3人で固まって雑談…に入ってきて来ないなのはに声をかけると、まるで今気づいた様な反応。

「おまえ、大丈夫か…普段ならちゃんと話聴いてるだろ？」

「やっぱり、疲れてるんじゃないのか、なのは？」

心配する二人

「大丈夫だつてば、二人とも、元気だから心配しないでって、なんでも言ってるのに」

それを苦笑し否定するのは、すでに数回は似たやりとりがあった。

「本人のそういう言葉が一番安心できねーって、やっぱりこの任務終わったら強制休養だな」

「シヤマルにはもう、予約入れといたぞ」

「ナイスだ、ヴィータ… 飴をやるっ」

「なんで飴なんだよ、つかガキ扱いか!？」

「ちげーよ、手軽な栄養補給と酷使用する脳への糖分補給だつつの、いらねーのか？」

「そういう事なら、もらっとくよ、あんがとな」

「なのはも、ほれ」

「……………」

「なのは」

「ふやあつ、び、びつくりした、な、なによしくん」

「飴なめとけ、少しでもちがから」

ヴィータとなのはに飴：正確にはキャラメルだが：を手渡し。
ヴィータと秘匿念話を始める。

「（やっぱ、だめだな：一応大体の掃討が終わったら、広域探査するから、合図でガード入ってくれ）」

「（ああ、判った：ホントは止めてーんだけどな、局の上の方が許可してねーらしいぞ）」

「（なんで、んなことしてんだ？）」

「（こないだ確認ついでにレティ提督に聞いたんだよ）」

「（あの人が止められない上か、面倒だな）」

「（なに、だったらあたしらで守ればいいさ）」

「（だな、さて、そろそろか：頼むぜ鉄槌の騎士）」

「（任せとけよ、清風の騎士）」

顔を見合わせ、お互いに微笑して、なのはのそばに立つ、作戦開始まで数分：視線の先には、無数とも言える機械兵器。

作戦開始から約1時間、外部にいた機械兵器を減らし、突入部隊が突入してからでも20分は立つ頃。

機械兵器はエクセリオンバスターや、ラケーテンハンマーなどでどんどんと数を減らしている。

良彦は多数に対する技が、対軍しかないので地道になのはとヴィータのフォローだ。

「そろそろ、終わりが見えてきたな」

「ああ、数は居ても戦闘力は大したことないしな、一寸疲れる程度だ」

軽口を叩き合う良彦とヴィータ、少し離れた位置で再びバスターを放つのは。

実際には、外部担当魔導師の大半が疲労し、残敵掃討は実質この3人で行なっているようなものだ。

「…つの、馬鹿…砲撃は体に負担かかるから抑えろっていったの覚えてねーな」

「耳に入っても疲れた頭じゃ聴けてないんだろっつな」

良彦の愚痴に、ヴィータがシュワルベフリーゲンを撃ちながら答える。

「ともあれ、そろそろか…ガード任すぞ、ヴィータ」

「おう、安心しとけよ、良彦」

言葉と共に、ゼピュロスを付けた手でカチンと合唱…

「ゼピュロス、『凧』広域探査」

『了解：魔力域及び風域拡散、動体反応集積』

カートリッジロード2発、辺り一帯に弱い風が吹き付ける。

広範囲故、処理能力大半を使い動けなくなるが、その精度は高く光学迷彩や幻術なども簡単に見破る『凧』の変化系。

当然、戦場のまっただなかで普通使う魔法ではないが、隣にヴィータがいることで良彦はこれを迷わずに使える。

「…残存兵器数… 4 , 3 , 2 , 1… ぜ、いや、一体いきなりふえた、なのはの後ろ?！」

ヴィータと同時になのはの方をみる、兵器を殲滅し終えた事で安心したのか、レイジングハートを支えに立っているような油断した姿。

しかも、光学迷彩の機体なのか、目視出来ない…

「く、間に合えっ!」

『貫き』

更にカートリッジ2発ロード…速度に全力をまわし、制御は二の次…なのはに触れ、お互いがそこから離れ…る、瞬間。

二人の動きが突然止まり、響くのはざしゅつと肉を貫く音。

「ごふっ…ヴィ、タ」

「な、に…けふっ、これ」

そのままなら胸に突き刺さりそうだった透明な機械兵器の鎌のよ
うな刃が、良彦となのはの腹を貫通している。

それを見たヴィータの瞳孔が縮んで…

「てんめえ、なにしてやがる！」

ラケーテンハンマーで、吹き飛ばし…刃が外れた良彦となのは…
二人とも地面に倒れ込む。

「だれか、早く医療班だ、急いでくれ！」

叫ぶヴィータの声を聞きながら、良彦の意識は急速に薄れる。

「（あー、いつてえなこれ…なのはも、かわし、きれ…なか、っ
た…か、わり…い）」

薄れる意識のなか、実感が半端にないため、そんな事を考えなが
ら、意識を手放した。

32：墜ちる者（後書き）

まずはお詫びを、本来26話である闇の終わり、旅の終わり、が27になっていて、そのまま話数つけたため、今まで1話ずつずれていました、32話にあわせてこれまでの話数を訂正しました。

というわけで、リンカーコアは無事ながら、重傷者は二人になりました、一寸だけ、救済です。

次回は入院とかの話になるとおもいます。

33：絶対安静（笑）

良彦が目を覚まし、最初に見たのは、赤い髪の幼い少女の顔… ヴ
イータが心配そうにのぞき込んでいて。

「起きたのか、大丈夫か？」

と、心配する姿… あれ、知らない天井じゃない、とか一瞬思った
あと、思い出す。

「俺より、なのははどうした？」

「馬鹿、お前の方が重傷なんだぞ、自分の心配しろよ」

心配と怒りがミックスされた顔で、こつんとヴィータに叩かれる。

「あの未確認機体の刃、鎌みたいになってて、なのははその先
の方が刺さった程度だ、それでも一寸内臓掠めてたらしいけど」

「んじゃ、なのはは無事なんだな… んで、俺はどうなってるんだ、
体動かないんだけど」

「おめえは… かなり深く刺さって内臓も貫かれてた… いそいで治
療したけど、血が多く出たから、起きななければそのまま、とかいい
やがったんだぞ、ヤブ医者が」

「落ち着け、やばかったのは判った… で、なぜに、拘束衣なのか
説明を」

「少しでも動けるようになったら修行始めそうだから、あたしの提案で着せた」

「…あのな、ヴィータ…一応俺も体が大事だから、この状況で修行とか考えないぞ?」

「はっ、頭から血ながしながら、シグナムやシスターと模擬戦してた奴がどうか」

「あの時は一寸興奮してたんだよ、今はさすがに重傷なの判ってるから、そんな事しねーって」

「んじゃ、後で看護師に言っといてやるよ、さっきコールしたから医者と一緒にくんだろ」

「そか…ヴィータ」

「んだよ、良彦?」

「心配してくれて、あんがとな」

「ん…動けるようになったら、翠屋でシューアイスおごれよ」

「あいあい、了解」

等々話をしていると、ドアが開き、以前リンカーコアを蒐集されたときの先生と一緒に来た看護師さんが入ってくる。

ヴィータと看護師さんは何か話して、看護師さんが頷く。

先生は、バイタルを確認し、傷の状態の確認、消毒、などを手際よく済ませていく。

「魔法による治療を並行して、全治2週間程度だよ、ただ腸の辺りを刺されているので、しばらくは点滴で栄養補給になるね」

先生は、そういつて外へでていく。

「2週間か…そんなに体動かさないのは物心ついて初めてだ」

「良彦は何歳位から修行とかしてんだ？」

「確か、4歳だったかな、両親が死んで爺さんに引き取られてからだな」

「八坂流合気術だっけか、どんなんだ？」

「最初にあつたときにやってた修行もその一個だったんだけど…自分の間合いを認識し、そこを超えるモノを無意識レベルでそらす、それが合気術での『凧』だな」

「ん…もしかして、魔法を抜いた良彦の技なんかが、そうなのかな？」

「そうだよ、基本はな、魔法が無いとできない技はリンカーコアのなかったリトの子供に覚えられなくて、純粹に武術として教えられたのが始まりらしい」

「構えや、投げのときに相手の力利用するの、とかか」

「だな、魔法ありでもなしでも、『弾き』で相手の攻撃の方向をずらしてそれを利用して投げたり、できる隙の間に『捌き』でよけ

たり、だな」

「他に何かないのか、それだけじゃ、自分から攻撃しずらそうだぞ？」

「あるんだけど、まだ使えないんだよ…ある程度力がないと威力がでないから、まあもう一寸大きくなって体ができればできると思っけどな」

「ふーん、良彦が大きく、ね…想像できねーな」

「うっせ、一応父さんも爺さんも、165くらいはあつたんだから、俺もそれくらいは」

「…気のせいかな十分ちっちゃいくねーか？」

「そういう家系らしい、リトもそんなくらいだったし」

痛み止めが効いてるのか、若干ぼうつとした感じでしゃべる良彦、普段なら怒る所も今は反応が薄い。
もぞもぞと、体を動かし…動かないことを思い出して。

「なあ、喉が渴いたんだけど？」

「ああ、スポーツドリンクでいいか？」

「いいけど、外してくれねーと飲めないんだが」

「そんなくらい、飲ましてやるよ、ほら」

ベッド事体をおこされ、ヴィータが持つコップが口の前に持ってこられる。

「…まあ、いいけど…ん、んく」

それに口をつけ、顔をあげるとあわせて、コップも動かされる。

「はあ、あんがとな、ヴィータ」

「このくれーなら、なんでもねーよ、もう一寸したらさっきの看護師さんが鍵もってくるからな」

「そうか、はあ…あ、そういえば」

ふと何かに気づいたように顔を上げる良彦。

「今度はなんだよ？」

「いや、なのはだけど、土郎さんとか来たか？」

「ああ、そつちか、来たぞ…血相変えてな、んでなのはと色々話し合いついたらしいぞ、あたしはこつちいたからわからねーけど」

「そうか…これで、休みなしで仕事とかやめてくれると良いんだけどな」

「そこは、他の皆も言ったし、家族にもきちんと言われたらしいぞ無理するなら、こつちも無理してなのは止めるってな」

「なら、平気か…はあ」

「ああ、それと毎日士郎さんだっけ、なのはの父親…」つちにも顔出してたぞ？」

「ああ、そりゃ保護責任者だしな、来るだろ」

方向違いの言葉にヴィータは

「あのな、それ以前に娘の友人で、命の恩人だろうが、誰でもくるっての」

「…そういや、そうだな、傷物にした責任とか言われたらどうするか？」

「傷は残らねーよ、お前もだけど、そのレベルの医療技術はあるっついの」

「む、そうなのか…ふむ」

「ま、お前も少し搾られるんじゃないか、お礼もあるとは思っけどな」

「ま、あの人はそこらへんの区切りはしっかりしてるしな…うーん、そうか…今度頼んでみるか」

「変なこと考えてんだろ、お前」

「んなことねーよ、記憶にあって使えない技があるから、それを使えるように手伝ってもらおうかと」

「考えてんじゃねーか！、今は修行の事考えるの中止、怪我を治す事に専念しろよ」

「あいあい、了解…ああ、そうだヴィータ、しばらく飯くえねーから、飴とガム買ってきてくれよ、今度…あと俺んちの冷蔵庫にある食材はやての方で使っちゃってくれ」

「ん、そんぐれーいいぞ、んじゃ鍵借りてくぞ」

「頼むな…少し眠くなってきたし、眠っとくわ」

「ああ、そうしろ」

「ん、おやすみ、ヴィータ」

そういって、ゆっくり目を閉じて静かな寝息を立て始める。

「おやすみ良彦…ホント、無事でよかったな」

寝息を立てる良彦の頭を優しくなでるヴィータだった。

この後入ってきた看護師や士郎にその場面を目撃されるが、良彦は預り知らない所である。

33：絶対安静（笑）（後書き）

良彦側メインです、なのはは一週間程度で退院出来る予定ながら、自分の責任で良彦が大怪我したのもあり、本来より無理な任務は控えるようになる予定です、それでも必要ならとまらないでしょうが、それと良彦パワーアップフラグもいれました。

一つお詫びを、リインフォースの名前がリインフォースだった部分が多々あったので修正しました。

次回は、怪我が治った後で士郎との修行でしょうか。

34：退院祝い

なんだかんだと特に事件はなく2週間、まあ、見舞いにヴィータやアイン…リインフォース二人で判りづらいので守護獣の方はドイツ語の1でアインになった…が毎日来てくれたり。

他の皆も、たまに顔出したりしてくれたり…なのは自分が動けるようになってからまつさきに来て謝ってくれていた。

休息の大事さを言い含め、あまり気にするなといって慰めては置いたのだが、どうなるか。

ともあれ、2週間で予定通り退院だが、しばらくは自宅休養であるので、自宅に戻ってみると。

何やら沢山の人間の気配が中からしている…警戒していると、突然ドアが開き、パンパンつと音が連続…何事とおもえば、そこにはヴィータ、アイン、なのは、フェイト、はやて、ツヴァイ、アリサ、すずか等、友人たちがクラッカー…鳴らし終わった物…を持ち

「……………退院おめでとうそして、おかえり、良彦よしけん（良彦君）……………」

と、退院を祝ってくれた、中へひっばられ、居間につけば、皆が料理やらを準備して待っていてくれたようだ。

「…ありがとな、皆」

恥ずかしそうに、だが確かに嬉しそうに微笑む良彦。

「とりあえず、家着にきがえて来いよ、楽にしねーとな」

そう言ってくれるヴィータに従い自分の部屋へ行って着替え、仏間を一度覗いて仏壇に軽く手を合わせる。

「…なあ、なんか家の中綺麗なんだけど？」

「ああ、それかあ、なんやヴィータがな」

「ちよ、はやて言わねーって約束したろ」

「ヴィータちゃんが帰ってきたとき綺麗な方がいいだろって、言っただけで掃除したの、どうかなよしくん」

「てめっ、なのは」

「私は約束してないしね」

「そっか、サンキュヴィータ」

なのはに食ってかかるヴィータの頭をぼんと手で、礼を言っ…ヴィータは赤くなりながら。

「一般論だろ、一般論」

「ま、確かにそうよね、ともあれ主役もきたし始めましょうか…なのはと良彦の退院祝い」

ブツブツ言うヴィータをさらっと流し、アリサが宣言する。
「まず、フェイトが皿に料理を取り分け、上座にはなのはと良彦。」

「ほなら、私が乾杯の音頭とらせてもらいます」

すつとはやてが立ち上がり…

「なのはちゃん、良彦君の退院と、ヴィータのデレを祝して乾杯
やっ!」

「『『『『『『『『『『『『乾杯』『』『』『』』」

「さて、はやて、なんだよそれ!」

「違うんか?…掃除もやけど、良彦が好きやからいうてバニラア
イスー生懸命桃子さんに習ってつくってたやないの?」

「しーしー、なんで言うんだよはやて!」

「ん、バニラあるのか、それは楽しみだな」

「ま、まあ…飯食ったら出してやるよ」

「でも、なのはもヨシヒコも無事でよかったよね」

からかうはやて、赤くなって混乱するヴィータ、比較的落ち着い
た様子の良彦に、フェイトが優しく微笑みながら頷いている。

「そうね、一時はどうなるかとおもったけど、万事解決よね」

「そうだね、二人とも無事でよかったよね」

さらに頷くアリサ、すずか。

「んうう、じめんねよしくん」

「それはもういいって、いったよな、なのは…そうだな気にするなどは言わないから、無理するなど言わせてくれ」

「うん、ちゃんと週に1日は休むようにしたよ、大丈夫」

「なら、いいさ…しかし、美味しいな、皆で作ったのか？」

なのはの肩をぼんと叩き、話題を変える。

皆が顔を見合わせ…

「大半ははやてよね、慣れって偉大だわ」

「うん、私たちは少し手伝っただけだったね」

「料理のかわりにお母さんと一緒に、ケーキつくったよ」

「なのはは、主役だからって言うてるのにやめてくれなくて」

「ま、長い事食事の支度やら一人でやってたしな、そこは任せて欲しいわ」

アリサ、さすが、なのは、フェイト、はやてが言い合い。

「ケーキもアイスも楽しみですよー」

とツヴァイが言っていると、入口から声。

「お待たせしました、主…そして、おかえりマスター」

そこには荷物をもったアイン。

「ごめんな、お使いさせてもって」

「いえ、問題ありません…これを」

手渡すのは小さめのリュック、それを

「ほい、ヴィータ」

「なんだよこれ、はやて？」

「退院したばかりで大変な良彦君をちゃんと世話するんやで？」

「はあー？、聞いてねーぞそれ、アイン、ツヴァイ！？」

「というか、なんでヴィータなんだ、アインでいいじゃねーか」

言っはやてに、混乱するヴィータと良彦。

「ツヴァイも今初めてきいたですう」

「荷物をと言われて、用意されていた物を持ってきたただが？」

「はやて、最初から仕組んだのか！」

「何言つてんねん、放つといたら良彦君明日からランニングとか始める気やで」

その言い合いにびくつとする良彦。

「良彦…てめえやる気だったな…あー、分かったよなのはも心配だし、泊まるよ！」

「よっしゃ、それでこそヴィータや」

怒ったように言い切るヴィータに、サムズアップする良彦。周りは苦笑し、良彦は頭を抱えている。

「んー、それじゃさ、今日だけ皆でとまらない？」

そこへ、追撃のアリサ。

「いいね、よしくんの家に泊まるの久しぶりだし」

「いいの、かな？」

「大丈夫だよ、ね、良彦君」

なのは、フエイト、すずかが続き…

「ツヴァイもお泊りですうー」

「主とマスターと一緒に、たまにはいいかもしれない」

追い詰めるツヴァイとアイン。

「わーったよ、部屋はあるからいいけど、連絡はちゃんとしとけよ」

白はたを上げる良彦…その日は結局皆が泊まり、久しぶりに賑やかであった。

しかもその後、話を聞いた大人達や、守護騎士一同も訪れた為、家はある種の力オスに陥ったとかいらなかったとか…。

ともあれ、自分が恵まれていると実感できる出来事ではあったらしい。

34：退院祝い（後書き）

キャラ立ちの会話を書いていたら修行を入れると長すぎる事に…まあ、あと退院後しばらくは安静でしようから、こんな感じになりました。

次回こそ、修行を開始したい！

35：守るための強さを

混沌の退院祝いから1週間、なのはは既に復帰し、ヴィータも仕事があるので普段はおらず、いるのは大抵夜だけだったりした。

その間軽いストレッチなどは行なっていたが安静にするという、ヴィータやシャマル、本局の先生との約束をまもり、それ以上はしなかった。

で、今日だが、シャマルが出張で診にきてくれて…なぜかヴィータもいたが…運動オーケーの許可がでた、ただその診察時に。

「なあ、良彦…何で傷跡が残ってたんだ？」

「ん…ああ、これな…消せたらしいけど残して貰ったんだ」

「だから、なんでだよ？」

問いかけるヴィータに対し

「教訓かな、なのはを止められなかった、守りきれなかった、力が足りなかった…まあ、色々あるけど、ケジメだ、俺自身に対する」

「ふーん、まあ良彦がいいなら、いいんだけどな」

「ん、あんがとな」

「なにがだよ」

「気にしてくれて、だよ」

ぼんぼんとヴィータの頭を叩く。

「は、別にきにしてねーです、自意識過剰なんじゃねーか？」

「へいへい、ともあれ俺は土郎さんに報告してくるわ、店に居るだろうし」

「あいよ、こっちは本局もどろぞ、仕事まだあるしな」

「そうね、良彦君：運動してもいいけどゆっくり体をならしてね」

「あいさ、わかってるよシャマル先生、鍵頼むぞヴィータ」

「あいよ、こっちは任せとけよ」

挨拶して、家を出ていく良彦、送り出すヴィータ、それを微笑ましく見ているシャマル。

軽く走って喫茶翠屋：お昼を過ぎた辺りなので、丁度お客さんが少なめな時間：裏から声をかけ、土郎を呼んでもらう。

少しして、エプロンをつけた土郎が出てきてくれる。

「こんにちは、土郎さん」

「ああ、いらっしやい良彦君」

お互い軽く一礼し

「シャマルからの許可がでて、運動オーケーになりました」

「そうか、良かったな…それで今日は報告だけかい？」

何かに気づいているのか、そう問いかける土郎。

「いえ、一寸修行の相談に」

「とりあえず聞こうか？」

で、話したのはリトが子供に教えた技の中で理解できなかったもの…『音貫き』と呼ばれているそれは、魔法で言う『貫き』を生身で行うらしい、更にいえば魔法抜きでこれが出来た場合、魔法での『貫き』の制度速度共上がるらしい。

わかる限りの説明…『音貫き』の最中は、1秒を数秒に感じ、自分が高速で、それこそ普通なら目に止まらない程の速度で動けると、リトとその息子であろう二人が会話していたのを伝える。

しばらく腕を組んで考えてた土郎が顔を上げ

「似た技なら、家の流派にもあるな、”神速”と言っただが、おそらくほど一緒だろう、ただ…」

「ただ、なんですか？」

「体がちゃんと出来る前は使わない方が良い、負担が大きいんだ」

「そうですね、でも…修行は付けて貰えますか？」

「そうだね…同じ感じの技っぽいし、おかしな癖をつけるよりは良いだろう、ただし…さっきも言ったがちゃんと体が出来てから使

うこと、その見極めはこつちでしょう」

「はい、お願いします…：そしたら、模擬戦の方も一緒にお願いできませんか？」

「そつちは、美由希や恭也とするといいいかな」

「はい、おねがいします」

ぼんと頭を叩いてくる士郎に、嬉しそうに微笑み、もう一度一礼する。

「さて、お昼はたべてきたのかい？」

「あ、いえ…：結果聞いてすぐだったんで」

「じゃ、食べていくといい軽食ならすぐできるよ」

「はい、お願いします」

結局翠屋で昼飯を終えて、また軽く走りながら家へ戻る事に。

それからは、基本朝はランニング、昼間は学校にいつて、夕方は管理局か聖王教会、仕事や用事がなければ、高町家で恭也や美由希、たまに士郎に稽古をつけてもらったり、模擬戦をしてもらつ。

基本土曜はランニングとストレッチのみで、体を休める。

ちなみに何故か仕事や休みをほぼ同じシフトにしている…：聖王教会に行くとき以外…：ヴィータも修行に付き合っており、いつの間に

か高町家の皆とも仲良くなっていた。

また、なのはもランニングだけは、参加するようになった…怪我をしたときに、体を鍛えておくことも重要だと土郎達に言われたらしい。

最初は短い距離で疲れはてていたが、だんだんと距離を伸ばしている。

この時期からずっと良彦となのはは体を造る地味な基礎と、良彦はさらに『音貫き』を含めた八坂流合気術の修行を、ヴィータもそれに付きあい八坂流合気術の修行をずっと続けていく。

良彦が入院中に言っていた八坂流の『凧』『音貫き』とならぶもう一つの奥伝とも言うべき『無風』…記憶にある限り打撃技らしい、騎士甲冑や実体の鎧を無視し直接体内にダメージを与えるっぽい…も試行錯誤を繰り返している。

ただ、こちらはある程度の筋力や自分自身の耐久力も必要らしく、取得…取っ掛りすら…は、まだまだ先になりそうである。

ちなみに、この頃から管理局や一部犯罪者、聖王教会関係者の間で、基本的に一緒に居る良彦とヴィータに対し、二人とも古代ベルカ式の使い手でフロントアタッカー、そして背が小さい所から。

”青と赤の小鬼”などと噂されていたらしい、他にも色々あるが、それはまたその内に語られるかもしれない。

35：守るための強さを（後書き）

本格的な修行開始です、パワーアップはゆっくりと無理なく鍛えることで、StrikerSには間に合わす予定です、約8年位ありますし…。

『無風』は…まあ、浸透勁的な技になると思います。

次回も何かオリジナルな話を入れようと思います…もしかしたら数年飛ばかもしれません。

36：衝撃（笑）の事実

良彦となのはの怪我からおよそ2年、この間になのはが魔導師ランク空戦Sになり、少し前に教導隊に入ったり、フェイトが3度目の執務官試験で合格し、空戦Sランクも取得し、一寸前に局の施設で保護されていた子の保護責任者になったり。

はやてが、ランク総合SSを取得、この間は上級キャリア試験にも合格していたし、ユーノは論文などを発表、さらに無限書庫の室長になったらしい。

まあ、他の皆も階級が上がったり、ランクが上がったりはしていたのだが、では良彦はといえば。

とりあえず、修行もうすすみ『音貫き』はできるようにはなった、ただし未だに実戦での使用は禁止されている。

『無風』も、少しずつだが技の取っ掛かりが判ってきた、ユーノに無限書庫から古代ベルカ式だけでなく、いろいろな武術の資料何かを探してもらったりしたのだ。

魔導師ランクは、空戦AAAランクを取得、騎士としては完全にカリムの下、まあシスターシャツハとほぼ同じ立ち位置である、一応管理局の階位も持っているが三等空尉で、恐らく便宜上のものである。これ以上は昇進しないらしい。

と、まあ…状況はこんな感じで、現在12月も半ば、もうすぐクリスマスなのだが…良彦は困ってというか、苦悩というか、ある種絶望を抱いていた。

中学一年、13歳なのに、身長が133cmから一向に伸びないのだ…ちなみに、この身長10歳の頃、怪我をした頃のままである…筋肉などは付いているので、そっちは問題ないのだが。

あと、ここ数年、魔法と出会ってから、髪の色…元々濃い青色、

光に透かさないと判らないくらい…が、鮮やかな青に段々とはえ変わってきているし、瞳の虹彩も左の濃い翠が、以前より鮮やかな翠へと変わってきている。

シヤマルに相談し、検査を受けたのだが…髪と瞳は魔法資質が目覚めたことによる、先祖帰りに近いものだと言われた。

身長は、今のところ不明、ただ伸びてない時期を考えると、2年前の事件が原因の可能性は強そうらしい。

一応シヤマルには、身長関係の事は口止めしておき、まあ、伸びないものは仕方ない、と思いつつ…5人娘に軽く見下ろされるのには一寸絶望した。

クリスマス前の街を歩く青い髪の少年と赤い髪の少女…良彦とヴィータだが…が、歩きながら雑談している。

「ま、伸びねーもんを無理やり伸ばす方法も有るらしいけど、体への負担が大きいから、諦めたよ」

「ふーん、良彦がそれでいいなら、いいんじゃないかねーの…それで、なんで今日は買い物つきあえとかなんだ？」

「うむ、ああ身長の話は内緒な先祖帰りの影響だとしても言ってくれ…でだ、クリスマスが近いからプレゼントを買おうと思っとな、5人娘のとか、何が良いかわかんねーから、参考意見聞かせてくれ」

「あいよ、そっちは了解だ…5人て、はやて、なのは、フェイト、アリサ、すずかの5人か？」

「ああ、今年もクリスマス会があるからな、買っておかねーと、仕事して金は少し余裕あるしな」

「ふーん…そっか、まあいいや、んじやはやてのから見ようぜ」
そういつと、目的地だったミッドのデパートに到着する。

「少しは何か考えてんのか？」

「はやてには、料理道具とかいいんじゃないかと思ってるんだが、洒落の効いたのがあると良いな」

「ま、妥当か、つか13歳だしちょっとしたアクセサリーとかでもいいんじゃないのか？」

「んー、それも考えたが、全員お揃いじゃ手抜きだし、別々じゃなんか違う意味がありそうじゃね？」

「それもそうか、んじゃキッチングッズ売り場だな」

すたすたと歩く二人、青と赤のふたりは、端から見ればどうみえるのか…。

キッチングッズ売り場へと足を踏み入れる。

「お、良彦これとか良いんじゃないの？」

ヴィータが指し示すのはアイスクリームメーカー。

「いや、ヴィータが食いたいからだろ、それ…相変わらずアイス

には目の色変えるな」

「いいじゃねーか、好きなんだから」

「つか、お前が家で作るって行ってちっちゃいんだけど去年かつたろ！」

「家のはやての所じゃ別だろ、んじゃおめえは何がいいと思うんだよ」

「そうだな…この中華鍋とかどうだ？」

「業務用の本格派じゃねーか、それ、はやてが料理屋でもひらくのかよ！」

「んだよ、じゃあ、このパン焼き器とか？」

「地球で似たようなの買ってたぞ」

「なら…」

延々とこんなやりとりをしつつ、結局買ったのは幾つか揃いの茶碗、はやてだけじゃなく守護騎士とリインフォース二人の分あわせてである。

家族を大事にしているはやてなら、こういうのが良いだろうと、落ち着いたのだ。

で、次に向かったのはおもちゃ売り場。

「なあ、良彦なんでおもちゃ売り場なんだ？」

「んあ、ああ、なのはがぬいぐるみとか好きでな、毎年送ってるんだよ」

「そうなのか、”管理局の白い悪魔”が、ねー」

「さて、この…デフォルメされた、白い人のぬいぐるみとかよくね？」

商品名が不屈のえーすおぶえーす…どうみてもなのはをモデルにしている、手にはレイジングハートらしきつえも持ってるし。

「それはいいな、良彦にしてはナイス判断だ」

「だろ、してはってのは気になるが、これなら受けも取れる」

そういって、なのはは一発オーケー。

次に向かうのは、写真関連の商品が置いてある場所。

「さて、フェイトだけど…フォトフレームにするかなと思うんだよな」

「なんでだ？」

「フェイトって、友人家族を大事にしてるからな、写真とか多く飾ってるし」

「そういや、そうかもな…なら、携帯できるのがいいんじゃないかねーか…このカード型の奴」

カード型のフォトフレームに小型のデータチップが組み合わされ

ており、かなりの枚数の写真をデータ保存できるらしい。
お気に入りだけをスライドショーしたり、決めたのだけ普段は見
れたり良さそうだ。

「うん、それでよさそうだ、ナイスだヴィータ」

「へ、任せろよ」

フエイトも決まり、アリサのプレゼント。
やってきたのは本の売り場。

「さて、アリサとすずかは、大体きめてるんだ」

「二人とも本なのか？」

「あの二人は犬好きと猫好きだからな、管理世界の子犬辞典と子
猫辞典でいいんじゃないかと」

「あー、確かにそういうの喜びそうだな」

「うむ、つーわけで、よさそうなの探してくれ」

「おうっ」

で、二人に2冊ずつ本を買う。

一通りプレゼントを買って、フードスペースで休憩する。

「ふー、サンキュな付き合って貰って」

「別に構わねーよ、今日はどうせ休みだったんだしな」

「ま、そうかもだけどな、ここは奢るわ」

「そうか…んじゃ、このバナナパフェな、アイスダブル、バニラとチョコで」

「あいあい、つか予想通りのだな」

注文を聞いて苦笑する良彦。

「んだよわりーかよ」

むくれるヴィータ。

「いや、んじゃ頼んでくるわ」

で、持ってきたのはヴィータの注文したパフェと、良彦はチョコバナナクレープにしたらしい。

「ほれ、どうぞ」

「おう、いただきます、っと」

スプーンでもぐもぐと食べ出すヴィータを横目に、クレープを齧る。

感じる視線…目をやれば、クレープをチラチラと見るヴィータ。

「…食つか？」

「いいのか？」

ぱあっと明るい顔でいって、差し出したクレープを一口齧る。

「返事の前に食ってるじゃねーか」

「うつせ、差し出した時点で許可ありだろ、ん…これもうめーな」

「よかったな、帰りにクレープかってくか？」

「そうだな、イチゴ生クリームにしてくれ」

「あいあい、了解」

しばし、お互いがデザートを食べ続け。

ふとヴィータが疑問を投げかける。

「そういや、ユーノとクロノ、エイミィ当たりのプレゼントはど
うすんだ？」

「あつちは、地球の物の方が良いと思ってな、ユーノは最新の考
古学資料とか、クロノとエイミィはお揃いのコップだな」

「なるほどな…あれ、そういやあたしもクリスマス会呼ばれてる
けど、あたしのは？」

「流石に、本人に付き合ってもらって買ったら驚きと喜びが薄れ
るだろ、ヴィータのはもう用意してあるし」

「そうなのか、良彦もちゃんと考えてんだな」

「あのな、俺をなんだと思ってるんだ？」

「修行バカ」

「否定、できねえ」

軽口を叩き合い、苦笑する良彦。

「ま、そういつことなら楽しみにさせてもらっただろ」

「あいあい、喜んでもらえると良いんだけどな」

「喜ばせろよ」

「努力はする」

お互いに微笑み、こつんと拳同士を軽くぶつけ合う。

「んじゃ、食ったならクレープ買って帰るか」

「おう、イチゴ生クリームだぞ」

「わあってるよ」

手に荷物を持ち歩く、青と赤…どこか微笑ましく見える二人組であつた。

36：衝撃（笑）の事実（後書き）

ある意味で衝撃の事実をさらっと受け入れて居る良彦です、まあリトの記憶があるのである種老成した考えの影響でしょう。

怪我の一件以来ヴィータが良彦の家と八神家で半々位で生活しています、局での泊まりも多いとは思いますが。

次回は折角今回クリスマスネタだったので、時期はずれながらクリスマス会の話を書く予定です。

37：クリスマス会inn八坂家

ミッドチルダのデパートでプレゼントを買ってから数日、中学最初のクリスマススイブ&2学期終業式の日がやってきた。

参加者は、良彦、ヴィータ、なのは、フェイト、はやて、リイン、フォースアイン、ツヴァイ、アリサ、すずか、ユーノ、クロノ、エイミイの12人、管理局組みは皆、今日の為に前倒しで仕事などを終わらせている。

場所は大人数なので、良彦の家になった、他に人が居ないので少し騒ぐ位は問題ある。

「さて、コップとジュースはいきわたったか？」

「人数分出したから大丈夫だと思うぞ？」

周りに確認する良彦に、ちゃんと個数は合わせたとヴィータ。

「こっちは平気よ」（アリサ）

「私も、貰ったよ」（すずか）

「ん、ジュースも大丈夫」（フェイト）

「だね、ユーノ君は？」（なのは）

「僕も大丈夫」（ユーノ）

「リインもおっけーですう」（ツヴァイ）

「私も大丈夫だ」(アイン)

「こちら問題ない」(クロノ)

「おっけーおっけー、大丈夫だよ」(エイミイ)

「こつちも大丈夫や、ほな、乾杯しよか」(はやて)

各自が返事をして、パーティの恒例：はやての乾杯の音頭が始まる。

「ほな、中学最初のクリスマス&2学期終了、管理局組みは久しぶりの休みも含めて、乾杯やっ」

「乾杯」(全員)

それぞれにジュースをいれたコップを掲げる、料理ははやて、良彦がメインになり、他の皆も協力、エイミイはミッドの料理を作って持ってきてくれたらしい。

それが机に並べられ、真ん中には大きなケーキ、当然翠屋のものだ、なのはやフェイトも手伝ったらしい。

「しっかし、良彦が料理できるのって一寸以外なのよね」

「なんでなの、アリサちゃん？」

「だって、いつも修行しかして無いイメージがあるじゃない？」

「ああ、なんとなくわかるね、ヨシヒコって時間が空くと修行してそっ」

アリサになのが問いかけ、答えにフェイトが頷く。

「でも、一人暮らしなんだし、できるんは当たり前ちゃうんかな？」

「そうだね、でも男の子だから、やっぱりちょっと驚くかな」

「でも、僕も一人暮らしだけど料理できないよ？」

「君は基本本局からあまりでないからだろう、食堂で普通に食べれる」

「クロノ君は、リンディ提督とか私がつってるけどね」

はやての疑問にすずかが苦笑しつつ答え、ユーノができないのは当たり前なんじゃ？という感じで、クロノが突っ込む、そこにエイミイが爆弾発言。

「ほほう、ちゅーことは、今此処にいる中で、かつぼうが3組みあるんやな？」

きらんと光るはやての瞳。

「かつぼう？、お料理ですか？」

「主は、カップル、もしくは恋人と言いたいのだと思っぞツヴァイ」

ツヴァイが首をかしげ、アインがツヴァイの頬についたご飯粒を

取りながら苦笑。

「え、そうなの…えーと、よしくとヴィータちゃん…クロノ君とエイミーさん…あとは？」

天然か、自分とユーノは完全にすつとぼけである。

「ユーノ君も大変やな、苦労するぞ」

「そうね、流石に同情するわ」

「なのはちゃん、らしいけどね」

「なのは、そういうことには鈍いからね」

はやて、アリサ、すずか、フェイトが小声で言い合い。

「なんで、俺とヴィータなんだよ、ん？」

「そうだな、根拠を聞かせてくれなのは」

良彦とクロノはなのはにつっかかり。

「っのばかは、みてねーと偶におかしな修行始めるんだよな、飯も一人だと栄養補給優先だし」

「クロノ君もだよ、仕事仕事で放っておくとご飯ちゃんとしたのたべないよ」

ヴィータとエイミーはどこか共感。

そしてなのはは

「え、局でもあの青と赤は、いつも一緒だ、とか…クロノ執務官と補佐は良い仲だって」

首を傾げつつ答える。

「仕事と一緒になんだから、基本一緒だろう、つか俺は学校もあるからいつもじゃねえ！」

「そうだ、良彦じゃあるまいし、補佐と一緒になのは当たり前だし、仲が良いのは母さんとだ！」

「はっ、相手の寝癖を直してやる仲の人はいうことが違ったな」

「半同居人もな」

良彦とクロノがお互いに半眼で睨み合い…動く、と思った瞬間。

「馬鹿やってんじゃねーよ！」

「はい、ストッパー」

ヴィータの脛蹴りが良彦の足に当たり、エイミィがクロノを後ろから抱きかかえる。

「いつて、いてーだろ、ヴィータ！」

「あたりめーだ、痛く蹴ってんだよ、つかパーティなんだから暴れんなよ！」

「今のはクロノがだな」

「あんな、おめえはあんま局に長いねーから知らねーだろうけど」

「なんだよ」

「あの噂だけじゃなくて、もっと酷いのもあんだぞ、毎度気にしてたら疲れはてるってーの」

「マジでか？」

ヴィータの言葉に、管理局組みを見渡す…皆視線を逸らす。それで事実だと判った良彦は、椅子に座り直し…頭を抱える。一方で…

「エイミィ、その暴れないから離さないか？」

「えー、このままでも良くない？」

「いや、そのだな…色々ともんだいが」

「まあ、当ててるんだけどね」

「わざとか、確信犯か、離せっ！」

少し暴れるとすぐ離すエイミィ、真っ赤になり椅子に座り直すクロノ。

周りはその様子は微笑ましくだったり、恥ずかしそうにだったり、

ニヤニヤしたりしてみている。

「だー、気分を切り替えてプレゼント交換にすっぞ」

「そうだな、それが良さそうだ」

「そうだね、そうしようか」

良彦とクロノ、ユーノの男3人が話題を変える…良彦、クロノは恥ずかしさから、ユーノはそんな二人の援護だ。

それぞれがプレゼントを持ち出してくる、この人数でそれぞれにだから別部屋に置いてあったのだ。

「んじゃ、俺から行くぞ…まず、なのは」

プレゼントは基本その場で開けるという約束にしてある、反応が見たいからだ。

なのはに手渡されるのは、白い人型のぬいぐるみ。

「つて、なんかみたことあるよこれ？」

「良いだろ、それ…」不屈のえーすおぶえーす”、個人的には”管理局の白い悪魔”となやんだんだけどな」

「ちよ、なんで自分で自分のぬいぐるみ貰わないとまらないのよしくん！」

からかつ良彦に一寸怒り気味ながら嬉しそうではあるなのは、周りも笑っていたり、笑いをこらえたり欲しそうだったりしている。

次にフェイトに向き直り。

「フェイトは、これな」

渡したそれを包装紙を破かないように開けるフェイト。

「あ、これ…前から欲しいと思ってたんだありがとうヨシヒ」

「なら、丁度よかったな」

素直に感謝するフェイト。

「んじゃ、次はやてだな、正確には八神一家だけだな」

「ほほう、ヴィータ、アイン、ツヴァイ、一緒にみよか」

「あいよ」

「了解です」

「たのしみですう」

包装された中には、揃いの茶碗、サイズはいくつかあるが。

「ほほう、なるほどこういのできたんか」

「ま、アドバイザーが良かったからな」

「このサイズならツヴァイが体を大きくすれば丁度いいな」

「たしかにですう、ありがとうございますよ良彦」

「んで、ヴィータが驚いたらんちゆうことは知ってたんやな」

「良彦に付き合っつて買っつてきたからな」

「そか、ん…あんがとな良彦君」

はやて、アイン、ツヴァイは素直に感謝、ヴィータは少し恥ずかしそうにしている。

次に差し出すのは、アリサとすずか。

「二人は、これとこれな」

「ごそごそと取り出すのは、管理世界子犬全集1、2と管理世界子猫全集1、2である。」

「あら、下手なアクセサリとかより良いわね」

「わあ、可愛い猫さんがいっぱい、ありがとう良彦君」

「ありがとうね、良彦」

早速見始める二人。

ユーノに向き直り。

「まあ、ユーノも本だけど、これな」

差し出された本を確認し、嬉しそうに微笑むユーノ。

「地球の考古学とか遺跡の本だね、ありがとう、面白そうだよ」

「喜んで貰えれば、こっちも嬉しいな」

お互いほほえみあい。

「んで、クロノとエイミィさん」

「まて良彦、二人一緒なのか？」

「問題でも？」

「あるにきま」ありがとうね、良彦君」ちょ、エイミィ」

エイミィに差し出すのは、ペアカップ、ベタなことに向きを揃えておくと柄がつかがる物だ。

「今度クロノ君の部屋に置いておかないとね」

「まて、なんで」

「まあまあ、今でも私のカップとかあるしいいじゃない」

「ぐっ…判った」

まあ、クロノが敷かれているのを確認し。

「俺からは、以上と」

皆へのプレゼントを終える。

そして他の皆もそれぞれプレゼントをわたしていくのだが…良彦

の前に置かれたのは、トレーニングマシン一式。
皆がまとめてそのセットにしたらしい。

「お前ら、俺をなんだと」修行バカ（全員）「はい、言い返せません」

言い切る前に返され、あえなく撃沈。

この後、ケーキを切り分け、ヴィータが張り切って作ったアイスなども振舞われた、暖房が入って居る上にこの人数、アイスを食べると寒くなることはなかった。

時間が過ぎ、皆が帰っていく…会場の片付けは皆で大体は済んでいるので、そのあとはゆっくりだ。

翌日、細かい片付け…食器を棚に戻したり掃除等…をしていると、今日も休みをとっているヴィータがやってくる。

「良彦手伝い来たぞ」

「ん、サンキュな…つつても後掃除位だけだな」

「なら、そっちは任せとけ、おめえはまた朝ランニングしてきたんだろ？」

「サボると体が鈍るきがしてな」

「今日は完全休養なんだから、シャワーでも浴びて着替えてこいよ、その間に終わっから」

「んじゃ、そうするわ」

良彦は部屋を出て、ヴィータは掃除を開始する。しばらくして、掃除も終わった頃、部屋着になった良彦が戻ってくる。

「ふう、さっぱりした」

「ほれ、いつものでいいよな」

出されるのはスポーツドリンク。

「おう、あんがとな…な、ヴィータ」

「あんだよ？」

「ほれ」

ぽいつと投げ渡すのは、小さな小袋。

「これは？」

「クリスマスプレゼントだ、あんな雰囲気の中じゃ渡せなくてな」

「ふーん、開けていいか？」

「ま、いいぞ…あんま期待するなよ」

中から取り出されるのは、待機状態のアイゼンとゼピュロスの右手部分らしき物がクロスした髪留め。

どこか歪な感じがする、こんな限定的なものは売ってないだろう事から、手作りらしい。

「…あながと、な…なあ、良彦」

「んあ？」

「付けてくれよ」

「まあ、良いけど」

お互い顔を赤くし、視線を合わせないまま、ヴィータの赤い髪に髪留めを付ける。

「こんな感じか、よく判んねーけど」

「へへ、あながとな良彦」

左前髪についた髪留めを鏡で確認し、微笑むヴィータ。

そのあとはお互いに無言で…いたのは数分、少しすればいつもの如くじゃれ合いというか、言い合いが始まるのである。

だが、そのやりあいには陰湿には感じず、端から見れば微笑ましいものであった。

37：クリスマス会inn八坂家（後書き）

人数が多いと会話が難しい、というかユーノのセリフがほぼなかったorz

ともあれ、中学になったので、少しだけ意識し始めています。

次回はまた2年位飛んで空港火災辺りの話でしょうか…多分良彦は、一般人救出になります…というか、火災と良彦では相性が悪すぎるので、どうするか悩む所です。

38：空港火災

あのクリスマスから2年、中学3年生になったある日、休暇をあわせ、はやてに会いに行こうとなのは、フェイトと約束してミッドチルダで待ち合わせしていた。

直前に出張任務があったため、良彦だけ隣海空港から向かうことになっていた、空港を出て向かうかと、思った所でドンツという爆音が響き、突然辺りに警報音が鳴り響く。

隣にいた赤い髪の相棒：ヴィータだが…と、何事だ、と思っていると、ゼピュロスとアイゼンに緊急通信、隣海空港で爆発事故発生、それが大規模火災に発展している模様。

「あの音が、初期救助もまだだろうし、行くぞヴィータ、煙は俺がなんとかするから、瓦礫とか任す」

「おう、おめえじゃ、壊そうとして火煽っちまうかな」

「そういうことだ…ゼピュロスセットアップ、それから風の結界を呼吸ができれば、良いヴィータの方もな」

『了解、セットアップ…風の結界展開、人体に害のある要素を遮断します』

「アイゼン、こっちもセットアップだ」

『了解、セットアップ』

二人の姿が変わる、良彦は青のジャケットにズボン、手には鋼色の無骨な籠手に包まれ、ヴィータは赤のゴスロリ風ドレスに、赤い

帽子、手にはグラーフアイゼン：鉄槌：が握られる。

二人が薄い青の膜につつまれ、その幕を境に煙は道をあけ、彼らに近づかない。

空港内、天井近くを飛ぶ二つの影、眼下には急ぎ逃げ出す人々、彼らは出口に近いから問題はないだろう、爆発音のした方向へ、急ぎ移動する。

「ゼピュロス、1321隊と地上本部へ緊急通信、これから緊急救助にあたる旨を伝えてくれ」

『了解』

「アイゼン、こっちは生体反応を探すぞ」

『了解』

飛行しつつ良彦は後で面倒にならないように、緊急時の飛行許可と現場での動きを事後申請ながら、部隊と地上本部に連絡。

ヴィータはアイゼンで爆発のあった付近の生体反応を探る。

「反応が3つだ、良彦」

「あいよ、いそいで向かうぞ」

ヴィータが先導して、反応のあった方へ、煙に巻かれ、最初の爆発で怪我をしたのか、3人の人が倒れている。

「管理局です、すぐ救助しますから、頑張ってください」

声をかけ、3人の回りにも風の結界を張り…

「ヴィータ、出るのに近い方のかべぶち抜け！」

「おう、アイゼンツ！…ラケーテンハンマー！」

『了解、ラケーテンハンマー』

ラケーテンフォーム…片側がピク状になり、反対には噴射口が現れる…盛大に噴射炎をあげ、その反動とともに、壁にアイゼンを打ち付ければ。

壁はぶちぬかれ、一瞬外へ煙が流れる、が…結界に包まれた良彦とヴィータ、要救助者3人は煙に巻かれる事はなかった。

「よし、ヴィータ1人頼む」

いって、自分は既に2人抱きかかえる

「あいよ、こういう時は、獲物がねーほつが多く助けられるな」

「ま、かもな…喋ってる間に行くぞ」

「おうよっ！」

壁に開いた穴から飛び出す青と赤の魔力光に包まれる影…一旦上空に上り、当たりを確認、指揮車や救急車が来ている事を視認し。

『こちら本局航空隊第1321部隊、八坂三等空尉とヴィータ三等空尉だ、要救助者を3名救助した、現場の指揮官に従う、どこに連れていけば良い』

『こちら、本局特別捜査官、八神はやて一等陸尉です…良彦君に
グイータ？…まあええ、近くににいる救急車へ搬送してや…』

『了解、その後の支持もよろしく、八神一尉』

直ぐに3人を救助隊に引き渡す。

『八坂三尉は本局03、グイータ三尉は本局04でオペレーター
からの支持を受けてな』

『本局03了解』

『04了解』

はやての指示に了解の旨を返す、すぐに連絡。

『本局03、04…』

指示に従い、瓦礫の奥に取り残されていた要救助者達を二人で救
助していく。

グイータが瓦礫を吹き飛ばし、良彦は救助者を風の結界で守る。

数十分後、本局航空魔導師隊が到着、一息付き…はやての元へ集
まる。

疲れた様子のはやて、ツヴァイに、なのはとフェイトもそこにい
た。

「お疲れ…二人も居たのか？」

「そりゃいるよ、待ち合わせは近くだったし、この状況じゃ救助

にでないなんて考えられないし」

「そうだね、幸い民間人には死傷者はいなかったみたいだし」

「そやな、皆と陸士部隊、救助隊のおかげやな」

「つか、航空魔導師隊が、展開遅くねーか」

良彦に応える、なのは、フェイト、はやて…ヴィータは初動遅れを指摘する。

「空と陸で面倒な争いがあるしなあ、どうにかできんやろかと思
うんやけど」

真剣な顔で考え込むはやて。

「とりあえず、まだすることあるし、そっちを片付けてくるか」

「ああ、せやね…なのはちゃん、フェイトちゃん、ヴィータ、ツ
ヴァイ、もう一寸よろしくな」

それに頷く一同…その後深夜まで後始末などが続いた。

とりあえず、女性陣5人と別れ、近くのホテルで一泊したあと、
皆に合流。

少し眠そうながら、何かを決めたか、覚悟の表情をしている。

「おはようさん、眠れたか？」

「微妙にねみい…ふあ」

「ヴィータは、いつもだろそれ」

「うつせ、おめえのせいで朝起きる時間が固定されてんだよ、あたしは朝よえーのに」

「はいはい、てか、なに笑ってんだそっちは？」

ヴィータと軽いやり取り、はやて、なのは、フェイト、ツヴァイがくすくす笑っていて。

「なにつて、なあ」

「だよねえ」

「うん」

「ですう」

「いや、判らんから…まあいいや」

何かこう良く判らないながら、話を切る。

「な、良彦君」

「どつした、はやて？」

「ちよ、聞いてもらって良いかな？」

「俺は構わねーけど…そっちは皆納得してる話しつぽいな？」

「せやね、今朝皆には聞いたんや…私な自分の部隊を作りたいんや、それでな」

「いいぞ」

「良かったら良彦君も…って、はやっ」

「なんだかんだで、長い付き合いだからな、大体はわかるっての」

「そしたら、そんな時は頼むで良彦君」

はやての言葉にお互いぱんつと手を打ち合わせる。
ほかの皆も微笑み、頷く。

その後仕事があるため直ぐに皆と別れる。

「しっかし、俺らが全部集まる部隊か…他の面子とかどうなるんだろうな」

「おめえは、強い相手がいねーか、とか考えてんだろ」

「いたほうが、楽しいだろうとは思ってるけどな」

「はあ、修行バカが…まあいい仕事行くぞ」

「昨日の休み潰れたからなあ、次の休暇は早めに取るか」

「だな、そつだ、良彦…買い物してこーぜ」

「いいけど、何をだ…午前中で休み終わりだぞ」

「ミッドのアイスクリームメーカーと、材料だな」

「…いいけどな、つたく、腹壊すなよ？」

「はっ、壊すかよ」

「何回か夏に食いすぎて…」

「うっせ、だったらおめえが止めるよ！」

「とまらねーだろうが、全く…まあ、いい行くか」

ぼんつとヴィータのあたまを叩く…その振動で揺れる髪に鉄槌と籠手のクロスした髪留めが鈍く光っていた。

38：空港火災（後書き）

メインキャラには絡まず、一般人のみ救護：攻撃に使う技は風で火を煽りそうなので、結界のみです。

次回は、ガジェットとの戦闘あたりを…時間軸は一年後位になるか
と思います。

39：ガジェットドローン

ミッドチルダ臨海空港火災から1年と少し、中学卒業を期に生活の拠点をミッドチルダへと移した一人暮らしなので、あまり大きくないマンションを一室借りている。

実家は士郎に頼んで借り手を捜してもらい、借家にした。

マンションは海が近く、また八神家：はやて、なのは、フェイトもミッドで生活している…にも程近い。

そのためか実家の延長のような感じでヴィータが休み前や休みの日に来ている事も多い、しっかりと実家から茶碗や生活道具なんかも持ってきている。

そんな中、臨海空港の火災に似たような事件が、幾度か発生していた、但し全て無人世界でだが。

無人世界のはずなのに、高度な魔力集積の実験場などが残されており、幾度か問題になっている。

はやてやフェイトはそれらに関して色々と調査しているようだ…良彦は基本通常任務であり、そちらの事はあまり判らない。

その日も、違法技術の研究所の検挙と言うことで、何時もの小隊…良彦とヴィータ、二人のフロントアタッカーに、センターガードの小隊長、ウイングガード1、フルバック1…で向かっていた。

無人の管理世界、その一角森にまぎれるように作られた建物が見える。

「目標の建築物を視認…周囲に動体反応あり、自動機械の様子です」

サーチャーを飛ばしていたフルバックの隊員が報告してくる。

「なら、遠距離から射撃で自動機械を沈黙させ、即座に突撃する
…時間との勝負だと思え」

小隊長が指示をだし、それぞれが魔法の準備に入る。
良彦は周辺の警戒だ…射砲撃素質皆無なので。

小隊長以下4名、3名は普通に魔力スフィアが、ヴィータの前には8つの鉄球が浮かんでいる。

「よし、撃てっ!」

掛け声と共に幾つも浮いたスフィアから魔力弾が打ち出され、ヴィータも…

「アイゼン」

『シュワルベフリーゲン』

8つの鉄球を4つずつ2回に分けて連打、赤い魔力光に包まれ標的へ飛来する。

が…楕円のような形をした自動機械の直前で魔力弾は消失、ヴィータのシュワルベフリーゲンは魔力を消されながらも、目標を打ち抜き、4機撃墜、4機に損傷を与えている。

それを見て小隊長が…

「AMF、なのか?」

AMF…アンチマギングフィールド、魔力結合・魔力効果発生

を無効にするAAAランク魔法防御である、ちなみに『凧』もこの性質に近い物を持っている。

「ヴィータ、いけっか？」

「当然、あの程度ならわかってればぶち抜ける」

「隊長、援護お願いします、此処はベルカ式のほうがやりやすい」

先ほどの射撃で、10数対の自動機械が向かってきている。

「判った」

小隊長の言葉と共に、良彦とヴィータは突撃を開始、ウィングガードは防御を、フルバックは射撃強化や身体強化の魔法などを随時かけ。

小隊長は、多重弾殻射撃の準備を開始。

近くで見る自動機械は、色は全体的に青っぽく、背後から触手のような黄色いコードが延びている。

攻撃方法は、何らかの光学兵器に、あの触手で捕らえての締め付け？辺りと予測し

「ヴィータ、崩すから一機ずつ確実に頼む」

「了解、崩したのは気にしねーで前進めよっ！」

「任せる」

だん、っと最初に踏み込む良彦、光線を撃たれるが、小さなシー

ルドで弾き、『捌き』：体さばきで避け：相手の近距離に踏み込む。不可視の『凧』が一瞬乱され青の光りが見えるが、直ぐに制御を取り戻しつつ：相手の足元へ魔力を込めた震脚、魔力は風に変わり、その風が震脚の一瞬だけ強くなり、相手を揺らす。

体勢を崩したそれは、無視し次の相手へ：後では体勢を崩した自動機械にヴィータのハンマーが打ちこまれている。

「まず、一機」

「なら、これで2だな」

伸びてきた触手を『弾き』ながら、引き寄せ：右拳をど真ん中に叩き込む。

バチバチつとショートしながら、動きを止める自動機械：良彦とヴィータ、どちらも小さな体に反し、かなりのパワーを身に秘めている。

「いや、4だな」

前方で良彦とヴィータに攪乱されている自動機械、その2体に隊長の射撃が命中：消される事を前提とした弾殻が消えるが、本命が機械を打ち抜く。

「なら、後半分くらいかな、さっさと終わらすか」

「だな、こんなの動きがトロイから直ぐだ」

軽口を叩きつつ、時に良彦が体勢を崩したのをヴィータが、ヴィータが動いて反応したのを良彦が、撃ち砕く。

数分後応援に来た自動機械含め約20機が、残骸になっていた。

「よし、急いで中」

隊長が指示を出そうとした瞬間、建物から爆音…それに反応し、フルバックの隊員が防御フィールドを即時展開、少し遅れて、良彦もそれに重ねるように。

「ゼピュロス」

『風の結界』

カートリッジを1発ロードし、フィールドを強化して行く。

爆発が収まり、建物は炎上…消火班や検察要員を急いで呼んで、一旦小隊任務は終了。

主要な資料や研究機材などは持ち去られたり破壊されていてほとんどわかることは無かったが、高度な魔力集積研究がされていた事だけはわかったらしい。

数日後、隊舎で先日の事件の資料整理などをしながら。

「しっかし、あれなんだったんだらうな？」

「しらね、つか良彦ちゃんと資料纏めとけよ、わかりづれえ」

「ちゃんと纏めてあんだろ…えーと、これが…どっちだっけ？」

「判ってねーじゃねーか、戦闘報告とかは正確なのに、他はだめってどうなんだ、ん？」

「仕方ねーだろ、苦手なんだよ…えーと、こつでこつか？」

「ちげーって、こつちがこつで、これがこつち」

横から身を乗り出したヴィータが良彦のディスプレイを弄りまてめて行く。

「おー、そか、さんきゅ…後でなんかおごってやんよ」

「んじゃ、家の近くのアイス屋で、アイスな」

「あいあい、あそこだな」

「ほら、これで終わりだ、上げて帰るぞ」

といていると

『八坂3等空尉、ヴィータ3等空尉、第3会議室へ出頭してください、繰り返します…』

「出頭、なんかしたかヴィータ？」

「あたしより、おめえのが何かしたんじゃねーのか良彦？」

お互い顔を見合わせ、とりあえず移動する。

ノックして扉を開けると…チビ狸、もといはやてとアイン、ツヴアイが其処に待っていた。

3人とも陸士部隊の制服に身を包んでいる。

「いらっしやい、良彦君、ヴィータ」

「はやて…どうしたんだ、珍しいな」

「はやてっ、忙しいんじゃないのか？」

「とりあえず、席にどうぞマスター、ヴィータ」

「一寸聞きたい事があるんですよ、良彦さん、ヴィータちゃん」

出迎えたはやてに驚く良彦とヴィータ、アインは席を勧め、ツヴアイははやての肩に座っている。

二人が隣り合いに座り。

「さて、先日の無人世界での戦闘の事、なんやけどな」

はやてが切り出す

「あの変な機械の事か？」

「せや、あの機械がいま私がおってる事件に絡んでるんよ」

「はやてが追ってる事件？」

「まあ、詳しくは今度話すわ、そんでやな、戦った感じどうやった？」

質問に対し悩む良彦とヴィータ。

「そうだな、ミッドの魔導師だと面倒なんじゃないか？」

「AMFだっけ、あれがあると射砲撃メインじゃ、きついと思うぞ」

「空は魔導師ランク平均が高いからいいけど、陸じゃもっとやばそうだな」

「あたしもそれは思った、今回だって小隊長以外はあたしらだけしか落としてねーしな」

それを聞きはやては…

「そか、そうなると、やっぱり」

「主…少しだけでも情報を開示しておいた方が良いのでは？」

「良彦さんと、ヴィータちゃんなら、大丈夫だと思いますよ」

「そやな、ええか二人とも…」

そして教えられたのは、レリックと呼ばれるロストログアの事件、それを目指し出てくることが多いのが先日の自動機械、通称ガジエツトドローンと呼んでいる物。

数度無人世界で今回のような実験設備などが発見されるも、全て廃棄されている事などだった。

「今フェイトちゃんも捜査してるんよ、そやからその内ちゃんとした形で協力してもらおう事になると思う」

そういうはやてに

「りょうかい、そんな時は思う存分力貸してやるよ」

「当然だな、まかせろよはやて」

良彦とヴィータが一瞬顔をあわせ、二人揃って答える。

「ほな、次の調査があるんでこれで失礼するな、あ、そや」

「ん、どうした？」

「いやな、ヴィータ…今日皆かえってきーひんから、良彦君所で厄介なっというてな」

「おう、わかったはやて」

「そうなのか、んじゃアイスと飯の材料かってかねーとな、何が良い？」

「そうだな…冷しゃぶとかいいんじゃねーか？」

「んじゃ、肉と野菜か…おし、判った」

そんな二人にニヤニヤしつつ、はやてが…

「すっかり、なれたもんやな、あの二人」

「流石に5年になりますから、マスターもなれるでしょう、以前より照れがなくなっています」

「とうづか、ざぶいー」「いないんやよ、今日は誰も、なアイン？」「ふえ？」

「はい、八神家は全員出かけています」

と、ツヴァイが本当のことを言いそうになったのをとめていたりした。

そのまま、はやてたちと別れ、ミッドの自宅…マンション…へと戻る、良彦とヴィータ、食後にアイスも食べて満足したらしい。

39：ガジェットドローン（後書き）

対ガジェットドローン戦です、一応小隊長はAAランクの射撃型という設定です、ウィングガードとフルバックはAランク程度を想定。3人とも生粋のミッド式なのでガジェット相手には苦戦します。

次はスバルかギンガ辺りと、出合う話とか入れてみようかなと思います、近代ミッド式、しかも格闘技者であるので、噂を聞いて、みたいに。

40：陸士108部隊

ガジェットドローンとの遭遇から暫く、その対処方法の検討や、地上で対応できる魔導師がどれだけいるか等の調査を暫く手伝った。結果、今の段階で地上の魔導師では相手をするのは非常に危険だと判明、その実態を調べるために、はやての口利きで陸士108部隊に紹介してもらい、何人かの魔導師と模擬戦をさせてもらうことになった。

『凧』は、AMF効果に近い性質を持っているため、丁度良い実験台になるらしい、またチラツと聞いた話し話しでは、その部隊には近代ベルカ式、しかも格闘技系の魔導師がいるらしいのだ。

で、現在その隊長室前、ノックをすると男性の声で

「開いてるぜ、はいんな」

と声、素直に入り、中に居た体格のしっかりした白髪の男性に敬礼しつつ、挨拶。

「本局航空隊第1321部隊所属、八坂良彦三等空尉です」

「おう、話は八神の嬢ちゃんから聞いてる、ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐だ、よろしくな三尉」

「はい、よろしくお願いします、ナカジマ三佐」

「あんまかてー話し方じゃなくて構わねーよ、気楽にしてくれ、それで今日の用件なんだが」

「じゃあ、お言葉に甘えて、地上の一般的な隊員の錬度の調査、ですね、空からのこんな依頼中々受けてくれなくて」

「それで嬢ちゃんから、うちにつてことかい、ま、良いだろう隊員にも良い経験になるだろう、ただ基本的に陸戦魔導師しかいねーぜ？」

「はい、此方も今回は空は飛ばないで事に当たるんで、問題ないかと」

「わかった、それじゃ…ああ、丁度良いところに」

話しているとお茶を持ってきたのか一人の女性、紫の長い髪をした陸士。

「おいギンガ、こっちの八坂三尉を訓練場に案内してくれ、後さつき行った準備は出来てるか？」

「はい、部隊長、準備は完了しています…はじめまして、八坂三尉、ギンガ・ナカジマ二等陸士です」

「よろしく、八坂良彦三等空尉です」

立ち上がったもかなりギンガの方が背が高いが、まあ、お互いに握手…お互い何かに気付いたような顔をして、直ぐに離す。

「じゃ、案内よろしく、ギンガ二等陸士」

「はい、あの…ギンガでいいですよ、八坂三尉の方が年上ですよ、ね、確か」

「ギンガは幾つだ？」

「えと、14歳ですけど」

「そう、か…確かに俺の方が上だな、一応16になるし」

「はあ！、三尉おまえさん、そのなりで16なのか？」

二人の会話に驚くゲンヤ、隊員証を提示し確認を取らせる良彦。

「たしかに、16だなすまん、一寸驚いたつか、ギンガは何で知ってんだ？」

「え、何度か噂で、”青と赤の子鬼”の事きいて、はやてさんに聞いたんだけど」

「また、その名前か…はあ」

ゲンヤの問いにギンガが答え、良彦は苦笑。

「ま、いいやな、さっさと案内してやってくれ」

「はい、こちらへどうぞ、八坂三尉」

「あいよ、俺も名前でもいいぞ、そっちのがなれてるから」

「はい、では、良彦さん」

案内され、たどり着くのは訓練場、既に数人の隊員がセットアッ

プして、準備している。

そこへギンガの案内ではいれば、視線が集まる、小さく会話している隊員もいるが、そこ等辺は無視、多分身長のこととか噂のことだろう。

「今回無理な願いを聞いてもらって皆さんに感謝しています、八坂良彦三等空尉です、時間も限られてますし、早速開始しましょう」

良彦もセットアップし、何時もの騎士甲冑を纏う。

相手のほうで決めて合ったのである。順番に、隊員構えに出て、挨拶、最後はギンガだったのでギンガが此処のトップクラスの魔導師なのだろう。

始まった模擬戦：射撃魔法は『風』で打ち消され、砲撃魔法もそれほど高威力のものは無く、『流し』でけずられ、『捌き』で避けられる。

対AMFの訓練もしておらず、魔導師レベルの平均が低い地上部隊はガジェット相手にはやはりきついと判断する、早急に対AMFの訓練だけでもした方が良さだろうと頭にメモ。

しばらくして、ギンガが、前に出る：白のアンダーに胸元と脛はハードシエルの装甲、指貫のグローブに黒のブーツ、紫と黒のジャケットを纏っている。

前に出たギンガが、足にローラーブレードの様なものをつけ、左手にはごつい籠手、手首の辺りにリボルバー型のカートリッジシステムが見て取れる。

「ほう、やっぱりギンガが近代ベルカ式の魔導師だったか」

「聞いてたんですか？」

「はやてが、居るって教えてくれたのと先の握手で、な」

「なるほど、では改めて…ギンガ・ナカジマ、流派はシューティングアーツ、デバイスはこのリボルバーナツクルです」

「ああ、清風の騎士八坂良彦とゼピュロス、流派は八坂流合気術だ、よろしく頼む」

お互いに構える、良彦は何時もの左手を顔の前、右手は腰に…ギンガは少し前傾姿勢で、左拳を顔の横に構え、右拳は肩の辺り。

一瞬の静寂の後…

「行きます！」

「来い！」

二人の声が響き、ギンガが地面を疾走…勢いのまま、左拳、リボルバーナツクルを振りぬく。

それに対し、『凧』で一瞬動きを遅め、左拳で『弾き』…反転するのを利用し、身体を沈め、回転の足払い。

それを避け軽くジャンプしたギンガに、そのまま回転し、上段回し蹴り…だが。

「ウインググロード！」

ギンガの声と共に青紫の道が彼女の足元に現れ、そこを疾走してかわして行く。

「なるほど、面白い魔法だな、飛べなくても駆け抜けるのか、空を」

感嘆と共にそれを見送りつつ、構えなおす。

「まだまだ、行きますよ!」

ぐるんつとウイングロードが反転するように伸び、良彦に向かってくる…交差の瞬間に、肩口への蹴り。

それを左拳で『弾き』、一度距離を取り直す…すうつと細めた瞳が楽しそうに見える。

再び反転し、正に突撃してくるギンガに…

「でも、動きが直線的過ぎる…ゼピュロス」

『貫き』

だんつと地を蹴り、高速移動…体格差もあり、ギンガの懐へかんとんに飛び込む、引き絞っていた左手を掴んで、引き下ろし…ウイングロードを蹴り上げれば。

ギンガの身体がくるつと半回転し、ウイングロードへ叩きつけられる。

その直後、良彦の右手がギンガの顔の前に広げられ

「ほい、これで一本だな」

「…はい、でも今一体?」

良く判ってない様子のギンガを立たせ、地面に降りる。

「ギンガはいま、自分の突進力で投げられたんだよ」

「突進力で…?」

「ウインググロードを走る速度は中々だが、合気には相性が悪いんだ、相手の力を利用し投げたり、体勢を崩したりできるから」

「なるほど、でもそれだと私は勝ち目がなさそうですけど」

「いや、そうでもないぞ、攻撃が真っ直ぐ過ぎるのが一番の問題だから、フェイントなんかで上手くこつちを動かしたりすれば、何とかなる」

「そうでしょうか?」

「実際、ベルカ式の魔導師に何度も負けてるしな、後は高威力砲撃なんかできるなら、それもアリだ」

「砲撃は苦手ですけど…どんな相手なんですか、良彦さんに勝つのは」

「そうだな…戦闘データ渡して良いか相手に聞いて許可出たらギンガに送ってやるよ、参考になると思うぞ」

「はい、お願いします」

そんな会話をして、その日の実験は終了、後日だがヴィータ、シグナム、シャツハの許可を取り、データをギンガに送っておいだ。チラツと見たギンガの感想は、3人とも普通じゃない、だったが。

数日後の八神家、珍しく全員揃ってる所へ、お邪魔している良彦。先日の108部隊での模擬戦の話をはやてにしているのだ。

「つーわけで、地上部隊でも対AMF訓練はした方がいいと思うぞ」

「せやな、でも108以外はあんまつてもないし」

「なら、ゲンヤ三佐から他部隊に伝えてもらえばいいじゃねーか」

「んー、まあとりあえずはそうしとこうか」

話は一旦それで終了、夕食になる。

「ほな、皆…いただきます」

「……………いただきます」「……………」

「ヴィータ、あれ取ってくれ」

「おう、ほれ…良彦それたのむ」

「ん、これが、ほいよ」

そんななか、あれやそれで意志疎通してる青と赤、サラダをとりわけ、醤油を渡したりしている。

その様子を見ながら

「あの二人、もう夫婦でいいんちゃうかな」

「部隊でもあんな感じだと聞いています」

「そうね、医務室でも噂は聞こえてくるわ」

「マスターは色々考えてる様子ですが」

「どんなことですか？」

「……良彦であれば、おかしい事ではないだろう」

はやて、シグナム、シャマル、アイン、ツヴァイ、ザフィーラが
こそこそ話し。

なんだかんだで食事は終わる。

「ああ、そうだ…昨日地球いつてきて、土産買ってきたんだ、皆
食うか？」

持ってきていた箱…小型の保冷庫…から、翠屋のシューアイスを
取り出す。

それを見て、皆はすばやく頷き、あっという間に箱から無くなる
シューアイス。

「ほれ、ヴィータ」

「ん…バニラじゃねーか、入ってないから無いのかと思ってた」

「直ぐなくなりそうだしな、先とつといた」

「へ、良彦はせいいな」

「んじゃ、いらねーのか？」

「いるにきまってるだろ、あんがとな」

受け取り、嬉しそうにむぐむぐと食べる、良彦もバナナを一個食べ
て苦笑。

その日は結局八神家に止まり、ザフィーラと同じ部屋で寝ること
になった、夜遅くまで二人は何か話していたらしいが、その結論が
聞けるのはもう少し先だった。

40：陸士108部隊（後書き）

というわけで、ギンガ登場です、あの動きがメインだと合気には有利だなあと思いました。

ともあれこれで、ゲンヤとギンガとも知り合いに、顔が無駄に広くなっている気がします。

今回は、教会側の話しにしようと思っています。

41：預言者の著書

先日の陸士108部隊での模擬戦から数日、今日は聖王教会で騎士達と模擬戦をしていた。

来はじめた頃と違い今は、大体の騎士に勝つか時間切れに持ち込めるようになった。

だが、シャツハだけはまだ、中々勝ち越せないでいる、魔導師ランクはそう変わらないので、経験の差なのだろう。

ともあれ、この頃は引き分けに出来る事は増えた、今日はぎりぎりで時間切れになり、模擬戦は終了。

終了後に

「そういえば、騎士良彦、騎士カリムが今日は自分の方に顔を出すようにとおっしゃっていましたよ」

「騎士カリムが？…確かにこの頃あんまあってないけど…まあ、判った、シャワー浴びたら行くわ」

「ええ、私も直ぐ行きますので」

そういつて、訓練場で別れ、シャワーを借りてから、カリムの執務室へ、ノック二回で返事が来る。

「どうぞ、入ってください」

「失礼します、ごきげんよう騎士カリム」

「ごきげんよう騎士良彦、そちらどうぞ」

椅子を勧められ着席、直ぐにシャツも入ってきて紅茶を淹れてくれる。

「それで、なんかあったんですか、騎士カリム」

「それなんだけど騎士良彦は私の希少技能を知ってましたよね？」

「ええ、確か”預言者の著書”っていう、未来予知ですよ、確立はあまり高く無いって言ってたような」

「そう、それでこの間から気になる予言が出ているのよ、古代ベルカ語だし、解釈が幾つもある出来て難しいんだけど、騎士良彦の意見も聞かせて欲しいの」

椅子から立ち上がり、まとめてあった古い紙のようなものを手に取ると、それが解け、カリムの周りを囲う、その中の一枚を良彦に差し出してくる。

「ええと…古い結晶と無限の欲望が交わる地…死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る…死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち…それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる…か」

「それを、どう思うかしら？」

「前半は一寸判らないけど、中つ大地の法の塔は、多分管理局の地上本部で、法の船は次元艦隊か、管理局本局じゃないかな…そうすると、何らかの理由で両方が機能不全なりに陥る、とか？」

紙をカリムに返しながら、意見を述べる。

それを受け取り

「他にも何人かそれとほぼ同じ意見の人がいるわ、今度その人達と一緒に相談したいのですけど、時間は空けられますか？」

「とりあえず、一週間位前に言ってくれば何とかかなると思うよ」

「では、決まったら連絡をしますので」

「了解、しかし…これが当たったら色々問題になるな」

「ええ、ですからこの予言を成就させないために動くことと思っています」

「なるほど、それじゃ、今日はこれで、騎士カリム」

「ええ、ありがとうございます、騎士良彦」

紅茶を飲みきって立ち上がり、部屋を出る。

そのまま、マンションへと戻る良彦、部屋へ入り、クッションで今日あった事を考えていると。

風呂場の方から足音、予言を気にするあまり気付いてなかったのか、恐らくヴィータがきているらしい。

視線をそっちに向けると、良彦のTシャツがヴィータのものにしては一寸大きいTシャツをきて、髪はまだ濡れていて、解かれています状態のヴィータが冷蔵庫に向かってる。

「つか、来てたのかヴィータ」

「おめえより早くいたぞ、気付いてなかったのか？」

「一寸考え事してた、というか何でそんな格好してた？」

「楽だからってのと、衣替え前で冬服しかなかったかな、別に借りていいだろ？」

「そりゃ、いいけどね…ふう」

冷蔵庫からアイスを取り出すヴィータ、クッションに座り。

「なに溜息とかにあわねー事してんだ？」

「知識があっても、考えるんは難しいな、と思ってな」

「ふーん、なら考えるのが得意な奴にまかせりゃいいじゃねーか、知識は判る所だけおしえてさ」

「…そついや、そうだな、俺は執務官でも捜査官でも指揮官でもないんだし、そうするか、サンキュヴィータ」

ぼむぼむと頭叩き

「叩くなっつの、毎回毎回、ほれ、良彦の分」

皿に盛られたアイスを渡してくる。

「おう、あんがとな…って、これは手作りの方か？」

「残ってたし買ってくんの勿体ねーだろ、それとも嫌か？」

「んにゃ、俺はこっちのが好きだな」

「そ、そうか、じゃあ又つくっついてやんよ」

「おう、頼む…とりあえず、アイス食ったら少し休憩だな、頭使
いすぎた」

「おめえは、変に考えすぎる時があるかな、他にも人いんだか
ら頼れよ、あたしでもいいぞ」

「ヴェータには世話になりっぱなしだからなあ…でも、その言葉
はありがたい、あんがと」

お互いに、拳をこつんとあわせ、笑い会っ…何があっても守るも
のを今度こそ守ると、良彦は改めて決意していた。

41：預言者の著書（後書き）

予言関連と、普段の様子少し…予言は基本本編通りです。

今回は、クロノとエイミィの結婚の話あたりを、少し書こうと思います。

42：結婚前夜 式

予言の事を聞いて暫く、カリムから連絡を貰い行ってみれば、居たのははやてとクロノ、ヴェロツサ、シャツハ、当然カリム。

そこで色々と相談になったのだが、ヴィータからの忠告通り、良彦は基本自分がわかる事を聞かれれば答える程度に留めていた。

結果、この場に居ないが他の賛同者と共に、期限付きながら部隊を立ち上げ、予言に対処する方向に話はまとまり、部隊に関してははやてが隊長になると言う事になった。

で、相談の終わった帰り、クロノに呼び止められる。

「良彦、一寸良いか？」

「ん、どうしたクロノ？」

クロノはいつの間にか身長もしっかり伸び、並ぶとまるで親子に見えなくも無い。

「いや、丁度良いからこれをね」

差し出されるのは一通の招待状。

「ふむ…結婚式か、準備進めてたんだな」

「母さんとエイミィ、それにレティ提督あたりが、楽しそうにね…良彦も注意して置けよ」

「…忠告、痛み入るが、こっちはまだなあ…」

苦笑し、クロノの言葉に返す。

「ともあれ、参加させてもらっよ…まあよければ式前日に、男だけで集まらないか？」

「そうだね、それは良い考えだ、良彦君」

何処から現れたのかヴェロツサが答える。

「俺、クロノ、ヴェロツサ、ユーノ、ザフィーラ、此処らへんだな」

「ふむ…僕は構わないけど皆は平気かな？」

「ま、少し時間あるし何とか調整できると思うよ」

「だな、連絡入れるから細かい話はそこで詰めよう」

良彦が参加者を上げ、クロノが忙しい皆を心配するが、ヴェロツサと良彦はそれでも集めるつもりらしい。

「しかし、一番最初がクロノか…始めてあつた時は、俺とそんな身長違わなかつたのにな」

「あの頃は、それがコンプレックスだったけどね、君は…まあ、一応聞いてはいるけど」

「良彦君のは、治療できる可能性はあるんじゃないっけ？」

「んー、でもまあ、残した傷と同じでこれも戒めと思ってるし、俺的にそんな困らないから、このままで良いかなと」

「君がそういうなら、僕は構わないが」

「そうだね、本人の意志が重要だしね」

「んじゃ、式前日は男衆でクロノの独身最後を祝ってやろう!」

「おー!」

「…カオスになりそうな気がするよ」

良彦の叫びに乗り乗りなヴェロツサ、既に疲れているクロノであった。

式前日、ぎりぎりのスケジュールで仕事を詰め込んだ数人…クロノやユーノ…も何とか間に合い無事男性陣によるクロノ独身最終夜祝いが開催された。

まあ、未成年もいるので酒は無しになったが、場所は明日のことも考えて式場のホテルで部屋を取った。

ある程度の人数が入れる大部屋で、長期滞在客などが自炊できるようにキッチンまで着いている部屋だ。

料理はホテルに頼んだのが半分、良彦が作ったのが半分である…ミッド料理半分、地球料理半分とも言うが。

「んじゃ、クロノの結婚を祝して乾杯!」

「『『『乾杯』』』」

5人がコップを打ち合わせ、一気に飲みきる。

「しかし、クロノとエイミィか…随分長い付き合いだよね、君ら」

「俺らが知る限りでも、7年だよな」

「僕となのはがジュエルシードを追ってる頃にあつたから、そうだね」

「そうだな、闇の書の一件もそのくらいになる」

ヴェロツサの言葉に頷きつつ、良彦、ユーノ、ザフィーラが言葉を続ける。

「そうだな、訓練校の頃からコンビだったから、もう一寸長いと思っけど」

「ま、そうじゃなきゃ、勝手に相手の髪セットとかしねーよな」

「というか、なんでそれを知ってるんだ君らは？」

「『『『リンディさんが見せてくれた』』』』」

頭を抱えるクロノ、楽しそうにそれを見る一堂。

「でも、長い付き合いから結婚って言うのもなんだか良いよね」

「ユーノはまず、あの鈍感に気付かせるよ」

「全く気付いている様子はないな」

「そっだね、手伝おうかユーノ先生？」

うらやましそうなユーノに、良彦、ザフィーラ、ヴェロッサが追いつく。

「忙しいのもあって中々合えないし、あえても二人になれないんだ」

苦笑するユーノ。

「まあ、頑張れ…寧ろ直接言わないとなのは絶対気付かないぞ、保証する」

「そっだよ、頑張るよ」

応援する良彦に素直に答える。

「そっいえば、良彦、君はどうするんだい？」

「管理局内では色々な噂があるけど」

「……」

クロノ、ヴェロッサが問いかけ、ザフィーラは無言。

「ん…」応考えてるぞ、もう少し先になるけどな」

それに素直にそれだけ答える。

「そうか、それなら僕らは何もいう事は無いね」

「そうだな、相談くらいは乗れると思うぞ」

「うん、僕もそのくらいなら」

ヴェロツサ、クロノ、ユーノがそれぞれ言ってくれる。

「良い友をもったな、良彦」

ザフィーラは、良彦の肩をぽんと叩く。

「だな…さて、俺の方はもういいだろ、クロノの惚気でも聞かせてもらおうじゃねーか」

「ああ、それなら僕もいくつか知っているよ」

良彦の言葉にヴェロツサが反応する。

「噂の真相とかも聞いておきたいよね」

ユーノも噂は色々聞いているらしい。

「ともあれ、あまり新郎を疲れさせるなよ」

とは、ザフィーラの弁である。

クロノの予想通り、混沌とした時間が過ぎていった。

翌日、式はつつがなく終了する、エイミィのドレス姿は綺麗だったし、クロノも決め込んでいた。

友人代表でヴェロツサの挨拶や、女性の方ははやて、なのは、フエイトの3人が揃って歌を歌ったりしていた。

まあ、お偉いさんも多くその挨拶に時間をとられたのも事実だが。今は、披露宴も終わり、二人を見送る所だ、地球ではブーケトスなどがあるが、こっちは無いみたいで、ブーケはエイミィの手元にはない。

そう思っていた少し前の良彦はいきなりの展開に驚きを見せる。

「それじゃ、はやてちゃん」

「ほい、いくでー」

エイミィの言葉に、はやてが反応し、空をブーケが舞う、いや…ツヴァイが運んでいる。

「じゃ、トスいつくよー!」

エイミィ振りかぶって…投げた!

一直線にヴィータに向かい投げられるブーケ。

「んなっ、あぶねーだろエイミィ!」

それをしっかりと受け止めるヴィータ…辺りの女性陣は何故かに

ここに顔で。

「次結婚するのはヴィータちゃんだね」

と、なのはが、爆弾投下。

「なんでだよ、つか、どついう事だ！」

わけの判らないヴィータに、はやてが

「地球ではな花嫁の投げたブーケを取った人が次結婚するいう、
験担ぎがあるんよ」

「で、今ブーケを受け止めた」

「だから、次はヴィータちゃんなの」

はやて、フェイト、なのはが説明し。

「ま、ええやんかヴィータには良彦君おるし」

はやてが追撃。

「な、なんで良彦が此処まででてくんだよ！」

ヴィータが真っ赤になりながら反論している、その隙に、そこを
離れようとした良彦、だが

「まあまあ、何処行くんだい良彦君」

ヴェロツサにつかまっている。

「ヴェロツサ、お前もまさか」

「さあ、何のことかな…ぷぷ」

「くっ、孔明の罠か、これが」

まあ、良彦も顔が赤いのだが。

「と、とにかく…あれだ、結婚とかあたしは、その」

「まあ、おちつきやヴィータ…験担ぎなだけで、ぜったいとちやうから、な」

真っ赤なヴィータをなだめるはやて、良彦も諦め、ヴィータのそばに。

「とりあえず貰つとけ、さっき言った以外に幸運のお裾分けの意味もあつから」

ほんと赤くなつたヴィータの頭を撫で、苦笑する。

それに頷き、だが良彦と視線を合わす事なく、クロノとエイミィの新しい出発を見送つたのであった。

42：結婚前夜 式（後書き）

まあ、たまには男衆と喋るのもってことで。

今回は、18歳の誕生日の辺りを書こうと思います。

43：誓いの形

クロノとエイミィの結婚式から2年弱、ミッド風に言々と新暦7年の6月。

4日にはやて、14日に良彦と比較的近い誕生日だということもあり、知り合ってから毎年その間の休日で行ってきていた。

今年も皆の休みをあわせ、誕生日パーティーを行い、いつもの用に混沌と化した訳だが。

で、今日は14日、良彦の誕生日である。

昼間から何処か落ち着きがなく、書類も何時もより間違えなどが多かったりしたが、何とか普段どおりの時間に間に合わせた。

そしてまあ、自宅のマンションで、態々来てくれるように言ったヴィータを待とうと思いい、部屋に入ると、先に来ていたらしくソファで寛ぐヴィータが居た。

「早かったな、ヴィータ」

「何いってんだよ、おめえが遅かったんだろ、んで？」

「んでって、なんだよ」

「なんの為に態々、声掛けたんだ？」

「ああ、それか…一寸待ってくれ、着替えてくる」

「ん、了解」

ヴィータにそういって、部屋へ入り、普段の部屋着に着替える。

軽く深呼吸し、買っておいた物を確認、それを持って居間へ戻る。

「おまたせ、んじゃ…用件だな」

「おう、早くしろよ、飯の準備もあんだぞ」

「て、準備すんのは俺じゃねーか、それ」

「だから、早くしろっての」

「わーったよ、これだ」

差し出すのは小さな箱。

「んだよこれ？」

ヴィータが普通にあげると、中には白金の台座に真っ赤なルビーが一個のシンプルな指輪。

「…良彦、これは？」

「いいか、何度も繰り返すと恥ずかしいから、しっかり聞いとけよ」

ヴィータの問いに、息を軽く吸い込み。

「ヴィータが好きだから、これからも一緒に居て欲しい、その約束の形だ」

顔を赤くさせつつ、ヴィータをしっかりと見て、言い切る。

見つめているヴィータの頬が赤く染まり、瞳が揺れる。

「ばっか、おまえ…あたしはいつでも一緒だったじゃねーか、それはこれからも…だろ？」

「ん、そうなんだけどな、ちゃんとけじめをと思ってよ、日本じや18から結婚できるんだ、それにあわせてっつてずっと思ってた」

「おせーよ、馬鹿…あたしはずっとそのつもりだったっての」

「俺もそうだけどな、それでもきちんとして形に見えるものが欲しかったんだよ、ほら、手」

指輪を取り、ヴィータの左手を掴み…薬指へそれを納める…小さな手にあわせた、一瞬玩具にも見えそうなサイズだが、気持ちのもったそれは、薬指で赤く輝いている。

「この次は、結婚指輪、だな」

「結婚て…良いのか良彦、あたしは」

「そんなの、俺には細かい事だ、つかシャマルに聞いたけど、基本人と変わらないんだろ？」

「まあ、そうだけど、でも老化とかしねーぞ？」

「それもあんま問題じゃないな、この身体も老化遅いらしい、遺伝子異常なんだってさ」

「…そ、か…でも、其処まで言うなら何で今結婚じゃねーんだ？」

「それな、俺も考えたんだけど、少し先にでかい事件がありそうなんだ、それを解決してからの方が安心できると思ってな」

「でかい事件、てなんだ？」

「まだ秘密だ、ただ…はやてが隊長になって部隊が作られるだろ、それが事件対策の部隊だ、これも秘密だから言うなよ？」

「判った…んじゃ、その事件が終わったら、そ、その…けっこんか？」

真っ赤になりつつ上目遣いで聞いてくるヴィータ。

「俺の予定では、そうなってるけど、嫌か？」

「ばーか、嫌なわけねーよ、ただ結婚とかは考えて無かったから、その…嬉しいんだよ！」

何故か逆切れし、叫ぶヴィータに、静かに手を伸ばし、頭を撫で。

「そうか、俺もそういつて貰えて嬉しいよ」

すっとなを取り立たせ、引き寄せる。

「これからも、よろしくな…ヴィータ」

「こっちこそな、良彦」

引き寄せた小さな身体をしっかりと抱きしめ、二人の影がゆっく

りと重なって行く。

と、いう事が合った翌日、筋は通さなければという事で、八神一家へ挨拶に出向いた。

はやてには祝福と共にからかわれた。

シグナム、シャマルはヴィータがやはり先になったか、と納得され、シグナムには益々の稽古という名の模擬戦を約束させられ。

シャマルにはブーケをくださいね、とか言われた。

リインフォース達は二人とも祝福と共に、アインはマスターはこういう事では動きが遅いといわれ。

ツヴァイには、ヴィータちゃん、長く待ってたですよ、といわれた。

ザフィーラは、言葉少なく祝いを述べ、ぽんといつもの用に肩を叩くだけだった。

この間、良彦もヴィータも真っ赤な顔で、恥ずかしそうであり、嬉しそうであった。

あと、これからはヴィータが良彦のマンションで生活するのが基本になり、休みのあったときや、皆が集まる時は八神家にもいく、そんな感じに決まった。

更に、もう一本の筋…高町家へも、報告へ出向いた。

土郎は、驚いていたが納得し、祝福を述べてくれた、さらにこれまでの修行と守るものに対する意識をもったならば、と…『音貫き』の使用を許可してくれた。

実際暫く前から身体的には大丈夫だと思っていたらしいが、精神的に無理をしないか迷っていたらしい、今回の一件で無理はしないだろうとの判断だ。

桃子は素直に祝福というより、やはりヴィータを待たせていたことをチラツと言われたが、日本で結婚できる年齢にけじめをという良彦の言葉に納得してくれた。

ウェディングケーキは任せなさいとの確約もくれた。

恭也は、良彦の頭をポンッと叩き、相手に心配を掛けるようなまねは控える、とだけ言ってくれた。

美由希は、ヴィータに抱きついて、よかったねと祝福し、良彦には、先をこされたーとか、にこにこしながらいていた。

このほか、知り合いにもいつの間にか話が広がり、お祝いのメールや連絡が暫く続いたらしい。

43：誓いの形（後書き）

というわけで…プロポーズです、キスの後どうしたかはあえて語りません！

で、次回ですが…スバル、ティアの試験見学とかを考えてます、ようやくStrikers部分に突入です。

44：Bランク試験

ヴィータとの婚約から約一年、新暦75年の4月、はやてが目をつけたという部隊員候補の魔道師ランクアップ試験があるというので、はやて、フェイトと一緒に見学に来ている。

なのはとツヴァイが試験官だ。

準備をしているのは二人、青い髪をショートにし、右手にリボルバーナックルをつけた少女、ギンガの妹でスバル・ナカジマというらしい、魔力光は青、良彦と同じだ。

もう一人は、オレンジの髪を両サイドで纏めた少女、銃型のデバイスを持つ、勝気そうな雰囲気、ティアナ・ランスターという名前らしい。

スバルは近代ベルカ式、更にシューティングアーツを…ティアナはミッド式、他に幻術なども使えるらしい。

ツヴァイが二人に諸注意を与えた後、開始の時間が来る。

開始位置を飛び出す二人。

「さて、あの二人どんな感じなんだ？」

「せやな、素質は十分やとおもうよ、後は今回の試験でしっかり見極めやな」

「資料をみる限りでは、確かにいい感じみたいだけど」

上空を飛ぶヘリの中で、良彦、はやて、フェイトが二人の様子を見ている。

ティアナが銃型のデバイスからワイヤー付きのフックを打ち出し、それを利用して移動したり、スバルは狭いビルの中もローラーブレードで縦横無尽に壁とか関係なく駆け巡る。

攻撃の精度もなかなか、ティアナの射撃魔法は的をほとんど外さない…スバルは肉弾型だ、速さと威力はかなり高い。

「二人とも良い動きだな…ただ、スバルの方は以前のギンガと似た癖があるな、装備の問題か」

「なんやそれ、ちょーきかせてんか？」

「攻撃が真つ直ぐ過ぎる、相手がミッド式ならシールドで弾いて近づくのはまあ、良い手だろう…ただ、同じ間合い、格闘戦の時な」

「どうなるの？」

「相手次第だが、攻撃が真つ直ぐという事はそれだけ読みやすい、あつさり負ける可能性がある…実際ギンガとの最初の模擬戦では、あつさり倒せたしな」

それを聞きながら、はやてが首を捻る。

「いま、最初のつーたか、なあ良彦君…きみ、まさか」

「………ギンガが非番の時にチョコツとシグナムやシャツハと一緒ににな？」

「…ヨシヒコ、それは」

「非番なんだし、いーじゃねーか、今のギンガはかなり腕上げて

るぞ？」

「ま、えーわ…その内ギンガにも声かけるかもやし」

はやてとフエイトの苦言に、苦笑で答える。

その間も試験は続き、銃型デバイスを匣に妨害用オートスフィアを集め、光学迷彩魔法を使いスバルを隠し突撃させ、更に注意を引き、ティアナが射撃でしとめる、そんな連携も見せる。

「良い感じできとるなー、でもこっからが難関やで」

「遠隔攻撃可能な大型オートスフィア、半分の受験生は此处で脱落しちゃうからね」

「だな、あのレベルの魔導師だとちとキツイだろうけど」

言ってる間に一瞬の隙を突かれ、ティアナが転倒、転びながら撃った射撃魔法は偵察用のスフィアを打ち抜いたらしく画像が途絶える。

「ありや…偵察用の落ちたか？」

「流れ弾みたいやね、とりあえずゴールの方でまっこと」

「そうだね、なのはがどうにかするだろうし」

「んじゃ、俺ツヴァイの所行ってていいか、どうもへりの中は狭
苦しい」

「はいはい、ツヴァイの邪魔せんときよ」

「あいあい、んじゃな」

へりのドアを開け、飛び出し、一瞬の青の光りに包まれ騎士甲冑を纏い、ツヴァイのそばへ。

一瞬驚いたツヴァイだが、良彦だと気付くと、腰に手を当てながら。

「もう、何しにきたですか良彦さん」

と、一寸怒ったように言ってくる。

「狭いと息が詰まるから出てきた、様子どうだ？」

「はあ…邪魔はダメですよ」

「判ってるっての、で」

「現在、大型オートスフィアを攻略している所です、へりの方も画像戻ってると思うですよ」

「良いって、ふむ…ティアナが一人で…当たっても倒れないって
いうか、幻術かこれ」

「ですね、本命はきつと」

画面の一個にスバルが映る、ウィングロードを疾走し壁をぶち抜いて、大型オートスフィアの元へ突撃。

「ほ…中々面白いな」

「いや、規定ぎりぎりと言うか違反ですよ」

「ま、現場で規定とかなないからなあ」

ティアナの幻術に翻弄されていた大型オートスフィアがスバルへ狙いを変える…その間に近づき、大型オートスフィアが張ったバリアをスバルが打ち砕く。

大型オートスフィアからの攻撃をシールドで受け止め、左手に作られた青い魔力光の球体を、大型オートスフィアに押し付け…右手でその球体を打ち抜き叫ぶ。

「デイベイーン…バスターー！」

押し付けられた超至近距離からの直射砲撃に、大型オートスフィアは青い魔力光に包まれて、そのまま爆発する。

「今のデイベインバスター、だよな」

「そうですね、スバルさんはなのはさんに憧れてるらしいですから」

「ほう、今度からかつとくか」

「そんなこと言っていると、ヴィータちゃん関連でからかわれますよ」

「いい加減なれたっての、そっちは」

そんなことを言っていると、遠くから疾走音が響き渡る、どうやら

らスバル達が近いらしい…。

「ちーと、早すぎじゃねーか、あれ？」

「止まれ、なさそうすね」

「はあ…（なのは近くいるんだろ、ネット頼む）」

突撃という言葉通りに疾走してくるスバルと、おぶられたティアナが慌てた顔をしている。

「（うん、そうする予定だけど…どうするの?）」

「（力を逃がして、放り投げるから受け止めてくれりゃいいよ、ツヴァイもな）」

「（了解です）」

「（ん、わかったよ）」

ツヴァイは蒼天の書を取り出し

「ヴァイヒ・スツーツ」

と、魔法を掛け…なのはも

「レイジングハートお願い」

『了解、ホールディングネット』

と、魔法を掛ける。

ゴールの後に桃色のネットと白い柱が幾つも立ち上がり、其処へスバルとティアナが飛び込む…瞬間に。

速度を殺しきれないスバルの懐に良彦が飛び込み、襟を掴んで、身体を捻りながら、ダンツと地面を蹴り上げる…突進の勢いが上昇方向への力に変換され、スバルとティアナが空を舞う。

飛び過ぎないように、襟を強く引き寄せ、ある程度の威力を殺し…離す。

スバルはネットにダイブし、ティアナは白い支柱に引っかかって止まる、どちらも何があったか良く判って無い表情だ。

「こらー、危険行為は原点の対象になるですよ!」

と、ツヴァイが怒鳴り。

「一寸危なかったかな」

と、降りてきたなのはが苦笑している。

「止まらない速度はやめとけ、危ないんだ」

えらく実感のこもった良彦の言葉。

言われた二人は、ネットと支柱の魔法が解けて、ようやく実感し
たらしく、すまなそうに謝ってから、スバルは立ち上がり、ティア
ナは足首を捻ったのか立てなさそうだ。

「ああ、今治療をするから」

「それはツヴァイがやるですよ」

と、すーっと飛んでティアナの足元へ。

それを見て、二人は揃って

「ちっちや！」

との事だが、ツヴァイは特に気にしてないようだ。

なのはを見たスバルが、泣き出し、抱きついたりしてたが、とりあえずは試験は終了した。

良彦は何か聞かれても面倒なのでツヴァイの助手という事を通し、後片付けがあるからとさっさと離れた事を追記しておく。

44：Bランク試験（後書き）

今回はヴィータはお休みです、スターズ二人の試験を見学してました。

次回は、六課稼動の話になると思います、良彦とアインの六課での立ち位置も次回説明する予定です。

45：機動六課稼働

スバルとティアナの魔導師Bランク試験から暫く…二人はその後、再試験で受かったらしい…機動六課の稼働初日、全員を集めての挨拶の日がやってくる。

此処から本格的に、はやての部隊が動き出すのだ。

部隊員達が整列するなか、報告を受けたはやてが、グリフィス…グリフィス・ローラン、レティ提督の子供だ…に連れられやってきて、壇上に上がる。

部隊員を見渡し、簡単な挨拶の後、隊長陣の端…隊長陣は部隊員とは対面する形で整列していた…にいた、良彦とリインフォースアインを一步前に出させ。

「基本フォワードはスターズとライトニングに任せるんやけど、こっちの二人、八坂良彦三等空尉と彼の守護獣のリインフォースアイン、この二人は遊撃部隊として、動いてもらうことになるから」

「八坂良彦三等空尉だ、よろしく」

「リインフォースアインです、同じくよろしくお願いします」

二人が一礼し、下がる。

「ほんで、この二人のコールサインはウィンドや、01が八坂三尉、02がアインやな、ほんじゃ解散、各自仕事に取り掛かってや」

その報告が終わると、皆移動していく。

「はー、人前で挨拶とか緊張するわ」

「マスターは、もう少しそういう事になれたほうが言いと思われるが」

「こればかりはな、性分だから」

アインと良彦が話しをしていると

「良彦、新人が訓練するみてーだから、みとかねーか？」

「ん、ヴィータか…そうだな、一度全員揃うとどついつい感じか見とくか」

「ではマスター、私は主の方へ」

「ああ、頼む、はやても隊長の仕事多いだろうから手伝ってやってくれ」

ヴィータとアインに答え、ヴィータと一緒に歩き出す。

「しかし、スバルとティアナは問題ねーとおもうけど、後のチビ二人は大丈夫なのか？」

「フェイトの保護した奴らだよな、魔導師ランクは陸戦BとC+だから、問題ねーと思うけどな」

「ふむ…つと、何処で見るんだ？」

「隊舎の屋上だ、一寸言った海上に訓練施設があるんだよ」

「そうなのか、どんな感じだ？」

「確か最新式なので、レイヤー建築で大体の地形は再現できるってよ」

「そりゃいいな、俺らの訓練でも使いやすそうだ」

「だな…ツと、此処だ」

話しながら歩き、屋上へであれば、先客が一人…六課制服を着た赤紫の髪の人物、シグナム…居た。

「何だ、お前たちも見に来たのか？」

「新人の動きを見とかねーとあわせづらいからな」

「だな、マダあたしらが教えるってことはないけど、どう教えるか考えなきゃだしな…ま、その前に自分を鍛えねーとだけだな」

シグナムの問いに、良彦、ヴィータが答え。

しばし、新人の動きを観戦する3人。

「…うーん、赤毛の子、エリオだっけ…デバイスに振り回されるな、スバルは相変わらず直線的だ」

「他二人にはなんかねーのか？」

「…射砲撃メインのティアナと、召喚？支援だったかの、キャロは専門外だからな、ティアナはなのはが教えるのが一番だろう」

「エリオは、地力をつけるトレーニングをさせる必要があるな、デバイスが大型だけに、取り回しに苦労していそいだ」

「だな、朝のランニング一緒に走らせて見るか、足腰はベルカ式には欠かせないし」

「そうすつか、後でなのはに言っとくわ、それ計算して訓練しねーと、オーバーワークになっかんないな」

「頼んだ…ともあれ、まあちびっ子二人も結構動くし、悪くはないな」

「そうだな、鍛えればものになるだろう」

「ま、まだひよっこだけだな」

3人で暫くそんな話をして、どうやら訓練が終わって昼食に行くようなので、此方も移動することに。

少しして食堂、訓練で体力を使った為であろう、新人の座るテーブルの上には山のようなパスタが置かれている。

スバルとエリオがそれをどんどんと消化し、雑談などしている様子だ。

「そういえばさ、最後に紹介されてた人いるよね、あの人の名前どっかで聞いた覚えがあるんだけど？」

スバルが一旦フォークを休め、首を傾げる。

「そうなんですか…?」

「あ、僕もフェイトさんから聞いたような覚えが」

キャラ口は首をかしげ、エリオは思い出そうとうなる。

「あんたの事だから、雑誌が何かで見たとかじゃないの?」

「違うよーティア…んー、あ、そうだ思い出した、ギン姉が前に話してたんだ、確か”青と赤の子鬼”の片割れで、古代ベルカ式の魔導師なんだって」

「”青と赤の子鬼”って本局の、確か…ちびっ子カップルとか、ロリシヨタコンビとか言われてる?」

「そうそう、その人」

スバルとティアアナが会話に夢中になり回りが見えなくなっている頃、エリオとキャラ口は二人を止めようとしていた。会話に出ている本人が、直ぐ近くにいるからだ。

「他には、どういわれてるんだ?」

そんな声に、スバルとティアアナは更に会話を続ける。

「たしか、実は既に紫の髪の子供がいる、とか、いやいや犯罪だるあの外見、とか」

「そうそう、そんな噂……………」

「ほう、楽しい噂だな、なあ良彦」

「そうだな、楽しいな、ヴィータ」

その言葉に、ギギギとブリキの様に首をならし、振り向くスバルとティアナ。

「八坂三尉に、ヴィータ副隊長いつからそこに？」

「ギン姉が、ってあたりだな」

「ってことは、ほぼ全部」

「ああ、きーてたぞ」

スバルに良彦が、ティアナにヴィータが答え。

「楽しそうだったな、それに余裕もあるらしい、なのはに頼んでトレーニング増やして貰おうな」

「それがいいな、頑張れよ二人とも」

良彦、ヴィータが言いながらにやりと笑う。

「ご、ごめんなさい、それだけは簡便してください」

「すいませんでした、もうしませんから」

と頭を下げる二人に

「ま、冗談だ、散々そんなこと言われてるからな、慣れてるよ」

「つたくだ、まあお前らもあんまり無責任に噂流すなよ？」

「「はい！」」

「なら良い、ああ、そうだスバル、エリオ」

「「はい？」」

「明日から朝ランニングな、ティアナとキャロも参加したきゃしていいぞ…一応ベルカ式じゃなくても体力があるに越した事はないからな」

「えーと、訓練以外に、ですか？」

スバルの問に

「なのはにはそこ等辺いっとくから、大丈夫だ」

簡潔に答える。

「ベルカ式の場合、足腰は特に重要だからな、地味だけど毎日続ける事に意味がある」

「ま、あたしも一緒だし無理そうならこの馬鹿止めるから大丈夫だつて」

「つて、誰が馬鹿だ何のばk「修行馬鹿」…はい、すみません
言い切る前に言われ、黙らされる。

「はあ、とにかくそいう事な」

苦笑し、違うテーブルへと歩いていく良彦とヴィータ…新人4人は顔を見合わせ、先ほどの噂がどの程度真実なのだろうと小声で話していた。

初日が忙しく過ぎて、自室…良彦とヴィータは同じ部屋だ…で、風呂も入りゆっくりしている良彦とヴィータ。

ヴィータはいつの間にか習慣…というか本人が言うには楽しいが…になっている、良彦のTシャツを着て、髪は解いている格好だ。色々と刺激が強いので、何度かやめるよう言ったが聞いてもらえなかった。

「ん、ふあ…しかし、結構疲れたな、書類やらかなり多いし」

「良彦は、普通の書類苦手だかな、アインをはやてにつけねーで、ウインド関係のほうやらせたほうが良かったんじゃないか？」

「はやては、この何倍もしてるんだろうからな、つか、してるらしいぞアインに聞いたけど」

「それだと、ツヴァイと2人じゃきついか、3人でもどうか、って感じだな」

「そういう事だ、ま、ウィンドは二人だけだから、まだ何とかなるだろ、新人の教育始まるまでは」

「ダメそうなら、あたしが手伝うから溜める前に言えよな」

「アイアイ、そんな時は頼むわ」

すっと伸ばされた手がヴィータの赤毛を撫でる。

「んじゃ、明日も早いし今日は早めに寝とくか」

「だな、言った本人が遅刻したら、恥ずかしいもんな」

「うっせ、寝起きが良いのはしってんだろが」

「はいはい…ん」

軽くじゃれあつような言い合いの後、立ち上がり目を瞑るヴィータ。

「ん…おやすみな」

「こちらもち立ち上がり、あわせるだけのキスをして、ぼんぼんとヴィータの頭をなでる。

「へへ、おやすみ、良彦」

まあ、そういつてもベットは別ながら寝室は一緒なので、二人揃って奥の部屋へ消えていくのだが。

45：機動六課稼働（後書き）

機動六課稼働開始！、キャラの台詞が少ない…まあ、これから新人の台詞も増やせればと思います。

一応婚約はしてるんで同室です、ベットは2個です。

今回は、スバル、エリオ辺りと、個別に模擬戦とかを考えています。

機動六課制正式稼働から数日、時間が空いたのでヴィータと一緒に訓練の見学に出てきた。

見ると丁度一息ついた所なのか、新人4人となのはが座って休憩している所だった。

「おす、どうだ調子は？」

「あ、よしくん、うん悪くないよ」

「なのは、よしくんは止めろって、何度言わすんだせめて、仕事
中だけでもだな」

何時もの呼び方に苦笑していると

「あの、なのはさんと八坂三尉って？」

「幼馴染だよ、実家が隣同士なの、同級生だしね」

スバルの言葉に、いつせいに良彦を見る新人4人、そして

「「「「ええー！！」「」」」」

「息のあつた叫びだな、お前ら」

「全く、それにまだ体力が余ってるらしいな」

4人の驚きに、ヴィータ、良彦が答え。

「八坂三尉って、僕と同じ位の年齢じゃないんですか？」

「てか、どうみても小学生ですけど」

「私もあまり変わらない年齢かと…」

「ありえない、どうしたらそんな」

エリオ、スバル、キャロ、ティアナが眩きや問いを発する。

「これでも今年19だ、色々事情があつてな、そういうもんだつて納得しとけ」

「よしk…良彦三尉が同じ年齢なのは本当だよ、今度昔の写真見せてあげる」

「あ、なのはそれあたしにも見せるよ、こいつ見せてくれねーんだよ」

「良いよ、ヴィータちゃん」

と、まあ、軽い会話をした後で、良彦が本題を切り出す。

「そだ、なのは一寸スバルとエリオ、この二人と1対1で模擬戦軽くしてーんだけど、少し平気か？」

「ん…そうだなあ、二人ともいける？」

「はい、大丈夫です！」

「僕もいけます」

良彦となのはの問いに、立ち上がりながら答えるスバル、エリオ。それを聞いて、楽しそうに微笑む良彦、訓練場の一角で、二人と対峙する。

「そんなじゃ、スバルからな…ヴィータ、なのは審判頼む」

「おう、任せとけ」

「うん、判ったよ」

「おねがいします、八坂三尉」

「あー、名前で呼んでくれ、スバルだけじゃなくて皆な、苗字はあんまりなれてないんだ」

「はい、良彦三尉」

「おし、んじゃいくか、ゼピュロス」

『了解、セットアップ』

青い光りに包まれ、青のジャケットにズボン、両腕は無骨なガンレットに包まれる。

「良彦三尉って、ベルカ式、しかも無手なんですか…魔力光も私と近いし」

「ん、まあそうだな、魔力光は偶然だろうけど…無手だぞ、ほれこい」

お互いに構え、向かい合い…弾ける。

「はい、行きます…せやあぁっ！」

ローラーブーツを軋らせ疾走し、右手のリボルバーナックルで殴りかかるスバル。

それをあえて一步踏み込み、低い姿勢で『捌き』懐へ入りこみ、腕を取ろうとする、が…スバルは一足早く、バックステップで後退。

「反応も悪くないな、全力できて良いぞ」

「はい、なら…ウイングロード！」

右拳：リボルバーナックル…で地面を叩く、ベルカ式魔法陣から延びる青い道が縦横無尽に広がって良彦を取り囲む、その道を疾走し、時に拳を、足を振り下ろすスバル。

が、それぞれを『弾き』でそらし、『捌き』で避ける…時間と共にスバルには焦りが生まれ、大振りになる攻撃。

「はあ、それなら…」

強い攻撃を良彦が『弾く』、一瞬生まれる隙…あえて良彦が作っているのだが…に、左拳に作った魔力塊を突き出してくる。

「デイバイーン…」

「甘い…其処は俺の距離だ」

押し付けた魔力塊から、一気に魔力が削られていく、それに驚いた瞬間

「で、驚いてる暇は無い、っと」

伸ばしていた左手を掴まれ、くいっと軽く引かれる、それに抵抗しようとして身体を起こせば…その瞬間足が払われ後ろへと身体が投げ出される。

受身を取ろうと腕を伸ばし、地面につけ、良彦を確認しようとした所で、喉に小さな掌が押し当てられ、動きを抑えられる。

「そこまでだ、試合終了」

「良彦三尉の勝ち、だね」

言葉と共に、引かれる掌、疲れた様子も見せず良彦はスバルを引き起こす。

「動きの早さ、攻撃の重さ、反応どれも問題ないんだが、動きと攻撃が真っ直ぐ過ぎる、虚実混ぜないと正面からの戦いじゃ辛いぞ」

「はあ…あの、今の最後一体？」

「俺の希少技能の効果かな、後でちゃんと説明してやる…次エリオ、こい」

「は、はい、よろしくお願いします、良彦さん」

スバルは不思議そうな顔をしながらなのは達の方へ歩いていき、

エリオがストライダーを構える。

「いつでも、良いぞ」

「はい、いくよ、ストライダー！」

『了解』

ストライダーの噴射口から勢い良く噴射炎を上げて、エリオが突撃、身体を捻りながら一閃を放つ。

距離とストライダーの長さ、エリオの腕の長さを見て、一步後退し、先端を避ける。

振りぬいたストライダーをそのまま遠心力でまわし、エリオが追撃、先ほどよりも鋭さが増している。

其処へ、踏み込みながらストライダーを上へ『弾く』、ストライダーに身体を持っていかれるエリオの腕を掴み、身体を捻りながら懐に潜り込んで、足を跳ね上げれば…一本背負いだ。

地面に叩きつけられるエリオ、一瞬動きが止まった所で、首の横に良彦の足が、ダンツと震脚。

「そこまで、ストップだ」

「これも良彦三尉の勝ち、ね」

「大丈夫か、エリオ？」

引き起こしたエリオの背中、埃を払う。

「あ、はい…一瞬で良く判りませんでしたけど、大丈夫です」

「はい、エリオ君これ」

キャラがエリオにタオルとスポーツドリンクを差し出している。

「さて、エリオは速度はいう事ない、ストラダーに振り回されきみなのと、やっぱ攻撃が真っ直ぐ過ぎるな」

そういって、ヴィータが差し出したスポーツドリンクをあおり。

「で、質問はあるか？」

と、問いかければ

「はい、良いですか良彦三尉」

「ティアナか、なんだ？」

「スバルもエリオも攻撃するとき、一瞬動きが鈍くなった気がするんです、それとスバルのバスターを消したのって？」

「どつちもさつき言った希少技能の効果だな…いいか」

と、『凧』に関する説明を新人にし始める、色々な意味で驚く4人、ヴィータとなのはも改めて聞けば、魔法制御の精度にはやはり驚かされる。

一通り話した後、4人の反応はといえば

「要するに、一種のAMFって事ですよ、自分の魔法は通す」

「しかも、ある程度の距離でこっちの動きを鈍らせる」

「それで、振り抜いたとき違和感があったんだ」

「えと、それ…どうにか破れるんですか？」

ティアナ、スバル、エリオ、キャラはこんな感じで、キャラの問いに。

「俺的に一番相性が悪いのは、此処だとなのはティアナだな…遠距離から大型砲撃食らえば落ちるぞ」

「近距離だと、どうしたら？」

「反応しても動ききれない速度か、威力、どっちかがあればあっさりだな、実際…シグナムとシスターには負け越してる」

エリオの問いに答え遠い目をする。

「そうだな、折角だからもう一戦だけいいか今度は2対2、スバル、エリオ対俺とヴィータ…目的としては、コンビネーションの有用性を知ってもらうって事になる」

「んなの、こいつらもわかってるだろ流石に」

「頭で判るのと実際体験すんのじゃ別だろ」

「つか、二人は…やる気満々らしいな」

「「はいっ」」

スバルとエリオは既に立ち上がり、準備している。

「ほれ今日の夜ヴィータの好きなもん、作ってやっから早く準備しろ」

「うっせ、わーったよ、アイゼン…夜は、ステーキだかな、良彦」

『了解、セットアップ』

「あいあい、ほれいくぞ」

青の騎士甲冑の良彦、赤の騎士甲冑のヴィータが並び、スバルとエリオもデバイスを構える。

「それじゃ、はじめっ」

なのはの掛け声に、4人が動く。

スバルはウィングロードを展開し、ヴィータへと向かう。エリオは噴射による突進はせず、掛けて良彦へ。

「なるほど、疾走中に消されるとまずいつて考えかな」

ある程度小刻みにストラダを突き出すエリオ、その突きを『弾き』『捌く』、金属同士が擦れる音が何度も響く。

スバルのリボルバーナックルをヴィータはアイゼンの柄の部分で

器用に受け流している、蹴りはかわし、時には飛び退る事もある。

「でも、これじゃ1対1が2組だよな、だから…ヴィータ」

「あいよっ、いつでも」

掛け声と共に、ヴィータが反撃へ、アイゼンでスバルの疾走してくる所を殴る、シールドで受け止め一瞬動きが止まる。

エリオの突きをスバルの方向へ『弾き』、柄を掴んで体勢を崩させ…ストライダごと、背負い投げ、エリオに風を纏わせて吹き飛ばす。

その先は、動きの止まっていたスバルの背中、ドンツという音と共に、二人の体勢が崩れる。

「こいつで…」

「…しまいだ」

赤と青のロープ型バインドが、スバルとエリオを纏めて縛り上げる、それを確認し。

「はい、そこまでー、お疲れ様、スバル、エリオ」

なのはがストップを掛けて、終了。

バインドが解かれ、地面に投げ出される二人。

「どうだった？」

「えっと…あの動きって相談とかしたんですか？」

「してねーぞ、念話もな」

「じゃあ、なんであんな動きを？」

「まあ、相手に対する信頼と信用かな」

良彦の問いにエリオが疑問をあげ、ヴィータが答えそれに更にスバルが、と続く。

「お互いの動きを良く知るからできるって事ですか？」

ティアナが問いかける。

「そういう事だ、さっきだってティアナとスバルなら俺らももつと苦戦したと思うぞ？」

「お互いを知れば、動きが見える、そうすりゃ自分がどうすれば他の人がどうするかわかる、あたしが前居た小隊はそんな感じだったな」

「それじゃ、お互いちゃんと話し合ったり、一緒に訓練を繰り返せばいいんですか？」

「ま、そういう事だ、今は簡単にあしらわれてももつとちゃんとコンビネーションを覚えれば、てこずるだろうしな」

キャロの問いに答え、ぽんと頭をなでてやる。

「まあ、個人戦がしたいなら言ってくれりゃ、俺は時間ある限り

受けるからな、後体裁きとかなら相談に乗れる」

「あたしの方は、個人の指導までは無しな、隊長が掛かりっきりな分書類多いんだよ」

「えへへ、ありがとうね、ヴィータちゃん」

良彦、ヴィータがそういつてなのはが微笑む。

「それじゃ、休憩中悪かったな、訓練頑張れよ」

「んじゃな、夜にでもアイス食わせてやから楽しみにしとけ」

新人4人にそういつて、青と赤のちっちゃん三尉二人は歩き去って行く。

新人達は先ほど言われたことを実践するかのようにお互い会話を始め、なのははそれを優しく眺めていた。

46:ion1 2on2 (後書き)

今のスバルとエリオだと、こんな感じになると思います。

良彦とヴィータは基本阿吽状態なので、次の動きが大体わかってます、またヴィータは『弾き』をアイゼンでの受け流しに応用しています。

今回はファーストアラート辺り、初出動の話になると思います。

47：ファーストアラート

スバル、エリオと軽い模擬戦をしてから数日、チラツと聞いた所によると、新人達に実戦用のデバイスを支給する事に決めたらしい。スバルのローラーブーツと、ティアナのアンカーガンが稼働限界に近く、4人の実力もデバイスに振り回されないだろうと言う判断からだとか。

それでも何段階かのリミッターは掛かっているらしいが。

機動六課の執務室、多くの部隊員の机が並んでいる一角。

「んで、そんなに書類が多いのか？」

「そうだよ、ちゃんと出しかねーと後で問題になんだろ、つか手あいてんなら手伝えよ」

「いいけど、最終確認はしてくれよ、後バニラな」

「わーった、ほれこの分頼む」

覗き込んでいたヴィータの隣に座り、送られた書類を処理し始める。

「エリオとキャラは、基本モードだけだったのを第一段階に、か… 4人とも大事にされてるな」

「おまえとかなのはっていう前例があっかな、いきなり全力でつかわせねーんだよ」

「制御しきれない力は、あぶねーってか」

「そういう事だ…あん時だって、一歩間違ったらもっとやばかったんだぞ」

「判ってるよ、でも同じ事になったら同じ事すると思っぞ」

「しなかったら良彦かどうか疑うな、うん」

「ま、あんまり心配かけねーようにはするけどな」

「そうしろ、こっちの心臓にわりー」

そんな会話をしつつ、多くあつた書類も無くなっていく。

「これで終わりか、んー…少し休憩すつか？」

「ん、そうだなー…あんがとな、助かった」

二人ともウィンドウを閉じて、たちあがり、部屋を出て行く。部屋を出て少し歩けば、休憩スペースだ、良彦が飲み物を購入して、一本をヴィータへ放る。

「ミルクティでよかったよな」

「ああ、あんがとな…ふう」

受け取ったミルクティを開けて一口飲んで、一息。

「あっちはもう受け取った頃かね」

「だろっな、シャーリーが一寸前に嬉しそうに出てったしな」

「ああ、説明役には一番だろっからな」

「そういつこった…楽しそうに作ってたかな」

顔を見合わせて、苦笑、そうしていると…。

隊舎内に警報音が響き渡り、辺りにアラートのウィンドウが開く。良彦とヴィータの隣にもウィンドウが開き、はやてが映る。

「警報？、どうしたんだ？」

『ちょおごめんな、聖王教会で追ってたレリックが乗った列車にガジェットドローンが集まってきて、列車が暴走してるんや』

「それで、どうするんだはやて？」

『新人となのはちゃん、フェイトちゃんが現場に向かうんやけど、良彦君もバックアップで行ったげて貰えるかな？』

「俺は良いぞ、へりだよな、上に向かうわ」

「あたしはどうするんだ？」

『ヴィータは隊舎で待機や、他に何か起こった時手が足らんと困るからな』

「あいよ…んじゃ、きつちりぶっ潰して来いよ良彦」

「あいあい、お前の分まで、だろ」

「とーぜん、判ってんじゃねーか」

「こつんと拳をぶつけ合い、良彦は屋上へ、ヴィータは指揮室へ走る。」

武装へりに乗り込んだのは、良彦、なのは、リインフォースツヴアイ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、操縦はヴァイス陸曹だ。

新人が椅子に座っている中、なのはと良彦はたっただままで、作戦概要を説明している。

「車両は完全にガジェットドローンに乗っ取られて暴走してるです、前後から乗り込んでガジェットドローンを殲滅、制御を取り戻すの事と、レリックの確保が任務になるですよ」

「そうすつと、スターズとライトニングで前後か？」

「そうだね、私が」

なのはが言おうとした瞬間

『報告、上空にガジェット反応、新型の航空型、多数です』

それを聞いてなのはが

「私とフェイト隊長で、空を抑えるよ、だから車両の方はツヴァイとよしくん、援護してあげて」

「はいです」

「あいよ、つか又呼び方」

「あ、ごめん…でもいいよね、今他の隊員居ないし、それじゃお願いね」

そんな中、キャラロが緊張からか身を硬くしているのが目に入る。チラツとなのはをみれば、キャラロに近づき手を掴んで、小さな声で何かを囁くと安心したのか身体から無駄な力が抜ける。

「それじゃ、ヴァイス君、お願い」

「あい、たのんますよ、なのはさん」

後部ハッチが開き、なのはが空に身を躍らせる。
一瞬桃色の光りに包まれ、バリアジャケットに身を包み、高速で飛行していく。

「さて、そろそろ現場上空つすよ、いいすか、良彦さん」

「あいよ、後方からスターズとツヴァイ、前方からライトニングと俺でいいか」

「はいです、先に付いた方がレリックの保護を、ガジェットを潰せば制御取り戻すのは私がやるですよ」

「おし、んじゃそついう感じで、行くぞ」

「了解」「了解」

ツヴァイが空中で白い光りに包まれ騎士甲冑…白のジャケットにスカート、はやての騎士甲冑に似ている…姿を変える
簡単な打ち合わせの後、4人が声を合わせる。

「さて、無事に後方の効果地点到着、スターズの二人、さくつと
いってくんな」

ヴァイスの音が響き

「了解、いこティア」

「判ってる、スターズ04、ティアナ・ランスター」

「スターズ03、スバル・ナカジマ」

「いきます」

空へ飛び出し、青と橙の光りに包まれる二人。

「次、ライトニング…チビども気をつけてな」

「はい」

ハッチの縁に立ち、下を見る二人、エリオが手を伸ばしながらキヤロに声を掛ける。

「一緒に行こうか？」

「…はい」

その手を握り、キッと顔を上げるキャロ。

「ライトニング03、エリオ・モンディアル」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「「行きます」」

二人揃って飛び出し、此方も途中で金と桃色の光りに包まれる。

「んじゃ、行ってくるヴァイス陸曹、へり頼んだ」

「あい、任せといてい」

「ウィンド01、八坂良彦、出る」

青の光りに包まれ、騎士甲冑に身を包んで空を翔ける。

それぞれ車両に着地した4人は新しいバリアジャケット…それぞれ
の分隊長のデザインを踏襲している…に包まれている。

エリオとキャロのいる辺りへ、良彦は降り立ち。

「おし、行くぞ」

「はい、キャロ」

「うん、いけます」

列車の上を走り出せば、直ぐに内側からガジェットドローンが屋根を突き破り飛び出す。

「そつち、任せるぞエリオ」

「了解」

飛び出した2体のガジェット、片方をエリオの任せ良彦は1体に向かう。

伸びる触手のようなコードを『捌き』一気に近接：右拳で中心を打ち抜き、バックステップ、直ぐにガジェットが爆発する。

エリオの方もストライダーの一閃でガジェットを撃墜。

「中に入るぞ、気をつけるよ」

「「はい」」

中にいる大量のガジェットドローンをキャロの支援魔法の援護をうけ、良彦が先陣、エリオが良彦の討ちもらしを破壊していく。

進んでいき、もう直ぐレリックのある車両と言う場所で…目の前に今までと違うガジェット。

『ガジェット…新型です』

車両一杯のサイズの球体が目の前にいる。

「これは俺が相手しとくから、エリオ、キャロ、上にでてそつちから目標車両に」

小型と同じコードとベルトのような触腕を伸ばす大型に向き合う良彦。

エリオとキャラ口は命令に従い天井を破り上へ飛び出す。

「さて、あんま時間はかけらんねーな」

何時ものように左手を顔の前に構え、右手は腰…伸びてくる触腕を『弾き』、一気に接近…右拳を叩きつけるが、AMFにより威力を殺される。

其処へ殺到する触腕…一旦距離をとれば、目のようなカメラ部分から光学兵器が打ち出される、それをシールドで受け止めつつ、考える。

「（ある程度の打撃と魔力は打ち消される、か…なら、ある程度じゃなければ良いわけだ）」

『弾き』、『捌き』ながら、右手に魔力と風を練って行く。

大型触腕を左手で大きく弾き

「ゼピュロス」

『貫き』

高速移動から、練りこんだ風と魔力を叩き込む。

「風拳・嵐」

AMFを打ち抜き、正面装甲を打ち抜いて拳がめり込むと同時、練りこんだ風が大型ガジェット内部で嵐の如く吹き荒れ、内部をず

たずたに引き裂く。

拳を引き抜き、爆発を防御フィールドで受けきる。

「やっぱ、AMFで結構弱くなるな、もちっと考えないとな」

と、眩き急いでいると

『ウインド01に緊急、上部にも大型ガジェットが、ライトニング分隊が苦戦中です』

との連絡、急いで上へ出ると…エリオが大型のガジェットの触腕で列車外、崖の下へ放り投げられ、それを追ってキャラロが飛び降りる所だった。

「って、何やってんだ」

『ううん、あれでいいんだよ、離ればAMFは弱くなる』

「ああ、なるほどね」

『そう、使えるよフルパフォーマンスの魔法が』

落下しながらキャラロがエリオを掴み、桃色の光りと帯状魔法陣に包まれ…それを破り、白い竜が姿を現す。

それに乗りキャラロとエリオが復帰し、エリオが構える。

キャラロのツインブーストで強化されたエリオがフリード…白い竜…から飛び出しながら、触腕を切り裂き着地。

2発カートリッジロードし

「一閃必中」

強化魔法で桃色に光る穂先と変換により帯電する槍が突き込まれ、上に向かい切り裂かれる。

そして、爆発…。

その間にスターズの方でレリックを確保、列車もツヴァイが制御を取り戻したらしく停止する。

スターズはレリックの輸送、ライトニングは後続部隊への引継ぎと相成った。

良彦もライトニングの二人と一緒に残り後始末を終わらせた。

夜、六課宿舎：良彦とヴィータの部屋では。

ヴィータは何時ものＴシャツ一枚で髪を解いていると言う格好、良彦は普段なら長袖の寝巻きなのだが、風呂上りなのか、シャツと短パンと言うラフな格好だ。

「あー、結構疲れたな」

「あの大型か、どんな感じだったんだ？」

二人の前には皿に乗ったバナライズが置かれている。

「AMFが強いのと、装甲も球形だから砲撃じゃ貫きづらいなあ
りゃ」

「そうすつと、ベルカ向きの相手つーことか？」

「だな、ミッド式であれ倒すのは苦勞するだろうな、リミッターかかって無いのは達なら楽だろうけど」

「つつてもガジェットは基本新人に任せられるようにならねーとな」

「ああ、それでだろうな、個人スキルに移るってよ、訓練」

「そうすつと、あたしも教えねーといけねーな、良彦はどうするんだ？」

「俺は誰か教えられねー時の変わりだな、どうしても抜けられねー仕事があるときは、俺が交代する」

「そつか、基本は予定通りってことだな」

「そういうこつた、ん…前より美味くなつたな」

「作り方は変えてねーぞ、良彦の好みに合わせたのだけだな、それ」

「そつか、あんがとな」

隣に座るヴィータの髪を指に絡め、癖の残る髪を梳く。

「ん…そんなくねー普通だろ」

「俺がありがたいと思つたんだよ」

「そうかよ」

薄っすらと頬を赤く染め、そっぽを向くヴィータ。
髪を梳きながら、くいつと自分の方をむかせ、アイスを含んだま
まキス…それをヴィータの口内へ押し出す。

「ん…んう」

「ふあ、どうだ？」

「…馬鹿、いきなり何すんだよ！」

「いや、見てたらしたくなった…いいじゃねーか、初めてじゃね
ーし」

「うっせ、恥ずかしいもんは何時までも恥ずかしいんだよ！」

「あいあい、悪かったよ、今度は許可とつから」

「そういう問題じゃねーって、ったくよお…」

微笑む良彦に顔を真っ赤にするヴィータ、良く見れば良彦も少し
顔は赤い。

「食い終わったら、ねんぞ…疲れてるんだろ？」

「だな…ベット入ったら直ぐねそーだ」

お互いに、アイスをささっと食べきり、並び立って寝室へ。

「今日は寝巻ききねーのか？」

「そろそろこの格好でも身体ひやさねーしな」

「そっか、んじゃお休み良彦」

「ん、お休みヴィータ」

寝室に一緒に入り、お互いに寝る前の軽いキスをして、ベットへ入る…言ったとおり良彦は直ぐに寝入ってしまった。

47：ファーストアラート（後書き）

六課初出勤です、良彦が一人で？型壊してもつまらないので？^がた
が二体でました。

いちや いちは、おまけです。

次回は海鳴出張辺りの予定です。

一応R - 15 指定入れて起きます。

48：管理外第97世界「地球」

初めての出勤から数日、新人4人の訓練は個別スキルに移った。スバルは前線で耐える為にヴィータ相手に防御訓練、ティアナはなのはと射撃訓練、エリオとキャロはフェイトが見ながら回避訓練。良彦は普段は書類をしているか、何処かを手伝うか、他の仕事で居ない教師陣の代わりをしている。

個別訓練に入ってから数日、前線メンバーがはやてに呼ばれて集合する。

「さて、きて貰った理由なんやけどな」

「うん、どうしたのかな？」

はやての言葉になのはが問いかける。

「聖王教会の方からの依頼で、ロストロギアの確保っちゅー仕事なんやけど」

「それってレリックなのか？」

「不明や、可能性があるから、念のためっちゅー事やな…場所は、管理外第97世界「地球」なんよ」

良彦の次の問いに答えるはやて、それに反応する新人一同。

「地球って、はやて部隊長やなのは隊長、良彦隊長の故郷ですよ？」

「そうだね、私も子供の頃いたんだよ」

スバルの問いに答えるフェイト。

「どんな世界何ですか？」

「ミッドチルダとそれほど大きく変わらず、魔法が無く科学だけが
発展しているのが特徴と言えますね」

キヤロの問いにリインフォース・アインが答え。

「魔法ないんですか？」

「無い無い、偶に魔導師としての素質持つ人は居るけど、大抵魔
法しらんし」

エリオに答える良彦。

「でも、隊長たちは？」

「偶然かな、ジュエルシード事件が無ければ知らなかったろうし」

「私もやな、まあここにいる皆がおらんかったら此処にこうして
いなかったやろうけど」

ティアナになのは、はやてが答え。

「ま、後は行ってみりゃ判るだろう、出発は？」

「準備出来次第やな、一応急ぎや、と言っわけで、皆直ぐに準備してもう一度集合、急いで向かうよ」

その言葉に皆が動き出す。

「はやて、俺とヴィータは自宅の方一寸寄って良いか？」

「ええよ、私もすずかちゃん所寄ってから合流やしね」

「あんがと、んじゃ後でな」

良彦も準備に向かい、数十分後、再び同じ場所に準備をした前線メンバーが揃う。

「ほなら出発や、なのはちゃん、フェイトちゃん、フォワードメンバーよろしくな」

「うん、それじゃ皆いこうか」

「」「」「はい」「」

それぞれ転送ポートから転送されていく。

良彦とヴィータは、良彦の自宅に置かれたポートへ転送。

「此処も暫くぶりだな、綺麗に掃除されてる…：土郎さんにお礼言わないとな」

「だな、でもなんでこっち寄ったんだ」

「偶には皆に挨拶しないと、あっちでも一応してるけど、この

家の方がしつくり来る、それにだな…婚約してからこつち着てなかつた時間なくて」

「確かにそーだけだよ」

「ちゃんと紹介しときてーんだよ、お前の事、アリサの別荘からよりこつちからのが墓近いからな」

「先に言えよ馬鹿、普段の格好できちまったじゃねーか」

「大丈夫だ、俺の家族はんなのきにしねーし」

ほんぽんとヴィータの頭を軽く叩く。

「つたく、それでも恥ずかしいだろ、初めての挨拶がこの格好つて」

「いって、その格好俺は好きだぞ」

白いTシャツに赤のミニスカート、膝上の赤と白の縞々のソックス、そんな格好。

良彦は白いTシャツに、薄い青のスラックスである。

「ばあか、いくならいくぞ」

「あいよ」

頬を染めたヴィータが歩き出す。

家を出て、八坂家の墓参りをして、ヴィータを紹介した後、アリ

サの別荘へ向かう。

途中、ロストロギアはレリックではなく、危険性の無い物と判明したため、一種緩んだ空気になってきている、まるで旅行のように。

別荘に向かう途中、再びの連絡、フォワードを案内がてらサーチャーを配置するらしいので、良彦とヴィータはそのまま上空へサーチャーを配置する役目を指示される。

「海鳴の空も久しぶりだな」

「戻って来ても飛ぶ事なんかねーしな」

青と赤の魔力光をひきながら空を飛ぶ二人、一応見つからないように不可視結界を張りながらだ。

「だよな、飛ぶの好き何だけどな、俺は…ミッドでも許可なしじや飛べねーし」

「仕方ねーだろ、そうしねーとアブねーんだから…それに、訓練場の上で偶に飛んでるだろおめえ」

「気付いてたか？」

「あたりめーだ、何年の付き合いだと思ってるんだ？」

「10年に一寸とどかねーか、長いな」

「そういう事だ、良彦のことですらねー事はもうあんまねーだろ」

「はっ、そりゃこっちも同じだな」

話しながらもサーチャーの配置を繰り返す。

「っと、これで終わりか…ちと待ってくれ」

「ん、いいけどどうした」

「士郎さんに挨拶行くんだけど、なのはに一応声をな」

「そか」

空中で止まり、念話を送る。

「（なのは、そっちはどうだ？）」

「（よしくん？…こっちは大体終わりだよ、翠屋よってお土産買おうと思ってるんだけど）」

「（なら、丁度良い、俺とヴィータも合流するわ、挨拶しとかねーとな）」

「（うん、じゃあ…店の近くでいいよね）」

「（おう、直ぐ行く）」

念話を終わらせ、ヴィータに向き直り。

「なのはも寄るみてーだ、土産かっつくんだと」

「なら、あたしらもかってこっぜ、シュークリームな」

「判ってるよ、行くか」

「おう」

すうっと移動し、人気の無い場所で着地して翠屋へ向かいなのは、スバル、ティアナと合流。

なにやら桃子と士郎とみて、スバルとティアナが驚いたり、なのはの様子を見て困惑したりしてる。

士郎へ挨拶し、お礼をいってシュークリームを頼む、その日の分と明日にでもという事でかなり大量に頼んだ、六課での待機組みへのお土産だ。

翠屋で挨拶と買い物をして、アリスの別荘へ向かう…運転は良彦だ、免許は年齢確認とか結構されたがちゃんと取れたのだ。

夕食ははやてが準備したバーベキュー、新人4人は恐縮していたが、他の皆は慣れたものだ、合流してからは良彦も調理側に加わり新人の混乱を更に助長した。

48：管理外第97世界「地球」（後書き）

というわけで、出張前半です。

ヴィータを良彦の家族へ挨拶させてみました。

今回はスーパー銭湯とロストロギア確保の予定です。

49：スーパー銭湯

夕食には六課隊員以外に現地協力者とその友人というか関係者も来ていた。

まず別荘の提供者にして隊長陣の幼馴染アリサ、もう一人の幼馴染でもあるすずか、なのはの姉の美由希、その友人でクロノの妻エイミー、フェイトの使い魔アルフ：現在はフェイトの魔力を多く使わない為のチビモードだ。

それぞれの挨拶と会話を交えながら食事は終了する。

その後別荘に風呂が無いことから、海鳴に出来たスーパー銭湯へ向かう事に。

大人数でぞろぞろと移動して行く、中に入りで迎えた店員に。

「えーと、大人13人、子供5人やな、おねがいします」

ちなみにリインフォース・ツヴァイも外部サイズ変更で普通の子供サイズになっている、当然これも新人達は驚いていた。

「ヴィータ副隊長は…？」

「あたしは大人だ」

「よしh「俺も大人だぞ？」・・・はい、すみません」

ティアナの問いにヴィータが素早く答え、スバルに至っては言おうとした段階で突込みが入る。

そのまま脱衣場の方へ歩いていき、良彦は男子の方へ…と、エリオがフェイトに連れられて女子の方へ連れてかれようとしている。

「まてまて、エリオはこっちだろ」

「えー、でもエリオと久しぶりにお風呂に」

「いえ、僕は男性の方に行きますから、それに女性のお風呂に入るのは」

「私は気にしないわよ」

「前から頭洗ってあげようかって言ってるしね」

「あ、ほらエリオ君」

良彦の制止に、フェイト、ティアナ、スバルが問題ないと言い、キャラが示した先には。

「11歳までの男児は女性風呂に入る事も可能、とか書かれている。」

「それでも、こっちに來させてやれ、エリオの年齢だと余計困るもんだ」

すたすたとフェイトに歩み寄り、エリオの腕を掴んでる手から、どうやったのか判らないほどあっけなくエリオの腕を外させる。

「んじゃ、連れてくぞ」

「うう、ヨシヒコが意地悪だよ、なのは」

「にゃはは、よしくんはね、見られたくない人がいるからだよき
っつ」

「せやな、それも理由の一部やろうな」

「……ああ、そっか、うんそれじゃ仕方ないね」

フェイトに泣きつかれたのはが、そんなことを言うとはやても援護、何故か納得するフェイト。

「ああ、それでいいよ、嘘ではねーし」

ぶつきらぼうに言って、エリオを男子脱衣場に連れて行く、女性陣からの視線を受け顔を赤くしているヴィータもさっさと脱衣場へ入っていつていた。

男子脱衣場について、エリオにロッカーの使い方などを説明して、服を脱ぎだす良彦。

「あの、ありがとうございます良彦さん」

エリオも服を脱ぎながら、そういつてくる。

「いいつて、エリオ…お前の気持ちは俺も結構わかるからな」

「そうなんですか？」

「昔な…皆と知り合った頃、シグナムとかシャマルと入らされた事があるんだ」

苦笑と共に答える良彦。

「そうなんですか…ははは…って、良彦さん、服脱ぐと、その筋肉凄いですね」

「ああ…なんだかんだで14年、途中少し問題があったけど、鍛えてるからなこれくらいにはなるだろ」

人前では比較的余裕のある服装が多いため判りづらいが、外見の年齢とは見かけにならないほど引き締まった筋肉で全身が覆われている。

「あれ、これ…一箇所だけ大きい傷が」

「ああ…それはその内教えてやるよ、今はまあ、戒めの為のもんだって覚えときゃ良いかな」

「はあ、あ、すみません、じろじろと」

「いいつて、エリオも頑張って鍛えるよ」

会話の締めにはんぽんとエリオの頭を叩き、湯船の方へ二人で歩いていく。

洗い場でエリオの背中を洗い流してやり、良彦もエリオに洗い流してもらおう。

「ふああ…こんだけでかい湯船はひさしぶりだな」

「僕は始めてです、凄く気持ち良いですね」

比較的空いてる時間なのか、他に人はほとんど居ない。
と、ゆっくりしていると、念話がある。

「（おい、良彦…そっちにキャラロが行ったぞ、その）」

「（ん…ああ、銭湯って女の子も男性の方入れるんだっけか、てか、どうした？）」

珍しく切れの悪い念話に疑問を浮かべる。

「（…キャラロの事見て鼻の下のばすなよな！）」

「（なんで、子供の裸見て、そうなるんだ）」

「（あのな、自分でいうのもなんだけど、あたしとキャラロ、体型にそんな違いねーんだぞ？）」

「（…ああ、なるほど…心配するな、俺が好きなのはヴィータであって、ヴィータの身体だから、その、興奮するんだぞ）」

「（…っばか、とにかくキャラロを変な目で見んなよ）」

「（あいあい、仕方ないエリオに犠牲になってもらうか）」

念話は切れ、同時にキャラロが近づいてる事を視線の隅で見つけ。

「キャラロ、こつちだ…エリオ、あそこから出ると子供用の露天風呂だ、行って来い」

「えええ、つて、キャラロ!？」

「あ、良彦さん、ありがとうございます」

「何で此処に？」

「店員さんに聞いたら、女の子も11歳までなら男性の方入って平気なんだって、だから来ちゃった」

「ええ、つて良彦さん、気付いてたんですか？」

「まあ、普通の銭湯でもそうだったしな、それよりあんまり見せたくないなら急いであっち行ったほうが良いぞ」

驚くエリオ、のほほんとしているキャロ、苦笑している良彦。

「うう、わかりましたキャロ、こっちに」

諦めたのか、キャロを引っ張って子供用露天風呂に消えるエリオとキャロ。

それを見送り、湯船の中で、苦笑しながらも身体を伸ばしリラックスする良彦であった。

皆が風呂を上がり、エリオと良彦はかなり上がるのが早く、待たされたが、帰り道、暖まった身体に丁度良い温度の中を団体で歩く。良彦とヴィータは最後尾、少し離れた位置だ。見れば、二人の小指同士が繋がれているのが判る。

「キャロの事みなかったらうな？」

「だーら、さつきもいつたら、キャロに興味はない、妹みたいなもんだ」

「ま、まあ、信じてるけどよ、やっぱ少し心配になるんだよ」

「んー…そっか、それじゃ今度ちゃんと信じさせッから、な」

ほんぽんと、髪が解かれている頭をなでる、昔送った髪留め…アイゼンとゼピュロスの右手、どちらも待機状態、がクロスした物…もそれにあわせゆれる。

「どうやってだよ、それ」

「今は、秘密だな、つか前にいる奴らに聞かれちゃ困る」

「…ん、まあ待ってる」

小指をつないで、そんなことを話していると…それぞれのデバイスから反応、ロストロギア発見の知らせだ。

「休憩は此処までやな、機動六課出動や」

そのはやての声に、六課隊員はデバイスを取り出し、協力者その他は先に別荘へ戻るらしい。

アインが広範囲に封鎖領域を張り巡らせ、皆がセットアップを開始、反応は臨海公園の辺りらしい。

「フォワードメンバー4人で、本体を確保、他はサポートに廻ってや」

「了解」（全員）

新人4人がロストロギアへ近づくと、まるで某RPGのスライムのような感じのそれは回りに分身？を多く作り出している。

見た目どおりに弾性が強く、殴ってもぼよんぼよん跳ね回る。

そんな中で、ティアナが跳ね方の違う、恐らく本体を補足、スバルとエリオで動きを止めた所をキャロが封印魔法で、封印していく。攻撃能力のないロストロギアは、比較的簡単に封印され、任務終了である。

別荘で戻っていた皆と合流した後、直ぐに帰り支度を始める六課隊員。

アリサ達は一日位泊まっていたけれど、と言っていたが、六課の仕事がたまっている状態なので、このまま帰る事にはやてはしたらしい。

良彦だけ、一寸約束があるから、と翌日の昼頃まで残ったのだが。約束とは士郎に頼んでいたシュークリームの事であり、六課の隊員分…えらく大量で、士郎と桃子もあまり寝なかつたらしい…を購入し、六課へ戻った。

六課待機組みと他のバックヤードスタッフなどにも配ったそれは、かなり喜ばれたらしい、六課内で翠屋が有名になった瞬間だった。

49：スーパー銭湯（後書き）

ロストログア確保は、ほぼおまけです、銭湯内でのやり取りメイン。

次回はホテルアグスタの話し…多分何話かに分かされると葉思います
が…を書く予定です。

50：ホテルアグスタ前夜

地球へ出張してから数日、新人の訓練も順調に進んでいる、フェイトが捜査の為に居ない日が多いので、良彦がエリオとキャロに回避の訓練をつけている事が多い。

そんな風に日常を過ごしている所へ、はやてから隊長陣に次の任務の話し。

「ちゅーわけでや、今度の任務はホテルアグスタで行われる、オークションの警備になったんや」

「どういうわけだよっ！」

「今から説明するから、おちつき良彦隊長」

「いきなり突っ込ませるような言い方するからだが」

「落ち着けよ良彦、はやてがああなのは今に始まった事じゃねーだろ」

結局ヴィータに窘められる。

「んじゃ、説明するよ、オークションでは所持が認められたロストロギアなんかも出品されるねん、それをレリックと勘違いしたガジェットが出てくるかもしれんて、そういう訳や」

「ガジェットが出てきた場合の為に、警備って事？」

「そや、中の警備は私となのは隊長、フェイト隊長が、外は他の

フォワードメンバー全員やな、ウィンドも含めるで」

「了解した、出発は？」

「時間判ってるし、良彦隊長とアイン、それにヴィータ副隊長と、シグナム副隊長は今から先入りしてくれるか、他は明日現地入りや」
なのはと良彦の疑問にはやてが答える。

「あいさ、んじゃ準備出来次第出発か？」

「だな、一回部屋もどるか」

「そうだな、とはいえ、そう多くの準備がいるわけでは無いだろう」

「マスターの場合は、飲み物などでしょう、あまりホテルで売ってる物ではないですから」

先に出る4人がそんなことを言いつつ部屋を出る。

数時間後、ヴァイス操縦のヘリでホテルアグスタへ降り立つ4人。その格好は、六課の制服、デバイスは民間人も多い場所なので起動ロックされている。

「…この格好、息苦しいんだが、胸元開けちゃだめなのか」

「ダメですマスター、任務中ですから」

「そんぐれー我慢しろよ、ったく」

「良彦は、普段からちゃんと着てないからそう思うのだろう」

「全員でいわんでも」

胸元を弄りながら、苦笑する良彦。

「よし、最初に話していた通り…深夜までは4人で所定箇所の巡回、それからは2名ずつ交代で定時巡回だ」

シグナムがそう言って

「それじゃ、気をつけてな」

「おう、皆もな」

「了解、何かあれば連絡を」

良彦、ヴィータ、アインが一言ずつ言って移動して行く。
ホテルの4方、外周を警戒しながら廻る4人。

特に何事も無く、時間が過ぎ深夜、最初はシグナムとアインが巡回に付く。

良彦とヴィータはホテルの好意で従業員の仮眠室を借り受けて休憩だ。

「仮眠室だけでも借りられて、ありがたかったな」

「だな、態々部屋借りるよりも外に近いしな」

「んむ、とはいえ、軽く仮眠しとかねーとな、交代して明日は一日だ」

「そーだな…ふぁ、ちと眠いしな」

あまり大きくないベットに二人並んで座り、夜食を軽く食べながらそんな会話を続ける。

食後のお茶を飲み、灯りを最低限の光度に落とし、そのまま同じベットで横になる。

「ほんじゃ、おやすみな…ん」

「ん…おやすみ、良彦」

ちょこつと唇を合わせ、タイマーを3時間でセット、その時間には起きて交代になる。

何事も無く、仮眠から起き、シグナム、アインと交代、二人でホテル外周の巡回を続ける。

「サーチャーを廻りにつてのはホテルだから出来なかったのかね」

「オークションに出る人間には、色々いつかんな、高官とかがそういうのうるせーらしい」

「はぁ、安全とプライバシーでプライバシーを取るのか、いい身

分だな」

「ま、あたしらは自分の仕事をするだけだろ」

「んだな、うしいくか」

こつんと拳同士を打ち合わせる。

まあ、結果として特に何も無く夜が明け、シグナム、アインも起きてくる。

「おはようさん、こつちの時間も何もなかったぞ」

「おう、問題なしだ」

「そうか、此方もゆっくり休ませて貰った」

「ええ、ベットは二つあったのに一つしか使われた形跡はありませんでしたが」

シグナムとアインが、にやりと笑い掛ける。

「うっ、それはなんだ、あれだ」

「うっせ、一緒の方が安心できるんだから良いだろ」

良彦とヴィータが頬を赤くしながら、言い訳。

「悪いとは言っていないぞ、事実を言ったただけだ」

「マスターはこつという時に慌てすぎるくらいがありますからね」

再び二人が、苦笑しつつ言い。

「よし、予定の箇所へ皆移動だ、警備に入る」

「あいよ、他の皆が来るまではこのままだな」

「おっし、んじゃ油断すんなよ」

「了解、予定通りに」

シグナムの指示で3人が動き出す、事前の打ち合わせで決めた場所へ。

前線一同がくるまで、何事も無く警備は続けられた。

50：ホテルアグスタ前夜（後書き）

4人でなら2人ずつ交代できるな〜と、そんな考えとヴィータと良彦を動かしたのでこんな感じになりました。

次回は他メンバー合流、ガジェット戦辺りの予定です。

51：ホテルアグスタ襲撃

ホテルアグスタのオークション警備、前日入りした4人：良彦、ウィータ、シグナム、リンフォースアイン：と後発組みが合流。後発組みは、部隊長はやてに、なのは、フェイトの隊長陣、シャル、ザフィーラ、リンフォースツヴァイ、それに新人4人：ティアナ、スバル、エリオ、キャロ：だ。

合流後、隊長陣はドレスアップして会場警備のためホテルの中へ、他は打ち合わせに従ってホテル各所と外周部に分かれる。

外周はウィンドが担当なので、良彦とアインが一緒に廻っている。

「ふむ、しっかし本当にガジェット来るのかな」

「判らないからこそその警備だと思うが、マスターは不満が？」

「いや、不満は無いが制服を脱ぎたい」

「却下です」

白い耳をピコピコ動かしながら一言で会話を終わらせるアイン。

「さいですか…ま、ガジェット程度ならいくらでもって感じ何だが」

苦笑しつつ、巡回を続けていると、屋上のシャルと六課隊舎のロングアーチ…司令室だ…から緊急連絡。

『ガジェットの反応を感知、距離はまだあるけど、結構多いわね』

『ロングアーチから各員、ガジェット？型多数と、？型が数機接近中です』

連絡を受け、はやてが指示を出し始める。

『シグナムとヴィータ、ザフィーラ、アイン、良彦隊長は先に出て数へらしや、フォワードメンバーは所定位置に移動、抜けてきたら倒してや』

「了解、んじゃ、俺とシグナムは？型メインだな」

ホテルアグスタの周囲は森に囲まれている、この状況で？型の多さとサイズを考えると、基本1対1メインの良彦とシグナムは自然と大物狙いになってくる。

また、アインは蒐集した魔法をほとんど失ってはいたが、はやての夜天の書から幾つかの魔法を覚えなおしている…良彦とは違い、オールラウンドに戦える資質を持っていた。

「では、マスター…いきますか」

「おう、ゼピュロス、セットアップ」

『了解、セットアップ』

良彦が青の魔力光りに包まれ、青いジャケットにズボン、両手に無骨な籠手の騎士甲冑姿に変わる。

アインは濃い紫の魔力光に包まれた後、黒の袖なし、ミニスカートワンピースに黒の指貫グローブ、右足だけ太腿まである黒いソックス、そして背中に4枚の黒い翼を持つ姿へと変じている。

青と濃い紫の魔力光を引きながら、空へ上がる、ホテルから飛び出してきた赤と紫、藍白の魔力光：ヴィータとシグナム、ザフィーラ…と合流し、5人が空を翔けて行く。

「んじゃ、予定通りいくか…ガジェットとはいえ一応気をつけるよ」

「そりゃこっちの台詞だっつの、？型相手何だからな、おめえは」

「機械任せの単純な攻撃でやられねーって」

「とはいえ、戦場では万が一がある油断はするなよ、皆」

「ああ」

「ええ、シグナムの言うとおりですマスター」

「判ってるよ、痛いほどな…おっし、新人の出番なくす勢いでいいじゃない」

4人に言われ苦笑しながら返し、一転気合を入れなおして宣言する。

「だな、あそこまで通さねえっていう勢いでいくか」

並んで飛びながら、いつもの用に拳同士を打ち合わせる良彦とヴィータ。

「お前たちは過保護だな、全く」

「似た物夫婦ですからね」

シグナム、アインが苦笑し

「が、気持ちも判らないでも無い、な」

ザフィーラが静かに一言付け加える…恐らく此処にいる5人がそう思っているだろう事を。

「おっし、ならいくかつ！」

「おっつー！」

その掛け声と共に、それぞれが目標に対し向きを変える。

シグナムと良彦は、？型の進行予想位置に、ヴィータ、ザフィーラ、アインは？型の密集している場所へと。

途中でシグナムとも別れ、？型の一機へと向かう。

目前には良彦の倍以上あるサイズの？型…相変わらず、コード状の触腕とベルトコンベアのような太い触腕が見える。

相手センサーに捕らえられたのか、三つ目のような発振口から、光学兵器が放たれる…それをシールドで弾き、一気に距離をつめる。

「相変わらず、サイズだけで発見から反応が遅いつ」

空を翔け、太い触腕を『弾き』ながら、その内側へ…勢いを殺さず、指を真っ直ぐ揃え、魔力と風を纏った貫き手を？型の中心へ打ち込む…練られていた風が刃となり。

「風拳・一刃」

？型を貫き、身体を捻ればその勢いで？型が裂け、爆発：一瞬早く後退し、次の相手を探す。

数回の攻防、報告を聞いている限りでは、？型も？型も数を減らしているらしい…が、次の瞬間。

『誰かが近くで召喚を使ってます！』

という、キャロの全体連絡、ロングアーチからも

『反応確認、魔力反応：大きい』

更に次の瞬間、？型の動きが変わる…先ほどまでの機械任せの単純な動きから、意志を感じる動きへと。

同じように繰り返していた倒し方に反応され、防御から反撃を受ける…意志を感じた段階で回避行動に移っていたため、直撃は避けられた。

一旦上上がり、シグナム、ヴィータと合流する、比較的近くで戦っていたようだ。

「どうおもっよ？」

「動きがよくなったな、召喚で何か変わったか？」

「自動だったのが、手動になった感じだな、これ」

良彦の問いにシグナム、ヴィータが答える。

「要するに、一寸動きがよくなったって事だろなら、それに合わせてぶつつぶしゃ」

「さて、あれは」

ヴィータがもう一度攻撃しようとしたのをシグナムが止める。
見ればガジェットの下に魔法陣、キャロの召喚と同じだが魔力光が紫だ。

「召喚…まさか」

良彦の言葉に、ロングアーチから通信。

『召喚反応多数、ホテル近辺です…ガジェットが転移してきます』

「召喚で送り込んだのか」

「ヴィータ、良彦、残りは此方で処理する、新人の援護に」

「わーった」

「了解だ」

シグナムの言葉に、青と赤の魔力光が其処を離れて行く。

「特急だ、つかまれヴィータ」

「あいよ、頼む」

二人の手が繋がれ、青と赤の魔力光が一つになる。

「ゼピュロス、一寸距離あるけど…いくぞ」

『了解…貫き』

バシユバシユツと2発カートリッジロードし、高速移動へ、風の結界が良彦とヴィータを包み込み、その中で抱き合い、身体を密着させ、速度を上げて行く。

その間も、新人達のほうは苦戦しているらしい、通信からはテイアナとスバルが前に出てコンビネーションアタックを掛けるようだ。

大量の？型を周りに集め、ウィングロードで疾走するスバル、テイアナが4発カートリッジをロードし、クロスファイアシユートのスファイアを形成している。

「やばいな…ヴィータ！」

「任せる！」

短いやり取りから、良彦は風の結界からヴィータを押し出し…2発カートリッジロード。

「風拳・烈風！」

押し出したヴィータの背中を押しように強い風を纏った拳を振りぬく…その風を受け、ヴィータは加速し

「アイゼン！」

『フェアリーテ』

ヴィータの足元に赤い魔力光が渦を作り巻きつけば、加速は更にかかる。

クロスファイアシュートシュートが放たれ、？型が打ち落とされる中、それた魔力弾がスバルへ迫る…その魔力弾をヴィータがアイゼンで打ち返し、地面へたたきつける。

「このばかつ、なにやってんだ！」

「あ、ああ…」

「ヴィータ副隊長今のは…」

「うつせえ、今は言い訳聞いている時間じゃねー、後下がってる！」

「はあ、此処は俺らがやっつくから、な」

良彦も後から降りてきて、スバルの肩を叩く。

「はい」

「……」

スバルは小さく頷き、ティアナは無言のまま一緒に下がって行く。

「つてと、んじゃさつさと潰すか」

「だな、後でなのはとなさねーといけねーし」

ヴィータがシュワルベフリーゲンで？型を落とし、良彦が？型を打ち倒していく。

エリオ、キャロもそれぞれの受け持ちを倒しきり、どうやらガジェットの襲撃は収まったらしい。

暫く後、ホテル内部で遅れていたオークションが開始され、無事に終わったらしい。

ガジェットの残骸を調査していると、久しぶりに見る顔がなものと歩いていた。

「なんだ、ユーノじゃねーか、来てたのか？」

「ん…ヨシヒコじゃないか、久しぶりだね、元気かい？」

「おう、ってかこんな所でデートか？」

「ち、ちがうって、アコース査察官に頼まれて護衛してくれてるんだよ」

「仕事だからさすがにね、それは無いよ」

慌てて否定するユーノと苦笑するのは。

「ヴェロツサも来てるのか、後で挨拶しとくか」

そういって、二人と別れ、ヴィータの方へ。

「良彦、ティアナだけだよ」

「ああ、随分焦ってたな…前からやばそうな感じはあったけど根が深そうだ」

「だよな…なんか合ったのか、アイツ」

「俺は聞いてねーけど、はやてなら何か知ってるだろうな、今度聞くか」

「ん…ま、とりあえず今は此処の引継ぎだな」

「ああ、さっさと終わらせるぞ」

六課から来た調査員に、細かい事を報告し、ヴァイスが操縦するヘリで隊舎へと戻った。

51：ホテルアグスタ襲撃（後書き）

『貫き』の結界内に入れば一緒に高速移動も可能ですが、良彦が小さいのであんまりサイズが違つと魔力消費が多くなる為、使つ相手はヴェータくらいでしょう。

今回は、魔王降臨？辺りのお話です。

52：スターズ模擬戦

ホテルアグスタから帰って数日、いつもの用に個人スキルの訓練なのだが…この頃朝早くや訓練後に、スバルとティアナが自主トレしているのが、気に掛かる。

一応新人4人の訓練メニューは、なのはと相談し多少の余裕はあるが、それでもオーバーワーク気味な気がする。

「んーむ…どうしたもんかな」

「どうしたんだ、良彦」

夜、自室で腕を組んで悩んでいると、風呂上りのヴィータが近づいてくる、シャンプーの匂いに一瞬鼻をくすぐられながらも

「ティアナとスバルの事なんだけど」

「ああ、訓練は真面目だし張り切ってるみてーだな」

「それいがい自主トレしてるみてーなんだよな」

「それってオーバーワークじゃねーのか？」

「そうなんだよ、なのはにも明日の訓練の後いつとかねーと、とは思ってるんだが」

「だな、早い方がいいだろう」

そんな話をして、いつもの用に寝室へ…いつもの用に軽くお休み

のキスをして、就寝。

翌日、朝の訓練の仕上げに模擬戦を行う…最初はスバルとティアナ対なのはだ。

模擬戦が始まり縦横無尽に張り巡らされるウィングロード、そこを疾走したのはに殴りかかるスバル。

幻影ではなく実体で、シールドに止められディバインシューターに追いかけられる。

フェイトが見学している皆…良彦、ヴィータ、エリオ、キャロ…の所に急いで駆けてくる、本当はなのはを休ませたかった様だ。

その間に、ティアナが射撃魔法…恐らくクロスファイアシュートだろう…で援護するも、精度は高いが速度、切れがない。

「おかしいな、ティアナの射撃もつと早いと思ったんだけど」

「だな、疲れか？」

「違う気がする…あ、ほら」

打ち抜かれるティアナは幻影、スバルが再び突進し、近くのビルで砲撃の構えを取るティアナ。

「ティアナが砲撃？」

「出来るだろうけど、あのタイミングじゃ、ほれ」

驚くフェイトに良彦が言った、次の瞬間ディバインシューターに打ち抜かれ…消える。

「って、あっちも幻影かよ、じゃ本体は」

ヴィータが辺りを見渡す。

足音が響き、スバルの突進をなのはが受け止めているその時、なのはの真上のティアナ。

その手には、銃身から魔力刃を生やしたクロスミラージュ。

「一撃、必殺」

そのまま落ちるようになるのはに向かう、小さく呟くのは…次の瞬間レイジングハートが待機状態に変化。

片手でスバルのリボルバーナックルを、片手でティアナのクロスミラージュ…その魔力刃…を掴み、止める。

「おかしいな、こんなこと教えてないよね？」

小さい呟きが静かになったあたりに響く。

「訓練で素直にしたがって、本番でこんな危ないことするようじゃ、訓練の意味、ないよね」

「あたしは、あたすは何も無いから強くないと…何も無いから」

ティアナが飛びのき、砲撃の構えを見せる、が…次の瞬間、スバルもティアナも桃色のバインドに捕らわれる。

なのはの周りに幾つもの射撃用スフィアが形成されていく。

「少し頭ひやそうか」

ディバインシューターではなく、恐らくあれはクロスファイアシユートだろう、それがティアナを容赦なく打ちのめし、ティアナがダメージで気絶する。

絶叫しティアナを呼ぶスバルになのはは、冷たく模擬戦の終了を伝える。

その後ティアナを医務室に運び、シャマルに任せて、はやて、なのは、フェイトの隊長陣と良彦とヴィータ、シグナムとで相談。

「んで、ティアナは何であんな焦ってるか、知ってるかはやて？」

「それやけどな」

良彦の問いに暗い顔で答えるはやて。

「ティアナの兄、ティード・ランスター一等空尉が殉職した時な、酷い事を上司の人がいったんよ」

「犯罪者を取り逃がす役立たず、みたいな事をね、それで一時期問題になったんだけど」

「その時ティアナはまだ10歳、お兄さんの事をそんな風に言われて、どう思ったか」

はやての答えにフェイト、そして兄を持つという意味で何か思う

所があるのかなのが続ける。

「それで、か…もう一個気になってたんだけど、なのは、ティアナって自分に才能無いと思っ込んでないか？」

「あー、それあたしも感じた、あんだだけ射撃できて幻影まで使いこなすのに、自分はダメだって思っ込んでんぞアイツ」

「うむ、訓練もそうだが、この間のホテルでの一件はそれも関係しているのではないか？」

良彦の言葉にヴィータ、シグナムが同意する。

「うーん、今まだ基礎固めだから、実感できないのかな…」

「だと思っぞ、毎日少しずつ上がる実力は、自分じゃわからねーし」

「そうしたら、其処も含めてお話ししないと、かな」

「そうだな、なのはに其処は任すわ」

「とはいえ、まだ寝てる見てーだし、そこ等辺は明日じゃねーか？」

なのはに、良彦、ヴィータが言って、皆が頷く。

「そしたら、そこ等辺は明日やな、任せたでなのはちゃん」

はやてがそういって、その場は解散に相成った。

52：スターズ模擬戦（後書き）

とりあえず、模擬戦とティアナの事情あたりまでです。

次回は夜間出動中の隊舎会話になると思います。

52：スターズ模擬戦

明日にでもと言っていた夜の事、隊舎内にアラートが鳴り響く。ロングアーチからの報告では、?型の編隊を確認、近くにはレリックの反応も施設も無いらしい。

また以前の?型よりも高性能らしく速度などが上がってるそうだ。

「ちゅーわけなんやけど、どう見る?」

「此方の戦力の確認と改造した?型のテスト、かな」

「私もフェイトちゃんと同じ、かな」

「そう考えるのが自然だわな」

はやての問いに、フェイト、なのは、良彦の隊長陣が答える。

「そやね、そしたら?」

「今まで相手が知ってるはずの戦力だけで叩き潰す!」

「だな、相手に態々情報やる事も無いだろ」

更に問いかけるはやてにヴィータ、良彦が答える。

フェイトの捜査でガジェットドローンの製作者は、広域次元犯罪者Dr・スカリエツィらしいと判明している、現在最も敵とみなされている相手だ。

「それでいこ、なのはちゃん、フェイトちゃん、ヴィータ、アイ

ン、頼めるか？」

「了解」

「判った」

「任せとけて」

「判りました」

それぞれが返事をし、急ぎヘリポートへ、そこには新人4人も来ていた。

ヘリへと乗り込みながらなのはが新人を見ながら。

「じゃあ、今回は空戦だから皆は隊舎で待機ね」

「そっちの指揮はシグナムや、ちゃんという事きくんやで」

「あと、ティアナは待機から外れておこうか、体調も魔力もまだ万全じゃないよね」

はやてに続いてなのはが指示する、それに

「何ですか、いう事を聞かない隊員は要らないって事ですか？」

ティアナが噛み付く。

「自分で言ってる判らない、それ当然のことだよ」

なのはの返しに

「自分で努力しちゃダメなんですか、私にはエリオみたいな才能もキヤロみたいな希少技能も、スバルみたいな素質もない、ただの凡人が頑張っちゃいけないんですか?!」

搾り出すように叫ぶ、それを…シグナムがティアナの腕を取って振り向かせ、頬に一撃。

「相手にするから付け上がる…ヴァイスへリの方は？」

「乗ってくれりゃいつでも出せますぜ」

「だ、そうださっさと行け」

その後なのはを追いたて、へりへ向かわせる。

「ティアナ戻ってきたらちゃんとお話しよう、思いつめちゃってるみたいだから」

「いーから、後はあっちに任せとけば何とかなるってのあたしらは行くぞ」

押し込むヴィータが一瞬良彦を見る、それに頷きを返す良彦。へりに乗ったなのは、フェイト、ヴィータ、アインがへりポートを離れる。

「はあ…シャーリー、いるんだろ」

良彦が階段の所にいたシャーリーに声を掛ける。

「ばれてましたか：何だか皆見てられなくて」

「丁度いい、時間はあるから一寸皆ではなそうや、資料頼むなシヤーリー」

「はい、了解です」

新人にシャーリー、シグナム、良彦がラウンジへ移動する、心配したのかシャマルもいつの間にか来ている。

類にアイスパックを当て、暗い顔をしているティアナを前に、シヤーリーが幾つかの映像を見せる。

なのはの事、フェイトの事、良彦の事：プレシア・テストロツサ事件、闇の書事件：そして。

「なのはは休みもなしに戦い続けた、俺らが気付いた時には遅かったんだ、その任務が終わったら無理に休暇を言う矢先の任務だ」

映されるのは、アンノウンの刃に貫かれる良彦となのは。

驚く新人一同。

「身体に負担のかかる戦い方、休みの無い戦い、その無茶の付けは反応の遅れだった：普段なら気付いただろうこれに気付かなかつたんだ」

これとはアンノウン、普段のなのはなら早く気付いただろうし、ちゃんと防御できたはずだった。

「一瞬遅れたなのは、気付くのが遅れた上、救いきれなかった俺

…結果はまあ、あまり酷くはないが、それでも軽症じゃすまなかつたな」

「あ…お風呂で見た、あれって」

エリオが何かに気付く。

「そうだ、無理をしてたなのは気付けず、怪我までさせた…自分勝手な思っただけど、その戒めって事だ」

「なのはちゃん、自分の無理で良彦君に怪我させたって、凄く悔やんでたの、怪我は比較的軽かったんだけど、怪我が治っても暫くは仕事にならなかつたみたい」

「何度も謝ってきたからな…良いって言うてるのに、まあそんな訳で俺たち…隊長副隊長陣だな…は、こういう事にならないようにしっかり教えてたつもり何だが、判りづらかつたかな」

シヤマルの言葉に苦笑を浮かべ、呟く。

シグナムが静かにティアナを見ながら

「確かに無茶が必要な場合はある、だがあの時はそういう場合だったか、犠牲を出さなければ倒せない相手だったか？」

その質問にティアナは答えられない、そして、時間だけが過ぎて行く。

空戦は4人の活躍により、?型の編隊を殲滅、さほど時間は掛からなかつたらしい。

待機解除になり、部屋に戻った良彦：制服のまま、ソファに沈み込んでいた。

「ただいま、良彦…話したんだって？」

「ん、まあ…チョコツとな、俺の情けない過去とかを」

「んなことねーよ、良彦は何時も一生懸命じゃねーか、それを隠そうとしゃがって」

隣に座ったヴィータが、ぽこんと良彦の腹を叩く。

「これだって、残らねーように出来たのに、態々残しやがって…一生懸命で、一寸人が悪いよなおめえ」

「気付いてたのか？」

「つたりめーだ、これが合ったらなのは自分がした無理をわすれねー、それもあって残したんだろ、自分で言う戒めも含めて」

「他の皆も気付いてんのかね」

「どうだろうな、はやとアイン、シグナム、ザフィーラは気付いてると思うぞ」

「あ…はやてはあれでよく見てるからな、アイン、シグナム、ザフィーラはまあ、予想内だな」

叩いた後、傷のある辺りを優しくなでていたヴィータとそんな会話をして

「ティアナ大丈夫かね」

「帰ってきたとき、なのはが話しに行っただから平気だろ」

「そか、ヴィータは見に行かなくて良かったのか？」

「新人はなのはの領分だかな、あたしは手伝っただけだ」

「なるほどな…ま、他に人居たら話しづらいこともあんだろうしな」

「そういうこった、さてあたしも風呂入ってくるよ」

「あー、俺もマダだったな…一緒に入るか？」

「ばあか、きかねーでいいよ…出たら直ぐ寝んだろ、どうせ」

「だな、疲れてるしな、精神的に」

「なら、さっさと入ろうぜ、あたしも疲れてんだ」

二人立ち上がり、一緒に風呂場へ歩いていく。

実際疲れていたのだろう、風呂を上がり髪を乾かさないうちに二人とも眠ってしまったのだから。

52：スターズ模擬戦（後書き）

とりあえず、模擬戦とティアナの事情あたりまでです。

次回は夜間出動中の隊舎会話になると思います。

54：良彦への疑問

名前：八坂良彦 性別：男性 年齢：18

現所属：ウィンド分隊隊長・ウィンド01 元本局航空隊132

1部隊所属

階級：二等空尉

魔力光：青 変換資質：風 希少技能：『凧』

魔法術式：古代ベルカ式 魔導師ランク：空戦AAA+

【特技・特記事項】

高い格闘戦能力と防御力、移動速度を誇り、航空隊ではヴィータ三尉とのコンビで前線のトップとして活躍。

料理が得意でレパートリーは広い。

特記

聖王教会教会騎士団所属の騎士カリム・グラシアの特務騎士であり、管理局へは派遣と言う形で入局。

騎士名：清風の騎士 また、古代ベルカ時代【風王】直系の子孫である。

八坂流合気術継承者 【風王流】継承者 対軍魔法所有

「うーん…なんというか、驚きだわ」

「どうしたのティア…って、これ良彦三尉のデータ？」

「あ、スバル、エリオとキャロまで」

「こんにちは、どうしたんですか？」

「良彦さんのデータですよ、それ？」

覗きこんだスバル、エリオ、キャラが問いかける。

「ん、この間の話しか聞いて気になってね、後映像でおかしいなって思う所が合ったんだけど、そっちは判らなかつたわ」

「そなんだー、えーと……教会騎士団の騎士で」

「古代ベルカの王の直系……」

「この継承者が2個なのって」

ティアが見せるデータにスバル、エリオ、キャラが言葉を失う、ちなみに年齢は皆が18歳って本当だと思っていた。

「逆に判らない事が増えた気もするわね、模擬戦もあまりしないから、魔法とかも実際良く判らないし」

「なら、直接聞いてみたらどうでしょうか？」

ティアナの言葉に、キャラが提案する。

「それがいいよティア、時間あるし、聞いた方が早いし、納得できそう」

「僕もそう思います」

「ん、それもそっか、よし、じゃあ良彦三尉に質問に行くわよ」

「「「おー！」「」」

4人は良彦を探しに部屋を出て行ったのである。

で、海上訓練スペースで自分の修行をしていた良彦の前に4人が来て、質問があると言われ、じゃあ此処でよければと、現在廃墟のデータを使ってる訓練スペースに車座になって座る。

「それで、何が聞きたいんだ」

「はい、まず教会騎士団って本当ですか、後古代ベルカの王の直系とか」

スバルが手を挙げ質問。

「ホントだな、清風の騎士八坂良彦、西風のゼピュロス…これが正式な名乗りだ、王のほうも事実ではある、そっちの血よりも日本人の血のほうが濃いと思うけどな」

それに答え、次はと促せば

「あの、八坂流合気術と【風王流】の継承ってというのは？」

「ああ、そうだな…【風王流】は文字通り【風王】一族が使っていた流派だ、魔力変換資質と高い魔力制御、この2つの才能がいるんで、一族でも使える人が少なかったんだけどな」

「それじゃ、八坂流は？」

「【風王流】から魔法部分をなくして、体術部分を抜き出した流派だな、いくつかの奥儀がある」

キヤロ、エリオに答える。

「それじゃ良彦さんの魔法は【風王流】なんですか？」

「だな、そうなる…さつき言った2個の素質を持つ人間は何故か、射砲撃の才能が皆無なんで、普通の魔法体系じゃ実力が発揮しきれないんだ」

ティアナが聞いてくるのを、苦笑しつつ答え。

「それってどんなのがあるんですか、模擬戦とかあまりしてないんで判らないんですけど」

「あー、そか…シスターとかシグナム、ヴィータとするときは教会だしな…んじゃ、いくつか教えところ、実戦で使ったの中心な」

スバルの問いにそういつて、立ち上がりセットアップ、青の光りに包まれた後騎士甲冑姿に。

「『風』は前に説明したな…まずその応用、見やすいように不可視設定外してやるぞ」

そういつと良彦を中心に青の魔力で出来た球体が大きくなっ
ていく。

「これも『凧』だ、但し…感知能力に特化させて、魔力の相殺とかが一切出来ない上に自分は動けない、一人じゃ使えない技だな」

「大きさどのくらいまでなるんですか？」

「一応2km位まではいけるぞ」

エリオの問いに答え、魔力光で出来た球を消していく。

「んで…そうだな、ティアナ、射撃魔法適当に何発か打ってくれ」

「え…良いですけど」

ジャケットを着ずに、クロスミラーージュを構え、5発ほどの射撃魔法を良彦へ打ち込むティアナ。

『凧』に入ってきた射撃魔法を、両手で集め…橙の一個の球体にする、さらにそれが青へと変わって行ったあと、近くに放り投げる。

「今のも応用、相殺しないようにして、魔力を集め、それを利用できる、ただ…これは実戦では使えない」

「何ですか、便利そうだけど」

スバルに苦笑しつつ。

「色が変わるのが自分で使える魔力になった証だ、数秒かかっただろ…実戦で数秒は、だめだろ、しかも変換中はやっぱり動けないし、魔力損失が2割位出る、普通に殴った方が早いだろ？」

「なるほど」

「んじゃ、『風』はこのくらいだな…で、【風王流】なんだけど、基本は相手の力を利用した投げや反撃、風を使った拳打、脚撃からなると思うってくれ」

そう言いながら、拳を構え、魔力と風を纏わせる。

「拳打の基本、風拳：魔力と風による威力上昇した拳だな」

「攻撃を弾くときとかに使ってる技ですよな」

スバルに再び答え。

「ああ、そうなる…で、攻撃用のがまず、風拳・嵐：纏った風を当たった瞬間に増幅風の刃を一定範囲に発生させる」

「あ、確か？型に使ってた」

「そうだな、でこれはホテルで使った…風拳・一刃、貫き手に纏った風を刃にする」

「確かに使ってたね」

エリオ、キャラコがそれを見て頷き。

「風拳・烈風：練りこんだ風を強化し相手を吹き飛ばす、まあこないだはヴィータの加速に利用したけど」

「あはは、あの時ですか」

苦笑するティアナ。

「後は投げと同時に使う…風拳・圧だな、これは当たった後に圧縮した風が衝撃になって相手に伝わる」

「なるほど、それで投げはどんな感じになるんですか？」

スバルが聞いてくる。

「ん…陸戦では地面にたたきつけた後、間接を極めるか、相手が多いときは、足を使う」

「足？」

「首や、その他急所に魔力を纏わした踏み付けを加えて、寝かすって事だ」

「な、なるほど」

ティアナが引きつりながら頷く。

「空はたたきつける場所がないからな、シールドを位置ずらして其処にたたきつけてるな、投げ飛ばして距離とる時もある」

「そうなんですか、結構大変ですね」

「それでも、投げに対応できる魔導師はほとんど居ないから結構有効だぞ」

エリオの言葉に苦笑しつつ、ぽんと頭を叩く。

「とりあえずは、流派はこんな感じかな、第2段階終わったら模擬戦参加するから、後はその時な」

「「「はい」「」」」

「他にはあるか？」

「あの、良彦三尉」

「ん、どうしたティアナ」

「昔の映像といまだと、その髪とか目が…」

「ああ、それが…んー、何でかわからねーんだけど、お前らに見せた事件以降、こうなって来たんだよな…【風王】の遺伝子が強く活性化したんじゃないかってシャマルは言ってたけど」

「そうなんですか…すいませんでした、変なこと聞いて」

「良いって、気にもしてないしな…他は？」

「あ、はい」

「キャラ口、何だ？」

「あの、対軍魔法ってなんですか、広域殲滅とかとはちがうんでしょうか？」

「そうだな…広域殲滅は魔力ダメージのみとかも選択できるよな、

対軍はただ相手を倒す、というか殺す魔法って言う括りになるな」

「そんな魔法があるんですか？」

「古代ベルカは戦乱の時代だったからな…結構多いんじゃないかね、ただそれが俺の資料に乗ってるのは、使ったことがあるからだな」

「たしか、闇の書事件で、でしたっけ？」

エリオに答え、スバルが更に問う。

「だな、あれはかなり抑えた方だけど」

「抑えないと、どうなるんですか？」

「数キロ範囲がプラズマで焼き尽くされる」

ティアナにそう答え、やらないけどな、と苦笑。

「さて、こんな所か？」

「あ、後一個」

「んじゃ、スバル」

「ウィータ副隊長とは何時結婚するんですか」

「予定じゃ、来年の6月だ」

「「「え?」「」」」

「聞いたいてなんで皆で疑問を浮かべる」

「答えてもらえろと思えなかつたんで」

ティアナが代表して答える。

「そうか、まあ…予定してるのは事実だし、その手の話も慣れたからな」

にやりっと笑い、騎士甲冑を解除、普段の着崩した六課制服へ戻る。

「んじゃ、書類もあつからいくぞ、またな」

「はい、ありがとうございます」

「「「ありがとうございます」」」

ティアナに続き他の3人も一礼して見送った。

「っていう事があつてな、新人に結婚予定いつちまつた」

「おめえな、まだはやてとなのは、フェイトにしか言つてなかつたろそれ」

「いいじゃねーか、ほぼ確定だし、でもあつちは言つてないぞ」

「あつち？」

「結婚までは、あれだせkk」「だーっ」「おぶっ」
そういつた瞬間、真っ赤になりながら

「その他の誰かにいったら、ゆるさねー」

げしげしっと脛を蹴られまくる。

「だから言ってねーって、せkk」

「だー、言うな聞かれてなくても言うな！」

どずんっと、腹に拳一撃。

「おぶっっ、わ、わかつたから、マジ攻撃はやめろ」

「うっせ、この馬鹿…信じらんねー、全くよー」

「今日オムライスにしてやっから、な、許せ」

「…今度翠屋のシュークリームも」

「おっけーだ、買ってこよう」

「んじゃ、ゆるす」

とすと良彦の肩に頭を預けるヴィータ。

その頭をぽんぽんと優しく叩き、顔を向けさせて軽くキス、立ち上がり食事の準備へ入るのだった。

54：良彦への疑問（後書き）

新人の疑問を利用した、魔法とかの説明です。

今回は、休暇のお話だと思います。

55：新人は休暇、他は？

新人達が良彦に質問に来てから大体2週間くらいが過ぎた、今日のはなのは、ヴィータ、フェイト、良彦がそれぞれ一人ずつを指導し、ばてばての新人達が地面に腰を下ろしている。

「皆お疲れ様、其れで実は今日第2段階クリアの試験だったんだけど」

「……ええ!?」「……」

なのはがいう驚きの事実の声が上がる、それを苦笑して聞きながら

「皆どうだった?」

「合格」

「ま、良いんじゃないか」

「問題ねーだろ、合っても困る」

と、簡単にフェイト、ヴィータ、良彦からの返答。

「はやっ」

「私も大丈夫だと思うから、それじゃ皆、第2段階終了ね、合格おめでとう」

スバルの一言にも苦笑だけ返し、お祝いを告げる。

「デバイスのリミッターも解除すつから、シャーリーの所行つと
けよ」

「んじゃ、又明日だな」

「え、明日？」

ヴィータが指示し、良彦が付け加える、そして、4人の疑問を代
表してティアナが問う。

「訓練再開は明日からだ、今日の午後は休暇だな」

「私達も隊舎で待機する予定だしね」

ヴィータの言葉になのはが答えフェイトが頷く、そして

「やったー、お休みだ、ティアどうしよつか？」

「ちょ、スバル抱きつくんじやない暑いってば」

と、喜ぶスバルとティア、エリオとキャロも

「どうしよつか、何かすることあるかな？」

「そうだね、どうしよつか」

と、まあ休みの過ごし方をあまり判ってないッぽいが嬉しそうではある。

「おし、んじゃ休める時はゆっくり休んどけよ、俺らみてーになんぞ」

「よしくん、それは言わない約束だよ！」

「事実だしなー、知られたんだ隠す意味もねー」

良彦になのはが突っ込むが、ヴィータに追い討ちを食らっている。

「うう、フェイトちゃん」

「よしよし」

フェイトに抱きつくなのはを、皆が笑ってみていた。

で、新人達はクラナガンに出て遊んでくる事にしたらしい。

なのは、フェイトは待機、シグナムは聖王教会へ、ヴィータ、良彦は陸士108部隊で教導の予定だ。

良彦は教導資格を持ってないがヴィータの助手及び、標的役だ、対AMF戦闘の教導なので、良彦の『凧』を通す攻撃が出来れば、問題ないからだ。

「…あつちは休みでこっちは仕事か、まあ、ナカジマ三佐には世話になってるしな」

「そういう事だ、あちらの好意で捜査協力もしてもらっているのだしな」

「まー、おめえにしてみりゃ『凧』の修行にもなんだろよ」

「まあな、あそこの隊員はやる気もあるし、気合の入った攻撃してくれるんで、修行にはなるな」

「ならば、文句はあるまい」

「なんで修行になれば問題ないって言い切れるんだ？」

「「修行バカ、だから（な）」」

良彦の呟きに、シグナムが苦笑しながら答え、ヴィータがフォロ
ー、そして良彦の問いに、二人揃って答えしてくれる、何時ものやり
取りだ。

「まあ、事実なんだが…っと、なのは、フェイト、新人の送り出
しか？」

「ああよしくん、うん4人とも出かけたよ」

「エリオとキャラ口は大丈夫かな、街は危ない所もあるし」

「…フェイトは過保護だな」

「にやはは」

苦笑で答えるなのは、フェイトは本当に心配そうだ。

「あ、でも3人はおでかけ？」

「私は教会にな」

「あたしらは108に教導だ」

「っーことだ」

シグナム、ヴィータ、良彦がなのはに答え。

「そっか、頑張ってきてね、私とフェイトちゃんは待機してるから」

「おう、つかなのは、お前は仮眠しとけ、どうせ疲れ溜まってんだろ、仮眠がいやならシャマルにマッサージでも頼め」

「うっ…よしくん、気付いてたの」

「いや、気付かれて無いと思ってんのお前だけだぞ」

その言葉になのはが、他の3人を見ると、皆が揃って頷く。

「ワーカーホリックに修行バカ、新人も大変だな」

「シグナム、バトルジャンキーにそれを言われると、あいつらも困ると思っぞ」

シグナムが苦笑しながら言うのを、ヴィータがどかんと叩き潰す。全員の笑いが一瞬合わさり

「んじゃ、いくとしますか…あ、シグナム、シスターに今度模擬戦よろしくって言っといいてくれな」

「ああ、引き受けたその際は私も同行しよう」

「偶にはあたしもな、おっし良彦、車頼むぞ」

良彦、シグナム、ヴィータが話しながら隊舎の外へ。

なのは、フェイトも待機する為にか奥へ入っていった。

ちなみに良彦の車は、地球のミニクーパー…所謂旧ミニである外見は、中身はミッドの物に改造されている…である、基本乗るのは良彦とヴィータくらいなので、小さいので十分なのだ。

走らせることしばし、108部隊隊舎の駐車場に車を止め、部長であるナカジマ三佐に挨拶へ向かう。

「失礼します、機動六課から出張教導にきた、ヴィータ三等空尉と、八坂良彦三等空尉です」

ヴィータが珍しく真面目に挨拶するが

「おう、ってちびっ子コンビじゃねーか、元気だったか？」

「おっさん、ちびっ子言うなっ!」

「そっだ、あたしらはまあ身長は低いけど、チビいうな!」

ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐は、二人をちびっ子コンビと笑い捨てる、それに反応し、突っ込む二人。

「ははは、いいじゃねーか、毎度毎度すまねーな、終わったら飯食ってけや」

「あいよ、んで今日は何人くらいいるんだ？」

「そうだな、ギンガ以外はほぼいるはずだぜ」

「ギンガは、捜査か…それじゃ仕方ねーな」

ゲンヤに人数の確認などを済ませ、ヴィータと一緒に訓練場へ、六課のような海上訓練スペースではなく、陸の上の広場に見えなくも無いが。

武装局員が整列するなか、前にある台に立って軽く挨拶、毎度の事なので隊員からは気軽な挨拶が帰ってくる。

しつかりと柔軟を行った後で、コンビ、小隊、部隊、と単位を大きくして訓練していく。

一人という事は無い、平均の魔導師レベルが陸士は高くないので一人でガジェットを発見した場合は、報告義務がある程度だ。

ある意味でAMFより厄介な『凧』を打ち抜く為の訓練が始まる、AMFは膜のようにガジェットを覆っている為、その膜を破ればガジェットに魔力弾なりを届ける事が出来る、これは複数人数であれば、同時一点集中で何とかなる。

『凧』は膜ではない、良彦の腕が届く範囲を全て覆っている分厚い壁のような物なのだ、これが抜けるならAMFも恐くは無いだろう。

シグナム、ヴィータ、なのは、フェイトは普通にこれを抜く攻撃をもつ、シスターシャツハは速さと鋭さでこれを抜く、そして、はやては攻撃範囲が違いすぎ…一方的に広範囲魔法でやられるか、一瞬で近づいて殴り倒すしか結果がない…て話しにならない。

一般隊員の場合は、ほとんどこれを抜く方法は少ない、が…良彦も完璧ではない、隙を突かれれば、許容量以上の攻撃を受ければ『凧』も破られる、そのため相手は考える、どうすれば隙をつけるか、破れるか。

それに対応して良彦も考える、どういう手で来るか、何処までが完全に消せるか、だからこそ自分の修行にもなっているのだから。

訓練は数時間続く…本来なら終わるのは夕方だ、だがその日は途中で、ヴィータと良彦のデバイスに緊急で全体通信が入った為、中断になる。

それは街に出ていた新人達からで、事件の新たな局面を知らせる連絡でもあった。

55：新人は休暇、他は？（後書き）

第2段階終了、新人は休暇へ、良彦ヴィータは108で教導です。

次回は、地下での攻防の辺りでしょうか、以前も書きましたが良彦視線がメインなので、ヴィータと駆けつける事になると思います。

56：幾つもの攻防

陸士108部隊の教導をナカジマ三佐の好意により、中断し、飛行許可まで貰って新人達が地下を探索している廃棄区画の方へと急いでいる。

「しっかし、女の子にレリックか、もう一個ありそうだったのも驚きだな」

「ああ、しかももうガジェットも出てきてるらしい、急ぐぞ、良彦、ツヴァイ」

「はいです」

ツヴァイとは途中で合流した、あちらも急いで向かっていたらしい。

廃棄区画に近づく、部隊員に聞こえる念話で新人達が

「（私達の目的はレリックの確保だから、此处は無駄に戦わずに、隙を見て引きましょう）」

「（うん、レリックを取られないようにちゃんと守りながら）」

と、言っている。

「（おっしお前ら良い判断だ、あたしらがもう少しでつくから、しっかりレリック確保しとけよ）」

「（ああ、目の前の壁抜けりゃそこが現場だからな）」

言ってる間に壁…実際には床だ…が迫る。

「アイゼン！」

『了解、ギガントフォーム』

ヴィータのグラーフアイゼンのヘッド部分が巨大化し、それを振りかぶり一撃床を突き抜けて煙と共に突入、良彦とツヴァイも続く。驚く新人と、敵対勢力と思われる、少女、融合騎、亜人を視認。

少女は紫の髪、黒を基調としたドレス風バリアジャケット、白いソックス黒い靴、手には大きな宝玉のついた恐らくデバイス。

融合騎は赤い髪に露出の多い水着のような衣装、羽と尻尾が特徴的だ。

亜人は黒い肌に額に1つ、左右に2つずつ目のような器官を持っている人型で全身が甲冑のようにも見える上に尻尾を持ち、マフラのような布を首に巻いている。

「捕らえ、凍てつく足枷…フリーレンフェッセルン！」

素早く一緒に居た少女と融合騎にツヴァイが氷の拘束魔法を唱え、小さな冰山を作り出す。

「ふつとべー！」

ギガントフォームのアイゼンを振りかぶったヴィータが亜人と激突、一瞬の拮抗、其処へ。

「ゼピュロス、モードツヴァイ」

『了解…モードエウロス』

普段の籠手の肘辺りに噴射口が出来る

「押し込めッ！」

『了解、炸裂する嵐』

轟つという噴射音と共に拳打が加速され、アイゼンの後側、亜人と反対を殴りつければ…二重の衝撃に亜人が吹き飛び、柱をおりつつ壁にめり込んでいった。

「おっし、皆無事か？」

「他に敵とか残ってるか？」

「皆さん大丈夫ですか？」

良彦、ヴィータ、ツヴァイの声に、驚きと困惑をしつつも頷く新人4人とギンガ。

ギンガは捜査中、発見された少女が入っていたらしい生体ポッドを見つけ、此方の事件とリンクしていると考え協力してくれたらしい。

白のアンダーに紫と黒のジャケット、鉄色の胸当てに脚甲、リボルバーナックルとマツハキャリバーの姉妹機ブリッツキャリバーを装備している。

「とりあえずは今居た相手だけですけど」

「…つつても、今の奴逃げたッぽいな、気配がねーし」

「ああ、今確認したけどあの奥にはもういねー」

「こっちもです」

冰山を消せば床に穴が開いている。

「つたく、つてこれは？」

突然辺りを揺れが襲う

「やべーな、ギンガ、スバル道を作つて皆上がれ、こっちは後から追いつく」

「はい、スバル」

「うんギン姉」

スバルがウィングロードを地面から天井、ヴィータ達が入ってきた穴へ螺旋状に作り出し登り出す。

その奥でティアナとキャロがなにやらごそごそしていたが、急いで登っていった。

殿はギンガだ、4人が上がるのを確認し、ウィングロードを上がって行く。

「おっしあたしらもいくぞ」

「おう、急ぐぞ」

「はいです」

ヴィータ、良彦、ツヴァイはそのまま穴から飛び出す、間一髪崩落には巻き込まれなかった。

外では大型の召喚獣らしき虫が地面を揺らしていた、あれが地震の原因だろう。

その近くのビルの屋上に召喚者らしき少女と融合騎がそのようすを見ている。

融合騎は慌てている様子なので、少女が単独でやらせたのだろう。亜人のほうは既に姿が見えないのはダメージが大きかったから少女が送還したのかもしれない。

そして、新人メンバーと少女、融合騎の追いかっこが始まる。融合騎は少女をルールとよび、少女は融合騎をアギトと呼んでいるようだ。

人数の差、機動力の差で廃棄予定の高速道路上で二人を補足、バインドと手錠を掛け、相手の権利を告げていると、少女が小さくヴィータに何か呟く。

良く聞こうと良彦が近づくと、その間に何者かがエリオが持っていたレリックのケースを道路の下から手を伸ばし奪い取る、そして少女は

「貴女はまた、何も守れないかもね」

とヴィータへ告げる、それに対して

「何だと、てめえ、まさかっ」

と、少女へ詰め寄り、そこに隙が出来る。

「いったただきー」

と言いながら飛び出す何者か、だが

「いや、そりゃ無理だわ」

良彦の声と共に飛び出した少女の腕が握られ、飛び出した勢いをそのまま利用され、投げられる…更に良彦は今この少女が道路をすり抜けるように現れたことに気付いていた。

その為、叩きつけられるのは、地面に作られた青いシールドの上だ…シスターシャツハもめちやくちな場所から現れるのでこういう相手にもなれてしまってる良彦である。

叩きつけられた少女は水色の髪ヘッドセットのような物と、青と藍色の身体の線が判るスーツ、肩、腰、手首足首にハードシエルの装甲がある、そんなカツコだ。

叩きつけられると同時に、青い魔力光と風に動きを止められる、良彦の『風鎖』だ。

「レリック持って、こつちも助けようとは、贅沢だったな」

「って、何であれに反応しきれなの？」

「慣れだな、地面の中高速移動されて後ろから殴られた事が何度もある」

「ええええー、そんな人がいるとかありえないっしょ」

「だが、こうして捕まってる以上ありえたんだよ」

少女の言葉に良彦が答え、バインドを複数にしている。

ヴィータはルールーと呼ばれていた少女に突っかった後、ウィンドを開きロングアーチに色々な確認を取っただけらしい。

それに寄れば、地下に居た以外に？型ガジェットが大量に空に現れたため、なのは、フェイトが迎撃に出たこと。

倒しても倒しても幻影と実機で編成された編隊を潰すのに時間が掛かると判断したはやてが、リミッター解除、遠距離から広域殲滅した事。

その後へりにも砲撃を加えられたが、はやての攻撃の為へりの方へ戻ってきていたなのはがぎりぎりで防御成功したこと。

砲撃の犯人をデアボリックエミッションでノックアウトしようとしたがどうやら逃げ切られたようだという事。

そして、此方の状況も伝える、ルールーと呼ばれた少女、アギトと呼ばれた融合騎、水色の髪の少女…首元に？という数字が入っている。

それらを確保した事、レリックを奪われ…それを言おうとした所で

「あの、レリックなんですけど」

「いま、連絡中だ待ってる」

ティアナが何か言おうとして、止められる。

「どうしたんだ、俺が聞いとくけど」

「あ、はい…その一寸レリックに細工しまして」

そういうとキャロの帽子を取れば、そこには一輪の花…それが次の瞬間レリックへと変化する。

「フェイクシルエットで姿を変えて、一番敵と接触の少ないキャロの帽子の中に」

「もちろん封印は厳重にしております！」

恐る恐る言うティアナに、気合十分のキャロ。

ヴィータもツヴァイもそれを見て気が抜けたのか、驚いてなのか、溜息について無言。

「ということ、レリックも確保できたらしいぞ、箱は他に人居たらそつちが持ってたかもだけどな」

そんな連絡をして、ヘリに迎えに来てもらった。

青髪の子は無機物をすり抜けるようなので、常にバインド状態のままだ。

こうして、謎の少女の保護から端を発したこの一件は、3人の逮捕者を出して一度幕を下ろす。

アギトと呼ばれた融合騎を見た時から良彦の中でリトの記憶が騒いでいる、新しいことを思い出していた。

56：幾つもの攻防（後書き）

新人の活躍はほぼはしょられています、ヴィータ参上から、ルール
ー、アギト、セイン逮捕です。

良彦の特製上、あの程度の速度とセインのISでは不意を討てませ
ん…シスターシャツハで速度と何処から来るか判らない移動系の恐
さを知っている、『凧』による探知がある、此処らへんから無理と
考えました。

トーレの速度なら、流石に不意は討てたと思いますが、この時点で
はクアットロとディエチを助けているので此方は無理でしょう、な
ので一時逮捕です。

今回は、良彦最後のパワーアッププラグを回収します。

57：新たなる／古の力

その後、捉えた3人：質問した所名前は素直に答えた、紫の髪の少女がルーテシア、融合騎がアギト、水色の髪の少女がセイン…は名前以外では雑談以外答えようとはしないので六課で留置する事に。セインについては副隊長以上が誰か一人つくことになった、以前から隊長陣では話しに上がっていたがどうやら戦闘機人らしいのだ。それとセインの胸元に合った？と言う数字から、最低でも他に5人は戦闘機人がいるだろうとも予測された。

ともあれ、3人とも大人しいもので、特に今の所困った事は無い様子だ。

また、保護された少女は翌日には目覚め、名前をヴィヴィオと言うらしい、なのはが随分懐かれている様子だ。

そんな中、良彦はアイン、ヴィータとウィンドの待機室で会話していた。

「あのアギトって言う融合騎、リトの記憶に出てくるんだよね、アイン覚えあるか？」

「リトといた頃の記憶はあまり多くないが、確か…烈火の剣精、その称号をもったシグナムをロードにする者だった気がする」

「マジでか？…てかことは古代ベルカ時代の融合騎って事じゃねーか」

「まだ本当にそうかはわからねーけどな、資料が残っててそれから復元された可能性もあるから」

「そうだけだよ、それでもすげーって事になるぞ」

「そうだな、復元だとしても凄い事だ」

3人で言いながら、更に良彦が

「で、もう一個の話し何だが…リトの父親【風王】である、ベシユテンバーク王も融合騎を連れていたんだ」

「…そういえば、いたな、青い髪、青い瞳、青い装束の、確か」

「セプテントリオン、ゼピュロスが持つ西東南、3つのモードと対を成す北の象徴だな」

「そんなのがって、ゼピュロスのモードが3つ？、おめえ2個しか使ってねーじゃねーか？」

「南に相当するのはノトス、これは一人だと制御しきれねーんだ、その為のセプト…セプテントリオンだ」

「んじやなにか、そいつが居ればモード3も使えると？」

「そうなる、アギトが古代ベルカから何らかの形で残っていたとして…セプトも残ってる可能性がある」

「ん、でも【風王】の国は消滅してるんじやねーのか？」

そのヴィータの言葉にアインが悲しそうに微笑む、良彦は気にするなとぼんと頭をなでつつ。

「烈火の剣精と北風のセプト、国に居た融合騎はその事件の時、中立の技術研究国でメンテナンスを受けていたはずなんだ」

「私の記憶でも、あの事件の少し前にあった大きな戦がかなりの激戦だった為、繊細な融合騎はしっかりしたメンテナンスを受けさせると言う話になっていたはずだ」

「でも、セプトが残ってても誰かが使っていたりするんじゃないか？、古代の融合騎だぞ？」

グイータの疑問に良彦は

「いや、多分それはないな…セプトは【風王】にしか扱えない、血筋的なものと、その能力の問題でな」

「どういうことだってば」

「まず、【風王】の血筋以外の者には反応を示さない、で、能力なんだが、単体では補助がメインでそれも大半が風に関する事だ」

一旦、お茶で喉を潤し

「で本来の能力を発揮するにはユニゾンする必要と、モード3ノトスが必要なんだ、【風王】の持つデバイスにはそれが組み込まれる…リトは兄弟の中で唯一次代の【風王】の資質があったから、ゼピュロスにはそれがあるんだ」

「じゃあ、セプトが居れば良彦以外には今の時代はつかえねーって？」

「そのはずだな…無限書庫のユーノと、聖王教会の騎士カリムには連絡しておいた、もしかしたら」

「そうになると、色々大変そうだけど戦力は強化されるっつーことか」

「ああ…まあ期待はあまりあまりしないでまっつてよう」

そういつて、ヴィータとアインとそのまま他の話題へと会話を移していった。

そんな会話から数日、ユーノから資料が送られてくる、古代ベルカ時代【風王家】の物と思われる発掘物…【風王】の国にあったものでは無く、同盟国などに残っていたものだ…が聖王教会で保存されているらしいとの事だ。

騎士カリムからも、同様の話しと、現在それらを保管庫から取り出し、良彦に確認してもらおう準備をしているそうだ。

ちなみに判断基準は【風王家】の紋章…風を意匠とした3本の斜線に羽をクロスさせたもの…が、付けられている物だそうだ。

で、現在シフトの空いた時間にヴィータと共に教会へ来ているわけだが。

「ごきげんよう、騎士カリム、シスターシャツハ」

「よう、カリムにシャツハ、久しぶりだ」

「ごきげんよう、騎士良彦、騎士ヴィータ」

「ようこそ、騎士良彦、騎士ヴィータ」

良彦は挨拶までは丁寧、ヴィータは挨拶から碎けている、相手はしっかりしたものだ。

「それで、何個か候補があつたつて？」

「ええ、保管庫からいくつか封印がしてあつて教会の方でも管理局でもどうにもならないのがあつたわ」

「騎士良彦なら開けられる可能性があるのではないかと、そう思われますね」

「つてか、それつて開けていいのかよ？」

「中身が何であれ古代ベルカの事を知る資料にはなりますから、構いません」

カリム、シャツハにヴィータが問いかけ、カリムがきっぱりと答える。

「んじゃ、早速案内してくれるか、時間もあまりないし」

「では、こちらへ」

カリムが立ち上がり、案内してくれる…重要な場所においてあるのだらう、シャツハも付いてきてはいるが。

案内されたのが教会の保管庫、その一層目だ、まだ奥に段階を置いて重要なものが保管されているらしい。

目の前には、【風王家】の紋章が入った、箱などが置かれている、これが開けられなかった物なのだろう、数は3個ほど。

1個目、宝石箱のようなものだ…手に持って開けてみる、以外に簡単に開く、中身はネックレスと指輪、どうやら他の国に嫁いだ誰かの宝石箱だったのだろう。

開けようとしたときに少しピリツとした事から、あれが此方の事を調べる魔法か何かか、【風王】の血筋に反応したらしい。

続いて2個目、一辺が1mはある箱だ、材質は鉄？、まあかなり頑丈そうで、しっかり蓋がしまっている。

蓋に手を掛ける、再びピリツとした反応があり、蓋が開く。

中身は何らかの装置…恐らくは結界や、防衛用の魔法など、長時間の使用が必要なそれらを維持する為の物だと思われる、普通は数個セットで使用することから、これ1個での使用は無理だろう。

3個目、10cm x 35cmの長方形で厚さが10cmほどある、これも鉄？の箱だ。

同じように、蓋にふれればピリツとした反応、そして開く。

中は棺桶のように布に包まれているが、その色は青、そしてそれに包まれるように、青髪、青いワンピースのような衣装を着た身長30cmほどの少女、年齢で言うならば10歳前後か身長さえ考えなければ。

「……セプト、だ」

「マジかよ…てか、こんな中であって平気なのか、こいつ」

「恐らく、箱自体に封印の魔法が掛かっているのと、彼女自体はスリープモードの様子ですね」

良彦とヴィータの言葉にカリムが箱を確認し、セプトを見ながら言ってくる。

「ああ、そうみたいだ…よし、起こすぞ」

「おう、判った」

良彦のそばから一応離れてもらい、セプトへ声を掛ける、ただし、使っているのは古代ベルカ語だ。

『覚醒せよ、セプトトリオン、我はベシュテンバーグに連なる者』

良彦の言葉に、青い魔力光を発しながら、瞳を開くセプトトリオン…開いた瞳の奥の色も青…ゆっくりと起き上がり、良彦へ向かい直る。

『私を呼んだのは貴方ですか、小さき騎士よ』

『ああ、そうだ、我はベシュテンバーグの血を引く、清風の騎士八坂良彦…セプトトリオンの力を借りたい』

『私は【風王】以外に力を貸す事は無い、それを知らない筈はなかろう？』

その言葉に良彦は現状を説明して行く、古代ベルカ、セプトが稼働していた時から永い時間が過ぎ、その頃の【風王】は既に無く、

血を引くのも直系では良彦だけであろう事を。

それを聞いたセプトは

『ならば王に相応しい力を示せ、清風の騎士よ…我が手を』

言葉に従い、セプトの小さい手を取る。

セプトと良彦、お互いからあふれ出す青い魔力光、どんどんとそれが強くなっていく。

「大丈夫か、良彦!？」

「騎士良彦っ!?!？」

「良彦君!？」

グイータ、シャツハ、カリムの声が響くなか、正視するのも辛いほどの光りが溢れ、そして風が吹く、二人を中心に舞う風は強く、弱く…そして、風も光りも収まって行く。

『かつての【風王】と比べれば、いささか劣るが見事な風だ、いだろう…清風の騎士八坂良彦、汝を我がロードと認める』

その言葉に、汗をかき、荒い息の元で

『助かるよセプテントリオン、後俺の事は良彦でいい』

『そうか、ロード良彦、なら私もセプトと呼ぶと良い』

『言葉は、後でおしえるな、この言葉はいま日常じゃ使わないからな』

『うむ、頼むロード良彦』

その場に居たのは皆古代ベルカ語を理解するものたちだったのでこの会話で、契約が成った事を理解したらしい。

「おい良彦、だいじょぶなのか？」

「ええ、随分疲れてるみたいですけど」

「私とシグナムと連戦した後のようですね」

「あー、魔力と体力がかなりキツイ、でもセプトが協力してくれるってよ」

「それは聞いててわかったっての、いきなりでびっくりしたろうが！」

なみだ目で良彦の脛を蹴るヴィータ、それを見たセプトが

『鉄槌の騎士ヴィータ、我がロードに何をしている』

「って、あたしの事しってる??」

「あ…リトの時代に合ってるはずだからな、一寸待ってる」

驚くヴィータに良彦が答えセプトに向かい、説明する、夜天の魔導書の事、守護騎士のことなどだ。

セプトは驚くが夜天の魔導書の暴走についても、それにより国が滅んだ事も、戦国の時代何時滅んでもおかしくなかった事、それが

戦争ではなかった事、国が滅ぶ覚悟は王にも自分にも既にあつた事を伝えてきた。

『あとな、俺とヴィータ…婚約してるから、あいつが俺に何かしてもあまりきにすんな、出来れば他の皆も含めて仲良くな』

『…そうか、心得た、よろしく頼むぞ、鉄槌の騎士ヴィータ』

『おう、よろしくな』

それぞれ挨拶をして、カリムとシャツハも挨拶、現在のベルカ自治区の説明もしてくれた、また言語関係は以前リンフォースツヴァイの教育で使ったデータをセプトにインストールしてくれたので会話は現在のミッド語で可能になった。

一旦カリムの執務室に移動し、一旦休憩…その間にセプトはヴィータやカリム、シャツハと色々話をしていた…し、その後六課隊舎へ帰還した。

隊舎では皆驚き…アインは夜天の魔導書の事について謝ったが、ヴィータの時と同じ説明をされた…ツヴァイは驚きつつも、喜んでた。

セプトもツヴァイと言う同じ融合騎がいるのは嬉しいのか、仲良くなつたらしい。

新しい力、北風のセプテントリオン…簡単に使える力ではないが、その力はこの先頼りになる事は確実だろう。

セプトの部屋は良彦とヴィータと一緒に…さらにツヴァイの予備に用意してあつた、バック型の部屋もセプト用に改造され準備されたのである。

57：新たなる／古の力（後書き）

と言うわけで、最後のパワーアップフラグ…もう一人のオリキャラ…セプテントリオン事、セプト登場です。
ユニゾンでの実戦事態はもう暫く先ですが、模擬戦か、練習で一度は披露しようと思っています。

今回はギンガ、マリーが出張してきた六課の様子でも書きたいと思います。

58：集う人々

セプト：北風のセプテントリオン、良彦というか【風王】の融合騎：が来て暫く、捕らえた3人は未だに雑談以外には応じない。

ルーテシアとセインは、心理ブロックがかかっていると言う可能性もあるが、今のところ実際には不明だ。

アギトは何度か口を滑らせそうになる所から、そういう心配は無いだろう。

それと隊長陣には、アギトが融合騎だという事、古代ベルカの真正のそれだと言う可能性もあることを教えた。

そちらは様子見という結果になった、その際セプトもアギトの事は、本物ならシグナムがロードのはずだとシグナムだけに教えたようだ。

で、新暦75年9月5日：8月には六課で誰が一番強いのかとか、バックヤードスタッフや整備班、新人達で騒いで居たりしたり、ガジェットの改造型が出たりしたが概ね無事だった。

その日、六課は本局と陸士108部隊からの出向員を迎え入れる、本局第四技術部のマリエル・アテンザ：なのは、フェイトのデバイス達を改造してくれた人だ。

陸士108部隊からはギンガ・ナカジマ陸曹、捜査官でもあり、これまでも捜査協力してくれていた、基本新人フォワードと組む事になるだろう。

二人が来た時丁度新人の訓練が一段落ついた時で、マリエルがヴィイオをなのはとフェイトの子供？！と勘違いしたりしたが、その勘違いも何とか解けた。

で、ふたりともに面識のある良彦が、手を上げながら。

「マリーさんもギンガも久しぶりだな」

「ええ、良彦君とは中々会えなくて…所で、そっちの肩の上の子は」

「ん、我が、我はセプトントリオン、ロード良彦の融合騎だ」

「よ、良彦君いつの間に、こんな子を、是非一度検査を…！」

「反応がシャーリーと一緒にだけど、マリーさん」

苦笑する良彦、他新人やなのは、フェイト、ギンガ。

「ダメですよマリーさん、本人の承諾を取らないと」

「あ、うんそうね…セプトントリオンさん、どうかな？」

「まあ永く眠っていたゆえ、何度も検査を受けるのは構わぬが…それと長くて呼びづらかるう、セプトで良い」

既にシャーリーから数度検査をうけていたセプトも苦笑しつつその言ってくれる…元は学術研究国家で作られたからか、検査などに忌避感はないようだ。

「所で、二人ともどうしたんだ？」

「あ、そうだった、あのね…相手が相手だからそっち関係の協力と、デバイス整備も手伝おうと思ってね」

「私は、本格的な捜査協力と戦力補強のためにはやて部隊長が」

「なるほど、んじゃ、これからよろしくな」

「うむ、我もよろしく頼む」

他の皆も挨拶…スバルはギンガに飛びついてたが…して、一段落。

その後、セプトを検査したマリーはシャーリーと色々と話をして、ツヴァイ改造とか言い出しそうになっていたらしい。

そんなこんなで3日後、9月8日…この日は新人達の模擬戦だったのだが、厄日でもあったようだ。

海上訓練スペースで整列している新人一同。

その前に歩き出すのは、紫の髪をポニーテイルにした女性…シグナム。

「さて、今日は私がお前たちの模擬戦の相手になるう…が、私人では心もとないとおもってな、友人に応援を頼んだ」

その言葉に、新人一同+1…ギンガも一緒だからだ…はきよとんとする、シグナムの後には、見慣れた隊長、副隊長…良彦、なのは、フェイト、ヴィータ…が見学している。

誰が来るのか、と良彦も思っていると、聞きなれた声が。

「お待たせしましたシグナム、不肖の身ながらお手伝いさせていただきます」

そちらを見れば紫の髪をショートカットにし、いかにも修道女と
言う格好をしたシスターシャツハ。

「シスター、何やってんだあんた！」

「友であるシグナムの頼みに参じました…皆さん始めまして、シ
ャツハ・ヌエラです、今日はシグナムと共に模擬戦のお相手を勤め
させていただきます」

その言葉を聞いた新人達は、口々に…陸戦AAAの、とか、近接
戦闘ではシグナムさんと互角の、とか…驚きとある種の恐怖の感想
を吐き出している。

「さて、では行こうか5対2の変則マッチだ」

「ええ、此方はいつでも」

シグナムもシャツハもいつの間にかセットアップし、騎士甲冑へ
と姿を変えている。

シグナムの手にはレヴァンティンが。

シャツハの手にはヴィンデルシャフトが握られている。

新人+1も一寸自棄気味にセットアップし、模擬戦に突入。

舞台は廃墟セッティングで障害物なども多い場所で行われるよう
だった。

フロントアタッカーであるスバル、同ポジションのギンガ、ウイ
ングガードのエリオが、シグナムのシュランゲフォルム…蛇腹剣形
態…を中距離で足止め。

しているように見えるが本当は逆、足止めされているのはスバル、

ギンガ、エリオだ。

その足止めもそれほど長い時間ではなかった、だが…シャツハにそれで十分。

障害物など関係ないとばかりに、移動魔法…旋迅疾駆…により足止めされる3人の横、廃墟の残骸を通り抜け高速で一瞬でセンターガードであるティアナへ接近。

「烈風一迅！」

鋭い一振りでノックアウト、それに驚き隙を見せたスバルが、シグナムから

「飛竜一閃」

炎を纏った蛇腹剣の一撃で、此方も一発K・O。
自分達の陣形と動きを崩された残り3人も、次々と倒れて行く。

結果として、新人+1はぼろぼろにされ、シグナムとシャツハは物足りないと言う顔で、良彦とヴィータ、なのはとフェイトを見ている。

「と、とりあえず皆をシャマル先生の所運ばないと、ね、フェイトちゃん」

「そ、そうだねなのは、急ごう」

素早い反応で、離脱するなのはとフェイト。
残っているのは、良彦とヴィータ…顔を見合わせ。

「セピュロス、セットアップだ」

『了解、セットアップ』

「アイゼン、あたしもな」

『了解、セットアップ』

青と赤の髪、騎士甲冑に包まれた二人が訓練スペースに足を踏み入れる。

「負けた方が、今度ベルカ自治区の何時もの所でおこりな」

「良いだろう、此方も負けるつもりはないしな」

「へっ、今日こそ決着つけてやんよ」

「それは此方の台詞です、ペアマッチは毎回引き分けですからね」

良彦、シグナム、ヴィータ、シャツハが言いながら構える。

「両方のノックアウトか、1時間経過、周囲のレイヤー全部消えても終わりな…ノックアウト以外は引き分けだ」

「了解」

良彦の確認に3人が声を合わせる。

そして、模擬戦なのに死闘が始まるのだった。

結果は又も引き分け、時間ぎりぎりでお互いの切り札が炸裂する

が、それにより訓練スペースのレイヤー建築が全部消え去ったからだ。

お互いに相手を変え、時に1対2の状況を作り、中近距離での激しい白兵戦メインの模擬戦だった。

まあ、この組み合わせで遠距離がちやんと攻撃できるのはヴィータだけなので、当然の結果だが。

なお後に…六課解散後…この時の映像が一寸した理由で他の部隊などに流出するのだが、大半の近代ベルカ式の魔導師が、無理だろあれ、とか言っていたらしい。

また、スバル、ギンガ、エリオもこの時の映像を見て…スバル、エリオは頑張らなきゃと気合をいれ、ギンガは参考にする所は参考にし、無理な所はきっぱり諦めようと思ったらしい。

夜、良彦の部屋…良彦とヴィータ、セプテが風呂上りで、ソファに座り…一人肩に座っているが…ヴィータ作のバナライスを食べていた。

良彦は白いTシャツに青のショートパンツ、ヴィータは何時ものように髪を解き、良彦のTシャツ一枚、セプトはツヴァイから貰ったと言う寝巻き…基本青で白いリボンとかレースがついてる…を着ている。

「まったく、今回も引き分けか」

「これで、99戦全引き分けか、ペアマッチは」

「そんなになるのか…タイマンだと決着結構つくんだけどな」

「シグナムで3割、シャツハで4割だっけ、勝率」

「これでも上げてきたんだぞ、知り合った頃なんか暫く勝てなかつたんだからな」

「わーってるよ、頑張ったってのはよ」

珍しくヴィータが良彦の頭をなでる。

「ふん…ま、身体動かしまくったからアイスが何時も以上につめーけどよ」

一寸頬を赤くし、良彦が呟き。

「ふむ、烈火の将とあの双剣の騎士相手に、これだけできるなら問題はないだろう…あの二人は古代でも強者に分類されるぞ?」

セプトがゼピュロスから模擬戦…今までの分全部なので、映像で見せずデータでやり取りしたようだ…を確認しつつ、褒めてくれる。

「セプトもわかってんじゃねーか、もっと食べよ」

それを聞いて何故かヴィータが嬉しそうに小さな食器にアイスを乗せて渡す。

「む、これはすまん、ヴィータ」

それをおいしそうに食べて。

「昔は此処までの甘味は無かったからな、冷たくて甘いアイスは
我は好みだ」

普段比較的無表情なセプトが微笑を浮かべる。

「あー、リトもあんま甘いもんは食ってなかったみたいだな」

「うむ、あの時代、甘い物は贅沢品故な」

「そうなのか、あたしは覚えてねーんだけど…」

「ヴィータは良くリンゴみたいなのが好きで食ってたぞ」

「ああ、あの実か、あれは甘いからな、昔からヴィータは子供舌
だった訳だの」

「うっせ、ほっとけよ…ふう、ごちそうさま」と

ふと気付けば皆アイスを食べ終わっている。

「んじゃ、寝るか…セプトはどこにする？」

「ふむ…まだ、主ら番っておらんようだしヴィータのベットにす
るかのう、ロード良彦は寝相が悪い」

「おう、こいこい、歓迎すんぞ」

「悪かったな、それじゃ、おやすみな、ヴィータ、セプト」

言いながら、ヴィータにいつもの用にキス。

「ん、お休み良彦」

「ではの、ロード良彦」

3人とも寢室へ入り、直ぐに眠ってしまう…慣れていてもシゲナム、シャツ八相手では厳しかったようだ。

58：集う人々（後書き）

新人＋1への無茶振り（シグナム＆シャツハ）でした。

次回は、ユニゾン合戦模擬戦とか、面白いかなーとおもいます…相手はシグナムかヴィータで。

59：良彦&セプトVSヴィータ&ツヴァイ

シグナム&シャッハと新人+1とヴィータ&良彦が、模擬戦を繰り広げた次の日、エリオとスバルのこんな会話が交わされた。

「良彦さんとセプトって、ユニゾンするとどんな能力なんでしょうっ?」

「そういえば、気になるね…確かツヴァイ曹長とはやて部隊長、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長もユニゾンできるって聞いたし、そっちもどうなるんだろう?」

そうやって食堂でもりもり食事していると

「我とロード良彦のユニゾンか、説明より実際みるがはやくろくな」

「私も、構いませんよー、今日はヴィータちゃんが良彦さんといるはずですから丁度良いですしね」

二人揃って机の上で小さな食器で食事していたセプトとツヴァイがそついいい。

「面白そうな話やな、どうや良彦君、ヴィータ?」

聞いていたはやても振って来て

「俺は問題ねーぞ、ユニゾン状態での模擬戦もしたかったし」

「あたしも問題ねーな…良彦、負けたほうが今度夕飯おごりな、当然セプトでデザート美味しい所」

「おっけー、そっちも忘れるなよ、それ」

お互い言い合い、パンつと手を打ち合わせる、二人の肩にはそれぞれ、セプトとツヴァイが乗っかり、準備万端だ。

そのまま、海上訓練スペースへと場所を移す、新人+1となのは、はやてが見学者だ、他は捜査などで出かけている。

海上訓練スペース、今回の設定は森…まあ、空戦の二人なので、あまり意味はなさそうだが。

その真ん中で、二人がそれぞれ騎士甲冑に身を包んでいる。

「ゼピュロス、モードドライ」

『了解、モードノトス』

ゼピュロスの声と共に、魔力、風、どちらも良彦の周囲で圧縮されていく、外見の変化は今は見られない。

「どれ、ユニゾン…イン」

セプトの声と共に、青い光りに成ったセプトが良彦に吸い込まれる。

一瞬青く光り、良彦の外見に少し変化が起こる、髪は青のまま、少し長くなり、瞳は青と緑の虹彩異色、青の騎士甲冑は空色に、無骨な鋼色の籠手は金色に変化する。

「へっ、それが良彦とセプトのユニゾンか、こっちも行くぞツヴァイ」

「はいです、ユニゾン…イン」

白い光りになったツヴァイがヴィータに吸い込まれ、赤い髪が桃色に、赤いジャケットは白に変化する。

「準備おっけーだな、いっかセプト」

『うむ、同調のレベルも上々、問題はない』

「こっちもだ、ツヴァイ頼むぞ」

『はいです！』

青と赤の魔力光を引き、上空へ上がる二人、ある程度の高さで止まり、お互いに構える。

良彦は何時もどおり、左手を顔の前、右手を腰に。

ヴィータはアイゼンを下向きに構え、左手を前に出している。

「清風の騎士八坂良彦と北風のゼピュロス、そして融合騎セプトン トリオン」

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラフィゼン、そしてリイン フォースツヴァイ」

「いざ尋常に…」

「…勝負」

お互いの声と共に、同時に動き出す、お互いに一気に接近し…良彦は右掌打、その手のひらには目に見えて青い魔力と風が圧縮されている。

ヴィータはアイゼンを下から振り上げ、此方も赤い魔力をまとい、普段以上の威力を想像させる。

お互いに基本となる攻撃を…良彦は更に踏み込み、懐にはいりながら右手を振りぬきつつ、左手に風を纏わせて、『凧』の範囲に入ったアイゼンの先端を『弾く』。

ヴィータは今まで経験したより、『凧』の制動が強い事を感じながら、ツヴァイが強化した力を持って振りぬこうとしながら、良彦の左拳でアイゼンの先端の方向をずらされる。

が、その間に懐に飛び込んでくる良彦の右掌打を待っていたという感じで、自分の右手で『弾き』きってみせる…良彦と共に修行したヴィータは『弾き』『捌き』は身につけている、『凧』は無くとも、歴戦の戦士としての感覚が自分に迫る攻撃を察知させているのだ。

お互いの攻撃の軌道がそれ、一瞬ですれ違う、次の瞬間。

「『貫き！』」

「『フェアテ！』」

良彦&セプト、ヴィータ&ツヴァイの声が響き、一瞬青と赤が離れ、次には再び交錯する。

「風拳・嵐」

至近で風の刃を繰り出す良彦、普段以上の範囲威力の嵐が発生する。

「アイゼン」

『了解、ギガントフォーム』

ヘッド部分を巨大化させたアイゼンで、生まれる風の刃を叩き潰し、一瞬で切り返し、アイゼンを振りかぶり、振り下ろす。

「ちつ、重量があるから、なっ」

『じゃが、逸らせば問題なかるっ…烈風強化』

右拳に纏わせた魔力と風をアイゼンのヘッドに叩きつけ、『弾く』、普段より圧縮され威力が上がった烈風が巨大化したヘッドを回転させながらずらし、再びすれ違い一瞬距離が出来る。

「ここだ、コメートフリーゲン！」

『速度加速！』

頭大の鉄球に赤い魔力を纏わせ、ギガントのヘッドで打ち出す、普段以上の加速を与えられたそれが良彦に

「一点集中…」

『魔力、風圧強化』

不可視の『凧』が一瞬だが、コメントフリーゲンの着弾予想位置で青い光りを増す、其処へ予想通り着弾したその赤い魔力を相殺し、風が纏わりついて、動きを止める。

「さすがに、これは投げ返せねーな」

動きの止まった鉄球が地面に落ちるに任せ…

「セプト、『音貫き』から、『無風』を使う」

『…ロード良彦、できるのか？』

「多分一回なら、大丈夫だろ」

『判った、サポートはしよう』

セプトと言葉を交わす。

「ツヴァイ、良彦が全力で来るぞ、こっちも全開だ」

『はいです、反射速度強化、騎士甲冑出力全開』

ヴィータとツヴァイも次の一撃に全力を乗せる準備を行い。

「行く、ぞつ！」

『身体強化全開』

良彦の頭の中でスイッチが切り替わる、ゼピュロスがカートリッジを2発ロード…増えた魔力は良彦の身体強化に使われる。

純粋な体術で音を貫く…辺りがモノクロに見え、ヴィータの動きが遅く感じられる、其処へ近づき…目の前で『音貫き』は解け、瞬間移動したようにしか回りには見えなかっただろう。

そして、一切の前動作『無』しに振りぬかれる拳…足から腿、腰、肩、全ての動作が連動…がヴィータへ打ち込まれる、その拳と共に『風』が打ち込まれ、ヴィータの腹に当たる。

当たった腹から体内に衝撃が広がり、風がヴィータを吹き飛ばす。

だが、同じ瞬間…良彦がヴィータの目の前に現れた瞬間に、ヴィータも動いている。

魔力を込めたアイゼン…ギガントモード…に二人分の魔力が注ぎ込まれ、良彦を打ち据える。

『無風』に打たれながらも、ギガントハンマーをカウンターとして打ち込んだのだ。

結果として、ヴィータは吹き飛び何本かの木を折りながら地面に打ち付けられ。

良彦は真下に落とされ、地面にクレーターを作る。

お互いに、暫く動かなかつたが、少しして、立ち上がってくるが、ふらふらで…

「そこまでや、これ以上は危険そうやし、引き分けで終了やで」

はやての鶴の一声で模擬戦は引き分けとなった。

二人の中から、セプトとツヴァイがこれまたふらふらと飛び出してくる。

「ってー、つかあそこでカウンター選ぶかよ」

「おめえは、あれ使うとき正面からくるかな、それに『音貫き』の間は攻撃まで出来ねー、現れた瞬間にこっちも攻撃するくらいしか手がねーんだよ」

「しょうがねーだろ、攻撃まであの状態ですると負担大きいから、無茶になるんだよ」

「模擬戦でその無茶したら、ぶつとばす」

「だからしてねーだろ」

言い合いができるあたり、まだ元気ではあるようだ、お互い地面に衝突したがかすり傷程度だし。

「お二人とも、大丈夫ですか？」

「怪我とかしてませんか？」

ティアナとキャラロが心配してる中

「凄かった、ねー、エリオ」

「はい、一瞬の攻防の中、しっかりと鍛えられた技が、もう！」「スバルとエリオは興奮していた。

「なんていうか、接近されたら勝てないよね、あれ」

「そやね、ユニゾン状態ならシグナムやシスターシャッハでも勝

てるんちゃうか」

なのはとはやてがそう言い、苦笑している。

「あー…それは無し、自力で勝つから意味がある」

「ま、この修行バカはそういうよな」

「ともあれ、良いもんみだし、今夜は私が4人に腕を振るって美味いもんつくツたるわ」

良彦、ヴィータにそういつてくるはやて、それに喜ぶ4人、羨ましそうななのは、新人達は羨ましそうだが部隊長に強請るのも悪いかなと言つ顔、ギンガは良く判つてない。

「ま、当然みなにも一緒に作るよ、4人にはデザートのレストランアップで手を打ってもらつし」

その様子に気付き、そういうはやてに皆が喜んだ。

で、シャマルによる一応の検査と食事の後、良彦の部屋。

「ユニゾンで一番大きいのは、やっぱり『風』の強化なのか？」

ヴィータが何時もの格好で聞いてくる。

「だな、出力が全体的にあがるから、あの状態ならAランクくらいの砲撃まで防げるし、見せたとおりコメントくらいなら質量あつ

ても止められる、後は多弾着弾時にも相殺しきれ位か」

「なのはのデイバインシューター全弾とか、フェイトのプラズマランサー全弾とか…あとは108でよく受ける複数人数による集中射撃とかもか？」

「ああ、セプトが魔力、風の制御と、並列思考も強化と手伝いしてくれるんだ…まあ、前2個が出来ないとモードノトスは使えないんだよな、魔力増幅が強すぎて自分でダメージ食らう」

「だから、ノトス使わなかったのか」

「ノトスを使わぬ時に我とユニゾンしても余り効果はあがらんしな、精々風と魔力の制御率が数%上がる程度だ」

「そうなのか…お前らでフルドライブするとどうなるんだよ」

そのヴィータの言葉に一瞬考え

「『貫き』だけで、ガジェットは落とせるな、風の結界を強化してあのくらいなら切り裂ける」

「さらに『風』の効力もあがるの、恐らくAAランクまでなら砲撃対応できるじゃろう」

「はー、すげーな」

「とはいえ、できれば使いたくはねーな、疲れるし」

「うむ、数日動けぬようになるじゃろうしな」

「ああ、なんとなく判る」

苦笑する二人に頷くヴィータ。

「しかし、ヴィータも八坂流合気術の腕、上がったな」

「誰のせいだ、誰の」

「ま、おれだなー」

ぼんぼんとヴィータの頭を撫で

「全くだ、良彦に染められちゃったよ」

「いやか？」

「んなわけ、ねーだろ」

ころんと良彦の肩に頭を預ける。

「相変わらず、仲が良いな、主ら」

「セプトに隠す意味はないしな、言いふらす性格でもねーし」

「家族だかな、隠し事はいらねーだろ」

「では、ツヴァイともこういふ会話をしているわけだな」

「……………ストロベリーアイス」

「…もう一声」

「チヨコとバナラ」

「うむ、良かるう」

良彦とヴィータの提案に頷くセプト。

「…はあ、寝るか」

「うん、そうするか」

セプトも頷く、いつもより一寸長く、深いキスをして眠りについた…模擬戦で興奮していたらしい。

59：良彦&セプトVSヴァイター&ツヴァイ（後書き）

と言う訳で、カップルが対戦しました。

ちなみにセプトトリオンという名前は、北風の神の別名の一個です、それゆえ北風のセプトトリオンと付けてみました。

次回は地上本部公開意見陳述会辺りのお話になると思います。

60：その日機動六課

新暦75年9月11日、ユニゾンしての模擬戦から2日がたったこの日、地上本部公開意見陳述会警備のため、なのは、アイン、新人フォワードが地上本部に先入りすることになった。

「ほな、なのは隊長、アイン、ティアナ、スバル、エリオ、キヤロ、私らも明日には行くから頼んだで」

「了解、任せておいてね」

「了解」「了解」「了解」

「で、明日やけどシャマルとザフィーラは隊舎の警戒、良彦隊長とヴィータ、セプトは捕虜の監視警戒、フェイト隊長、ツヴァイはあたしと一緒に本部いきやで」

「はい、任せてください」

「了解した」

「あいよ、任せといてくれ」

「おう、任せろよ」

「了解、エリオ、キヤロ明日ね」

「了解しました」

呼ばれた順に答える。

その後、先入りのメンバーはへりで本部へ、他は休息と待機のために自室か仮眠室へ散っていく。

良彦、ヴィータ、セプトは明日朝一からの警戒の為、一旦自室へ戻った。

風呂に入り、早めながら寝室へ向かう。

「明日、あいつら助けにくるかな？」

「来る可能性は高いと思うな…予言の事もあるし、セインには少なくとも5人はその前に造られたであろう仲間もいるはずだし」

「うむ…なれば、探知型の『風』を張り続けるのも手じゃな」

「ああ、その予定だ、ヴィータ、セプト頼むぞ」

「おう、任せとけよ」

「うむ、ヴィータと我でしっかりロード良彦を守るつぞ」

良彦とヴィータがこつんと拳をあわせ、その上にぽんと小さな手が乗せられる。

「おっし、んじゃさっさと寝ちまつか、準備段階から警備してねーとだし」

「そうするか、ん」

ベットの縁同士に座り、ヴィータが目を瞑って良彦を待っている。

「ん、おやすみ」

そのヴィータに軽くキスし、髪をなでる。

「おやすみな」

ヴィータも満足したのかそういつて、微笑。

「これで番っておらぬのだから不思議よな」

セプトは苦笑し、ヴィータの枕の端に横になり、皆眠りに着く。

翌日、9月12日…おきて少し柔軟などして身体を温め、捕虜の3人の部屋へ。

「おいす、元気か？」

「……ん」

「健康ではあるよね」

「ってか、こんな所入れられて、気分はよくなーよっ！」

3人3様の反応、セインに関しては未だにバインドをかけられたままだ。

「いや、話さえすりゃ部屋出せるけど、はなさねーだろ？」

「……………」

「無理ですねー、事情がありますから」

「はっ、冗談じゃねーよ」

又3者3様：まあ、毎度こうなのだが。

「とりあえず、今日は俺らが監視だから何かあったら言ってくれ」

「だな、変な事すんなよ？」

そういつて、部屋の前の椅子に座り、ウィンドウを開く、地上本部公開意見陳述会の前だからか中継で本部が映し出されている。

582

数時間後、そろそろ陳述会の開始時間になる。

「んじゃ…ゼピュロス」

『了解、セットアップ』

「こっちもだ、アイゼン」

『了解、セットアップ』

二人が青と赤の騎士甲冑に身を包む、良彦は直ぐに『凧』を探知方に変更し、椅子に座ったまま動かなくなる。

隊舎内の人間と、直ぐ隣の部屋の3人、近くにいるヴィータ、セプトをきちんと感知している、その他の反応は今の所無い。

数分たった頃、部屋の中を歩く反応：トイレかと思っっていると同時、魔力反応、部屋の中と良彦がいる通路に突然大きな動体反応。

「なんだ、何か来てるぞ」

その声にヴィータがあたりを見渡せば、床に魔法陣、キャロのものと同じような…召喚のものか。

その中から、？型と？型が複数出現、AMFが共振しているのか、普段より強い。

「いきなり召喚だと、デバイスは持ってないはずだろ」

ヴィータの声に反応したのか？型が群れをなして向かってくる。

「なめんな、アイゼン」

『了解、ラケーテンフォーム』

「ラケーテンハンマー！」

回転と距離は短い、？型なら十分、近づくそばから破壊して行く。

『こちら隊舎警戒中のシャマル、外にガジェットの大群がきてます、総員警戒を』

「ちいっ…って、中から3人とも消えてる、しまった召喚できる

なら転送もっ！」

「とりあえず、この中のを片付けんぞ、数が多い」

「ああ、セプト援護頼む」

「任せておけ」

3人固まり真ん中にセプト、前後に良彦とヴィータ。セプトが、打撃強化と風圧強化をヴィータと良彦に掛ける。

何時もの如く良彦が前に出て、敵を翻弄足止めし、ヴィータの打撃で潰す、もしくはヴィータが射撃魔法で牽制した所を良彦の風拳で打ち抜く。

数分で建物内部の征圧は一旦完了するが、シャマルの連絡では外に大量のガジェットが来ているらしい。

「応援に行くぞ、シャマルとザフィーラだけじゃ辛そうな数らしい」

「おう、急ごうぜ」

「うむ、拙速に事を運ぶが良いじゃろう」

直ぐに外へ飛び出す、？型、？型、？型のガジェットが大量におり、その前方に人影。

緑色の何本もの光線が人影から放たれ隊舎に向かうが、ザフィーラの吼え声と共に巨大な盾が数枚現れそれを阻む。

「すまね、待たせたな」

「きたか良彦…ガジェットと恐らく戦闘機人であるうあの者の攻撃が重い、気をつける」

声を掛けるとザフィーラがそう答える。

「わかつ…ちいつ！」

頷こうとした瞬間、何も無かった場所へ拳を繰り出す…其処にはもう一つ人型、黒い甲冑のような外郭に紫のマフラー、先日見た召喚獣だろう。

「俺の相手はてめえってことかよ！」

受け止められた拳を引き、間合いを取りながらその場所を離れる。

「良彦っ！」

「まてヴィータ、シャマルと俺ではこの数は辛い、こつちを頼む」

「ちっ、わーってる、セプトあっち頼む」

「うむ、当然じゃ」

言いながら皆動く、ヴィータは空へ上がりシュワルベフリーゲンで？型、？型を潰し、ギガントフォーに変じさせたアイゼンでコマートフリーゲンで？型も潰す。

だが、数が多すぎる…広域破壊が得意な人間が此処にいない事が悔やまれるが、それでもヴィータは攻撃をつづけ、ザフィーラは防ぎ、シャマルはその二人を支援する。

そんな中良彦と、召喚獣は高速戦闘を繰り広げる、純粋な速さは召喚獣が、技量では良彦が上か、拮抗している。

腕を取ろうとすれば、その場所によっては刃が生える、生体武器を内蔵しているらしく、投げをうてそうにはない。

召喚獣の方も刃による攻撃、尻尾なども武器らしく繰り出すが、『凧』の範囲に入れば感知され、不意は撃てず『弾』かれ、『捌』かれる。

「（なんか、動きに本気をかんじねーな、時間稼ぎか）」

とはいえ、油断するわけには行かず、どうしても意識を召喚獣に持っていかれる。

セプトも良彦に支援魔法を使っているのだが、中々相手を圧倒とまでは行かない。

『ロングアーチより、報告、前線を抜けたガジェット多数が隊舎内に』

「くっ、とはいえ…こいつ行かせるわけにも」

振るわれた腕刃…二の腕に刃が生えている…を『弾き』ながら、数度の経験から大丈夫だろう場所をつか…む前に、腕が引かれる。

本能なのか、回避する動きに隙が少なく、人と構造が違うのか腕の引きが早い。

そんななか、緑の光線が盾を貫き隊舎へと直撃する、何本も放てるらしいそれがシャマルやザフィーラにも向かい、ザフィーラをしても過負荷に耐え切れなかったらしい。

「ザフィーラ、シャマルっ…っのお！」

召喚獣の攻撃をぎりぎりですり捌き…

『風鎖』

風を伴うバインドで縛りつける、その間に一旦距離をとり辺りを見渡せば、ヴィータが先ほどの人影と戦っている最中で…アイゼンを振るい光線を弾いた瞬間、何処から現れたかもう一人人影が後に持っている二本の刃でヴィータを叩き付け、地面に落ちて行くヴィータ。

「……………はっ」

真っ白になる頭の中、スイッチが切り替わる。

「人の女に何してくれやがる…んの、ぼけどもがっ！」

此方に距離をつめる召喚獣に向かい『音貫き』、モノクロスローションの中、一瞬で懐に入ると、『音貫き』を解除せずに『無風』…びきつと腕からはじけるような音がするが無視して放つ。

その速度に対応し切れなかった召喚獣は、打撃と風により一瞬で吹き飛ばされ、地面にめり込む。

「は、は…次はあっちか」

「ばか者！、自分で負担が大きいと言った技を此処でつこうてどつする」

「うるせー、いまは…あいつら」

ふらつく身体で二つの人影に向かい飛んで行こうとし、体力魔力の落ちた体が濃いAMFに耐え切れず、ゆっくりと地面に落ちて行く。

おちていくなかで、見えたのは？型に乗っているルーテシアという少女、2人の戦闘機人は空戦対応なのか空を飛び…そしてルーテシアの足元にいるヴィヴィオ。

「…また、かよ…守りきれな、かった」

「落ち着けロード良彦、連れて行ったという事は殺す気が無いという事、挽回の機会は来る」

「それ、でも…いや、あそこで冷静じゃなくなった自分の責任か…」

「そういう事じゃ、今はしばし休め、腕が逝かれておろつが」

「お見通しか…ユニゾンなしじゃ、あの連携は俺には荷が重い」

そういいながら、良彦の意識も暗闇に包まれていく。
遠く、何か巨大な気配と咆哮を聞きながら。

60・その日機動六課（後書き）

本部にはいかず、隊舎でルーテシア、アギト、セインの見張りでした。

今回は、病院での一幕辺りでしょうか、此処らへんは怪我人多いですし。

61：入院患者達

ミッドチルダ地上本部壊滅、及び機動六課壊滅した新暦75年9月12日から、1日。

地上本部ではギンガが、六課からはヴィヴィオがスカリエッティの手に者に連れ去られたのが確認され。

数人の軽傷者、重傷者が聖王教会系の病院に入院している。

軽傷なのは、良彦、ヴィータ、アイン、ツヴァイ、エリオ、シャルら、5人。

重傷なのは、スバル、ヴァイス、ザフィーラだ。

ヴァイスは元武装隊の経験を生かし六課内で拠点防衛するも、守りきれなかったらしい。

アイン、ツヴァイは地上本部に迫る、ゼスト・グランガイツ…その時点ではアンノウンだった…と戦闘、時間は稼ぐ物の、相手はアギトと合流、その後落とされたらしい。

スバルは敵戦闘機人と交戦、冷静さをかき、重傷をおった。

また、ロングアーチスタッフがぎりぎり持ち出したデータで、何故ルーテシアにデバイスがわたっていたのかも何となくだが判明した。

同じ時間、別の場所で、同じスタッフがカメラに映っていたのだ、証言からその時間にルーテシアの部屋には行ってない様なので、ルーテシアの部屋の前でカメラに映っていたほうが偽者だろう。

変身魔法か、そういった特殊能力を持つ戦闘機人の仕業だろう。

で、まあ…良彦はヴィータと同じ部屋に放り込まれている、理由の一つに放置すると修行を確実に始めるであろう事、確実に止める

にはヴィータ以外では無理な事が上げられている。

「とはいえ、これはねーだろ」

「そんぐれーでちよーどいいんだよ、おめえには」

右腕を完全に固定され、左手だけしか動かせない、足元には動きを抑える為か太腿とふくらはぎの辺りにベルト…トイレとかでは外してもらっ…が巻かれている。

まあ、それでも意識を取り戻して食事した後、腹筋とかしようとして、ヴィータにぶつたたかれたのだが。

「飯は左手で食いづらきゃあたしが食わすし、文句あつか？」

「其処に文句はねーが、さっきの話しをフォワードとかとしてーし、ザフィーラとヴァイスの見舞いはいきてー」

「ロード良彦は、動かんであると、気分が沈む性質じゃからな、そのくらいはよかるっよ、ヴィータ」

「ったく、しかし…アースラか」

「懐かしいな、あの船にや世話になつたかな」

先ほどはやてから、壊滅した六課隊舎の代わりに、廃棄寸前だった時空艦アースラを借り受けた事を連絡されたのだ。

「んじゃ、まずフォワード達の所いくか、ティアナとキャロは入院するほどじゃねーみたいだし、見舞いにでも来てんだろ」

ちなみにヴィータ自信は、背中に怪我はしたがそれほど酷くはない、入院とて良彦の監視メインだ。

「おう、足のこれ外してくれ」

ベルトを外してもらい、ようやく普通に歩ける、と嬉しそうな良彦だった。

フォワード達、というかスバルとエリオの病室、中に入ると丁度4人が、おやつを食べている所だった。

「よう、無事だったか？」

「おめえは、いきなりそんな事いつなよ」

バンと扉を開き一言、言い放つ良彦の後頭部をヴィータが突っ込む。

「よ、良彦三尉、はい、無事ではあります」

慌てるスバル、腕の動きなどがぎこちない事から換装したばかりか。

「僕もそれほど酷い怪我じゃありませんでしたから」

エリオは腕を吊っているが普通に動いている。

「私とキャラ口は、かすり傷程度ですし」

「はい、直ぐに治ります」

「きゅくるー」

ティアナ、キャロ、フリードが答える。

「そっか、なら良いんだが…スバル、お前も暴走したんだって？」

「あう…はい、ギン姉が血まみれで、其れで連れて行かれちゃつて」

「ああ、別にそれについて俺から言えることはねー、言えるのは」

「言えるのは？」

「お互い冷静さを欠くと、実力が発揮し切れねーよな、ってことかね」

スバルに行った後苦笑し、ヴィータを見る。

「スバルがギンガやられてんを見て暴走したみてーに、この馬鹿、あたしが落とされて切れたんだと」

「うむ、俺の女に手をだしやがって、などと叫んでおったな」

「って、其処までばらすなよ！」

「「事実だろ（じゃ）」」

ヴィータとセプトの容赦無いばらし行為に、フォワードも苦笑している。

「ま、でも…これできつちり実感出来たら、大きすぎる感情は力にもなるが、それは簡単に暴走もするってな、きちんと飼いならせば問題はないんだがな、ティアナみたいに」

「はい、実感しましただから、次はそんな事に成らないよう気を引き締めます」

ベツトの上で拳を握り締めるスバルの頭をぽんぽんと撫で。

「その息だ、皆も頑張れよ、態々連れてった以上次があるぞ」

「…はい」

「おめーもな、やられっぱなしでいる気ねーんだろ？」

続くヴィータの言葉に

「あたりめーだ、誰に喧嘩売ったか教えてやる…ま、まずは怪我をさっさと治すけどな」

「だったら、腹筋とかはじめようとすんな、ばかつ」

「ちよ、それはこいつらには黙っとけよ」

「いや、聞かせておいた方が良からう、主らロード良彦が修行…主らにはトレーニングといった方が良いか…を、病院内でしようとしたら我がヴィータに連絡せよ」

「了解です」「」

「ちょ、お前らまで、くツ、味方はいないのか?!」

だが、いませんでした。

で、場所は変わってザフィーラの病室。

中に入ると包帯を巻かれたザフィーラとそれを看病するシャマルがいた。

「大丈夫なのか、シャマル?」

「攻撃のほとんどはザフィーラが受けてくれたから、私は比較的軽傷ですんだの」

「ザフィーラ…さすが盾の守護獣、だよな」

良彦はシャマルに声をかけ、ヴィータはザフィーラの頭をなでる。

「ま、ザフィーラは大丈夫だろう、守護獣が主の危機に寝てることとはありえねー」

「そうだな、ザフィーラなら直ぐ起きてくるよな」

「でも、私達の再生機構なんかは、反応が落ちて…」

「んな事、ザフィーラには関係ねーって、決戦にはせってー参加

する、俺はそう思うね」

根拠無き断言をして、シャマルには苦笑されるが、ヴィータは頷いてくれた。

更に場所を移す…アインとツヴァイの部屋だ。

ツヴァイは本局のメンテナンス部のほうに行く前、一時的に此方にいるだけだが。

「む、マスターか…怪我はどうだ？」

「こっちの台詞だ、そっちこそどうなんだ？」

アインと良彦が言い合い。

「アインの怪我はそれほど酷くないです、一寸火傷しただけで」

「この馬鹿は、右腕の筋肉断裂だな、まあ治るのはそんなかからねーとよ」

ツヴァイとヴィータがそれに答える。

「なんでもオーバーランク騎士とやったんだって？」

「ああ、最初は何とか抑えていたのだが、あのアギトという融合騎が来てから、な」

「なんか突然でつかい火の玉作って攻撃しようとした所を、止め

ようとして、ゼストという騎士さんに落とされました」

「…それで火傷なのか？」

「騎士ゼストの攻撃は此方を行動不能にさせるだけの威力だった、近くにあった火の玉で火傷しただけだ」

「なるほど、その人の目的が判らん」

「本部を目指してたのは確かですー」

色々と疑問はあるが、それは追々解決するだろうと言う話で落ち着いた。

ヴァイスは現在、ミイラのように包帯に巻かれ、生命維持装置らしき物のコードがあちこちから飛び出しているような状態だった。意識は戻らず、脇の机には待機状態のストームレイダーが置かれている。

その様子だけみて、良彦、ヴィータ、セプトは部屋へ戻った。

良彦とヴィータの病室、部屋を廻ってすっかり遅くなったが夕食をとり、二人一緒のベッドに横になる。

「ロングアーチとかバックヤードスタッフは皆酷い怪我の人は居なくて良かったな」

「あたしらが時間稼いでたからな、退避が間に合ったらしい」

二人の枕の端ではセプトが既に眠りについている。

「決戦か…何処でどんな状況でも次は負けらんねーな」

「ん…あいつら人の大事なもんを奪い、傷つけやがったからな、やり返す」

向かい合い、こつんと額をあわせあって、目を合わせる。

「誰を怒らせたか…」

「…思い知らせてやる、ってな」

良彦、ヴィータが言葉を紡ぎ。

「んじゃ、まずは休養か、数日で魔法治療終わるしな」

「その間あんま動かすなよ」

「判ったって、約束する」

「なら、よし…ん」

「ん、おやすみ」

珍しくヴィータからのキスで眠りへと落ちていった。

61：入院患者達（後書き）

病院での一幕。

ルーテシアにデバイスを渡したのは、まあ変装が一番得意なドゥーエという事に。

次回はアースラ乗艦の辺りの予定です。

62：懐かしき場所／新たなる思い

六課襲撃から約一週間、軽傷者は皆退院し、病院に残っているのはザフィーラとヴァイスだけだ。

ヘリのパイロットはロンググアーチ通信士だった、アルト・クラエツタが行う事になった、ヴァイスの後輩だそうだ。

それと隊舎代わりに次元艦アースラをはやてが借り受け、そこを現在の機動六課としている。

此方の操縦は、やはりロンググアーチの一人だった、ルキノ・リリエだ、元アースラ所属の事務員で艦船操舵資格を所持しているらしい。

で、まあ…ザフィーラとヴァイス、本局へ精密検査に行っているスバル以外はアースラに乗り込んだわけだが。

「懐かしいね、これまた」

「だな、闇の書との決戦後暫く厄介になったからな」

「決戦か、あんときはやてに泣きながら抱きついてたよな」

「ばっ、うっせ、うれし泣きはしていいんだよ！」

「まあ、そうなんだが」

一寸赤くなるヴィータをからかいながら進み、会議室へ。

中には、フォワードの面々と、隊長陣、副隊長陣、グリフィス…グリフィス・ロウラン、レティ提督の息子で部隊長補佐だ…アルト

が既に揃っている。

「ちょ、おそいよ良彦隊長、ヴィータ」

「わりっ、一寸懐かしんでた」

「ごめんはやて、この馬鹿が遅いから」

「ま、ええわ…ほな、これからの話しや」

良彦とヴィータを座らせ話しだすはやて。

「地上本部襲撃に関しては本部側が仕切って、こっちには情報もくれへん、せやけど私らが追うんは、レリック事件の犯人としてのスカリエツィヤ、あつちとは関係ない」

一通り皆をみて。

「一度は出し抜かれたけど、次はそうはいかん、今度勝つのはこっちや、これ以上勝手はさせへん、皆いいか？」

その言葉に皆力強く頷きを返す。

「そしたらフォワード陣はいつでも出れるように待機、ロングアーチスタッフは情報のまとめと、指示だしや、相手の次の動きに直ぐ動けるようにな」

はやての指示で部屋を出る面々、残るのはフォワードメンバーだ。

「どうした、体休めねーのか？」

出る前に気付いた良彦が声を掛ける。

「あ、いえ、今度戦闘機人とあつたときの作戦を」

「ふむ……そいや、エリオとキャロ、スバルの事は聞いたんだよな？」

「はい、聞きました」

「どう思った？」

「えっと、難しいんですけど…向こうの人達も、感情とかあるのかな、って」

エリオとキャロが答えてくれる。

「だな、セインとは何度か話したが普通に感情があつた、六課を襲つた奴らは抑制されてるのか感情が今一感じられなかつた…てことは、ある程度の洗脳みたいなのを受けてる可能性がある、さてどうする？」

「できる限り保護します、戦闘機人でも普通に生きられる事を知ってますから」

良彦の問いにティアナが答え、そこへ

「なら、良く相談しとけ、一番戦闘機人と交戦してるのは多分、お前らだ…お前らを先に狙ってくる可能性も高いからな」

ヴィータが言い含める。

「んだなー…俺らも手が足りてれば助けにいけるけど、次は前回以上に大きく動くだろうからな、自分の相手は自分で保護なりしてやってくれ」

苦笑交じりに良彦が、言って部屋を出る、その背中に

「『了解』」

と声が掛かる。

アースラ食堂の一角、良彦とヴィータ、セプトが座ってお茶を飲んでる。

「次やばかったら、ユニゾン早めに頼むなセプト、AMF濃いとどうしても『凧』が鈍る」

「うむ、任せておけロードを助けるが、融合騎の仕事ゆえな」

「あたしが近くに居ない時はセプトが頼りだかな」

3人でそんな事を言っていると、艦内に一斉通信が流れる。

地上本部肝いりのアインヘリアル…魔導師に頼らない対犯罪者用の兵器らしい…の、1〜3号機が戦闘機人により無力化され、破壊されたと言う報告。

さらに、ヴェロツサからはスカリエッティのアジト発見の報告と、そのアジト近くから飛び立った巨大艦船の報告が送られてくる。

以前ユーノが調べてくれていた、『聖王のゆりかご』と呼ばれる古代ベルカの超兵器だろう、これについてはカリムの予言から一応は気にされていたが、実際に出て来たのには驚いた。

ユーノの調べでは、軌道上のあるポイントまで上がると地表攻撃や、もしかすれば次元跳躍攻撃も可能で、1隻で次元航行艦隊とも遣り合える可能性があるそうだ。

「…でけーな、ありゃ」

「ああ、でけー…でも、上がらせちゃ、まずいんだよな」

ウィンドウを見ながら呟く良彦とヴィータ、そこでウィンドウの映像が切り替わる。

スカリエッティが映り、『聖王のゆりかご』の復活を宣言し、さらにゆりかごの内部か、豪華な椅子に座ったヴィヴィオが映る。

ヴィヴィオは泣き叫びながら腕を椅子にロックされ、魔力を吸われているのか腕の上辺りに球体が2つ浮いている、そのそばには眼鏡をかけ、戦闘機人のスーツに身を包んだ女性と。大きな砲塔を近くに置いた女性がチラッと映る。

「趣味がわりー…な、こりゃ」

「やるー、こんな事の為にヴィヴィオをつれてったのか」

映像の中では、ヴィヴィオを【聖王】と呼び、その復活もうたっているようだ。

「行く場所は決定だな…」

「…ああ、あの船を止めて、あいつらぶちのめす」

良彦とヴィータ、顔を、見合わせ頷く。

「我もあれは気に入らんな、全力でロード良彦の力になるっぞ」

「ああ、頼む」

セプトも憤慨しているのか、画面を見ながらぎゅっと拳を握っている。

『六課各員、出撃準備や』

『地上本部にも戦闘機人反応が複数向かっています』

ロングアーチ…はやて、シャーリー…からの連絡。

『地上の戦闘機人は、フォワードメンバーいけるな?』

『『『『はい』』』』

いつの間にかスバルも来ていたらしく4人の声が返事をする。

『スカリエッティのアジトはフェイト隊長、現地のアコース査察官と協力してあたってや』

『了解』

フェイトが即座に答え。

『本部の空域はシグナム、アイン、ツヴァイ任せるわ』

『心得ました』

『了解、今度はおちない』

『了解ですー、任せてください』

シグナム、アイン、ツヴァイが返事をする。

『ゆりかご突入は、なのは隊長、良彦隊長、ヴィータにセプト、任せてええか』

『うん、任せて』

『おう、ずばっといって…』

『…どかんと潰せば良いんだろ』

『任せるが良い、ロードと共にある融合騎がどのような物かみせよ』

なのは、良彦、ヴィータ、セプトが頷き。

『私はゆりかご周辺の指揮や、こっちの指揮はグリフィス君頼むで』

『はい、お任せください』

『ほな、機動六課… 出撃』

『了解!』

全員の声が重なり、皆が動き出す。

目的は事件の解決、その一点。

62：懐かしき場所／新たなる思い（後書き）

出撃直前までの様子です、あんまり出てなかったロングアーチスタ
ツフの説明を一寸だけいれました。

今回は出撃時の会話と、ゆりかご突入時の辺りに成るとおもいます。

63：出撃ノ突入

フォワード4人は、ヘリに乗り出撃準備、空戦可能な隊長、副隊長、セプト、アイン、ツヴァイは下部ハッチから直接発進する。

「ほんじゃ、リミット解除よろしくな、はやて」

「いま、カリムとクロノ君に頼んだよ」

そういいながら、良彦、ヴィータ、セプト、なのは、フェイト、はやて、シグナム、アイン、ツヴァイが、下部ハッチから飛び出していき、空中でリミッターが解除される。

同時に、皆がそれぞれの魔力光に包まれて、その光りが消えた後には魔導師はバリアジャケット、騎士は騎士甲冑へと姿を変えている。

「うっし、全開でいけるな…っつても、無理すんなよ、なのはとフェイト」

「ちよ、何で私とフェイトちゃんだけ？」

「そうだよ、良彦だって無茶するくせに」

「お前らのフルドライブが、一番負担大きいだろうが、特になのは」

「そ、それはそう何だけど…よしくに言われるのは納得いかな
いよ」

「あ、でも、確かなのはのは危ないよね、使っなって言ってもダメだろうから、できる限り短時間でね?」

「うう、わかったよフェイトちゃん、よしくん…味方はいなかったんだ」

と、そんな会話をしていると。

「さて、そろそろ別れんといかん場所や、漫才はそこまでにしてや」

「漫才じゃないよう」

「はいはい、それじゃ、フェイトちゃん、アジト頼むで」

「うん、はやて」

「シグナム、アイン、ツヴァイ、地上本部上空は任せたで」

「はい、全力にて」

「了解、主の名にかけて」

「はいです」

「なのはちゃん、良彦君、ヴィータ、セプト、内部制圧よろしくな」

「うん、任せて」

「おうさ、今回は最初から全開だ」

「任せとけ、最初にあたしが全部ぶっ壊す！」

「よし、ほならいくで皆！」

「おう！」

全員の声が重なり、魔力光を引きながら速度を上げ飛行する。途中、一旦なのはが止まり。

「エクシードモード、ドライブ！」

『了解、エクシードモード』

一瞬桃色の魔力光につつまれ、昔のようなバリアジャケット…普段はスカートが少し短かったのが、ロングに…に包まれ、速度をあげ、良彦とヴィータに追いついてくる。

「こっちもいくか、セプト」

「心得た、マイロード」

「ゼピュロス、モードドライブ」

『了解、モードノトス』

「ユニゾンイン！」

あふれ出る青い魔力光のなか、セプトが良彦とユニゾンする、髪

が少し伸び、瞳が青と緑の虹彩異色、騎士甲冑は空色に染まり、籠手は金に輝く。

「おし、いくぜ」

ぐつと力を入れなおし、ヴィータ、なのはと並んで飛行する。

「まず、突入口を見つけてくれるまで、ゆりかごから出てくる？
型を相手しよう、よしくん、ヴィータちゃん」

「ああ、とはいえ…こいつら俺だと相手しずれーから、防御は任せて、射砲撃よろしく」

「おめえは、ホント遠距離だめだよな」

「無差別でいいなら、あたり一体潰せるぞ」

「ダメに決まってるんだろ、大人しく護衛してろ」

「あいよ、なのはも防御は考えず、ばんばん好きに撃てよ」

「うん、遠慮はしないよ！」

なのは、ヴィータが射砲撃の準備をしながら飛行するなか、良彦は離れすぎないように辺りの？型の動きをみて、攻撃がくればシールドなりで弾いていく。

そして、？型を潰しながらも此方も突入口を探しながらしばし、連絡が入る。

『突入班が、入れそうな場所みつけたそうや、至急むかってや』

「だどよ、いくぞ」

「おうよ、なのはも」

「うん、いこう」

青、赤、桃の魔力光が指示の合った場所へいけば、航空隊の隊員が数人、ゆりかごの外壁に空けた穴の前で3人を待っている。

「高町教導官、こちらです、既に数人が突入しています」

「うん、ありがとう、私達も突入します」

「あんがとよ、さっさと行って…」

「…さっさと終わらす！」

3人がその穴からゆりかご内部へと入る、ゆっくりと降下するなか、AMFが強まっていき、一瞬飛行魔法が乱れるが、3人とも少しに集中で立て直す。

「AMF濃いな此処…めんどくせー」

「言っても仕方ねーだろ、サーチャー出して、内部解析してもら
うぞ」

「そうだね、できる限りだしとこう」

3人がそれぞれ青、赤、桃の小さい球体を辺りに飛ばす、自動で

データを収集してくれるものだ、先行している隊員も出しているだろうから、内部構造は近いうちに連絡が来るだろう。

「とりあえず、中にもいるみてーだし、掃除しながら行くぞ、グイータ」

「おう、良彦、なのはは消耗おさえとけよな」

「でも…」

「なのはは、ヴィヴィオ助けるのに余力のこしとけよ、フロントアタッカーの仕事させる」

「そういうこつた、あたしらは他のメンバーの消耗を抑えるのも仕事のうちってね」

湧き出てくるような、？、？型に青と赤のコンビが突撃する、流れるような連携でガジェットを寄せ付けず、先へと進むのであった。

63：出撃／突入（後書き）

特に大きく違う点はありません、地上上空にアイン、内部に良彦&セプトがいる程度です。

今回は、内部決戦（良彦の）の辺りでしょうか。

64：決戦

『聖王のゆりかご』突入から暫し…なのはの消費を抑える為、良彦とヴィータが中心になり、？型？型の混合部隊を打ち倒していく。良彦が前に出て、ある程度の数を纏めて『風鎖』でバインド、そこをヴィータがシュワルベフリーゲンで破壊。

二人揃って走りこんで？型の下に潜り込んで、下方からアイゼンでの打撃、もしくは良彦の風拳・一刃での斬撃で破壊される。

なのはもディバインシューターを放ち援護してくれる。

「しかし、結構多かつたな此処まで」

一旦ガジェットが途切れ一息つく良彦。

「まったくだ、何処から湧いて来るんだこいつら」

ヒュンツとアイゼンを担ぎなおしヴィータ。

「二人とも飛ばしてたけど、大丈夫なの？」

心配そうなのは。

「これくれーなら問題ねーな、日々の積み重ねがあらーな」

「あたしも良彦と一緒に体力づくりやら、魔力の限界使用やら、やってるしな」

それを軽く吹き飛ばすように、良彦とヴィータが答える。

「あはは、そんなトレーニングしてたんだ」

「まあ、騎士たるもの、己の武に対してこだわるなら、最後には魔力が無くても戦える位の力が無いとな」

「とはいえ、できればその最後に行くまでの時間は長くしてーかな」

なのはに、再び良彦とヴィータが答え…外部、シャーリーからの連絡。

『内部構造が判明、駆動炉の場所と、ヴィヴィオがいる場所を示します、そのほかはジャミングなんかは酷くて細かくは判りませんでした』

ウィンドウの半分にゆりかごの内部構造が表示され、駆動炉とヴィヴィオのいる…どうやら聖王の間と言う場所…が示される。

「ふむ、んじゃ…ヴィータ、頼む」

「あいよ、なのは周囲警戒だ」

「あ、え、うんわかった」

ふつと目を瞑る良彦に、当たり前のように辺りを警戒し始めるヴィータ、なのはもそれに続く。

「セプト、『凧』探知モードで、できる限り大きくするぞ、AMFにまけねーようにな」

『うむ。心得ておる』

目を瞑っている良彦から、緩やかな風の流れが辺りを満たしていく、普段より展開速度が速い感じがする。

風は広がり、そしてそれに当たるものを良彦に教えて行く。

「駆動炉のほうは、ガジェットばっかだなかなか多めだ…ヴィヴィオの方は、ガジェットと多分これ戦闘機人かな、人型が一人」

『確かにあるな…む、これは…』

「…風が途切れるな、AMFが更に濃いのか、ってことは…此処にも何かあるな、こりゃ」

そういうと、ゆっくりと風は収まり目を開く良彦。

「さて、どうする？」

「駆動炉はあたしがいく、破壊と粉碎、それがアイゼンの得意技だ」

良彦の問いにまずヴィータが答え

「んじゃ、俺はこの濃いAMFの所だな、ある程度の相手なら何とかできんだろ」

更に良彦が提案し

「そつち任せていいなら私はヴィヴィオの所へ」

「おう、任せとけよ、きっちりかつちり落とし前付けさせねーとな」

「だな、それじゃそれぞれ目的を遂げたら脱出だ、また外でな」

最後に言ったなのは、良彦、ヴィータが拳を突き出し…3人で拳をあわせ。

「おっし、いくぞ！」

「おう！」

「うん！」

掛け声と共に、それぞれの方向に向かい飛び出していく。

ユニゾンしたセプトと共に、無数ともいえるガジェットの中を、時に駆け、打ちぬき…時に翔け、切り裂く。

対多数の技をほぼ持たない良彦…リミットブレイクすれば少し違うのだが…縦横無尽に空を床をかけ、一撃の下に？型？型を破壊して行く。

「ホント、何処に乗せてんだこれ」

『飽きるほど沸いてくるのう』

少し疲れたのか、愚痴のように吐き捨て、今も？型を『風拳・嵐』

で内部から破壊していく。

それで、近くにいたガジェットが一段落したらしく、一瞬の静寂……此処まで数十分、AMFが異常に濃い部屋、というか空間、まではもう少しのはずだ。

「もう一頑張り、いくとしまっ！」

『ロードッ！』

掛け声をかけようとした瞬間、『風』を後から襲う感覚に、無意識レベルで身体が反応……足を一步踏み出し、身体全体を回転させ、『捌く』。

振り返り、見え始めたのは、両手に刃を持ち、胴体は多脚に支えられ、頭のような場所に目のような切れ込みの入ったガジェット……思い出す、かつて自分となのはを貫いた、アンノウンを。

そのガジェットが、いつの間にか良彦の背後と言わず、前方にも溢れている。

恐らくは光学迷彩に動作音も抑えられているのだろう、隠れている間は。

目に見えるようになってからは恐怖を煽るように足音が響く。

「そういつ、事がよ……あんときのもてめーらの仕業か……丁度いい意趣返しだ……全部ぶっ潰す」

が、そんななか、良彦を取り巻く風は強さを勝手に増して行き。

「セプト、ゼピュロス……ブレイク！」

『心得た、思う存分ゆけい！』

『了解、リミットブレイク…スタート』

セプトの掛け声、ゼピュロスの何時もの冷静な声と共に、魔力も風も良彦を取り巻いて暴れ出す。

良彦のリミットブレイク…『千風』モード…は、本人の意思により、時に刃、時に嵐に、時には風塊へと姿を変え、本来『凧』の感知、迎撃に使われる並列思考…数十発の射撃魔法を相殺できるレベル…が攻撃へとその大半をまわされる。

結果として、この状態の良彦に近づけば…この時はガジェット相手なので遠慮などは一切ない…風に切り裂かれ、吹き飛ばされ、床に叩きつけられ、無残に周囲に居たガジェットが破壊されていく。

「セプト、『貫き』！」

『おうさっ、風速加速、飛行速度加速』

更にその状態で、高速飛行…普段でさえ、軽い射撃呪文程度はじく風の境界が、今は通り過ぎる場所をなぎ払っていく。

が、当然魔力も体力も今までより飛躍的に消費して行く、ただでさえこの先は来いAMF空間、どんどんと魔力は消失して行く。

「これで…ラストオ！」

轟っという風の塊が、新型のガジェットを床に叩き付け、潰し、爆発する。

それとほぼ同時、強く吹いていた風が収まり、良彦も大きく何度も深呼吸している。

「さすがに、このAMF下だときついな」

『そうじゃな、じゃが相手も打ち止めらしいのう』

「なら、さっさと終わらせるか、さっきから船に振動が走ってる… ヴィータとなのはも派手にやっつてそうだ」

『確かに、急がねば遅刻になりそうじゃ』

セプトとそんな軽口を言い合いながら、進んで行く。

たどり着いた其処は広い空間、良彦の足元から、薄いガラスのよ
うな足場が真ん中まで続き、そこに一人の女性が立っている。

付いたときに、眼鏡を外し、纏めていた髪を解いた女性が、此方
を見て、にこりと笑う。

「こんな場所まで用こそ、清風の騎士さん… ですが、此方に一人
出来てよかったですか？」

そう言いながら、見せつけるように幾つものウィンドウをこちら
に向ける。

フォワード陣は分断され、ティアナは1対3、スバルはギンガと、
エリオ、キャロはルーテシアとその召喚獣と戦っている。

シグナムは以前本部に向かっていた、騎士ゼストとツヴァイとユ
ニゾンして戦い、アインは？型を相手取る。

フェイトはスカリエツティと、戦闘機人2人と戦っている。

なのはは、恐らくヴィヴィオなのか、青い騎士甲冑をきた、虹色
の魔力光を持つ少女と相對している。

ヴィータは駆動炉に向かい、巨大なドリルの付いたアイゼン… ツ

エアシユテールングスフォルム、ギガント状態のアイゼンにドリルと噴射口が付いたヴィータのリミットブレイクだ…で、駆動炉を破壊しようとしている。

「…んで、なにが、こつちきてよかつたなんだ？」

「皆さん苦戦してらっしゃいますよ、それに」

踏み込んだ瞬間、ユニゾンが解除される…この空間のAMFはほぼ完全に魔力を無効化しているらしい。

「そんな状態で此処に来て、何が出来ると？」

その相手の問いに、苦笑を浮かべながら

「そうだな…順番に答えるか…まず、フォワードも他の奴らも、これくらい自分で何とかする、其処に関して俺には疑いは無い」

言ってるそばから、フォワード陣の決着が付いていく…3人の連携を崩しティアナが残る一人にクロスミラージユをつき付け、スバルはA・C・Sからディバインバスターをギンガに決める。

エリオは黒尽くめの召喚獣をシグナム直伝の紫電一閃で下し、キヤロは龍をよびルーテシアの巨大召喚獣を倒す。

フェイトは、エリオとキヤロの言葉に、力を貰い、リミットブレイク…ライオットザンバー…をもって、戦闘機人とスカリエツティを無力化。

ヴィータが最後の力ではなった、ツェアシユテールングスハンマーはアイゼンを破壊しながらも駆動炉に一点のヒビをつくり、そこに駆けつけていたはやてがそれを広げ、破壊する。

「ほらな、言っただろ…俺の応援は別にいらねーって、なのはも負けねーよ、アイツはやるよとなったら無茶を通すからな」

いいながら、ガラスのような足場をとんとんと足で鳴らし、にやりと笑う。

「…それでも私がいれば、新しいドクターと共に、この星をすばらしい場所にできますわ、魔法も使えない貴方には止められない」

言葉と共に、？型が数機、下から上がってくる。

「まあいいけどね…で何ができるか、だっけ…教えてやる事が出来るぞ」

「何をですか」

「お前らが…」

言葉と共に、良彦の頭の中でスイッチが切り替わる…『音貫き』、モノクロでスローモーションになる景色のなか、走り、相手の目の前に立つ。

「何で、負けるか…なっ！」

「なっ、いつの間に、魔法もつかってっ」

相手が何か言う間に、一切の前動作が『無』く、打ち抜いた後に拭く『風』だけが、それを示す…八坂流合気術の最奥、『無風』、肉体の力のみで放たれた場合、相手の体内に振動を与え、その振動

は全身を脳を揺さぶり、無力化する。

「お前ら、人を舐めすぎだ、人の心とかをな」

「あが、ぐっ…らくえん、が…ドクターとの、世界が」

戦闘機人といえど、内蔵はあるし脳もある、それを揺さぶられれば…結果、相手は床に倒れる。

ほぼ同時に、ウィンドウの中では、リミットブレイクした…ブースター？まで開放したであろう…なのはスターライトブレーカーが、ヴィヴィオを打ちぬき、融合していたレリックを破壊、ヴィヴィオの姿が幼子に戻る。

それと同時にガジェットが停止していく。

艦内には非常事態の放送がながれ、魔力結合が一切出来なくなっってしまった。

緊急隔壁もしまり、困っている所を、戦闘機人モードのスバルと、バイクに乗ってきたティアナに助けられたのは、まあご愛嬌。

スカリエツティとその戦闘機人、ガジェット、ルーテシア、アギト…とりあえずは全てを逮捕、保護、騎士ゼストと戦闘機人一人が死亡となった。

64：決戦（後書き）

と言うわけで、最後は肉体言語でした。

次回は、決戦のその後です、今回出来なかった分いちゃいちゃさせられればと思います。

65：アースラにて

『聖王のゆりかご』は軌道上に上がった所を、待機していた次元艦隊の一斉射撃で、しつかりと破壊された。

その頃、機動六課の隊舎代わりになっているアースラでは。

「……ヴィータ、お前それ大丈夫なのか？」

「ああ、動ける程度には回復してるって、おい良彦何処いくんだ？」

「一寸、スカリエツティ殺って(とって)くる」

「まてまて、折角生け捕りしたのに、何言ってるんだお前は！」

飛び出そうとする良彦を抑えたのはシグナム。

「落ち着け、我らは弱くなったとはいえ、主からの緊急再生機構がある、まだあれくらいなら、大丈夫だ」

「って、いつでも…俺となのは、そこに今度はヴィータが、だな」

「そういうのは嬉しいけど、落ち着けよ、傷はのこんねーし、問題ねーんだって」

シグナム、ヴィータ二人に止められ、渋々諦めたように力が抜ける、其処へ

「それにな、良彦君…折角やし今回の治療の時前言ったこと、

しとこつとおもてるんや」

それを聞いた良彦は、はやての方にざざっと近づき

「本当か、はやて？」

「ほんまや、怪我治すのと一緒に一部書き換えやね」

「…ま、まあそれなら」

「なあ、はやて、前言ったのってなんだ？」

そう聞かれるとはやては、人の悪そうな笑みを浮かべて

「それは良彦君からきいてや、私からは恥ずかしいわ」

と、良彦に振ってくる。

「良彦、なんなんだよ、なあ」

「そ、それは…後で部屋で話すから、此処じゃ簡便してくれ」

「…むう、絶対だかな！」

ともあれ、一旦はそれで落ち着き、会議室へフォワードメンバーは集合になった。

会議室には新人4人と、隊長、副隊長、セプト、ツヴァイ、グリ

フィス、シャーリーなどが席に着き、はやてが話したすのをまっ
ている。

「集まってくれてありがとうな、今回のレリック事件の方もこれ
で一段落やし、今度時間見てそれぞれ休暇だすからな」

その言葉に、皆頷き、休暇の事については嬉しそうだ。

「それと、六課隊舎の修理もはじまつてるんや、そっちが直つた
らこっそりパーティしようと思つとるんや、楽しみにしてな」

「料理は、六課の料理人と、俺とはやてか？」

「せやね、久しぶりに料理とかしたいわ」

良彦の問いにはやてが笑いながら答え。

「それじゃ、一寸真面目な話しに移るよ」

はやてが、一旦そういって、真面目な顔になる。

「まず、スカリエツティとナンバーズについては、これから事情
聴取とか、色々な手続きがある、それにシグナムが預かった騎士ゼ
ストが集めた事件データも解析やね」

「そこ等辺は、私とシャーリーの専門かな」

フェイトが言って、シャーリーも頷く。

「うん、基本はお任せするわ、ティアナも訓練無い時間なんかは

てっだつてな」

「はい」

ティアナの返事に頷き

「それと、ルーテシアとアギトなんやけど…あの二人の扱いは、今のところ保護扱いやね、ルーテシアは精神操作やら、されとつたし」

「騎士ゼストからも、二人を頼むと言われている」

はやて、シグナムがそういつてくる。

「それで、ヴィヴィオなんやけど、経過観察と健康診断やね」

「うん、それで、ヴィヴィオを本格的に引き取ろうとおもったけど」

「ええと思うよ、ヴィヴィオも喜ぶんやないかな」

「だな、というかそれで無茶が減りそうなのありがたいな」

「ちよ、よしくん、無茶とかして「ブラスター」までつかってか？」「はい、すみません」

「というか、良彦君も、なのはちゃんも、ヴィータも、突撃組みは無茶しすぎやー！」

なのはをからかったら、はやてから反撃を受けた。

「つつても、あの状況で、あんな相手じゃなあ、ヴィータ」

「そうだよ、最後の方出てきたの、良彦となのはを落とした奴だつたんだぞ」

「まあ、きもちは判る、でもリミットブレイクで、ヴィータはアイゼン壊して、良彦君は最後魔法つかつたらんやんか！」

「「すいません」」

はやての剣幕に思わず謝る、青と赤。

「まあ、ええわ…ともあれこれから暫くは後処理と、六課隊舎復旧の方が忙しくなるからな、がんばっていこや」

「はい（おう）」

全員の返事が重なり、それぞれ部屋を出て行く、所で良彦がシグナムを引き止める。

「シグナム、一寸良いか？」

「どうした、良彦？」

「アギトなんだけど、ユニゾンしたってホントか？」

「ああ、騎士ゼストから託され、大量の？型が降下して来たときな」

「それで、どんな感じじゃった？」

「そうだな…不思議と懐かしく、心が安らぐ気がした」

「そうか…ならば、あの者も間違えなさそうじゃな」

「だな…シグナム」

「どうした？」

「前に話したかもだけど、アギトは元々シグナムの為の融合騎だ、リトの記憶でセプトと一緒にメンテナスに出してたのを覚えてるから、ほぼ間違えないと思う」

「いかようにしてか、今まで残っていたようじゃな、我もだが稀有な事よ」

「そうか、それ自体は私はどちらでも構わないと思っている、今の私はアギトに見張られる身だからな、騎士ゼストとの約束を守るために」

その言葉に良彦もセプトも苦笑し。

「そっか、まあ一緒に居られるようにするんなら悪くは無いだろ」

「じゃな、呼び止めてすまなんだ」

「いや、構わない、ではな」

そういって、シグナムも立ち去り…残っているのは良彦とセプト

…と、扉をでたらヴィータがまっていた。

「さて、部屋戻ってはなそうぜ、良彦」

「覚えてやがったか」

「あたりめーだ、いくぞほら」

「我は暫し外そう、デリケートな問題ゆえな」

セプトはさつさと飛んでいってしまい、ヴィータに引きずられ与えられている部屋へ連行される。

で、アースラ内の二人の私室に来たわけだが。

「ほら、ちゃんと見えよ」

「…わかったって、一寸待て、今落ち着く」

冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出し、飲み干して深呼吸。

「よし、いいか良く聞けよ」

「おう、言ってみる」

「はやてに頼んだのは…ヴィータが子供できるように、だ…
してもらって事を頼んだんだ」

「…は？」

「だから、戦う存在として、そういう部分が抑制されてるんだよ、それを直して、その…できるようにして欲しいって頼んでたんだ」

「…おまつ、それって」

「ずっと二人でもいいけど、欲しいだろ、子供」

「ばっ、何であたしに先に相談しねーんだよ！」

「恥ずかしいだろうが、流石に！」

「あたしだって恥ずかしいっての、ばっ」

久しぶりに脛蹴りが炸裂する。

「いてーって、何かあるとそれだな、お前は」

「うっせ、何度も同じ事繰り返させんのはためーだろ！」

げしげしと何発も蹴り、落ち着いたようだ。

「はあ、はあ…とりあえず判ったけど、何時からそれ言ってたんだ？」

「一応婚約してくれた時だな…はやてにえらくからかわれた」

「…1年一寸か…はあ、そっか、子供…」

一寸赤くなりながら考えるヴィータ。

「ま、まずは結婚からだけだな、来年6月だから、準備始めねー
とってはやてとか桃子さんが言ってたし」

「ん…そいや、披露宴は両方でやるとかいつてたよな」

「地球とミッドでな、両方出るのが何人が居るけど、基本はどっ
ちかだな」

「そっか…うし、良彦、六課での仕事きっちりこなして、文句出
させずに結婚するぞ」

「ああ、当たり前だったの」

ぼんぼんとヴィータの頭をなで、抱きしめる…この後仕事が無け
れば、ゆっくりできるのにとか思いながら。

65：アースラにて（後書き）

グイータというか、守護騎士がそのままでは子供できないんじゃないかな
いかと言つのは、書いてる人の想像です、公式ではありません。

今回は隊舎が直った頃辺りを書こうかと思えます。

66：六課復帰／それぞれの休暇

新暦75年11月頃、機動六課隊舎も復帰し、事件後のどたばたも少し収まってきたころの事。

新人4人の訓練は相変わらず続き、次の段階へと進んでいっている。

「しかし、あいつらも結構動くようになったな」

「そうじゃなきゃ、こつちが困るっつーの」

「あはは、模擬戦でも結構粘るよね、今度はどうしようか？」

「んー…厳しい現実を教えるということで、海上隔離施設の砂浜をかりて、俺とセプト、ヴィータとツヴァイ、シグナムとアギト、全部ユニゾン、と3対4、実質6対4とか？」

「おー、それは面白そうだな」

「流石にダメだつてば、卒業間際なら、まだしもまだ早いかな、できればギンガも呼びたいし、そういう事なら」

良彦とヴィータの悪乗りを、なのはがたしなめる。

「んじゃ、ヴィータフォワード、なのはセンター、シャルフルバツクの3対4とかどうだ、普段参加しないシャル相手にいれば、あいつらもつと考えるぞ」

「んー、それは勉強になりそうかな、其れで行ってみようか」

「んじゃ、シヤマルに声かけとくな」

結果、模擬戦は一寸変則的になった。

「そいや、今度スターズ休暇だっけ、なのははどうするんだ？」

「えっとね、ヴィヴィオと聖王教会の学校見学と、海上隔離施設に面会、とかかな」

「あいつらカー、復帰プログラムはギンガ担当だっけ？」

「そうだよ、ギンガも治療から復帰して、頑張ってるみたい」

「そっか…ふむ、ヴィータは休みずらすんだよな？」

「その予定だぞ、どうした？」

「んや、俺もあわす予定だったし、隔離施設に行ってみるか？」

「ん…そうだな、一寸は話ししてみんのもいいかもな」

3人でそんな話を話しながら食堂へ行けば、新人4人も食事中…
相変わらずスバルとエリオは山盛りだ。

「相変わらず、良く食うな…そっいや、来週ライトニング休暇で、その後バーベキューするとか、はやてがいつてたな」

「良彦、肉多めにしとけよ、ギンガも来るし、普通じゃたんなくなるぞ」

「あはは、確かにそうかも、ギンガ、スバル、エリオがそろつと、10人分くらいそれだけで食べそうだよな」

新人と少し離れた位置で食事しながら、そんな話題で笑いあう。

少しして、スターズが休暇に入る、なのは、ヴィヴィオは予定通り学校見学などに、スバル、ティアナは募参りや面会らしい。

面会といえば、エリオとキャロが毎週のように、ルーテシアと面会しているらしい、仲が良さそうでいい事だ。

「しかし、なのはの書類、おおいな、おい」

「ロード良彦では、追いつかぬな」

「私も時間あるときしてるけど、全部は無理そうだね」

「まあ、急ぎのだけしといてくれりゃ、いいぞ」

なのはの分をフェイトと良彦が処理し、その他スターズ関連をヴィータが処理してるのだが、なのはの分が多い。

「書類は、めんどくせー」

「我侬言つなら手を動かせ、ロード良彦」

セプトにせつつかれながら、良彦は何とか書類を処理していく。

「そういえば、フェイトは休暇、実家にいくのか？」

「ん、ああ…行く予定だよ、エリオとキャロも一緒に、リンディ母さんも待ってるって言ってたし」

「ああ、あの人に見てみれば、3人とも子供みたいなものだろうしな、孝行して来いよ」

「うん、そうしてくるよ」

「良彦あたしらは、時間あったら桃子さん所顔出したほうがいいんじゃないか？」

「む、そうだな、あつちでの準備はすっかり任せちゃってるしな、土産持って顔出すか」

「ロード良彦が世話になっている、御仁だな、しっかり挨拶せねばな」

4人でそんな話題で盛り上がっていた。

なのは達が帰ってきて、入れ替わるようにライティングが休暇に入る。

書類はフェイトの分をなのはが、他をやはり休みをずらしたシグナムが担当している。

シグナムは通信越しではあるが、アギトと結構会話しているらしい。

良彦は、書類を回避し、ヴィヴィオの世話に廻っていた。

「よし、打って来いヴィヴィオ！」

「うん、いくよ、よしくん！」

すぱんつと、気の抜ける音が響く、ヴィヴィオが良彦の構えた掌にパンチを打ち込んだのだ。

「つて、なんでよしくんなんだ、おりゃ」

「だって、なのはままが、うひゃっ」

がしつとヴィヴィオを捕まえ、わしゃわしゃと頭をなでる。

「全くなのはは、しょうがないな…ヴィヴィオは学校大体決めたのか？」

「うん、サントヒルデ魔法学院が、いいかなってー」

「てことは、魔法の勉強するんだな、俺となのはとは大違いだな」

「勉強してないの？」

ヴィヴィオの質問に、冷蔵庫からジュースを取り出しながら

「なのはは感覚で魔法作るし使うからな…俺の場合は、先祖から継承した記憶にある魔法だからな、勉強はしてねーよ、ほれ」

「そうなんだー、あ、ありがとうございます」

ジュースをコップに入れ差し出す。

「頑張れよ、友達も出来るだろうし楽しいと思うぞ」

「うん、見学言った時も皆良い子だったよ」

「ヴィヴィオの方が年下だったと思うけどな」

「えへへ」

で、ふとヴィヴィオが良彦の顔を覗き込んでいるのに気付く。

「どうした、なんか付いてるか？」

「よしくんも、ヴィヴィオと一緒に、目の色が違うね」

「ああ…虹彩異色か」

「ノーさい？」

「目の色が違う事だよ、古代ベルカの王族に多いんだ」

その答えに

「ヴィヴィオは【聖王】だからですよね、よしくんは？」

「俺は【風王】の一族だな、【聖王】とは同じくらいの時代の血筋かな」

「そうなんですか、凄いですねっ」

「そうでもないぞ、子供の頃は此処まで色はつきりしなかったしな、それに血筋とか今の時代じゃ威張れるもんでもないし、気にしなくても良いと思うしな」

ぼむぼむとヴィヴィオを撫でる。

嬉しそうに微笑むヴィヴィオが、ジュースを飲みきり

「はい…休憩はおわりです、もういつかいおねがいます」

「おう、んじゃ簡単な型からおしえるからな」

そういつて、ヴィヴィオに言葉では無く、身体に型を覚えさせていく。

でもって、ずらした休暇の日、これから3日は自由になる。

「まず、地球からだな、往復して、残りで海上隔離施設と、ミッドで噂になってるレストランかね」

「そうだな、あたしはそれで良いぞ」

「うむ、我も構わぬが…格好はどうする」

「あたしの服かしてやるから、フレーム最大でいいんじゃねーか、地球ではセプトサイズの人も浮いてる人もいねーし」

「だな、そうしとけ」

「心得た、ではヴィータ服は頼む」

とそんなやり取りをしながら、転送ポートから地球の良彦の部屋へ移動、日本は平日だったので翠屋へ。

「いらっしやいませー、ツと、良彦君、お帰り…それにヴィータちゃんもいらっしやい」

出迎えてくれたのは美由希さん、直ぐに士郎さんと桃子さんも顔を出しお互い挨拶、セプトも紹介する。

「なるほどね、色々なことがあったのね、良彦君」

「まあ、程ほどに、其れでこれお土産です、皆さんでどうぞ」

以前からミッドのお菓子とかを桃子さんが食べたがっていたので今回は、一寸奮発して、評判の良い一寸高い店のお菓子詰め合わせだ。

「ありがとうね、それで今回はどの程度いられるのかしら？」

「一応明日朝にはもどろつかと」

「じゃ、その間に詰められる部分をつめよう、夕食は家で食べると良い」

桃子の問いに答え、士郎がそういつてくれる。

「はい、おねがいします」

「おじゃまします」

「うむ、よろしく頼む」

それに3人答え、結局夜に披露宴の話を決めていき、その内土郎は披露宴ではしっかりと酒を飲んでもらう、とか言い出したりした。桃子さんは、ヴィータをどう着せ替えするかを語り、折角だからセプトも着替えようと言い出したり。

まあ、平和に時間は過ぎて、翌日：良彦、ヴィータ、セプトは挨拶をしてミッドへと戻る。

ミッドへ戻ったその足で、海上隔離施設へ：飛行許可を貰い飛んでいった、それが一番早かったのだ。

職員の人に話し、収容されているルーテシア、アギト、ナンバーズと面会させてもらう。

以前も話していたセインと人見知りしないのかウエンディとは普通に話せた、他のナンバーズ：チンク、オットー、ノーヴェ、デイエチ、デイド：とは、挨拶と軽い会話だけだった。

ルーテシアとは幾つかの雑談と、先に決まった刑罰の話し、母親が目覚めた話しなどをした。

アギトはセプトと、色々と話をしていたらしく、どちらも比較的満足そうな顔をしていた。

その翌日は、ミッドで噂になっているレストラン：休暇が決まった段階で予約は入っていた：に、良彦とヴィータで向かい、ゆっくり

りと食事。

満足して帰りにテイクアウト用にあつた、デザート…ケーキだが…をセプトと八神家のお土産に買い、帰途についた。

良彦のマンションに戻り、風呂に二人とも入った後、ゆっくりとソファに腰掛ける。

セプトは八神家に預けてあるので合流は、明日隊舎でだ。

「結構濃い、3日だったなあ」

11月なので身体を冷やさないように長袖、長ズボンのパジャマ姿だ。

「だな、しかし、デザートは翠屋のが上なきがする」

「こちらは、何時もと変わらず良彦のTシャツを羽織っているだけだ。

「まあ、桃子さんの腕が上がり続けてるっていう、恐ろしい事実があるからな」

「ミッドの菓子も参考にしてんだろ、そりゃあがるよな」

解かれたヴィータの髪をなでながら、苦笑交じりに話し合い。

「披露宴のケーキとかは桃子さんが作るっていったな、知り合いの式場も手配してくれたし」

「んだな、ありがてーけど…着せ替え何度されるんだ」

「まあ、頑張れ、こっちでもはやて中心に何度かさせる予定らしいぞ」

「うぁー、まあ仕方ねーか」

「そういう事だ…さて、疲れたしそろそろ寝るか」

「…ん、そうだな」

ヴィータに軽くキスし、二人立ち上がる、そのまま寝室へ入り、その日は同じベットで就寝した、お互いの体温を感じつつ。

66：六課復帰／それぞれの休暇（後書き）

チラツと上のほうで言っている、3人ユニゾン対新人4人+1はその内やってみたい話です…人数的にちゃんとあわせるなら、新人の方にヴァイスを入れるとかも面白いかなと思います。

次回は、聖王教会の方で番外か、六課終了時の話しあたりかと思えます。

閑話 2

一寸キャラ設定。

名前：八坂 良彦（やさか よしひこ）

性別：男

年齢：19歳（StS時）

誕生日：6/14

血液型：O型

魔道師ランク：空戦AAA+

変換資質：風

希少技能：『凧』

天涯孤独の少年、保護責任者は高町士郎、ヴィータと18で婚約
自宅、隊舎共に同棲中。

魔力変換資質は風、希少スキル『凧』は、自らが反応でき迎撃ま
たは回避できる空間を自分の周りに展開する、

これは、自分の周囲魔力の把握と操作、風を無風にし、その空間
を掌握する。

その空間で起きる乱れに反応し、魔力攻撃は魔力で実体攻撃は風
で、一瞬動きをとめ、弱い魔力弾などは自分の魔力で相殺するスキ
ル。

八坂流合気術はほぼ体得、後は錬度を上げて行く段階。

『音貫き』、『無風』は、現在の所、連発は身体負担危険。

閑話 2 話目

これは相変わらず数少ない、男性陣達のStrikerS終了時のお話。

今回の参加者は、良彦、ユーノ、クロノ、ザフィーラ、ヴェロツサ、ヴァイス、グリフィスの7人。

「で、今日はどんな話をする気何だ、良彦」

クロノがまず問いかける。

「まずは…なんでザフィーラはStrikerSでは、犬形態のまま何だ？」

「犬ではない、狼だ…理由か、よくわからないが、隊員扱いだと魔導師ランク問題があるからではないか？」

「ああ、その格好だと隊員扱いされてないんだっけ？」

良彦が答えながらザフィーラへ、ザフィーラが答え、ヴェロツサが苦笑しつつ聞く。

「たしか、そのはずでさあ、八神部隊長の個人保有の使い魔って扱いつすね」

「まあ、僕もフェレットの格好のときは使い魔にまちがわれてたなあ」

ヴァイスが苦笑交じりに答え、ユーノは遠い目だ。

「あとは、人がいるよりは警戒されづらいからでしょうか…明らか

かに魔導師がいるより、獣がいるほうが警戒しない魔導師は多いかと」

グリフィスが真面目に答えてくれる。

「よし、それじゃ次の話題…だから、なんでバリアジャケットにスカート使ったっつもの」

「君はまたそれか」

良彦の発言にクロノが呆れている。

「まあ、新しく増えた所だとティアナとキャロくらいだけど、つかティアナは明らかに短すぎるだろ！」

「おちついて、ヨシヒコ、どづどづ」

「まあ、見栄えじゃないっすかね？」

「……………知らん」

「シャーリーの悪乗りが一番可能性ありそうですね」

叫ぶ良彦に、ユーノ、ヴァイス、ザフィーラ、グリフィスが答える。

恐らくグリフィスが正解だろう。

「あと、ナンバーズとか、シスターとか体の線すぎるだろ、何回かヴィータに突っ込まれたぞ」

「それについては、仕方ないな…僕もエイミーにそついう事は言われた事あるし」

良彦とクロノは、肩を組んで通い合っている！

「つかあれ、防御性能とかはいいらしいツすよ、ナンバーズのは」

「シスターシャツハは、動きを阻害しないようにとああなったらしいね、困った事だよ」

「……」（身体を丸めて眠り出した）

「なのはも、エクシード以外はミニだよねいまは」

「見栄えも戦力計算に入れてるとか？」

ヴァイスは何処で聞いたかそんな豆知識を、ヴェロツサはシャツハを思い出して身震い、ザフィーラは馬鹿らしくて寝た様子。

ユーノはなのはの事を言い出し、グリフィスは真面目だ。

「まあ…冗談はさておき「冗談なのか!？」、さておき…皆結婚式は来て貰えるのか？」

「ああ、そつちは問題ない、何とか休みを取れるよう今頑張ってる」

「僕もいけると思うよ、書庫のほうも人増えてるしね」

「まあ、僕は何も問題ないよ、シャツハもカリムもでるから、追われることもない」

「む、その話が、此方も問題ない、守護騎士の一人の祝いだ行かないはずがない」

「俺も、問題ないっすよ」

「僕もです」

皆が了承を返す。

「あんがとな、皆…おっし、んじゃそれまで気合入れて仕事しねーとな、皆がんばろうっや」

「おう！（はい）」

皆が頷き、何処かの部屋から退出していく。

閑話2（後書き）

ネタが浮かんだので、同でも良い、作者の叫びとかそういうのでした。

次回こそ、騎士団辺りでの話をとっています。

67：相談／模擬戦

新暦75年の12月も半ば、色々な雑事や相談をかねて聖王教会へ、良彦とヴィータは訪れていた。

セプトはウィンド関連の書類を任せているので今回は留守番だ。

「ごきげんよう、騎士カリム」

「ごきげんよう、騎士良彦、騎士ヴィータ」

「お久しぶりです、騎士カリム」

まずは、定型の挨拶。

「ひさしぶり、シスターシャツハ」

「はい、騎士良彦、お久しぶりです、騎士ヴィータも本日はようこそ」

「まあ、今回ばかりは…良彦だけに任せられないんで」

シャツハと共挨拶を交わし、机に付く。

机の上にはパンフレット、結婚式についてのプランニングに訪れたのだ。

披露宴は、既に良彦とヴィータの手から離れ、はやて、なのは、フェイト…いや、寧ろ更にも上、リンディ統括官やレティ提督の元に行ってるらしい。

「つか、俺に任されても困る、よくわからんし」

「この有様だから、あたしも来るしかなくて」

「まあ、騎士良彦が結婚に詳しくても驚きですが」

「とはいえ、結婚は二人でするものお互いで考えあつのが良いですね」

良彦の言葉に、ヴィータ、カリム、シャツハが言ってくる。

「それで、お二人の立場とか出自を考えるとですね、これなんか良いと思うんですけど」

カリムが勧めるのは、古代ベルカ式パッケージとやらだ。

「古代ベルカの王族同士の結婚式を再現したもので、一寸お値段はするんですけど、立派ですよ？」

値段をみれば、高いのは高いのだが、資金的には余裕ではある……良彦とヴィータ二人で働いている上に、特にお金が掛かる趣味は無く、披露宴は二人ではなく、ミッドは局の人間が、地球は高町家やアリサ、すずかの方で出す予定だからだ。

「俺は問題ないけど、ヴィータはどうだ？」

「値段が……うーん、もう一寸さがらねーのか？」

「ああ、大丈夫です教会騎士団の団員ならこの値段から1割引かれますよ」

ヴィータの問いに、シャツハが答える。

「そういや、良彦って教会騎士団員だっけ、忘れてた」

「1割引くと…か、かなり浮くな、この分を旅行に回すか？」

「だな、それじゃ騎士カリム、古代ベルカ式パッケージでお願いします」

「はい、此方で話は通しておきますね、後日きちんとした手続き用の書類が送られると思いますんで」

パンフレットは、そのまま持って行っていいとの事なのでありがたく受け取る。

「それにしても結婚ですか、羨ましいですね」

「騎士カリムは、そういう話し聞きませんね、しすて」「ごほん
いえ、なんでもありません」

「私もシャツハも忙しい上に出会いが無くて…どなたか紹介してもらえませんか？」

咳で良彦をさえぎったシャツハに苦笑しつつ、冗談交じりにそういつてくるカリム。

「いや、知り合いの友人だと…年齢的につりあいそうなのは一人いますが、どう思うヴィータ、ヴァイス何だけど」

「良い奴なのは、確かだな…実際あってみねーと後はわかんねー」

な」

そういつてる二人に

「どんな方なんですか、その方は？」

と、問うシャツハ。

「ぱつとみ軽い奴に見えるけど、結構しっかりしてるし根性もあるな、今は立ち直ったし」

「だな、それにミッド式の精密射撃型で、特化型だけど腕前はエース級だ」

「後はへりの操縦の腕前も一流…多分ゆりかごの時の戦闘映像に映ってるのがあると思う」

そういう二人に、カリムは頷いて。

「折角ですし、今度紹介してください」

と、微笑むのである。

暫く後、場所を移して、騎士団の訓練場、久しぶりに良彦とシャツハとの模擬戦である。

対シャツハ戦績は、此処暫くは5分ながら、最初から考えると…勝率は考えたくなくなるレベルだったりする。

「さて、んじゃ久しぶりに一本お願いします」

『セツトアップ』

「こちらこそ、よろしくお願いします」

『セツトアップ』

二人が騎士甲冑を身に纏う。

ある程度はなれて向き合う二人…良彦はシャツハ相手にする時は壁などに近づかないようにしている。

『凧』は壁があれば壁だと判断し、そっち側は無視してしまう、だが…シャツハは壁だろうが構わず中を移動してくる移動系の騎士だ、壁からの不意打ちで何度か倒されている。

「行きますっ!」

風を纏わせた右拳を踏み込みから素直に突き出す。

これを双剣型…トンファーにしか見えないが…のデバイス、その根本で受けながら、反対のデバイスを振りぬく。

それを構えていた左拳で『弾き』向きをそらす。

此処まではほぼ何時も通りの展開。

「では…参ります!」

一旦お互いが距離をとり、シャツハの鋭い踏み込みから回転させたデバイスを喰ひを上げ迫る。

それを回転しながら、左バックハンドで『弾き』ながら、その回転を載せたローキックをシャツハへと放つ良彦。

一步、一瞬のバックステップでローキックをかわし、素早く踏み込み、此方も回転しながらデバイスを打ち込むシャツハ。

回転速度をあげ、迫るデバイスをミドルキックで『弾く』良彦、そのまま回転し、ミドルをハイキックにつなげて行く。

頭に迫るハイキックを、身体を沈ませる事で避け、足が通り過ぎた所へ、両手のデバイスをそろえ、下から上へ振り上げる。

回転していた身体を、無理矢理止め：足元に砂煙が上がる：下からのデバイスの振り上げに、両手に小さな盾と風を纏い、受け止め、その威力を利用し身体を跳ね上げさせる。

「此処っ！」

跳ね上がった反動を利用し：練りあげた風と魔力を、貫き手に集め。

その間にシャツハも、次の動きに移っている、デバイスを構え。

「風拳・一刃」

「烈風一迅！」

お互いのデバイス同士がすれ違い、良彦の貫き手はシャツハの喉の前で、シャツハのデバイスは良彦の頭の横で、それぞれ止まっている。

「…引き分けかな」

「そのようですね」

お互いのデバイスと貫き手を引いて、離れる。
お互いに一礼し、騎士甲冑を解除。

「ほれ良彦、シスターシャツハもどうぞ」

スポーツドリンクとタオルを差し出すヴィータ。

「サンキュ、見ててどうだった？」

「ありがとうございます、できれば意見いただければ」

そういわれヴィータは

「そうだな、良彦が蹴りメインなのは珍しいと思ったけど、シスターはやりにくかったんじゃない？」

「ええ、普段は拳打メインなので少し驚きました」

「折角手も足もあるんだしな、蹴りも使えうさ…実際此処まで脚撃だけってのは、珍しいかな？」

「見てて、こっちも驚いたよ、まあ後は二人とも近接専門だけに動きは問題なかったな」

「そうですね、騎士ヴィータも如何ですか？」

「いや、あたしはそんなに修行もバトルも好きってわけじゃねーんで」

苦笑とともに、断るヴィータ。

シャツハもそうですか、とそれ以上は言っておかなかった。

結局結婚式の話と模擬戦で時間はつぶれ二人は六課隊舎へと帰ったのだった。

67：相談／模擬戦（後書き）

式は豪華になります。

模擬戦は、この二人だと、一瞬の隙で決まるのが基本だと思います。

今回は、六課解散時の話しになると思います。

68：機動六課解散

新暦76年4月28日：機動六課稼働から1年、今日で試験運用は終了、ある意味で新人達は卒業だ。

最初のようにはやてが壇上に立ち、部隊員に言葉を送っている。

その後、解散の記念パーティのために部隊員が散っていく中、新人達になのはが声を掛ける。

「皆、パーティの前に少しいいかな？」

「なのは隊長、はいなんでしょう？」

ティアナが返事を返し

「一寸一緒に来てくれる？」

「はい」

4人が後を付いていく、それに付き合う良彦。

裏庭に移動すれば、そこには桜が綺麗に咲き誇っている。

「この花って、たしか？」

「そう、私たちの世界の花や」

「別れと出会いにつき物の花なんだよ」

スバルの言葉に、はやて、フェイトが答え。

「桜つて言う花だな…違法魔導師に見せると恐がるかもしれん」

「なんでですか、良彦さん？」

キヤロがきよとんと聞いてくる。

「桃色だぞ、誰かの魔力光と一緒にだ」

「ちよ、よしくん、私そんな恐がられてないよ…」

「おや、俺はなのはだとは一度もいってないぞ」

「ううー」

「良彦、そこ等辺にしとけ、いじけっから」

なのはをからかう良彦をヴィータが止める。

そして、一歩前にでて

「あたしはお前らの事あんま褒めてこなかったけど…お前らもう立派なストライカーに成長したな」

少し涙ぐみながら4人に告げる。

「ヴィータ副隊長」

その言葉に、ティアナ、いや皆涙ぐんでいる。

「うん、本当に皆立派になった…もう一人前だよ」

「「「はい!」「」」

なのはに4人が揃って答え。

「ほな、そろそろ始めようか」

「うん」

「はい」

「おう」

「おっし」

「え？」

はやての言葉に、なのは、シグナム、ヴィータ、良彦は頷き、デバイスを用意する、フェイトだけ混乱している。

「なんだテストタロツサ聞いてなかったのか？」

「何を、ていうか何でデバイスを」

「最初で最後、全力全開の模擬戦、なんだけど？」

「聞いてないよ、皆?!」

だが、新人4人は既にデバイスを起動し、身体を解している、ギンガははやての横で楽しそうにしている。

が、そこに声が掛かる。

「何してんだギンガ、お前はあっちに入らないと」

「え、何ですか？」

「だって、一時とはいえ一緒に訓練したし、人数合わないだろそ
うしないと」

「せや、ギンガはフォワード陣と組んでや」

「がんばってくださいです」

「うむ、骨は拾ってやろう若きベルカの騎士よ」

「あうう…わかりました！」

一瞬ひるむ物の気を取り直して、デバイスを用意する。

「ほな、5対5、全力全開で…」

なのはが、フェイトが、シグナム、ヴィータ、良彦がセットアッ
プし、バリアジャケットと騎士甲冑に身を包む。

スバルが、ティアナが、エリオ、キャロ、ギンガが此方もセット
アップしていく。

お互いが構え、緊張が高まった所で

「ほな、開始や！」

はやての掛け声で、全員が動き出す。

スバルとギンガのツートップには、良彦とヴィータが。ティアナとなのはは、お互いに援護と牽制を行い。

エリオとシグナムが、デバイスで交差し。

キャロとフェイトは、遠距離で打ち合い、近距離ではキャロがフリードで防御してる。

「ホントに動きよくなつたな、お前ら！」

「鍛え、られ、ましたから！」

右に嵌めたりボルバーナックルで殴りかかるスバルをあえて、
弾か『ずにシールドで受け止める。』

隣ではヴィータもギンガを受け止め、力比べだ。

「はあっ！」

受け止めていたシールドを押し返し。

「…あれ、打って来いよ、一番の全力を」

「はい、行きます！」

ウィングロードが伸び、遠くからスバルが滑るように近づきながらカートリッジロード。

「振動拳！」

スバルの戦闘機人としての潜在能力、振動粉碎を利用した全力の

拳。

「おおおお！」

叫びうる拳を

「ゼピュロス、モードツヴァイ」

『了解、モードエウロス』

噴射口を籠手の肘の部分に作り出し、その拳に此方も拳打をあわせる。

「風拳・圧」

圧縮された風と振動券がぶつかり、お互いが吹き飛ぶ、スバルはウイングロードに着地し、良彦は空中で立て直し。

「いいね、もう一回来い、切り札一枚見せてやるよ」

「はい！」

元気な返事とともに、ウイングロードを走るスバル…再びの激突、先ほどと違うのは

「ゼピュロス…烈空盾」

『了解』

受け止めるのは右手を前に出し張った青い盾…なのはのシールド

すら打ち砕く振動拳の前に碎かれるかと思われたそれは、しかし
つかりと、振動拳を受け止める。

「風拳・圧」

一瞬動きが止まったスバルの腹に圧縮された空気と拳が打ち込ま
れ、弾き飛ばす。

「今のが、対フェイト、シグナムの切り札だ、スバルにも切り札
になるな」

「今のって？」

「終わったら教えてやる、これで終わるか？」

「いえ、まだ行きます！」

言葉とともに動きが変わる、ギンガとコンビネーションで動き出
したのだ。

「良い変じだし、良い考えだ…但し」

「あたしら二人一緒のほうが、つえーんだけどな」

当然ギンガの相手をしていたヴィータも良彦とコンビになるのだ。
ウィングロードを縦横無尽に張り巡らせ、駆け回るスバルとギン
ガ、二人の攻撃をほぼ一人で『弾き』『捌き』、受け止める。

その間にヴィータが攻撃する、それが基本だが、時により一瞬で
それが入れ替わる。

スバルを抑えていた良彦が素早くその身体をヴィータのほうに受け流し、ヴィータが抑え込み良彦が攻撃に、などパターンは様々だ。

数時間後、お互いのバリアジャケット、騎士甲冑がぼろぼろになりつつ、模擬戦は終了する。勝敗とか関係なく、本当に全力全開で戦った結果だ。

その後制服に着替え、シャワーを浴びてから、解散パーティーへ、皆名残惜しみつつも楽しそうだった。

68：機動六課解散（後書き）

ギンガがいないと人数合わないのでギンガいれてみました。

次回は結婚式か、その前夜あたりの話しになるかと。

69：結婚式（早朝）

新暦96年の6月、良彦の20歳の誕生日に合わせて結婚式を行う事になっている。

前日は流石にメンバーが集まらなかった…男性陣一同…ので、時間の空いていた？、ヴェロツサとザフィーラとだけ、前祝をしていた。

当日朝、夕べ騒いだヴェロツサはまだ寝ている時間に良彦は起き出し、部屋を出ようとする所で、ザフィーラの声が掛かる。

「今日も走る気が、良彦」

「ザフィーラ起きてたのか、落ち着かないから何時もと同じ事しとくかかってな」

「そうか、ならば我も付き合おう」

「良いのか？」

「問題ない、ヴェロツサ程飲んでは居ないからな」

そういつと狼の格好のまま、横に並んでくる。

「んじゃ、軽く流す感じで行くぞ」

「心得た」

朝もやの中、一人と一匹はゆっくりと辺りを駆ける。

「しかし、良彦とヴィータが結婚か、最初あった時は考えもしなかった事だな」

「…あのときか、ある種俺の封印したい修行記憶でいえばトップクラスなんだが」

「ふっ、そういえば昔はおかしな事をしていたな」

「あの道具、今も地球においてあるぞ…なんでか捨てらん無くな」

そういうと、ザフィーラが狼モードで器用に笑った気がする。

「ヴィータとの思い出の一部だから、だろう」

「そうかも…てか、そうだろうな、ヴィータとザフィーラと合ってたんだよな、最初でけー犬だなんて思ったっけ」

「何も知らねば仕方無い事だ」

「まあ、今も半分犬扱いされてるよな」

「…そういう事も、ある」

お互い苦笑しながら、ただ走る。

少し汗が出る程度走った所で、折り返しだ。

「基本さ、式とか披露宴のドレス類、俺一切見てないから一寸楽しみではあるんだよな、そこ等辺」

「式は、古代ベルカ様式の衣装だろうが、披露宴は…ミッドも地球もどうなるやら、だな」

「悪乗りしてそうだからな、準備してる人等」

「それもまた、仕方あるまい」

たつたつたと足音と、二人の声だけが当たりに響く。

「つか、ヴィータサイズだと色々ありそうだからなあ…」

「良彦も幾度かは着替えさせると、いつていたな、主が」

「マジか、変なのじゃなきやいいんだが」

「大丈夫だろう、つかみを取るといつていたからな」

「ダメだろそれ！」

「ふっ」

突っ込む良彦を、軽く笑い飛ばすザフィーラ。

そうこうしていると、走り出しの場所…教会で式を挙げるので、前夜は騎士団宿舎の一室を借りていた…聖王教会の教会騎士団宿舎へ帰り着く。

「うっし、少し落ち着いた」

「そうか、付き合った甲斐があるものだ」

「ん、なあザフィーラ」

「どうした？」

「何度も相談乗ってくれてあんがとな」

「容易い事だ、同じ守護騎士のため、そしてリインフォースを、
主を救った友のためだからな」

「それでもさ、ありがたかったよ、聞いてもらえて」

「そうか、ならばその礼はヴィータを幸せにする事で返してもら
うか」

「おう、約束する、全力でな」

差し出すザフィーラの手と良彦の手が、軽く打ち合わされる…狼
の手なので一寸難しかったが。

69：結婚式（早朝）（後書き）

一寸短めですが、恐らく一番世話になったであろうファイラとの会話をいれました。

次回は式と披露宴です、どんな衣装がいいか、悩みます…余り知識がないので、検索してどうかから引張ろつかなどか思っています。ですが。

70：結婚式

良彦とザフィーラが貸してもらっていた部屋へ戻ると、ヴェロツサも起きだしていたようだ。

お互いに軽く挨拶をすませ、ザフィーラ、ヴェロツサも準備の為に一度別れることになった。

良彦は、シャワーを浴び、普段着のシャツとズボンに履き替え、時間が来るのをゆっくりと待つ。

頭に浮かぶのは、海鳴の公園で出会ってから、闇の書の事件や、同じ部隊での任務、自分となのはが怪我したとき。

さらには、普段一緒に居た何気ない一時…どちらも荒い言葉使いなので、売り言葉に買い言葉は日常茶飯事。

そして、18の誕生日にした、婚約という名の確かな絆の形。

それが今日、更に一歩進み、結婚…約11年、思えば長く付き合っている、だが、これからそれ以上に付き合うのだと、今更の実感。

「…そうだよな、もう11年じゃねー…まだ、11年だ、これから先の方がどう考えても長いんだな」

そう言って、軽く深呼吸し、歩き出す…式はもう少し、自分も準備しなければならぬ。

聖王教会の式場、男性控え室…そこには、男性陣が勢ぞろいしていた。

次元書庫室長ユーノ・スクライア、次元航行艦隊提督クロノ・ハ

ラオウン、本局査察官ヴェロツサ・アコーズ、地上本部ヘリパイロットノ武装隊ヴァイス・グランセニツク。

次元航行部隊事務官グリフィス・ロウラン、辺境自然保護隊所属保護官エリオ・モンディアル、そして、一番付き合いの長い盾の守護獣ザファイラ。

式はこの7名が参加だ。

皆それぞれに似合ったスーツを着ている。

良彦は現在準備中、古い様式の白い上着、青いズボン、靴と手袋も青で纏められ、今は羽織っていないマントが近くにかけられている。

マントの背中には、【風王家】の紋章である、3本の斜線に一枚の羽をクロスさせた紋章が入り、基本の色は青、縁が白い毛で彩られている。

「…毎度ながら、こういう格好は喉元がキツイ気がする」

「今日は我慢しろ、僕も同じような格好したんだし」

「まあ、似合っているよ、良彦君」

クロノとヴェロツサがそういつて、喉元を弄る良彦を止め。

「まあ、青の子鬼とはおもえねーっすよ」

「ヴァイス、それは」

ヴァイスが言う言葉にグリフィスは止めに入り。

「でも、ホント似合うよヨシト」

「僕もカッコイイと思います」

ユーノとエリオは褒めてくれる。

「…馬子にも衣装という奴だな」

とは、ザフィーラだ、一番容赦がない、だがある意味でそれは長い付き合い故だ、だからこそみな言葉と同じくらいに嬉しい。

「さて、後はマント付けていだけだな…皆、きてくれてありがとうな」

7人を見渡し、頭を下げる。

7人はそれぞれ、笑い返し、頷く…そろそろ時間になるのだ、ザフィーラが人間形態になり、マントを持ってくれる。

「後を向け、我がつけよう」

「頼むわ」

そういつて、マントを良彦に付けさせ、送り出す。

良彦は長い道を通り、聖王教会の礼拝所…今は式場だ…へと向かう。

ゆっくりと歩き、扉にたどり着く…この先は、式場、既に皆が待っているだろう。

扉を開け、踏み込む…式に招待したのはそれほど多くはない、先ほどの男性陣に、高町家一同、八神家一同、ハラウン家一同、六

課新人フオワードの女性陣に、ロングアーチのシャーリー、ルキノ、アルト。

地球からアリサ、すずか…そして、当然セプトだ。

皆が椅子に座り、楽団と合唱隊…セントヒルデの学生だろうか、子供達だ…が、音楽を奏で聖歌を歌うなか、良彦は真ん中へ歩み出る。

反対の扉が開き、純白の古風なドレス、長い梳けるようなヴェール…これは赤…に身を包んだヴィータが、はやての手を引かれ歩いてくる。

普段は三つ編みか、解いているだけの髪はしっかりと結び上げられ、綺麗なうなじが見える。

真ん中ではやてからヴィータの手を預かり、共に聖王の像の前へと歩みを勧める。

聖王教会の神父が、聖句を述べ、それぞれの思いを確認し、誓いの言葉を聞き届けると、二人に指輪を渡し、お互いに付けさせる…此処はカリムに頼んで地球の結婚指輪のくだりを入れてもらった。そして、指輪の交換後…良彦がヴェールを持ち上げて、ゆっくりと、でもしっかりとキスを交わしていく。

皆の拍手が響き、神父の宣誓が行われ、式は終了する。

二人そろって、出口の方へと歩く、隣で一緒に歩くヴィータへ良彦が

「この先も、色々あるだろうけど、よろしくな、ヴィータ」

「あたしにはいいけど、他の人に迷惑かけんなよ、良彦」

ぎゅっと手を握りながら、その言葉に苦笑する良彦。

そのまま、後は静かに…周りからはお祝いの言葉や花吹雪などが投げかけられ、教会の扉をくぐり、少し行った所で振り向く。

「おっし、ヴィータ…レディセット！」

「おう、任せろ！」

突然良彦が叫び、ヴィータもノリノリで、ブーケを構える。

辺りの皆は吃驚して反応が遅れる、そこへ。

「ブーケ、トス！」

「ゴー！」

思い切り上に向かって投げられるブーケ、しかもしっかり身体強化魔法使用のそれは、高く上がり…落ちてくるまで暫く掛かった。

だれが取ったかは、まあ…秘密という事で。

「良彦君も、ヴィータもいつたくらんだんや、あんな事」

と、その後はやてに聞かれるのだが、二人は

「何となくあの場で思いついた」

「良彦が、イイ笑顔うかべたから、ああした」

と、あれが即興だった事を明かすのである。

それを聞いた皆は、この二人は結婚して正解だ、と皆語り合ったらしい。

70：結婚式（後書き）

今回も何時もより短めですが、式のみでお送りしました。

次回は、披露宴の予定です、乗りと勢いで、ミッド側だけになるか、地球側までいけるかは一寸不明です。

71：披露宴（ミッドチルダ）

結婚式から数時間たち、辺りがすっかり暗くなった頃、場所をミッドチルダ首都クラナガンのホテルへと移し、披露宴が始まる。

地球組みは色々な手続きがあるので、此方にはきていない、それゆえ地球でも披露宴を、と言う話しになったのだが。

式の際は、自治区としてのベルカ、聖王教会の許可で滞在していたのだ。

ちなみに、披露宴は地球組み以外の結婚式参列者と本局や地上部隊からも、何人か追加で参加する。

本局航空隊1321部隊の部隊長、小隊メンバー、陸士108部隊からはゲンヤとギンガ、それにレテイ提督。

驚くべきは、伝説の3提督までがいることだろうか…ヴィータと良彦で護衛した事があるのだが、孫の様に気に入られている。

「ほな、八坂良彦と八神ヴィータの結婚披露宴を始めたいとおもいます」

司会を務めるのははやてだ、しっかりとドレスアップ…白を基調としたシンプルな裾の長いドレス…したはやてが、一声かけ、扉が開かれると其処には。

「それでは、新郎新婦入場です」

黒のタキシードに、一寸着られてる感のある良彦と、赤のイブニングドレス、丈はロングで、胸元が少し開いてる…まあ、此方も一寸着られてる感が感じられる。

そんな二人が、ヴィータの手を良彦が取り、会場へ入ってくる。

周りからの拍手に迎えられ主賓席へ。

幾つものフラッシュに照らされ、嬉しそうな良彦とヴィータ、照れもあるのか少し頬が赤い気がする。

「それでは、まず二人を祝福して、乾杯からや、乾杯の音頭は、ゲンヤ・ナカジマさん、お願いします」

「つて、俺かよ、聞いてねーぞ、豆狸」

「主役二人の希望ですから、はよしてください」

「わーっ たよ、それじゃ」

皆が立ち上がり、ゲンヤ…こちらは普通に黒のスーツ…の声を待つ。

「チビ二人だが、まあ、立派な大人同士だ、思う存分祝ってやってくれ…乾杯！」

「乾杯！」

皆がそう叫ぶなか

「チビっていうな、ってんだろ、おっさん！」

「毎度毎度言わすな、おっさん！」

良彦とヴィータだけは違う言葉を叫ぶが、ゲンヤはにやりと笑う

とそのまま席についてしまう。

「ほな、続いて…本当は色んな人の挨拶なんやけど、何や頼んだ人皆して、堅苦しいのはいやみたいでなあ、そういうわけで此処はとばすで」

はやてが言い、それに頷いているのは、1321隊長や3提督、レディ提督、リンディ統括官などだ。

「続いては、友人挨拶やね、最初はなのはちゃんや」

「はい」

呼ばれマイクの方へ移動するなの…薄桃色の横にスリットの入ったロングのドレス…は。

「えー、高町なのはです、よしくん…良彦君とは、物心付いた頃からの友達で、ヴィータちゃんとも10年くらい友人として仲良くしてもらってます」

静かに聴く、皆。

「その二人が婚約した時も驚いたけど、もう結婚なんだね、おめでどう、良彦君、ヴィータちゃん」

短いが心のこもった挨拶を終え、席に戻るなのは。

「ほな、続いてフェイトちゃん」

「はい」

続いて出てくるフェイト…黒を基調に、黄色で縁取りした、これまたロングのドレス…もマイクの前に立ち。

「私は、ふたりともほぼ同時期から友達で、これまで仲良くしてもらって、お世話にもなつて来ました、その二人が結婚すると聞いて、驚きと嬉しさが溢れたのを覚えています」

ゆつくり語るフェイト

「二人とも末永く幸せにあることを願って挨拶に代えさせてもらいます」

そういつて、一礼し席へ戻って行く。

「私からは、何度も同じ事になるんやけど、二人が幸せになってくれればそれで構いません、これからもよろしくな」

はやてが、友人挨拶をそう締めくくる。

「ほな、暫くは自由にどうぞ、少ししたらヴィータがお色直しするんで、それまでな」

その言葉に、皆が動き出す、余興の準備か、数人が一旦会場を出て、そして主賓二人の下には祝いの酒を持った、人々。

特に良彦が飲まされるわけだが、飲まず方も飲まされる方も嬉しそうだ。

ヴィータの方は、数人の女性陣…なのは、フェイト、ティアナ、スバル、キャラコ、ギンガ、他…に囲まれお祝いの言葉を貰っている。

落ち着いてそれらを見ているのは、3提督と、レティ、リンディ、ゲンヤ、1321隊長位か。

はやてはヴィータのお色直しの準備にか、一旦場を離れている。

そして、皆に少しずつ酒が入り始めた頃に、再びはやての声。

「そしたら、ヴィータはお色直しや、良彦君はそのままやから、適等にかまったってな」

その言葉に苦笑をもらしながらも頷く、面々。

ヴィータははやて、アイン、ツヴァイ、セプトにつれられ一度退場。

「しかし…あれっすよね、良彦さん、年齢どおりの外見だと、あれ扱いつすよね？」

「あれって、何だヴァイス？」

「ロリっすよ、だってヴィータさんの外見」

「ヴィータが居ない所で言った判断は、良い判断だな…でもまあ、俺の外見がどうでも、多分結果は同じだし、其れでなんと言われても関係ねーな、俺は俺だ」

そっつい切る良彦に、ヴァイスはぐつとサムズアップし

「ま、そっいつと思ってましたよ」

にかつと笑う。

そして、しばし、再び会場の入口が開かれはやての先導で入ってくるヴィータ、その服装は。

赤色の薄い生地、濃い赤で薔薇を染め抜いたワンピースドレス、先ほどは纏めていた髪を解いて、付いた癖も伸ばし、ストレートロングになっている。

「……………」

無言で見つめる良彦に、はやてが気付き。

「なんや、良彦君、みとれてるんか？」

「なっ…ち、あ、いや…うん、似合ってるぞ、ヴィータ」

「おう、あんがとな…へへ」

そのまま、良彦の隣へ座るヴィータ。
お互いに頬を染め、にこにこしている。

「さて、それじゃ新郎新婦の馴れ初めとか聞いていこか、セプト
よろしくな」

「うむ、任せよう」

そういって、はやての後ろから出てくるセプト…こちらは、何時ものワンピースではなく、ヴィータと同じようなドレスを着ている…が、良彦とヴィータの背後に現れたウィンドウに何か映しているらしい。

何処かの公園で、今とほとんど変わらない良彦が何かおかしな道具で、遊んでいるようにも見えるその映像。

「つて、どツから持ってきやがったこんなもん！」

「なに、ロード良彦がゼピュロスから記憶を預かったように、ゼピュロスにも記憶されてるんじゃないよ…まあこれが始めての時ではないが、状況はほぼ同じらしいし、のうザフィーラ」

「ああ、これと余り変わりは無いな」

そして、犬：狼モードザフィーラが答える。

「裏切ったな、ザフィーラ！」

「主の望みだ、叶えるのが守護獣の役目、すまぬな良彦」

まあ、お互い笑いながらなので迫力はないが。

ちなみに、此処らへんは良彦、ヴィータ、ザフィーラしか知らなかったのだが、これを見た皆の感想は、おかしな事してるな、だつたらしい。

「そして、次は熱々の1321部隊編や」

此処らへんは、ゼピュロスやグラーファイゼン、他同僚からデバイスに記憶されていた物を集めたらしい。

主賓ふたりは、赤い顔で、照れている、改めて見て自覚したのだろつ。

「さらに、機動六課編！」

このはやて、ノリノリである。

こちらは、六課フォワード陣のデバイスや、個室以外のカメラなどから抜き出したものだろう…。個室のまでであったら二人とも再起不能だった可能性は高い。

「まあ、ざっとこんな感じじゃったわけですが、この二人気付いて無いかそこかしこで甘い甘い」

「ギブアップだ、はやて、其処までにしてくれ」

「頼むよ、あたしらのMP（恥ずかしさ的な）はもうゼロだ」

「しゃあないな、そしたら又着替えやな、今度は良彦君もやで」

そういうはやてが、二人を会場から連れ出していく。

暫くして、会場の扉が再び開くと、そこに居たのは…青いブレザーに白いスラックス、インナーは白いYシャツの良彦。赤いブレザーに紺色のスカート、インナーはやはり白いYシャツのヴィータ、スカートは騎士甲冑と同じ程度か。

「もし、高校生になったら、がコンセプトです」

とは、はやての紹介の台詞だ。

その様子に、再びフラッシュが幾つも輝く。

「うーん、やっぱりあれは正解よね」

「かあさん、まさか？」

リンディのそんな言葉に、クロノが反応する、そして

「ええ、なんというかぱっとみだと背伸びしてるみたいで良い感じね」

「母さん??」

レティが続き、グリフィスが驚く。

どうやら、この二人のリクエストだったらしい。

「そしたら、この時間は余興の時間やね、一発もりあげてや」

そして始まるのは、ある種のカオス…皆魔法が当たり前だからか、魔法を使った仕掛けも多い。

ティアナのフェイクシルエットや、オプティックハイドを利用した、人体切断やら。

フェイトとエリオで行う、超電磁砲実験（結界担当はユーノ&キヤロ）。

幾つかの魔法つき余興で盛り上がった後に、なのはが行った魔力収束…綺麗なのだが、集めた魔力を消すのに良彦の『凧』、しかもユニゾン付きが必要だった。

等々、一寸やばいだろうという余興、結界担当者一同が疲れていたりする。

そして、宴も盛り上がったなか、最後の着替えへと二人は向かう。直ぐに戻ってくる、その姿は…何時もの騎士甲冑、ある意味でこの二人に一番似合う格好なのではないだろうか。

その姿のまま、主賓席へ向かい、マイクを受け取る。

「今日は俺とヴィータのお祝いをこんなに盛大にしてもらってありがとう」

「あたしら、今日ほど嬉しい事は中々ないよ、忘れねーから」

そういって、二人揃っての一礼に、皆が拍手を送る、その後は少し落ち着いたのか、皆がゆっくりしたペースで飲み、祝いの言葉などを送ってくれた。

こうして、披露宴第一陣、ミッドチルダがゆっくりと幕を閉じていくのだった。

71：披露宴（ミッドチルタ）（後書き）

途中の行為はまねしないようにしましょう（できません）。

と言っわけで、ミッド側の披露宴です。

次回は地球での式と披露宴の予定です。

72：披露宴（海鳴）

ミッドチルダでの結婚式から、1ヶ月と少し、地球は日本の海鳴で良彦とヴィータの結婚式と披露宴が行われる。

場所はバニングス家の営業する結婚式場の一箇所だ、ヴィータの戸籍は、土郎の伝手と管理局…主にレティ、リンディ…の協力で良彦と同じ年齢という事にしてある。

ミッドでは古代ベルカ式だったので、此方では神前結婚式だ、したがって良彦は八坂家の家紋…丸い円の中、羽を交差させた感じ…の入った紋付羽織袴。

ヴィータは白無垢に角隠しである。

参加者は、高町家一同、八神家一同、ハラオウン家一同、アリサ、すずかとなる。

特に珍しい事も無い神前結婚式…まあ、新郎新婦がぱつとみて、小学生にしか見えないのは珍しいが…はつつがなく進み、披露宴である。

まずは、式の格好のまま、主賓席に座る良彦とヴィータ…角隠しは外しているが。

司会のマイクの位置に立つのは、これぞ執事と言う格好をした老人、アリサの執事である鮫島だ。

「では、不肖鮫島、良彦様、ヴィータ様の披露宴の司会を勤めさせていただきます、最後までよろしく願います」

綺麗に一礼し挨拶、そのまま続けて。

「最初に高町士郎様からの挨拶でございます」

その声を聞いて、スーツを着込んだ士郎がマイクの位置に移動する。

「こんにちは、高町士郎です、八坂君の親代わりという事で挨拶させてもらいます」

この結婚が嬉しいのか、笑顔のまま語り出す。

良彦の幼い頃のことや、いかに自らが受け継いだ武術を修行し続けているか、ヴィータと付き合うようになって無茶が減った事なども話題だ。

「その二人の結婚をとても嬉しく思っています」

そう締めくくる。

鮫島と交代し

「では、友人挨拶を…最初は月村すずか様、お願いします」

「はい」

ドレスアップ…薄い紫のワンピースドレス…したすずかが、マイクの前に立つ。

「ヴィータちゃんも良彦君も、知り合ってもう11年くらいだよね、ヴィータちゃんとははやてちゃんの家で始めてあって…」

良彦との学校での話しや、ヴィータとははやてが図書館に一緒に言

った時の話しなどを続ける。

「だから、そんな二人が結婚する事が嬉しくてたまりません、おめでとう二人とも」

そう締めくくる、席へ戻る、もう一度鮫島がでてきて

「では、続いて、アリサ・バニングス様」

「ええ」

続いて出てくるアリサ…薄い黄色のサマースドレス…は、マイクの前に立ち。

「結婚おめでとう、二人とも、私ももう11年来の付き合いだけど、貴女達が婚約した時は驚いたけど、納得もしたわ」

と、まあ地球にいる人から見ても婚約前からもう結婚しろよ、とか思われていたらしい事をミッドの事は言わずに言ってくる。

「というわけで、ようやくきちんと結婚して、こっちは落ち着いた気分よ、おめでとう」

素直に言わない所がアリサらしかった。

再び鮫島が登場し、場所を交代する

「では、ヴィータ様のお色直しでございます、皆様暫し歓談をお楽しみください」

そういって、ヴィータをつれて、アリサ、すずかが会場を出て行

く。

ヴィータが居なくなった良彦の場所に、小中の頃の仲の良かった男子が集まってくる。

口々にお祝いと、コップに酒を注いでいくのだ、それを断るわけにも行かず飲み干していく良彦。

返杯もしているが、多勢に無勢、良彦の飲む量はどんどん増える。少し酔いが廻ってきた所で、会場の扉が開き、スポットライトが当てられる。

そこに居たのは、薄っすらと化粧をして、所謂十二単…春夏の明るいめの色、薄い素材の物…を着た、ヴィータだ。

それを見て、ぽかーんとする良彦…良彦には衣装類は一切どういったのものを着せるか聞かせていない。

まあ、結構重量はあるのだろうがそれを感じさせない歩み、普段と違い楚々としたそれで、席へ付く。

「どうしたよ、おい、良彦？」

「うおう…わりー、見とれてた」

「っ、何言ってたんだ、ばかつ」

「だって、普段と別人だぞ、その格好…それに化粧も」

まあ、酔ってる良彦は回りに人がいることをほぼ忘れてるのだろう、普段人前で言わないレベルで褒める。

そして、周りの人間はそれをにやにやと、眺めているのだ。

「つか、一寸だまれ、皆きいてんだろが」

「……おおう」

言われてようやく気付いたか、周りを見渡す良彦、そして

「みるな、おれんだ!」

と、言い切ったのだ。

「良彦?!」

「いかん、良彦君が、暴走してるぞ」

士郎が叫び、恭也、美由希が立ち上がると同時。

良彦、士郎、恭也、美由希、4人の姿が消える、更に次の瞬間には、士郎と恭也に腕を抑えられ、美由希に胸をつかまれた良彦が、会場の真ん中に現れる。

良彦が『音貫き』から、近くにいたかつての級友を投げようとしたのを、神速で3人が割って入った結果だった。

「予定よりはやいが、良彦君も着替えだ、この場は任せた、なのは」

「うん、わかった」

士郎がそういって、良彦を連れ出す、そのさいシャマルとはやて、セプトに視線を送っていた。

視線を受け取った3人は、後を追いかける。

新郎控え室で、開放された良彦は、シャルルに酔い冷まし…一種の毒抜きに近い…の魔法を使ってもらい、正気に戻った。

「…うあ、俺何やってんだ」

「馴れない酒を飲みすぎて、感情が暴走したんだろう、というか、独占欲が結構強いんだな、良彦君」

「すみません、土郎さん、恭也さん、美由希さん…止めてくれてありがとうございます」

「まあ、可愛い嫁を独り占めしたい気持ちはわかるがな」

「あはは、珍しいもの見たって事で、良いよ」

土郎、恭也、美由希は、苦笑しつつ許してくれる。

「所で、俺の着替えて？」

「それはやね、これなんよ」

はやてが取り出したのは、白い胴着に青い袴、八坂流の胴着だった。

「結婚式で、これを…？」

「良彦君の父さんの時は、その上に羽織を羽織ってね、おじいさんと戦って勝って、君のお母さんとの結婚を許してもらったんだよ」

「実際戦うんは、むりやけどな、こっちの羽織を羽織って、まあ、おじいさん、お父さん、お母さんに報告の意味でやな」

「判った、ンじゃ着替えるわ」

まあ、着慣れたものだ、着替え自体は早い、その上に、青い羽織を纏う、背中には八坂の家紋入りだ。

そして、会場に戻る途中、新婦控え室の方から同じような格好をしたヴィータと鉢合わせる。

視線ではやてに問いかけると。

「どうせなら、あわせた方がええやろ、ヴィータも八坂流つかえるんやし」

とのこと、どうやらあの後で、連れ出したようだ…そして会場内は、級友による一発芸大会中だった。

一気飲みは普通、手品や一寸したイベントを行っていたらしい、主役が居なかったのに余り気にしない辺り大物ぞろいである。

で、会場の扉が開き、良彦とヴィータ…こちらは羽織と袴が赤だった…が入ってくると、視線が集まる。

皆そのある意味で結婚式で珍しい格好に、一瞬驚くが、修行バカの良彦らしいと、納得してくれた。

その後、良彦を巻き込んでイベントが行われ、仕掛けなどがあったのか、罰ゲームを受ける事に。

ヴィータへの告白と、キスを強要されたりしたが、逆にそれを照れなく行つた良彦、酔いが冷め切つてなかったらしい。

地球でもミッドでも夫婦となった二人、それを祝ってくれた皆の
気持が心地よい二人だった。

72：披露宴（海鳴）（後書き）

地球側での結婚式と、披露宴です…良彦暴走は、まあ飲みすぎです。

次回は何かしらのイベント…ヴィータ妊娠発覚とか、108部隊への出張教導とか、そういったのを書こうかなと思います。

73：ヴィータの異変

ヴィータと良彦の結婚から数ヶ月、ヴィータは六課終了後はなのはの誘いもあつて教導隊入りし、後進の指導に当たっていた。

良彦は、現在は管理局の籍はそのままに、聖王教会騎士としての仕事…ロストロギア確保や、その為の独自交渉、管理局とは別にある…に、従事している。

良彦がたまに他の管理世界へ行く以外は、ほぼ普通の家庭と同じ感じである。

それと、まあ…結婚したので、性交もしている、今までは一切そういう行為…キスくらいはしてたが…をしてなかったため、最初は色々会つたらしい。

そして、そんな生活が落ち着いてきた現在、二人は何故か揃って本局の会議室に呼び出されていた。

「つか、今更俺ら呼び出して何だと思つよ？」

「わかんねーよ、良彦、なにやった？」

「今本局とはあんま関係ない仕事しかしてねーぞ、聖王教会と本局で争うようなロストロギアは無いはずだし」

「なら、あたしにもわかんねーな」

白い教導隊制服のヴィータと、航空隊制服の良彦が言い合いながら会議室へ入ると、そこにはレティ提督と、数人ほど撮影スタッフらしき姿。

「八坂ヴェータ教導官」

「八坂良彦三尉」

「「お呼びでしょうか？」」

入りながらの二人の言葉に、レティは

「ええ、一寸二人にインタビュウ受けてもらおうと思って…というか、本局の報道チームがさせて欲しいそうよ」

苦笑しながら、撮影スタッフを示す。

「…というか、俺らでいいんですか、それなのとはか、はやてとか、フェイトとか…他にもいるんじゃないかと？」

「だな、なんであたしら何だ？」

「彼らの言い分だと、結婚してる局員同士は多いけど、そのどちらもが空戦型、しかも二人揃って魔導師ランクはAAA+、というのが面白いんだそうよ、まあ質問に答えるだけだから、頑張ってる」

そういつと、レティは一寸下がり、レポーターらしき女性が出てくる。

「それでは、本局報道チームによる有名人インタビュー、本日は、本局航空隊でその名を響かせた『赤と青の子鬼』こと、八坂夫妻です」

「つて、まてい、いきなりその紹介かよ!」

「え、でもこれが一番有名ですよね」

「否定は出来ねーけど、もう一寸違うのねーのか?」

レポーターと言うか、この場合インタビュアーだろうか、は…きよとんとしてから

「それでは、夫妻に質問していきましょう」

と、きっぱりとシカトしてくれた、そのままに

「えーと、此方の資料では、お二人とも20歳となっておりますが、本当ですか?」

「無視して進めやがった!…まあ、事実だな」

「一応そうだな」

領きを確認し、更に勧めるインタビュアー。

「で、先日結婚、と…デキ婚じゃないですよね?」

「ちっげーよ、つかっ結婚するまで、してん「アホかー、一寸黙れ良彦」おつふっ」

いいそつになった言葉を、後頭部を叩いて止めるヴィータ。

「デキ婚とかじゃない、2年前に婚約してちゃんと結婚したぞ」

「そうですね、なるほど」

ヴィータの答えに満足そうに頷くインタビュアー。

「では、余興的質問はこのくらいで…ヴィータ教導官は、古代ベルカ式を中心として、近代ベルカ式の人や、ハイブリットの人を多く教えてますよね、どんな所に気をつけてますか？」

「ん…結構期間が短いんで、その相手にあつた技術を高める事かな、後は無茶をさせない事」

「なるほど、良彦三尉は、現在は騎士として聖王教会で仕事をしているとか、そちらでの仕事はどうですか？」

「局の時と違って、交渉も多くなつたからな、それが個人的には、苦手かな」

と、結構真面目なインタビューを繰り返していく。

「それでは、ヴィータ教導官に「一寸、まってくれ…すまね、席外す」って、教導官？」

そういつて部屋を飛び出すヴィータ、残された良彦は、一寸驚き気味だが、インタビューはそのまま良彦に質問してくる。

局に居た時の話や、なのはと共にアンノウン…現在ではガジエツト？型と言われてる…に落とされた時の話などだ。

そうやっている間に、時間は過ぎインタビューは終了、後半ヴィータは戻ってこなかった…途中、シャマルから帰りに医務室へ寄る

ように念話があつたが。

疑問に思いながら医務室へ顔を出すと、個室へ引つ張つていかれる、其処ではアンダー一枚…黒いシャツのような感じ…に、なつたまま検査機器を付けられてベットに横になっているヴィータ。

「何やってんだ、ヴィータ、シャル」

「おめでとう、良彦君」

そういうシャルに、怪訝な良彦、ヴィータは赤い顔をしている、そして

「おめでたよ、ヴィータちゃん」

「……………は？」

一瞬思考がロックし、何を言ってるんだシャルはと言う顔をする良彦、畳み掛けるように、シャルが

「ヴィータちゃんが妊娠したのよ、今3ヶ月くらいね…さつきも気持ち悪いって、駆け込んできたから、もしかしてと思って検査したら」

「ヴィータ…シャル、本当だよな、それ？」

「当たり前よー、こんな大事な事嘘で言えるわけないでしょ」

その言葉に、ヴィータに近づき

「良彦…あたし」

ぎゅっと抱きしめる。

「なんていうか、嬉しいよ、ありがとうなヴィータ」

「ばっかつ、礼とかいいよ…でも、うん、ありがとう良彦」

お互いに礼を言い合い、しっかりと抱きしめあう。

「シャルも、ありがとうな」

「ううん、良いのよ、それより暫く悪阻が酷くなるだろうから、できればたまってる休暇とか使ってお休みした方が良いと思うわ、育児休暇もあるし」

「ああ、そうだな…それで良いかヴィータ」

「ん、万が一があるといやだしな、それで良いぞ」

「そしたら、届けとかはしておくから今日は帰ろうぜ、後明日にでもはやてにちゃんと言いに行かないとな、皆にもメールはしとかねーと」

少し慌てた感じで、言う良彦を、もう一度抱き締めるヴィータ。

「おちつけよ、大丈夫だから、な」

「…ん、おう…そうだな」

それを微笑ましく見守るシャル、その日は何時もよりゆっくり

と歩いて帰ったのだった。

報告を受けた、皆が驚きと喜びで、メールやら画像連絡やらがその日は絶えなかったらしい。

73：ヴィータの異変（後書き）

まあ…悪阻で発覚する事が多いんじゃないかと、というか、ヴィータ少し前まで生理がなかったたので、あんまり気にしてなかったんじゃないかと思いました。

今回は、自宅での話しを少しいれようかと思えます。

74：休日的一幕

ヴィータ妊娠発覚から暫く、ヴィータ自身は溜まっていた有給休暇と、早めながら育児休暇を申請して、今は基本自宅でゆっくりとすごしている。

セプトもアウトフレームをフルサイズにして、ヴィータとほぼ変わらない大きさになり、家事などを手伝っている様子だ。

良彦は、長期出張になりそうな仕事などは一時抑えてもらえるように、カリムに頼んでいた。

ヴィータ懐妊の報告は、地球にももたらされており、お祝いの連絡や、気の早いプレゼントなどが届いたりもしている。

また、比較的時間の空くザフィーラが、ヴィータとセプトだけでは何かあった時困るだろうという事で、大抵居てくれるようになった。

そんな中、良彦も休日的一幕。

「ただいまー、何時ものとおつてくれー」

扉を開きトレーニングウェアで入ってくるなり、良彦が一言、それに対し

「タオルとスポーツドリンクでよいな、ほれ」

と、セプトが持ってきてくれる。

「あんがとな、ヴィータはどうだ？」

「あんずるな、ようやく悪阻も落ち着いたようで、居間でくつろ

いであるよ」

「そうか、近くで妊娠した人とかいかなかったからな、悪阻が酷いのかも判らねー」

「専属でシャマルが付いておる、それだけでも安心できると思うがのう、その上盾の守護獣に、我、セプテントリオンが付いておるのだぞ」

そういわれれば、そうだなと思う良彦。

「ん…俺がどっしりしないな、ヴィータも初めてだし緊張してるだろうから」

と、気を入れなおす。

居間に行ってみれば、狼モードのザフィーラとソファに腰をかけ、楽な格好…マタニティウェア…をしたヴィータが良彦を見る。

「おっす、今日も修行してきたのか？」

「いつもどおり動いてないと、どうしてもおちつかねーしな、そっちはどうだ？」

「少し身体も動かした方がいいって言われてツからな、掃除とかしといたよ」

「んじゃ、朝飯ちやちゃツと作るか、希望ある人は？」

3人を見渡すと、セプト、ザフィーラは任せるといったそぶり、ヴィータが

「玉子焼き、甘いのが良いな」

「ん…そうすると、ご飯、玉子焼き、焼き魚、味噌汁辺りか」

そう言いながらキッチンに立ち、エプロンをつけて、調理を開始する。

「どれ、我も手伝おう…味噌汁は、大根と揚げでよいな」

「ああ、それで頼む…ザフィーラはどうする、同じのにするか、ドッグフードか」

振り返り、ザフィーラを見れば

「同じ物を貰おう、良彦の作る物も美味しいな」

こくと頷く。

「あいよ、んじゃ4人前だセプト」

「心得た」

余談だが、このマンションのキッチンなどには、少し手が入っている、良彦の身長でも無理なく使えるようにサイズが小さめだ、これは他の場所でも高さが関係する所は全部そうになっている。

サイズの合ったキッチンで、手早く馴れた感じで、調理をすまし、テーブルに料理を並べて行く。

「できたぞ、ザフィーラも人形態で頼む」

「ああ、判った」

ザフィーラも人形態になり、椅子に付く。
4人揃って手を合わせ。

「……いただきます」「……」

食前の挨拶、そのまま、食事を進めながら、今日の予定の確認だ。

「一応今日休みだけど、しときたい事なんかあるか？」

「ん、そうだな、体動かすのにも、買い物とかどうだ？」

「何か欲しいもんあるのか？」

「セプトの服も、あたしの貸してるばかりじゃなくて、ちゃんと揃えたいしな、どうだ？」

その言葉に、軽く頷き、セプトにも視線を送れば。

「それは、ありがたいが、金子は大丈夫か？」

「共働き、しかも隊長クラスやってた人間舐めんな、六課時代の給料はほぼ残ってたんだ」

「ならば、言葉に甘えよう」

「ふむ…ならば、このままで付いていった方が良いか？」

ザフィーラがそう聞いてくる。

「だな、狼形態は、服屋はいれねーだろ」

「俺もそう思うな、そのまま頼む」

「判った」

そのまま食事を終え、オレンジジュースを皆でゆっくりしながら飲み、食休み。

昼食も食べて、午後一でクラナガンのデパートへ。

車ははやての家のを借りた、流石にザフィーラ込みでミニクーパーは狭すぎるからだ。

「さて、セプトの服か、基本ヴィータに任せて良いか？」

「おう、良彦じゃ、わかんねーだろうしな、いくぞセプト」

「うむ、よろしく頼む」

ヴィータとセプトは、女性というか、女の子の服飾売り場へ歩いていく。

良彦とザフィーラは、近くにある休憩スペースで待機だ。

「ザフィーラ何か飲むか？」

「そうだな、良彦と同じもので構わん」

「了解」

近くにあった自販機で、結局水を買って戻ってくる。

「ほいよ」

「ん、ありがとう」

二人水を飲みながら、ベンチに腰掛。

「何時もすまねーな、付き合ってもらって」

「何をいう、我らはもう家族だぞ、家族に多少迷惑を掛けても気にするな」

そういつてくるザフィーラと、笑い合い、拳を打ち合わせる。

「しかし、どのくらい掛かると思う、俺は最低30分くらいだと思っただが」

「一応1時間は覚悟しておけ、主が一人それくらいは掛けていた」

「…そっか、まあ、気晴らしになるならそれも良いか」

「そのくらいに思うのが丁度良い」

そのまま、ベンチで雑談を繰り返す。

どのくらい時間が掛かったか、声が掛かりそちらを見れば。

ヴィータと、恐らく買ったばかりなのか、水色のワンピースに、

青と白の縞模様の靴下のセプトが来ていた。

「二人とも、何話ししてんだ？」

「つと、お帰り…セプト似合ってるな、可愛いぞ」

「む…そうか、ヴィータが選んでくれたのだが」

「俺も似合ってると思うぞ」

良彦、ザフィーラが褒めると、セプトは嬉しそうにくるっと周り微笑む。

「他にも何着か買つといたからな、暫くは大丈夫だろ」

「そうか、んじゃ帰りにおやつでも買ってくか、地下で食材も買いたいし」

「うむ、心得た、我は生クリームが入ったクレープで頼む」

「あたしは、アイス入りのな」

「…たこ焼きがあればいいのだが」

「まあ、適当にみてごうや、行くぞ」

そういつて、歩き出す4人。

その後それぞれのデザートを買い、食材も買ってマンションへと戻り、ゆっくりとすごした。

74：休日的一幕（後書き）

まったりとした時間編です。

今回は、子供が生まれる頃の話にする予定です。

75：新しい命

それから又暫く、新暦97年の6月、ヴィータの出産予定日が近づいてきていた。

本局の病院に入院し、基本はシャマルが、産婦人科の部分はシャマルには流石に無理らしいので、別の女医さんだ。

既に何時生まれてもおかしくないと言われ、病室で良彦、ヴィータ、セプトが待機状態。

ヴィータは先ほどから陣痛の間隔が短くなってるらしく、何度か顔を顰めている、一応間隔を計るためにそのたび毎に連絡は入れているのだが。

「…大丈夫なのか、ヴィータ？」

「落ち着けて、ちゃんと先生に伝えてるから、その時になったら呼ばれるから」

「ロード良彦は存外、こういうときの肝は座っておらん…男だからか？」

そわそわする良彦をヴィータがなだめ、セプトはからかう、ザフィーラは一旦はやての所へ行っている、陣痛が始まった段階で知らせに行ってくれたのだ。

「つつても、初めてのことだからなどうしても慌てるし…正直、怖い気もする」

「大丈夫だったので、経過は順調、母体も問題ないって言われてん

「だろ？」

「ここ数時間こんなやり取りばかりだ。

一応ヴィータの希望を聞いて、良彦も分娩室へ入る予定だが、今からこれではヴィータの方こそ心配になりそうだ。

「全く、良いかロード良彦よ、これから始まるは確かに女の戦、だが男には男の役割りがある」

「役割り？」

「然様、自分の妻を気持ちの面で支え、はげます事じゃ、今の主はどうじゃ、出来ておるか？」

「そうセプトに言われ、考え込む良彦。
暫しの時がながれ」

「いや、出来てなかったな…慌てても恐がっても、それをヴィータに見せ続けるなんざ、失格だ」

「良彦…無理はしなくても良いんだぞ」

「大丈夫だ、ヴィータ、慌ててるし恐がってるかも知れねーけど、覚悟は決めた、ちゃんと全部見届ける、覚悟が」

ヴィータの言葉に、手をぎゅっと握り、そう答える良彦。

それに微笑みを返すヴィータ、再び陣痛が来たのか顔を顰め、連絡…すると返事の後ストレッチャーが運ばれてきて。

「そろそろ時間です、移動しますね」

と、看護師に言われストレッチャーで運ばれるヴィータ、それについていく良彦。

「セプト、ザフィーラとはやてに連絡を、来たら待ってもらってくれ」

「心得た、ヴィータの戦場で主の役割りしかと果たすが良い」

そういつて、微笑むセプト、良彦は手を振って分娩室へ入っていく。

数時間後、分娩室前に集まっていた一同…セプト、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ザフィーラ、アイン、ツヴァイ、ヴィヴィオ、ユーノ、直ぐに来れたのはこれだけ、しかも一部は仕事を放置してきた…に聞こえる、大きな泣き声。

それを聴いた瞬間集まっていた皆は、お互い喜びを込めて、騒ぎ出す。

少しして、分娩室の扉が開き、ストレッチャーに乗り、少し疲れた顔のヴィータと、その手を掴みながら歩いてくる良彦。

皆が口々に、祝いの言葉を延べるなか、二人は礼をいって、微笑む。

「とりあえず、病室移動しねーか、此処じゃ次の人の迷惑になるから」

良彦の提案で病室へ移動する面々。

ヴィータは流石に体の小ささから結構体力を使った様子で、ベツトの上で横になり、皆を眺めている。

「それでそれで、よしくん…男子の子？」

「女の子？」

「どっちや」

なのは、フェイト、はやてがコンビネーション良く聞いてくるそれに苦笑しつつ。

「男の子だよ、元気だった…少し抱いたけど、赤ん坊って壊れそうで、驚いたよ」

その言葉に、もう一度皆が歓声を上げる、個室…色々と出入りがありそうなので、そうしていた…にしたのは正解だったようだ。

「そうか、ヴィータ…頑張ったな、守護騎士の将としても、一人の女としても、そして友として嬉しいぞ」

「ああ、我らの誇りだな」

シグナム、ザフィーラがそういって、ヴィータの頭をなでる。

「前まではこんな事思いもしなかった、ただ破壊するだけだった私達に、新しい命が…ありがとう、ヴィータ、良彦、主」

「アインは、感動やさんですね」

そついつアインとツヴァイは、少し泣いているように見える。

「ヨシヒコに子供かぁ、凄いね…本当、おめでとう」

「すごいね、よしくん、これでよしくんはお父さん、ヴィータふくたいちようは、おかあさんなんだね」

ユーノがお祝いし、ヴィヴィオが、良彦が実感しきれてなかった所を素直に言ってくれる。

「おめでとう、よしくん、お父さんたちにも知らせないとね」

「アリサや、さすがにも、だね」

「カリムや、ロツサ、シスターシャツハに、リンディ統括官、レテイ提督、クロノ君もやな」

3人娘は早速メールを送っている、其処へ

「失礼しますね…って、なんでこんないっぱいいるんですか?!」

と、シャマルが入ってくる。

「皆がお祝いしてくれるんで、つい」

「つい、じゃありません、ヴィータちゃん疲れてるんだから、休ませて上げないと、ほら」

示す先では、いつの間にか眠っているヴィータの姿。

慌てて部屋を出る皆。

その後、新生児室にいる、子供を皆で見て、もう一度祝いの言葉をもらい、その日は解散になった。

新しい命…天涯孤独だった良彦に、ヴィータと共に守るべき命…が、生まれ、家族が増えたそんな一日。

75・新しい命（後書き）

と、言うわけで子供は男の子になりました、名前は日本風にするか、
なのはっぽく（車の名前）するか悩んでいます。

今回は、子供が少し成長した辺りを書こうかと思えます。

ヴィータが子供：名前は克信と名づけられた：を産んでから2年と少し、新暦78年の秋。

夏頃に世間を騒がせた、マリアージュ事件の後始末もつき、多少落ち着いてきている。

その事件で保護された【冥王】イクスヴェリア：千年単位で目覚めるはずがを予定外に目覚めた為か、何時覚めるとも知れない昏睡状態：は、現在聖王教会で保護し、預かられている。

ナンバーズの更生組み：チンク、セイン、オットー、ノーヴェ、デイエチ、ウエンデイ、デイド：や、ヴィヴィオ、スバル等は良く顔を出している様子だ。

まあ、更生組みのうち、セインはシャツハについて修道騎士みない、オットーはカリムの執事、デイドはシスターなので、イクス：イクスヴェリア：の世話もよくしている。

良彦も時間があれば、偶に世間話を聞かせる程度の事はしている。子供：克信：も、2歳になり、ヴィータが連れて本局の児童施設で預かってもらうか、良彦が連れて聖王教会で預かってもらうかはその日のお互いの仕事次第だ。

どちらも無理そうな時は、アイナさん：アイナ・トライトン、六課で寮母をしてきてくれた人で高町家、ミッドの方のだが、ホームヘルパーをしている：に、預け、ヴィヴィオと一緒に世話をしてもらっている。

「で、まあ今日は俺の方が特に急ぎの仕事無かつたし、預かってきたんだが」

その言葉を聞いているのか、水色の髪、半そでのシスター服の少女…セインだ、こだわりは半そでらしい…が克信を抱き上げ、振り回している。

克信も楽しいのか、笑いながら振り回されている。

「すみません、騎士良彦、姉がああで」

「いや、オットーのせいじゃないしな、というか喜んでるからいいんだ、それにセインのISがあれば、振り回しても物にぶつかりはしねーし」

「でも、調子に乗りすぎていると…」

オットーに答え苦笑する良彦、冷静に見ているディードが呟いた時。

「シスターセイン！、修練はどうしたんですか？」

と、シャツハの叫び声が聞こえ、視線をやれば其処には息を切らせたシスターシャツハ。

「シスターシャツハ、えーっと…ほら、克信をあやす仕事って事で…だめですか？」

「それはオットーとディードが与えられた仕事です、貴女は騎士としての修練の時間だったはずですが？」

その言葉にセインより早く反応する人間が一人。

「ほう…我が子と遊んでくれるのはありがたいが、修練を逃げ出

すのはいかな、騎士セイン」

「はっ…シスターシャツハと、騎士良彦が…揃っている、それすなわち」

ガクガクと震えるセインから、いつの間にかオットーが克信を助け出している。

「逃げ出せないという事ですね、姉さま」

そして、冷酷に告げるディード。

「ああ、丁度いい所に騎士良彦、騎士セインの修練お付き合いをいただけますか」

「当然だ、修練をサボるとどうなるか覚えてもらわねーと…オットー、ディード、少し克信を頼む」

「はい、お任せください」

オットーが答え、いつの間にかセインを捕まえたシャツハと良彦は、3人揃って騎士修練場の方へ消えて行く。

その後、セインの叫びが響いたとか響かなかったとか。

その少し後、汗を流してイクスの部屋へ様子を見に行くと、先客がいるようだ。

金色の長い髪に緑と赤の虹彩異色の少女…ヴィヴィオ…と、赤い髪をショートにした、気の強そうな少女…ノーヴェ…がいた。

「なんだ、イクスと話してもしてたのか？」

「あ、よしくん、うん、今日学校であったこととかをね…よしくんは？」

「ん、さっきまでセインを絞ってたんだが、終わったんでイクスの様子見にな、ノーヴェは付き合いか？」

「はい、八坂三尉、ヴィヴィオが練習前について言うんで」

「ノーヴェ、名前呼び捨てで言いし、言葉使いも前と同じでいいぞ、きにしねーから」

「はあ、りょーかい、一応気を使っただけど？」

「はっ、昔の言葉使い知ってるほうからみりゃ、無理してるのばればれたっつの、局じゃないし、気にすんなよ」

そのやり取りにヴィヴィオはクスクスと笑っている。

「んで、話は終わったか？」

「うん、色々お話したよ」

「そうか、そりゃよかったな」

ぼんぼんとヴィヴィオの頭を撫で

「この後何時もの練習か、よかつたら少しみるか？」

「いいのっ!?!…あ、でも克信君は？」

「場所は何時もの魔法練習場だよな、連れてくるから一寸まってる、ついでに車で送ってやるよ」

「うん、判ったありがとう、よしくん」

「ん、あんがと、良彦、さん」

ノーヴェのさん付けに苦笑しつつ、克信を受け取り、ミニクーパーでなのはの家近くの魔法練習場へ。

広くて何も無い公園のような場所、基本自由に魔法を使える場所、それが魔法練習場だ。

「さて、軽く柔軟からな」

其処に3人：良彦、ヴィヴィオ、ノーヴェ…がたち、トレーニンググウェア姿で、柔軟運動を始める。

克信は、ベンチに座らせ、近くにサーチャーを置いている、何かあれば良彦が直ぐ気付けるように。

「んじゃ、拳打と脚撃の基本から、繰り返すか」

柔軟が十分終われば、其処からは基本の時間だ…というか、良彦は基本以上は教えられない。

拳打、脚撃の基本はほぼ同じながら、彼女らの習っているストラ

イクアーツには投げや極めは存在しない為、おのずと体の動きが変わってしまうからだ。

なので、基本だけ見てその先はノーヴェがヴィヴィオに教える、良彦が他に教えられるのは、並列思考の練習や、魔力制御の精密化くらいだ。

ちなみに、【風王流】は、そも二人に風の変換資質が無い時点で不可能だ。

「ヴィヴィオの動きも板についてきたな、師匠がいいからか？」

ヴィヴィオの体さばきや、コンビネーションをみながら、ノーヴェに聞いて見る。

「あたしは師匠じゃねーよ、そういう良彦こそ、どうなのさ」

「俺の方が師匠とはいえねーだろ、教えられるのは基本中の基本だけだぞ、武術として目指す場所が違いすぎらーな」

「そういうもんかね、まあ頑張ってるのは確かだよな」

「だな、魔法の勉強もストライクアーツも全力全開：なのはみてーだ」

苦笑しながら語り合う二人。

その後は軽く組み手だ、良彦が二人の相手をするのだが、魔法は身体強化のみ、射砲撃などは無しだ。

正確には、ヴィヴィオとノーヴェは身体強化のみ、良彦は魔法を使っていない。

それでも、二人の攻撃をしつかりと『弾き』、『捌く』：15年以上の積み重ねはそう簡単には越えられはしない、しかも八坂流合気術は元々相手の力を利用するわけで、本人が多少力で劣っても問題はなく。

そもそも、強化無しでもかなりの身体能力を持つ良彦に技がおまけされる、防御しつつ、無理な姿勢での攻撃や、癖を指摘するくらいに余裕はあった。

で、まあそんな事をしていると、声が掛かる。

「おめえは、又修行つけてんのか？」

「ん、まあ力になれるならなつてやりたいじゃねーか、昔の俺とかなのは見たいにならねー様に」

「よしくん、それ言うの禁止だから」

声に、ヴィヴィオとノーヴェも動きを止める。

「なのはママ、それにヴィータさん」

たたたと駆け寄りなのはに抱きつくヴィヴィオ、ヴィータの手には克信が抱かれている。

「どうも、なのはさん、ヴィータさん」

「ただいまヴィヴィオ…ん、こんばんはノーヴェ」

「おう、ノーヴェ、家のバカが何かしなかったか？」

ノーヴェの挨拶になのは、ヴィータが答え。

「修行に関してはプロだせえ」怪我しながら、修行するバカが
か？「はい、すいません」

「まあ、何時もながら良い練習になってます」

ノーヴェがその様子を見ながら苦笑、なのはとヴィヴィオも笑っ
ている。

「ともあれ、もう結構遅いし、そろそろきりあげない？」

「…って、もうこんな時間か、ンじゃ切り上げるか」

「はい、ありがとうございます、よしくん、ノーヴェ」

「…っていつか、ヴィヴィオもよしくんですっかり固定だな」

「ヴィヴィオは物怖じしないしね」

なのはの言葉に、良彦が答え、ヴィヴィオが一礼、ヴィータとノ
ーヴェは苦笑している。

その後、食事は家族と食べると言うノーヴェを見送り、なのは、
ヴィヴィオと良彦、ヴィータ、克信は一緒になのはの家で食事する
事に。

「…しかし、あれだな、なのはが食事作れるようになってるのは
驚きだった」

「ちよ、よしくん、私こどものころからできてたよ…その、簡単

なのは「

「目玉焼きとか、温める系のだったっけ？」

「というか、よしくんとはやてちゃんが、特別なんだってば」

台所で言い合う二人を見つつ

「まあ、はやての飯はギガうまだしな」

「ママのご飯も美味しいよっ」

ヴィータが克信をあやし、ヴィヴィオも一緒になってあやしてくれている。

食事を取り、少しゆっくりした時間をすごした後、良彦たちも帰宅、風呂に3人で入り、そのままベットへダイブするのであった。

76・日常（後書き）

子供の名前は克信となりました、2歳なので多少喋る気もしますが、今回は台詞無しです、挟む場所を上手く思いつきませんでしたorz

次回は、オリジナルで対アインハルト（大人モード）戦を入れようと思います。

77：霸王を名乗る少女

聖王教会の騎士としての仕事をこなした帰り、時間は既に夜、止めてある車へと向かう途中で一つの気配に気付き振り返る。

其処には銀の長い髪、顔にはバイザーを付け、白い袖なしジャケット、インナーは長袖の薄緑ツばいワンピース、手には黒の指貫手袋、太腿まであるソックスに、スニーカーのような靴を履いた少女が一人。

「【風王】八坂良彦さんですね、少しよろしいでしょうか？」

「…その名前で呼ばれるのは、初めてだが、確かに八坂良彦だな、そっちは？」

「失礼しました、カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルト、【霸王】を名乗っています」

「……【霸王】ときたか、それにイングヴァルトね…おもしれー、んで何のようだ【風王】に？」

名乗りを聞いて、楽しそうに笑ういかける。

「確認したい事が2つ…まずは、他の王について、貴方は知っているのではありませんか？」

「知ってるが、答える事はできない、騎士として、管理局員として、そして【風王】としてな、2個目は？」

「では、私と貴方どちらの拳が強いのか、を」

「ようは、辻合って事か……ま、いいだろこれも経験だ」

【霸王】の少女に対し、構える、それを見て【霸王】…イングヴァルトは

「バリアジャケットと武装を展開してください」

そう言うのだが

「させてみる、必要だと思えばしてやる」

良彦はそう返し、構え…左手を顔の前、右手を腰辺り…のままだ。

「なら、行きます」

静かに答え、少し距離のある位置で構えるイングヴァルト…其処から一瞬で、良彦の目の前までステップインしてくる。

そのまま右拳を良彦の顔めがけて、振り抜く。

が、良彦の左拳がそれを許さない、小さく捻りを加えた『弾き』で、相手の拳を逸らす。

逸らされた拳を引き戻しながら、イングヴァルトはそのまま小さく右膝を良彦に打ち込んでくる。

その右膝を右手で受け止め、地を蹴って後へ、距離をとって構えなおす。

「どうした、これじゃセットアップの必要を感じないぞ」

挑発するような言葉に、イングヴァルトは一つ深呼吸。

「まだです…」

再びのステップイン、今度は小さくジャブから入り、幾つかの拳打を重ねてくる。

ある程度大きな一撃以外は上体を動かし『捌き』、大きなものは『弾く』、何度か繰り返した後で大振りの一撃を『弾いた』瞬間。

『弾いた』腕と、足をバインドされる。

「ほう…こりやまた」

「霸王…断空拳」

呟く良彦の前で、イングヴァルトは構えを取り、手刀状の拳打を振り下ろす…瞬間、良彦は青い光に包まれ、次の一瞬にはバインドは消え去り…。

振り下ろされる拳を、捻るように突き出した右拳で『弾き』、振り下ろされる勢いそのまま、右手で相手手首を掴み、下へ引き大勢を崩させ、左手で腹に手をそえ、イングヴァルトの足を自分の足で払い上げる。

くるんつと自分の拳打の威力で一回転する相手を、ぐいっつと右手を取って引っ張り、地面にすんと落とす。

何が起こったのかわかってないイングヴァルトを、すぐさま

「風鎖」

『了解』

風と魔力にてバインド。

「バインドまでの流れは申し分なし、ただその後の溜めが長すぎだったな」

先ほどの一瞬でセットアップしたのであろう、青のジャケットにズボン、無骨な鋼色の籠手、黒のハードブーツの良彦が、総評する。

「今のは、一体？」

「【風王】の技だよ、まあ予想外に強かったなイングヴァルトは、セットアップまで追い込まれた…すまん、正直お前さん侮ってたわ」

「いえ、それよりも今の」

「悪い、今日は時間ねーんだよ、再戦する時は始めから本気でいくから、騎士団の詰め所にも来てくれ、んじゃ、それは少ししたら勝手に解けるからよ」

疑問を投げるイングヴァルトを放って置いて、車へと急ぐ…今日はヴィータも良彦も克信を連れてこれなかった為、なのはの家、アインさんに預けているのだ、迎えは良彦。

そんなわけで、ぱかんと『風鎖』に縛られるイングヴァルトを置いて、良彦は車に乗って急いで駐車場を出て行ってしまふのであった。

で、克信を無事に受け取って帰宅後、既に克信は寝ている時間、

ヴィータが帰ってきて、食事を出しながらイングヴァルトの話を話していた。

「って、事があってな、いや中々先が楽しみな相手ですよ」

「つか、おめえ、それ相手立派な犯罪じゃねーのか？」

「…いいじゃねーか、武術家同士の試合だし、こっちも同意してんだから」

言われて見ればそうかもしれないが、良彦的には、普段の模擬戦と余り変わらないので、気にしてなかった。

「つたく、まあ、良いけどな…でも【風王】ご指名の相手ってか、しかも自称【霸王】だろ、古風なのかね」

「前にクロノに聞いたんだが、昔の王達の子孫のなかには、継承記憶持ちもいるらしいから、その線かもな」

「そういや、そんな事聞いたな、良彦も一種のそれなんだろう？」

「俺の場合は、王じゃないけどな」

「ふーん…ま、今度来たら聞いてみるよ、話せば判るかもしんねーぞ」

「そうするか…ほれ、お代わりな」

ヴィータのご飯をよそいなおしたりしつつ、他の話題に話がずれて行く。

もっぱら克信が何かいったとか、何かしたとか、既に其処にいるのは親バカ二人と化していた。

77：霸王を名乗る少女（後書き）

ぎりぎりまでセツトアップしなかったのは、相手の実力などを見極める為と、バインドが無ければ実際あのままでも勝てる自信があったからです。

まあ、【風王】の子孫とか隠してるわけではなく、教会は知っているのだけれどもおかしくないかなという感じで、こうなりました。

今回は、ヴィヴィオVSアインハルト、2戦目の大人モード対決に絡ませる予定です。

78：ヴィヴィオリベンジ

【霸王】 イングヴァルトを名乗る少女との辻試合…良彦はそう思っている…から暫く。

管理局などに被害の報告は上がっていないのだが、どうやら同一人物と思われる少女による格闘技の実力者への挑戦、というか襲撃が少し話題に上がっていた。

「つか、これって…要するに負けたから被害届け出してねーって事だよな」

「まあ、【霸王】名乗ってるとはいえ、女の子だからな、それに負けりゃ出しづらিদろ、自分の所の看板とかの問題もあるし」

「看板なんか、だしてねーだろ？」

「ああ、いや、面子って意味の方な」

「ふむ…年若き女子に負けるというのは、それほど問題かのう？」

ヴィータの言葉に良彦が答え、セプトが首を捻る。

「まあま、うん」

「ああ、ほら克信、あーんして」

「あー」

その間に克信は先ほど上げたご飯を飲み込み、ヴィータに催促し

ている。

「正体不明で、少女相手、挑まれたとしても受けたのは自分ら、これで被害届け出す格闘家がいたら、みてみたいもんだ」

「そんなもんかのう…ほれ、ヴィータよ、克信がこぼしておるぞ」

良彦の言葉に首を傾げながら、セプトが指摘する。

「ああ、ホントだ…元気に食うからな、克信は」

「ま、いいことだよな」

こぼれたご飯を片付けながら、皆が微笑んでいる。

それから数日たったある日、なのはから連絡で、ヴィヴィオが少し落ち込んでいる事と、その原因になった相手ともう一度組み手をするんで、一応チョコツと様子を見てくれないかと頼まれる。

丁度非番…というか、ヴィータが休みだと教えたらしい…だったので、克信と散歩がてら、ヴィヴィオの元へ出かけることに、再戦は今日だそうだ。

待ち合わせ場所に行ってみると、何やら大所帯…ヴィヴィオ、ノーヴェ、チンク、デイエチ、ウエンデイ、オットー、デイド、さらに見てみればスバルとティアナの姿もあるし、ヴィヴィオの同級生と思われる初等科の少女2人と少年1人。

「おいつす、なんだこの大所帯？」

「びーお、びーお」

近づけば、克信がヴィヴィオに手を伸ばす。

「あー、よしくん…どうして此処に？」

「親バカに頼まれてな…つか、スバルにティアナまでどうしているんだ？」

苦笑しながら、ヴィヴィオに答え、スバル、ティアナに向き直る。

「えっと、色々ありまして休暇だったし見届け人です」

「それと、アインハルトを迎えに行っていました」

と、言われてみればスバルの後に一人の少女…セントヒルデの中等科制服を着て赤いリボンをつけている…が、此方を見て少し驚いた表情。

「…ふむ、お前さんがヴィヴィオと組み手するのか」

「は、はい…セントヒルデ魔法学院中等科1年、アインハルト・ストラトスです」

名乗りを聞き、暫しアインハルトを見つめた後

「【風王】の直系、清風の騎士八坂良彦だ、始めまして、アインハルト」

そんななのりを上げる…克信を抱いているので一寸コミカルに見える…と、周りが一瞬騒がしくなるが良彦は気にせず。

「ま、組み手二人とも頑張れよ、ヴィヴィオ、アインハルト」

「うん、ありがとうよしくん」

「は、はい」

二人が広い場所…港湾救助隊が訓練で借りたりする場所らしい…へ、進み出る。

「良彦さん、アインハルトを知ってるんですか？」

「始めましてって言わなかったか、俺は？」

ティアナの問いにそう答え、苦笑。

「アインハルトに合うのは初めてだな…イングヴァルトは、一回辻試合をした事がある軽くな」

「…ええええ！」

「ちょ、それ本当ですか？」

驚くスバル、更に問いかけるティアナ。

「急いでてな、数手遣り合ってから、バインド放置した」

「…なんてことを、何時の事ですか？」

聞かれるまま答えると

「格闘家襲撃の前ですね、それ…あー、もう、こんな近くに知ってる人が居たなんて」

「格闘家同士の辻試合だろ、イングヴァルトはちゃんと申し込んできたぞ？」

「それでも、犯罪だって局に居たんだからしってますよね、良彦さん！」

「局の人間の前に、騎士で格闘家だからな、今度から気をつけるよ」

ティアナが疲れたようにへたり込む中、ヴィヴィオとアインハルトが、セットアップと武装形態…アインハルト風のセットアップか？…を済ませる。

ちなみに、二人ともに変身と強化魔法を使っているのか、身長も高くなり、16、7くらいに見える…というか、ヴィヴィオの姿は箱舟戦を思い出す格好だ。

「いきます！」

「はい」

お互い距離をつめ、アインハルトの右拳を、ヴィヴィオがクロスアームガード、ガードの上からでも衝撃は十分そうだ。

更に左のショートストレートを顔にかすらせつつかわし、続いて右のストレートを左腕の肘で跳ね上げつつ受け止め。

大降りの左フックを頭を下げてからぶらせ…ボディへ右のストレートを打ち込む。

衝撃で後へ飛ばされるアインハルトへ、ヴィヴィオが追撃、近距離で打ち合いになり。

お互いの騎士甲冑がほつれるなか、ヴィヴィオの拳を受け止めたアインハルトが、足元から力を練り上げ…。

その力を直打に乗せ、ヴィヴィオに放ち…瞬間、ヴィヴィオも左のショートアッパーをアインハルトにかすらせている…吹き飛び、外壁に突っ込むヴィヴィオ。

「……一本、そこまで」

ノーヴェの声と共に、ノーヴェと良彦以外がヴィヴィオに駆け寄る。

目を回したヴィヴィオを介抱している、デイド。

危なくないよう気をつけてくれたといって礼をいう、ウエンディと子供達。

それに顔を赤らめつつ答えようとするアインハルト、が、ぐらつとゆれ、ティアナへ倒れこむ。

「あら、大丈夫？」

「え、はい…なんで」

「最後、ヴィヴィオがカウンター入れたの気付かなかったか？、顎先だから今になって揺れたのが来たんだろ」

そういう良彦に、ノーヴェも頷く、アインハルトは自分で立とうとして、今度はスバルへ寄りかかってしまう。

「いいって、無理しないのー」

ぼふんと抱えられ、恥ずかしそうなアインハルトは、小さく頷くのみ。

「で、どうだった？」

ノーヴェの問いにアインハルトは

「彼女には謝らないといけません、先週は失礼な事を言っていました、訂正します、と」

「そうしてやってくれ、喜ぶ」

それを聞いて、気絶しているヴィヴィオの手を取り

「始めまして……ヴィヴィオさん、アインハルト・ストラトスです」

「てか、おきてる時にやってやれって、それ」

突っ込む良彦に

「恥ずかしいからいやです」

と、照れているアインハルト…良彦の腕に抱かれた克信が、手を伸ばしながら

「あーい、はうと」

と、その髪をひっぱたりして、少し騒ぎになったりしつつ、その日はゆっくると過ぎて行く。

78：ヴィヴィオリベンジ（後書き）

二人の再戦に絡んだらこうなりました：少年一人は、今考えてるヴィヴィッド編の方で主役で出そうかと思っています。

その時はよろしく願います、此方は日常的なことや、新しい方と絡めつつ進められればと思っています。

次回は、良彦の騎士としての仕事か、ヴィータ側に視線を移すかも知れません。

79・日常（良彦）

さて、ヴィヴィオとアインハルトの一戦…彼女達的には第二戦目…を見届けた翌日。

この日はヴィータも良彦も克信を連れて行けないため、アイナさんに預けて仕事へ向かった。

で、まあその日の仕事の説明を受けにカリムの部屋へ向かう良彦。扉をノックし、来訪を告げれば。

「どうぞ、入ってください」

と、カリムの声。

「失礼します、騎士良彦、セプト参りました」

「はい、いらっしやいませ、いつもどおりくつろいでください」

まあ、此処らへんは何時ものやり取り、カリムが書類を持ち、テーブルへ腰掛、続いて良彦も対面に座る。

「それで、面倒事っていうのは？」

「それなんだけど、教会の方で調査しているロストログア、その内の一つの場所が特定されたのよ」

「なら、騎士団出せば良いんじゃないか？」

「それがね…まずこれを見て」

カーテンが閉められ大きなウィンドウが空中に現れる。
何処かの岩山だろうか、祭壇が置かれていて、カメラが移動し祭壇の裏へ、そこには余り大きくない穴が開いている。

「この穴の奥にあるそう何だけど、現地の人との話し合いで祭壇周りの破損は避けるように、という条件が付いてるの」

「この穴も広げられない、と…なら、少年騎士は？」

「サーチャーを送り込んだ所、傀儡兵が数体確認されてるわ、恐らくランクはAランク以上」

「…それで、俺が、中に入れそうだし、傀儡兵も対処できる、と」

「そういう事、騎士良彦お願いできますか？」

「了解、目標のロストロギアは？」

カーテンが開き、ウィンドウも閉じる中、良彦が聞くと。

「ロストロギア『水呼びの杖』、その名の通り、水を呼ぶ杖よ」

「何故、それが回収対象なんじゃ？」

「持つ人の魔力を使って水を作るのだけど、小さな魔力でも膨大な量の水が出来る上に、使用者の魔力を使い切るまで止まらないの、今杖がある世界、かつては奴隷制度があつて、旱魃の時なんかは奴隷にこれを使わせたそうよ」

「なるほどのう、今はどうなっておるのじゃ、そこ等辺？」

「教会及び管理局との接触以降は、そこ等辺の法整備と技術供与で、奴隷は撤廃、生活も安定しているわ、それである意味で危険なものだし此方で封印、と言う話しになったのね」

セプトの疑問にカリムが答える。

「なら、問題ないってことか、直ぐに出て良いのか？」

「ええ、ポートの準備も現地でのサポートの準備もできてるから、気をつけて行って来て下さい、騎士良彦」

「あいあい、んじゃいつてくるわ騎士カリム」

席を立ち、部屋を出る良彦とセプト、それを見送るカリム。

数時間後、転送ポートを使い現地へ到着、サポートの騎士達の案内で実際に祭壇裏へ。

確かに普通の大人の騎士では女性でも入れないであろう穴が開いている。

「んじゃ、ちくつと行って来る、何かあれば連絡するから」

そう言いながら、騎士甲冑にセットアップ、肩にセプトが乗っかり、穴の中へ入って行く。

穴の中は暫くは狭いが、段々と広がり途中からはかなり大きな洞窟のような場所になる、ただ一応崩れないように人の手が入って

いるらしく、壁には柱や補強した跡が見て取れる。

「ふむ、この広さなら戦うに支障はなさそうじゃな、ロード良彦」

「だな、狭くても戦えるけど、広い方がやりやすい」

セプトとそんな会話をしながら歩いていると、前方の様子が一辺してくる。

その様子はまるで地下神殿、明らかに人工の物である大きな柱に、地下なのに屋根があり、柱の間には甲冑が立ち並ぶ、無事に動きそうなのは4体ほど、他は壊れているのか動きそうにない。

「どうやら、この奥か…こいつらが傀儡兵か？」

「そうじゃな、古い型のようじゃが、それなりに動きそうじゃ」

そのまま近づくと二人を感知したのか、甲冑：傀儡兵：が動き出す。

「警告もなし、ってことは何かしら入るための決め事か物があるんだらうな」

「既に失伝しておるか、あえて隠したかは判らぬが、な」

「つつても、回収は許可してんだ、こいつら壊すのは問題ないだろ、支援頼むわ」

「心得た…我が主の風を強めよ…『風圧強化』」

セプトの強化魔法を受け、駆け出す良彦、身長2m程度の巨大な甲冑が良彦を押しつぶさんと襲い掛かる。

「一っ！」

巨大な剣を持ち、振り下ろした傀儡兵の懐へ飛び込みながら、動力源であるう、頭の奥に見える宝石…魔力の集積回路か？…へ、風拳・圧を叩き込み破壊。

宝石を砕かれた傀儡兵は、動きを止め、崩れ落ちる。

続いて剣と盾を持った傀儡兵が、盾で牽制しつつ剣を振るってくる、逆側からは斧を持った傀儡兵が、巨大な斧を振り下ろす所だ。その同時攻撃を、『貫き』による一瞬の高速移動で、斧をの側面に回り込み、斧の柄の部分を『弾き』方向を剣の方へとずらす。

結果、斧と剣はぶつかり合い、お互いの衝撃で一瞬動きを止める。

「おお！」

だんつと地を蹴り、高い位置にある傀儡兵の頭、斧を持つ傀儡兵の頭に風を纏った蹴り…『風脚・烈風』…を放ち、宝石を破壊すると共に噴出す風に乗って剣を持つ傀儡兵の方へ。

風に乗った『風拳・一刃』にて、剣の傀儡兵の頭を両断。

「二、三…次っ」

振り向いた良彦の視界に見えるのは、白い光りが集まる所、残り一体は砲撃型。

「…相性悪いのが残ったな、ったく」

眩く間に、一閃、光りが良彦に向かい撃ち出される。

「くっ…！」

間一髪横に避ける良彦に、傀儡兵の副砲が向けられる…主砲2門と副砲4門のタイプ…その先端から細い砲撃が繰り返される。

その砲撃の間に身体をねじ込みながら何とかかわし続け、一瞬後方へと飛びのく。

「セプト！」

「うむ、ユニゾン・イン！」

既に待っていたセプトが直ぐに良彦にユニゾン。

『モード・ノトス』

ゼピュロスもモード・ドライ、ノトスへと移行する。

「あのレベルなら、問題ないな？」

『当然じゃ、真っ向から行けるぞ』

「なら、一発で決める、ゼピュロス」

『カートリッジロード』

2発のカートリッジをロードし、右手に青い魔力光と強い風が集まる。

『ゆけい…！』

「おうさっ！」

傀儡兵は主砲と副砲をあわせて構え、撃ちだすが、その白い光りの中を青の光りが駆け抜ける。

砲撃を付きぬけ、溜めていた風と魔力を傀儡兵へと叩き込む。

『「風拳・烈空！」』

拳が当たった場所から真空の刃が四方にはしり、傀儡兵を寸断し…辺りは静けさを取り戻す。

ユニゾンを解きながら、セプトが現れ。

「ふむ、少年騎士ではこれは辛かったであろうな」

「ああ、カリムの判断は間違ってたな」

辺りを一応警戒しつつ、神殿の中へ…神殿の祭壇には一本の杖が置かれている。

「さて、んじゃ封印するか…ゼピュロス」

『了解、封印作業開始』

杖を風と青い魔力が取り巻いて、最初強かった風が段々と弱くなり。

『封印完了』

「じくろつさん、おし後は帰るだけだな」

「帰ったら報告書、じゃな」

「それが一番憂鬱だ、セプト手伝いよろしく」

「翠屋のイチゴシユー」

「あいよ、商談成立だ」

杖を手に神殿を後にし、外で待っていたサポートの騎士へ杖を手渡す。

その後転送ポートで教会へ戻り、書類をまとめ、帰ったのはヴェータより少し遅めになっていた、急いで食事の支度をしたのはここだけの話し。

79：日常（良彦）（後書き）

今回は戦闘ありますが、ロストロギア受け渡しで戦闘無もあると思います、その際も騎士は同席するだろうなと考えています、ロストロギアの危険性、闇での売買での利用の為の強奪など、色々考えられる為です。

次回は同じ日のヴィータの様子でも、と思います…初めて良彦主点以外になりそうです。

80・日常(ヴィータ)

さて一方、良彦が遺跡で傀儡兵と戦っていた日、ヴィータの方は教導隊の終了検定の為に、克信を連れて行って見ている余裕が無かったのだ。

なので、前話のとおり克信はアイナさんに預ける事になった。

白い教導隊制服を着て、なのはと共に局内を歩くヴィータ。

「しっかし、今回の教導も早かったな、2週間ってみじかくねーか？」

「そうだね、でもそれだけの時間である程度戦技の基礎が出来る人なら、一寸したコツで一気にレベルアップできるのも確か、何だよね」

「そうだけどよ…はっ、まさかこれって良彦の修行バカが感染ってんのか？」

「あはは、そうかも、よしくんは長い時間基礎を繰り返して、一つ一つの技も何千、何万と繰り返すからね」

慄くヴィータに、なのはが苦笑する。

「ま、まあ…今日は今回の奴らの終了検定だ、だめなのは居残りでもいいんだよね？」

「うん、ある程度まで達して無いと思ったら、相手には悪いけど

…」

「悪くねーよ、其れで本人の命が守れる確率が少しでも増すんだって思え、半端な実力で送り出すよりよっぽど良い」

「そっか、そうだよね」

二人揃って、訓練場へ到着、既に今回の教導参加者は整列している。

揃っている参加者の前、台の上に二人が立ち。

「それじゃ、2週間の締めくくり、卒業検定…私がミッド式を、ヴィータ教導官がベルカ式をみるからね」

「ダメな奴は、容赦なく再試験だかな、覚悟しとけよ！」

二人の声に、はい、と元気良く返事をする一同。

参加者が二組に分かれ、それぞれデバイスを構える。

なのはの側は、ミッド式らしく杖型が多く、ヴィータの側は、比較的色々なアームデバイスが見られる。

戦技教導に参加するだけあって、外見はそのままでも中身は改造や、術式の独自変換などをしている人も多いようだ。

「おっし、んじゃまずは、大型オートスフィア相手にコンビで挑んでもらうぞ」

「了解！」

ベルカ組みの声が響き、それぞれコンビに分かれて行く。

スバルとティアナが苦労したBランク試験最大の難関が、此処で

は基本ターゲットだ。

次々と二人一組で大型オートスフィアを攻略して行く…ベルカ式なので、射砲撃は目立たず、やはり近接での攪乱、その後魔力を溜めて打ち砕く事が多いようだ。

一通りの参加者が大型オートスフィアを落とすし、戻ってくる。

「んじゃ、次はあたしと空戦、2on1で行くぞ」

そういうと、ヴィータは騎士甲冑を展開し、空へ上がる、決められていた順番どおりに参加者もコンビで上がってきて、2対1の空戦。

その中でヴィータはあえて相手の魔法を打たせ、それを受け止め、反撃する…その反撃が簡単に入るようなのはこの時点で落第なのが…今の所落第者は居ない。・

続いて、ヴィータの攻撃…参加者の攻撃をシールドやバリア、バインドなどで押しとめて、放たれる…を、防御、もしくは回避させるようにヴィータは魔法を繰り返す。

空戦機動の流れや、シールドなどで受け止める時生じる一瞬の停滞に対する反応、その他諸々をこの短い2対1の模擬戦のなかで、確認して行く。

数時間後、ヴィータの前には疲れ果てた参加者が、それでもきちんと立って待機している。

見ればなのはの方も終わったのか、ヴィータに頷きを返す。

「よし、最初の位置に整列、急げ！」

声と共に台の前に整列する全参加者。

台の上、なのはが一步前に出て。

「はい、卒業検定終了です…ヴィータ教導官、結果は？」

「残念ながら……落第者なしだな」

一瞬声を落とし、ベルカ組みがざわつく中、けろっと明るく言うてる。

「ミッド側も落第者無し、これで2週間の教導を終わりにします、頑張ったね、皆」

その言葉に参加者から歓声、それと

「ヴィータ教導官、さっきのはいですよ！」

「そうです、これはお詫びに克信君を抱っこさせてくれないと」

などと、女性参加者から声上がる。

「わり、今日は試験だから克信預けてんだ、暇な時にでも声掛けてくれよ」

「むう、それじゃ約束ですよ？」

「おう、まあ旦那がつれてってなけりゃな」

「寧ろ、克信君連れてくるスケジュールをください！」

等々、終了した開放感からか、皆が騒いでいた。

その少し後、教導隊の事務室では、なのはとヴィータが教導結果のまとめと、次回教導参加者の選抜を行っていた。

「結果の方は、これでいいよな…?」

「んーと…うん、大丈夫、次回だけと申し込みは結構来てるけど、どうしようか?」

お互いの書類を見せ合い、確認しあつて

「とりあえず、ベルカ式の奴の資料と参考映像くれ、考えとく」

「判った、じゃあミッド式はこっちでしとくね」

お互い資料を持ち、更衣室へ。

「結構早く終わったな、落第者無しだと楽でいいな」

「うん、あ、ヴィータちゃん、帰り買い物行っていいかな?」

「ん、かまわねーぞ、夕食の材料か?、何にするんだ?」

「今日はカレーにしようかと思って、折角だし八坂家の分も一緒に買わない?、二人分だと半端が結構出るし」

「おっけー、良彦に作らせるからあたしはそれでいいぞ」

着替え終わり、退出しながらの雑談。

スーパーでカレーの材料や、お菓子などを買ってなのはの家へ。

なのはの家では、アイナさんが帰ってきていたヴィヴィオと克信、それにヴィヴィオの友達とで迎えてくれる。

「まあま、おかあえなはい」

「ママお帰りー」

「お帰りなさい、なのはさん、ヴィータちゃん」

「お帰りなさい、お邪魔してます」「」

ヴィヴィオの友人は3人、白っぽい髪を結んだ大人しそうなコロナ、黒い髪に大きなリボンで元気そうなりオ、黒い髪で中性的な感じのするセレガ。

セレガはこの中で唯一男の子だ、ストライクアーツとは一寸違う格闘技を習っているらしい。

「ただいま、克信、利口にしてたか？」

「大丈夫ですよ、克信君はちゃんとしてましたから」

ヴィータの呼びかけにアイナさんが微笑む。

「あい、いこうひてたよ」

克信も、どうだといわんばかりに手を振って答える。

「克信君、元気だったよ、ねー」

「うん、一緒に遊んだし」

「はい、それにお利口でした」

「そうだね、克信君は、凄い元気だ」

ヴィヴィオ、リオ、コロナ、セレガがそれぞれ言ってくる。言われた克信は嬉しそうに頬笑み、ヴィータも頷いている。

「ヴィヴィオ、宿題は終わったの？」

「うん、皆ではぱっとやっつけたよ」

「そっか、それじゃ皆、今日は家でご飯食べて行ってね」

なのはの質問に答えるヴィヴィオ、なのははその答えに満足したのか、微笑んでそういつて。

「多めに買っておいでよかったね、ヴィータちゃん」

「だな、カレーは人数多いほうが美味しいな、んじゃあたしは帰るぞ、良彦も早くなるかもしれねーし」

「うん、今日もお疲れ様でした」

「おう、そっちこそな…ほら、克信、帰るぞ」

克信を抱き上げながら、皆に軽く頭を下げる。

「あい、ばあばい、びーお、いお、こおな、えれが、あいあはん、あおは」

ヴィータの腕の中一生懸命に皆の名前を呼び、手を振る。

家に帰り、良彦を待つ間に、克信とお風呂へ入るヴィータ。

目をつぶらせ髪を…ちなみに克信の髪は青色で、額部分に少し赤がメッシュのように入っている、瞳は右は黒、左は翠、【風王】の家系の特徴を備えている…洗ってやり、湯船に抱いたままつけてあげる。

ゆっくりと風呂を済ませた後は、デザートようのアイスを作って待つのだが帰ってこない。

「とりあえず、テレビでも見るか、克信」

「あい、てえび」

ちよこんとソファに座った克信とテレビを見てみると、ドアが開く音。

「おいつす、ただいまー」

「お帰り良彦、遅かったな？」

「書類が、俺を帰してくれなかったんだ」

「我がいなければ、もう少し掛かったであろうな」

「ばあば、へぶほ、おかあえいなはい」

「おう、ただいま克信」

「うむ、ただいまじゃ、克信」

克信を抱き上げ、あやすように身体を揺らす良彦、その克信をなでるセプト。

「さて、夕食なんにすつか、買い物してねーんだけど」

「ああ、なのはがカレーにするっつーから、一緒に買ってきたぞ、だからカレーな」

「あいあい、んじゃ克信こっち来ないようにしといてくれな」

「あいよ、セプト、一緒にテレビでもみるぞ」

「心得た」

簡単なやり取りの後、良彦は直ぐに料理に入る。

ヴィータとセプトは克信をあやし、見張りながらテレビ観賞だ。

少しして、出来上がったカレーは幾つかの隠し味：まあ、チョコや数種類の香辛料などを効かせた、良彦の特製カレーだ。

克信にはまだ刺激が強いので、別な物を用意したが、他3人はしっかりと食事を済ませる。

良彦、セプトも風呂へ入り、何時もの就寝時間…克信はこの時点で寝かしつけられている。

良彦とヴィータが大きいベットへ入り、セプトは自分の部屋…持ち運びできる鞆サイズの方ではなく、良彦のマンションで開いていた部屋…にはいる。

そして、その夜もゆっくりと過ぎて行く…克信に弟か妹が出来るのは、遠くないかもしれない。

80・日常(ヴァータ)(後書き)

いつの間にやら80話です、自分でもおどろいています。
今回克信の外見と新キャラ…ヴィヴィッド編の主役予定…セラガが
きちんと登場です。

今回は、合宿前の忙しい様子などを描ければと思います。

81：旅行準備

それから暫く、幾つかの仕事…騎士としての…をこなし、近づくのは、春の大自然旅行ツアー&ルーテシア一緒にみんなでオフトレッキングの時期。

ここ数年、おなじみになった旅行だ。

その準備と休みを稼ぐ為に、参加者は仕事を多めにこなし、学生達はしっかりと勉強をしている、学生の試験休みに合わせて実行されるからだ。

良彦も幾つかの騎士の仕事を前倒してカリムに頼み、時間をやりくりしているわけだが。

「…現場作業だけで、書類他の人やってくんねーかな」

「ロード良彦は其処が一番時間掛かるのじゃから、仕事をつめれば書類が増えるは当然じゃろ」

セプトにせつつかれ、時に間違いを指摘されて書類をこなし続ける。

一方、なのはとヴィータの教導隊組みの方は、二人とも書類もしつかりしているし、普段から仕事を濃いレベルでこなしているので、休暇は簡単に出してもらえている。

他の局からの参加者もその状況はほぼ同じだ。

「結局、4日休み取るのに、結構掛かったな」

「良彦は普段から書類ためっからだろ」

「うむ、毎度後回しにするからこうなるのじゃな」

「まあま、じゅうちゆ」

良彦の愚痴にヴィータ、セプトが突っ込み、克信が手を伸ばしてジューズを強請る。

「おう、ほらゆっくり飲むんだぞ」

赤ん坊用の吸い口が付いたコップで克信にジューズ飲ませながら

「ま、時間できただけいいじゃねーか」

「そうだけどな、暫く書類はみたくねー」

「まったく、ロード良彦のこれは、どうにかならんかのう」

苦笑気味に呟くセプト。

「昔っから、戦闘報告書はきちんとかけるのに、任務全体のはダメだかな良彦は、もうあたしはなれたけど」

苦笑するヴィータ、克信にゲップをさせ、抱きかかえている。

「ま、後は泊まりの準備すれば、準備完了だし、さっさと済ますか」

「んじゃ、着替えとか頼む、克信が眠たそうだから」

「おう、寝かしてきてくれ、こっちはやっとくから、下着は後で自分で頼むな」

「ああ、良彦の趣味だけで入れられてもこまっからな」

そういつて、ヴィータは克信を寝かしつけに寝室へ、良彦はクロ―ゼットへ入って行く。

三つのそれほど大きくない鞆に、自分、ヴィータ、セプトの着替えを入れ、自分以外のは一部隙間を作っておいておく。

その後で克信を寝かしつけたヴィータとセプトがわいわい言いながらその隙間を下着で埋めて、準備完了だ。

「おっし、これでいいな、移動の時の服とかだけだな」

「それは出発当日でいいだろ、今日はここまでで」

良彦とヴィータでそういつて、頷きあい

「まあ、食事などはメガー又殿が用意してくれるしな、これ以上はなかるう」

セプトがそういつ。

「…一個忘れてた、ルーテシアとメガー又さんにお土産持ってかねーと」

「そういや、そうだな…んじゃ、明日にでも買い物行くか」

「ああ、そうしよう、デパートでいいだろ」

そういつて、再びうなずき合う。

翌日、4人：良彦、ヴィータ、克信、セプト：は、ミッドのデパートへいき、二人へのお土産と、忘れていたとガリユーへのお土産も買った。

81：旅行準備（後書き）

というわけで、特に事件もなく、短めですが、準備としてはこんな感じかと。

今回は、出発、到着あたりの事を書こうと思います。

82：旅行当日

さて、春の大自然旅行ツアー&ルーテシアと一緒にみんなでオフトレニングの出発当日の昼：ヴィヴィオ達学生がその日に試験結果が出るため、出発日はその日に：なのは宅に集まれる人間は集合と相成った。

結果、現在いるのは、家主のなのは、フェイトに、良彦、ヴィータ、克信、セプトの6人。

「ヴィヴィオ達はそろそろ帰ってくる時間か？」

「うん、去年と同じくらいだろうからそろそろかな」

良彦の問いに克信と遊びながら答えるのは。

克信は、はいはいしたり、つかまり歩きでヴィータ、なのは、フェイトの間を行ったりきたり、呼ばれては。

「あい」

と答えて、呼んだ方へ移動して行く事を繰り返している。

「カツノブは元気だね、いつも」

「あたしと良彦の子だかな、健康なのは確かだ」

フェイトが笑顔でいえば、ヴィータは自慢げに答える。

そうこうしていると、玄関の開く音がして、足音が4人分。

「きたな」

「だな、克信おいで」

「まあま、あい」

足元にいると危ないので克信を抱き上げるヴィータ、其処へ小学
生4人が入ってくる。

「ただいま、なのはママ、フェイトママ、よしくん、ヴィータさ
ん、かつくん、セプト」

「おじゃまします、皆さん」

「こんにちはー、おじゃましますっ」

「失礼します…こんにちは、なのはさん、皆さん」

ヴィヴィオ、コロナ、リオ、セレガが入ってきて挨拶。

「おかえり、ヴィヴィオ…いらっしやい、皆」

ソファに座ったなのはが、飛んできたクリス…セイクリッド・ハ
ート、ヴィヴィオの専用インテリジェントデバイス、外装がうさぎ
の人形で浮遊可能…を腕に、4人を出迎え。

「それで、どうだった？」

フェイトがその横で試験の結果を問えば。

「花丸評価いただきました」

「4人揃って」

「優等生ですっ!」

「そんな感じ…です」

リオ、ヴィヴィオ、コロナが続き、セレガは小さく頷いている。結果をみれば、筆記はコロナがA L L 1 0 0、実技はリオがS、ヴィヴィオ、セレガはほぼ同じで筆記は80〜90、実技はAという、確かに優等生だ。

「ほ…てか、皆頑張ったんだな」

「だな、これで問題なく、旅行いけそうだな」

「びーお、えあい」

「えへへへ」

良彦、ヴィータが褒め、克信も手を振ってヴィヴィオを褒め？ている。

「それじゃ皆の家に荷物取りに行かないとね」

フェイトがそういつて立ち上がり。

「あ、じゃあ私も一緒に」

ヴィヴィオも付いていこうとするが。

「待つて、ヴィヴィオはお客様が来るから、待機しててくれるかな？」

「お客様？」

「そつ、もう直ぐ来ると…」

なのはがそれをとめ、話をしていると、玄関からチャイム。

『いらっしやったようです』

とは、レイジングハート：桃色の羽で飛んでいる…だ。

玄関を開けて入ってきたのは、ノーヴェとアインハルト。

「アインハルトさん!？」

「ノーヴェさんにお誘い頂いたのですが、ご迷惑では無かったですか？」

「そんな事無いです、大歓迎です!」

ぎゅつとアインハルトの手を握って、握手するヴィヴィオ、他小學生3人も頷いている。

「秘密にしといて正解だったね」

「そうですね」

なのはとノーヴェは教えてなかったらしい。

「アインハルトさんだっけ、格闘凄く強いんだよね、よろしくね」

「あ、はい…えと」

「もう、なのはママ、アインハルトさんは繊細なんだよ」

「あ、そっか、ごめんね」

「あ、いえ」

なのは、ヴィヴィオ、アインハルトの間でそんなやり取り、其処へ。

「まあ、実際アインハルトは強いからな、俺もバインド食らった事あるし」

「よしくんが？」

「まあ、急いでたのと油断で、セツトアップしてなかったから何だが、実際かけられたしな、それに若いのに技も練られてるし」

「あ、あの…えと」

良彦のべた褒めに、アインハルトは困りと照れの混ざった顔で、俯き。

「よしくんも、すとーっぷ、よしくんほど図太い人は中々いないんだよ？」

ヴィヴィオが待ったをかける。

「まで、ヴィヴィオ俺は凶太く「良彦は、鈍感なだけだ」って、おい、ヴィータっ!」

「事実だろ、あたしが何年」

「判った、俺が悪かった、な」

言葉を挟むヴィータに誤り、ぽんぽんと頭をなでる、人前で無ければキスくらいしてそんな勢いだ。

「えと、そろそろ皆の家行きたいんだけど、いいかな?」

と、フェイトが苦笑交じりに聞いてくる。

「と、すまん…んじゃ、セレガは俺の方で家いくわ、方向確か違うんだよな?」

「はい、すみませんけど、おねがいします…良彦さん」

ぺこりと頭を下げるセレガに、いいからという感じで手を振り、皆それぞれの準備を持って移動開始する。

で、数時間後、スバル、ティアナとも合流し、次元航行船にて、無人世界カルナージへ。

船内では、仮眠をとるもの、騒いでいるもの様々で、約4時間…ミッドとの時差は約7時間…で、到着。

この後数日は、オフトレーニングとお楽しみが待っているの
だった。

82：旅行当日（後書き）

ヴィヴィオ達を待ってる間から、合流、移動までです。

次回はルーテシア、メガーヌ、ガリユー、エリオ、キャロも登場予定、登場人物多いけど頑張ります。

83：トレーニング開始&2001

カルナージに到着し、アルピーノ親子の家：既に温泉宿の様相を呈している…に付くのに暫し。

到着した皆を出迎えるのは、背の伸びた紫の髪の少女…ルーテシア…と、それにそっくりな紫の髪の女性…メガーヌ…だ。

「みんないらっしゃーい」

「こんにちはー」

「お世話になります」

「暫くよろしくな」

ルーテシアの出迎えに、なのは、フェイト、良彦が答え。

「皆出来てくれて嬉しいわ、美味しい物いっぱいよついでおいだから、ゆっくりしていつてね」

「ありがとうございます」

メガーヌの言葉にはなのはがお礼を言っている。
その間に

「ルルー久しぶりー」

「ルーちゃん」

「暫くぶり、ルーテシア」

「るうー」

「うん、ヴィヴィオ、コロナ、セレガ、克信」

ヴィヴィオ、コロナ、セレガに軽く会釈し、克信の頭をなでる。

「リオとは実際に合うのは初めてだね」

「今まで、モニターだったもんね」

「モニターより、可愛い可愛い」

「えへへ、ホント？」

ルーテシアがリオの頭を撫で、挨拶。

「そういえば、エリオとキャラは…先に来てるは筈は何だけど？」

フェイトの疑問にメガーヌが

「ああ、あの二人なら…」

「おつかれさまです」

言っていると、キャラの声、そちらを見れば手に薪を抱えたエリオとキャラ。

「時間があつたから、手伝ってくれるっていうんで、薪をね」

メガーヌがそついい、薪を置く二人。

「お久しぶりです、皆さん」

「お久しぶりです」

エリオ、キャラロが並んで一礼。

「…エリオ、ルーテシアは、ここ数年で背のびたよな、キャラロも一応伸びたけど」

良彦が苦笑しながら、3人を見比べる、機動六課の頃はそれほど変わらなかつた身長が、もう完全に追い越されている。

「えと、それほどでも無いかと」

「私は1年で1.5cmのびましたよ！」

エリオとキャラロのそんな台詞を無視し、ルーテシアが向かったのはアインハルトの方で。

「はじめまして、話は聞いているけど貴女がアインハルトね？」

「あ、はい、アインハルト・ストラトスです、よろしく願います」

「うん、いい子ね、ゆっくりしてっつてね、ちなみに」

エリオ、キャラロに並び…キャラロが真ん中だ。

「一人ちびっ子がいるけど3人とも14歳だからね、これでも」

「ちよ、ルーちゃん、それ酷い」

からかわれたキャラが笑いながら怒るといふ器用なまねをして

「キャラ・ル・ルシエと飛竜のフリードリヒです、よろしくアインハルト」

「エリオ・モンディアルです、よろしくね」

「二人とも私の家族なんだ、よろしくしてあげてね」

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

キャラ、エリオ、フェイトが、紹介を続け、アインハルトが一礼。そうしていると、近くの茂みが音をたて、其処から黒い甲冑風の外殻に身を包んだ人型…ガリユーなのだが…の召喚獣が出てくる。

それを見て、咄嗟に構えるアインハルト。

「あー、アインハルトさん、ごめんなさい、大丈夫です」

「あの子は…」

それを止める、ヴィヴィオ、コロナ。

「私の家族で大事な召喚獣、ガリユーって言うの」

その言葉に、騎士のように腕を胸元まであげて、礼をするガリユ
ー。

「し、失礼しました」

「私も最初はびっくりしたよ」

「…うん、知らないと驚くよね」

アインハルトの言葉に、コロナがフォローし、セレガが同意する。

「よし、それじゃ大人組みは、軽くトレーニングを、子供組みは
最初どうする？」

良彦の言葉にノーヴェが

「まず川遊びからかな、皆水着に着替えて集合な」

子供達の返事が上がり、アインハルトはノーヴェに無理矢理連れ
て行かれた。

大人組みのトレーニングは、自然の地形を利用したアスレチック
だ、空戦魔導師、騎士である、なのは、フェイト、良彦、ヴィータ
も飛行はしない。

克信は、メガーヌ…というか、ガリユ…に預けて、面倒を見て
もらっている、人見知りもしないし、ガリユなどを恐がりもしな
い、肝の座った子供だ。

「んー、いいね、これは久しぶりにすっかり身体動かしてる気分だ」

崖にかけられたネットを登りながら、軽い口調で言っている良彦。

「こんだけののは、久しぶりだな」

それに答えるヴィータ。

「特救でも日常此処まではしませんしね」

スバルも余裕そうで。

「あはは、これくらい毎日してたら体壊しちゃうよね」

なのはも、答える元気があるようだ。

他の面々は、一生懸命にネットを登る、全くの無口である。

その後も、幾つものアスレチックを利用したトレーニングが続き、暫くして小休止。

川が見える崖の上から、川遊びをしてる子供達…アインハルトが水切り、打撃練習及び確認の為に水中で拳を振りぬく動作…を眺めている。

「アインハルトも楽しんでるみてーだな」

「引率がいいからじゃねーか、なあスバル？」

良彦、ヴィータがスバルに振れば。

「えへへ、自慢の妹ですから」

「スバルとノーヴェも仲良しになったよね」

スバルが答え、なのはが笑いかける。

ちなみに、他4人：フェイト、ティアナ、エリオ、キャロ…は、地面で寝転んでいたり、何かに寄りかかっている。

「さて、そろそろ再開かな、どうする、もう少し休む？」

なのはの、その言葉に

「だいじょうぶですっ！」

「ば、ばててなんか、いないよ」

と、ティアナ、フェイトが何とか返し、エリオ、キャロは荒い呼吸のまま、苦笑している。

で、トレーニングを再開し、暫くして、昼食時。

大人組みと子供組みが合流し、バーベキューなどを食べる。

ヴィヴィオとアインハルトは、一寸グロッキーだ、水切りを延々行っていたらしい。

で、食後：ヴィヴィオとアインハルトは食器洗いに、他3人はル―テシアと本を取りにいったらしい。

大人組みは、模擬戦だ：なのは対元スターズ、フェイト対元ライトニングや、良彦&ヴィータ対なのは&フェイトなど、何回か行っていた。

其処へ、ノーヴェに誘われた子供組み、登場。

チラツと見てみると、ヴィヴィオとアインハルトが身体を動かしたそうなので。

「ヴィヴィオ、アインハルト…一寸来い」

「え、よしくん、なに？」

「良彦さん、どうしましたか？」

揃って近づく二人に。

「身体動かしたいんだろ…俺でよければ相手するぞ」

「良彦…お前何考えてんだ」

「いや、どうせなら模擬戦とかの方が実になるだろ、俺は二人と同じ無手だし」

「とかいって、強くなりそうだから鍛えて楽しみたいんだろ、おめえは」

「それは、否定しない、どうだ？、二人とも」

ヴィータと軽口を言い合い、二人に問いかける。

ヴィヴィオとアインハルト、顔を見合わせ、頷きあい。

「おねがいします、よしくん！」

「私も、お願いします」

「おっし、二人纏めて来い、今回はちゃんとセツトアップしてるからな」

既に青いジャケットにズボン、無骨な籠手の騎士甲冑姿である良彦。

二人もそれぞれ、セツトアップと武装形態を行い、騎士甲冑姿へ。

「清風の騎士八坂良彦、それとゼピュロスだ」

「高町ヴィヴィオと、セイクリッド・ハート」

「霸王流、アインハルト・ストラトス」

「……参る（いきます）……」

良彦の構えはいつもどおり、左は顔の前、右手は腰。

ヴィヴィオ、アインハルトの構えは比較的ちかい姿勢だ、両手を胸の前で構えている。

歩法により、一瞬で良彦に迫るアインハルトに、足の裏に光球……ローラーブーツの変わりらしい……を作り、疾走するヴィヴィオ。

二人揃って、アインハルトが右の、ヴィヴィオは左の、ストレートを放つ。

揃った攻撃、それが良彦に近づけば揃って違和感、突き出した拳が風に絡まれ一瞬動きが遅れる。

その一瞬で、左手でヴィヴィオの、右手でアインハルトの拳を外側へ『弾き』、良彦の身体が一瞬で沈む。

少しバランスを崩した二人へ、回転足払い…アインハルトは距離を見極め一歩下がり、ヴィヴィオはバックステップで距離をとる。

足払いが行き過ぎた所で、アインハルトが再び踏み込み、撃ち下ろし気味の左拳打、再び違和感、その間に回転した良彦が、地面に手をつき、自分の身体を後に弾き飛ばす、残るのは強い風。

距離のあるヴィヴィオが、スフィアをいくつか作り…。

「ソニックシューター・アサルトシフト！」

七色の魔力弾が、良彦に放たれる。

「…練りが、甘い」

良彦の近くまで飛んでいった魔力弾は、いきなりそのサイズを小さくし、近づききる前に消えていく。

「…って、なんでー！」

叫ぶヴィヴィオ、そのままもう一度疾走してきて

その間に、アインハルトも再び歩法で距離をつめ…二人揃っての、バインド。

青銀と七色の魔力で出来たバインドが、良彦を縛るが…。

「わりい、このレベルじゃ捕らえ切れねーぞ」

直ぐに薄れ、消える。

バインド中に、断空拳を放とうとしていたアインハルトと、至近

でダイバインバスターを放とうとしていたヴィヴィオ。

その二人の手を掴み、一度ぐいっと押した後、一瞬力を緩める…人の反射的行動で、押されれば押し返す為、緩められた瞬間重心が前に一瞬傾く…と、同時手首を返し、二人の身体は見事に宙を舞う。地面に叩きつけられる瞬間、手を上に引かれ、すんとお尻から着地…二人とも何があつたか余り判ってない顔だ。

この時点でヴィヴィオがダイバインバスター用に溜めていた魔力も霧散している。

「そこまで！」

と、ヴィータの声が掛かり、アインハルトとヴィヴィオが、はつと正気に返る。

「ふたりとも、昔のスバル、ギンガ、エリオと似た所があんなあ」

現在大人モードの二人が、身長的には低い良彦に軽くあしらわれたという事実、コロナ、リオ、セレガも驚いている。

「えと…色々判らないんだけど、よしくん、説明してくれる？」

「私も教えて欲しい、です」

「ふむ、まあ隠す事でもないか、夜にでも全員纏めておしえてやるよ、風呂上がったら湯冷ましにな」

そついう良彦に、こくこくと頷く5人…ヴィヴィオ、アインハルト、コロナ、リオ、セレガ…であった。

83：トレーニング開始&2on1（後書き）

と、言うわけで：2on1と、トレーニング：修行バカとヴィータは基礎体力が高いので、小休止のとき無事というか、楽勝でした。2対1でも良彦の能力を知らないと、ほぼ完封です、エリオ、スバル、ギンガと結果はほぼ同じ。

今回は、良彦の話しメインですね、女性風呂は会話が聞こえる程度です。

84：休息&質問タイム

さて、夕食前に風呂に入る事になった訳だが：当然男女別：男風呂は来ている人数の割には結構広く、10人位は一緒に入っても平気そうな、岩風呂である。

女性の方も岩風呂らしいが、かなり広いらしい。

「ふう：しかし、いい湯だな」

「はい、疲れが抜けますね」

「：うん、気持ちいいです」

良彦、エリオ、セレガの3人がゆつくりと湯に使っている、先ほどは背中を流し合ったりしていたのだ。

「ルーテシアが暇つぶしに作ったて言うけど、客が呼べそうだな」

「そうですね、僕達が泊まるロッジも設計したって言ってましたし」

「：ルーテシアは、多才ですね」

3人横並び、エリオ、セレガ、良彦の順番：その順番で背が小さくなっていたりする：で、皆頭にタオルを載せている。

ちなみに、克信はヴィータが連れて、女風呂の方だったりする。

「色んな知識のつまみ食いが好きだって言ってたし、これもその一環なんだろ」

「昔から、本とかいっぱい読んでますしね」

「…古代ベルカの事も、詳しいってヴィヴィオが言ってましたね」

「そういう事だ、さてさっさと上がるか」

「はい」

3人が立ち上がり、脱衣所に向かう時、騒がしかった女風呂の方で、誰かの掛け声と共に、水色の髪をした女性…水着を着ているらしい…が、はねられた用に飛び上がるのが一瞬見えた。

「…今のは？」

「さあ…？」

「ありや、セインだ…こんな所でなにしてたか、まあ、対処はヴィータ達がするだろ、行くぞ」

良彦は一瞬で見極めたのかそういつて、そのまま歩き出し、エリオ、セレガも首を傾げながら続く。

風呂を出て、着替えたあと、どうせ女性陣は時間が掛かるからと、メガーヌの手伝いに行つて真相が発覚。

聖王教会から野菜を差し入れに来たセインが、女性陣にサプライズという名の悪戯を仕掛けたらしい。

「で、誰かに弾き飛ばされたって事か…っと、失礼」

苦笑しながら聞いていた良彦、ゼピュロスにデバイス通信が着信する、メガーヌ、エリオ、セレガに一言いいつつ、通話に出てみれば。

ウィンドウが開き、出てくるのはシスターシャツハだ。

「失礼します、騎士良彦」

「どうした、シスターシャツハ…仕事は終わってるはずだけど？」

「シスターセインが、お使いにそちらに行つたのですが、折角だから一晩くらい泊まりたい、と…申しわけありませんが、監督をお願いします」

「ああ、そういう事か…了解した、余り羽目を外すようなら、帰ってから普段の倍の修行だつて、言つとく」

「おねがいします、では…メガーヌさんにもよろしくお伝えください」

ピツとウィンドウが消える。

「だつてさ、メガーヌさん」

「ああ、さつきルーテシアから念話で聞かされたわ、夕食もセインが作るつて、だから下ごしらえだけ、してくれればいいわよ」

「だそつだ、エリオ、セレガ」

「はい、了解です」

「判りました」

4人は野菜の皮むきや、其の他のした処理などを手早く済ませる、その頃には女性陣も風呂を上がってきて、セインが調理に入る。

縁側にちびっ子組みを呼んで、夕涼みモード、というか、先ほどの約束を済ませる。

大人達は、それぞれすごしているらしい…スバル、ティアナ、ノーヴェは椅子に座りゆっくり、フェイト、エリオ、キャロは部屋で親子の団欒、なのは、ヴィータはメガーヌと一緒にセインの調理を手伝い、克信は再びガリユーとセプトが預かっている。

「さてと、んじゃまあ聞きたい事が多そうだし、早速始めるか」

飲み物なども準備し、良彦が宣言、質問はと言つと。

「はいはい、よしくん…魔法が消えたのってAMFなの？」

ヴィヴィオが物怖じせず、聞いてくる、それに頷く4人…アインハルト、コロナ、リオ、セラガ。

「あれは俺の持つてる固有の希少技能だな、『凧』っていう」

その言葉に、はっと顔を上げるアインハルト。

「【風王】の『凧』ですか、もしかして？」

「そう、それだ…アインハルト以外は判ってないし、説明するぞ」

というわけで語られる『凧』という技、不可視にしている『凧』

の魔力を可視状態にして見せたり、簡単な実践も見せる。

「っていうか、よしくん、今までそれ教えてくれなかったし、使
ってなかったよね、私との組み手とかで」

ヴィヴィオが、不思議そうに尋ねると

「組み手で使う必要はないし、ヴィヴィオが大人モードになっ
てからの模擬戦は始めてだろう…それとインハルトと2対1だっ
たしな、二人に敬意を表して使ったって所だ」

「…格闘戦でそれは、かなり有利なんじゃ？」

続いてセレガが質問する。

「否定はしないが、無敵じゃない…実際格闘戦のみで戦って、そ
うだな…今回の参加者だと、フェイト、ヴィータ、スバル、エリオ
…この4人なら『風』を破れるし、勝敗も一寸の読み違いとかで変
わるな」

「なのはさんとキャラ口さん、ティアナさんはどうなんですか？」

リオが聞いてくる

「なのはは、格闘戦はさばけるし付いてこれるけど、格闘戦のみ
じゃ、俺の勝ちになるな、あいつは砲撃型だから溜めが長いんだ」

と、まずなのはについて言い

「キャラ口は格闘戦について来れないから無理、ティアナも腕は上

がってるが格闘戦だけじゃ、無理だな」

「じゃあ、3人は勝てないんですか？」

「そうじゃないな、魔法全部ありになったら…なのはの砲撃、ティアナの射撃、キャラの龍召喚は厄介この上ない、はっきり言うとアウトレンジから一方的にやられる可能性も十分ある」

続いた頃なの言葉に答え。

「では、格闘で『凧』を破るのに必要な事とは？」

「そうだな…しっかりと練られた魔力と鍛えられた技、力、速度…全てを揃えるという意味じゃないぞ、自分にあつた攻撃を極めるって事だからな？」

「自分に合つた？」

アインハルトの問いに答え、再び問われれば。

「ヴィヴィオとアインハルトだけしかまだみてねーから、二人な…ヴィヴィオは相手の攻撃を見極める目と飛び込む度胸はかなりのもんだから、カウンターヒッターの素質があると思う」

「そ、そうかな？」

照れるヴィヴィオ。

「アインハルトは、その年にしては鍛えられた技、そして霸王流の中でもトップクラスの威力であるう、『断空』がある、相手を追

い詰め『断空』を決めれば勝てると思うぞ、ただ」

「ただ？」

「打ち下ろしと、直打だけじゃだめだ…もつと幾つものパターンが無いと直ぐ対処される、後溜めが一寸長い…それと二人に言えるが、実のみじゃこの先通用しなくなる」

「じつ、のみというのは？」

アインハルトが断空について言われ、悩み顔の所で、セレガが聞いてくる。

「実は、本命、本気の攻撃だな、対して虚とというのが有所謂フエイントだな、これらを織り交ぜないと格闘戦である程度以上の実力者に勝つのは難しい」

「なるほど…」

こくりと頷くセレガ。

「あ、あと…二人をこごくるんってさせたのってあれは？」

リオが手を上げながら聞いてくる。

「ありゃ、八坂流合気、ミッドでは【風王流】か、の技だな」

「気付いたら、落ちた後だったんだけど、魔法なの？」

「純粹な、体術でありゃ…そうだな、こご押されたら、どうする

「？」

ヴィヴィオの頭をぐいっと軽く押す。

「え、あわ、つとと」

それを押し戻すヴィヴィオ、瞬間手を離す良彦…結果、ヴィヴィオは前にバランスを崩し、こけそうになる。

「判るか、押された時バランスが崩れそうになると身体は勝手にバランスを取ろうと力を込める」

「確かに、そうみたいですな」

「その瞬間の重心を見極め、相手の力に逆らわず、それを利用する…それが合い気投げていう技だ、日本ではいくつか流派があるんだぞ」

「えつと…てことは、二人はあの時」

アインハルトが納得し、リオが呟く

「自分の力でくるつと一回転、だな」

「あの、それって…力が弱くてもできるんですか？」

その答えにコロナが尋ねてくる。

「寧ろ、合い気って言うのは護身術みたいなものでな、力の無い人でもしっかり使えるようにくみ立てられてるぞ？」

それを聞いて、暫し

「あの・・・わ、私に合い気を教えてください！」

コロナが、言ってくる、それを見て同級生：ヴィヴィオ、リオ、セレガ：は、一寸驚き顔だ。

「私力余りないし、ストライクアーツも初心者レベルで：純粹な格闘戦に持ち込まれると、どうしても負けちゃうんで自分の身を守りたいんです」

「んー：八坂流のほうなら、まあ：いいぞ、【風王流】は無理だけど」

「はい、其れで構いません、お願いします」

「んじゃ、ヴィヴィオに稽古付ける時教えるわ、一緒に来ると良い」

「はい」

嬉しそうに頷くコロナ、不思議そうな顔をしているのは、ヴィヴィオ達だ。

「なんで、【風王流】はだめなの？」

「一子相伝とか、ですか？」

「王の技だから、だめとか？」

「…どうしてでしょうか？」

ヴィヴィオ、アインハルト、リオ、セレガが聞いてくる。

「ん、大層な理由じゃないぞ、一番の理由は風の変換資質が無い事だな」

その答えに拍子抜けする一同

「もう一つは…制御力の問題かな、コロナはこの中じゃ高そうだけど、そうだな、この魔法使えるレベル無いと資質があっても無理だな」

皆の前にウィンドウが開き、魔法演算がざつと流れる…魔力光の不可視用魔法ののだが…が、5人とも首を横に振るのみ。

「【風王流】は、風と今見せたのが最低限必要な魔法制御力になる…だから、普通だと無理なんだよなあ…それとっておくけど」

「…はい？」

「制御力が高いなら、魔法戦も有利だと思つたら実は大間違いだぞ…【風王】の血統は、高い制御力を持つ者ほど、射砲撃の適性が限りなくなってく、俺もほぼりだしな」

「…えええ！」

驚くヴィヴィオ達。

「なら、聞くが…今日の模擬戦、お前らが見学してる間、俺が格闘戦以外したか？」

そう問えば、5人は思い出しながら、揃って首を横に振る。

「どう考えても射撃するべき場所、タイミングで射撃したのはヴイータだったろ？」

こくこくと頷く5人。

「そういう、事だ」

苦笑する、良彦。

その後、年齢の事など雑談が続いたが、暫くして食事に呼ばれた為、その日はお開きになった。

実年齢を聞いてアインハルトが驚いたのは何時もの事。

84：休息&質問タイム（後書き）

という訳で：まあ、3人しか来ない男性風呂は余り大きくないだろうと検討をつけました。

合気気は、実際の効果とは異なる可能性が高いです、作者本人の思い込みなどが反映されています。

後気付いたらコロナが弟子になってました。

実年齢については、アインハルトは【風王】については知っていても年齢は知らないだろうという事です。

今回はチーム戦の予定です：久しぶりに良彦とヴィータが相對します。

85：全員で模擬戦（1戦目）

温泉騒動や、良彦との会話などがあつた次の日は、オフトレーニングの目玉、大人、子供全員での模擬戦だ。

最初の組み合わせは。

青チーム、フロントアタッカー：良彦、ヴィヴィオ、スバル、ガードウイング：エリオ、リオ、セレガ、センターガード：なのは、フルバック：ルーテシア。

赤チーム、フロントアタッカー：ヴィータ、アインハルト、ノーヴェ、ガードウイング：フェイト、セイン、ウイングバック：コロナ、フルバック：キャロ。

人数の都合上、シスターシャツハに頼み、セインにはこっちに付き合ってもらつた、このある意味で高レベルな模擬戦は修行にもなるだろうと、シャツハは快諾、セインは絶望したらしい。

「ヴィータとの相対は久しぶりだな、腕がなるぜ」

「はっ、いってろ、おめえの欠点一番知ってんのはこっちだからな」

「それを言うなら、こっちもだがな」

じゃれあうように言い合つて、お互いのチームの方へ分かれる二人、まあその際いつもどおり拳をぶつけ合っていたが。

で、青チーム集合場所。

「向こうは、前衛と中盤に突破力が高い子がそろつてるから、最

初は防御を固めて、お互いの相手とのマッチアップに集中ね」

「だな、バランス良く組み立てるから、バランスが崩れた時が勝負時だ」

「…………はい…………」

ヴィヴィオ、スバル、エリオ、リオ、ルーテシアの返事が響き、ガリユーも頷いている。

そして、そこにいる全員がセットアップ、幾つもの魔力光が輝き、皆がバリアジャケットの騎士甲冑へ身を包む。

模擬戦はレイアー建造物で作られた市街地、それぞれのポジションの別れ、待機していると。

皆のそばにウィンドウが開き、メガーヌが顔をだす、その後には中国風の銅鑼？を前に大きなバチをもって佇むガリユーと、ふわふわ浮いているフリード、アウトフレームフルサイズのセプトが克信を抱いている。

「それじゃ、元気に…試合開始！」

メガーヌの掛け声と共に、ガリユーが銅鑼を鳴らす、試合開始の合図だ。

ちなみに克信、銅鑼の音に驚くどころか楽しそうだったりする。

「いくぞ、遅れるなよ！」

開幕と同時に良彦が浮き上がり、突撃、送れずにウィングロードを

発動したスバルと、その上をヴィヴィオが疾走する。

エリオはフェイトへ、リオはコロナ、セレガはセインへとそれぞれ相手を定め突撃。

なのは、ティアナ、ルーテシア、キャロは全体をしっかりと見て援護射撃や、強化魔法を飛ばしていく。

フロントアタッカーはそれぞれ、良彦対ヴィータ、スバル対ノーヴェ、ヴィヴィオ対アインハルトだ。

「いくぞ良彦！」

ヴィータが手を横に振れば鉄球が4つ宙に浮き、それをアイゼンで一薙ぎ。

『シュワルベフリーゲン』

赤い魔力光に包まれた4つの鉄球が良彦に向かい撃ち出される。

「はっ、これはもう…馴れっこだ」

鉄球の魔力を削り、風で絡め3個を『弾き』で打ち砕き、1個を手に取り、投げ返す…此処までは、お互いに織り込み済みの動き、本番は此処からだ。

「アイゼン、モードツヴァイ」

『了解、ギガントモード』

ヘッド部分を巨大にしたアイゼンを振りかぶり、良彦を打ち砕かんとするヴィータ、ギガントサイズの速度威力、込められた魔力は

『風』をモノともしない。

「ゼピュロス、こっちもだ」

『了解、モードエウロス』

無骨な籠手の肘部分に出来る噴射口、強く風を噴射し、打撃力を飛躍的に高めてくれる、それがモードエウロス。

打ち下ろされるギガントハンマーに対し、真っ向から右拳を叩き付け…一瞬の拮抗、其処へ開いている左拳でハンマーの横つ面を更に打撃し、ヴィータの打撃をそらす。

だが、ヴィータもその間黙って見ているわけではない、自分の右側に巨大な鉄球を作り出し…そして良彦の左拳での打撃にあわせ、そのまま一回転。

『「コメントフリーゲン！」』

回転したさきは、丁度浮かべた鉄球…至近距離からのコメントフリーゲンだ。

良彦は、左拳を叩きつけた時の反発のなさから、それを予測、そのまま左肘から全力で風を噴射させ此方も一回転、そして。

『「風拳・一刃！」』

迫る巨大鉄球を風を練って作った刃で左右に両断し、体制を立て直す…ヴィータも打ち終わった体制から、普段の構えにその間に戻って、仕切りなおし。

「はっ、合い気が上手くなってんじゃねーか」

「誰かさんと一緒に延々修行してっからな、そっちこそ相変わらず反応がはええな」

お互いに構えあい、にやっと笑いながら、次の一手の隙を探る。

その瞬間、アインハルトに飛ばされたか、ヴィヴィオがお互いの間を吹き飛び壁に激突…そして。

一瞬切れた視界のなか、青と赤の魔力光が上空へ飛び出す、良彦の『貫き』とヴィータの『フェアテ』、高速移動魔法をお互いに発動し、上空を取ろうとしたのだろっが、結果上空で相対。

「とっ、なら」

『風拳・烈風』

正面に着たヴィータに右拳を放つと同時に、強い風がヴィータの動きを鈍らせる筈が、ヴィータはこの時点でアイゼンをラケーテンフォームに変更していた、そして。

「ラケーテンツ、ハンマー！」

強風に負けない威力でアイゼンの先端…片側がピック、片側が噴射口…後方の噴射口から、火を噴出し突撃。

迫るアイゼンのピックに対し、良彦は咄嗟に左腕でガード、間には小さく青いシールド…一瞬受け止め、左腕を上になじるようにして跳ね上げ、アイゼンの起動をずらす。

ずらされたアイゼンの軌道を利用したのか、ヴィータが目の前で一回転、そのつま先が良彦の顎をめがけて突きこまれてくる。

「なんのおっ！」

打ち出されたつま先を、顔をぎりぎりですらして避け、右手でアッパー気味に加速させ、ヴィータの身体を泳がせ、其処へ。

左拳に風を圧縮し打ち出す、『風拳・圧』。

「あめえっ！」

その拳と風圧をヴィータもシールドで防御し、反動を使って距離をとりなおし、姿勢を正す。

2度目の仕切りなおしだ。

「毎度の事ながら、こりゃ長引くな」

「早くおわりてーんなら、良彦がやられりゃ良いんだよ」

「だが断る！」

「こっちもお断りだ！」

そして、再び動こうとした瞬間。

『スターライト………ブレイカー……ッ！』

響く、なのはとティアナの声。

此処までの間に、ルーテシアやなのはから何度か収束砲を撃つという通信が入っていたのだが、二人とも聞いている余裕が無かったのだ。

結果、戦場のほぼ中央、上空で戦っていた二人は2発のスターライトブレイカーを同時に受ける事になり。

「ブレイカーは無理だな」

「ああ、無理だな良彦」

桃色と橙色の魔力光が辺りを埋めるなか、本能なのか、良彦はグイータを守るように抱きしめ全力で降下する。さらに、一応は二人とも全力でバリアを張ってはいる、赤と青の魔力光が二人を包んでいるのが判る。

しかし、収束砲の2乗攻撃の前にバリアも破れ、地上近辺まで来ていた二人も、ノックアウトライフポイントが0になる。

その後、ぎりぎり耐え切ったティアナ、後方にいて無事だったアインハルト、スバルが全力でガードしきったヴィヴィオの決戦。

ヴィヴィオが走りこむのをアインハルトが抑えるも、ヴィヴィオの単発ソニックシューターでティアナ撃墜。

アインハルトとヴィヴィオの一騎打ち、お互いの攻防が繰り返され、一瞬の隙を突いて打ち出されたヴィヴィオのアクセルスマッシュ。魔法で加速されたアツパーであるう。がアインハルトに綺麗に決まる。

だが、意識をほとんど失いながらもアインハルトは身に染み付いた動きで、ヴィヴィオへと蹴りを放ち。結果お互いの意識、ライフポイントを削りあい、引き分け。

1戦目は、両チームノックアウト、及び行動不能で、引き分けとなった。

85：全員で模擬戦（1戦目）（後書き）

良彦対ヴィータは、ある意味での時間切れです、戦闘が続いた場合どちらかが悪手を打った段階で、打った方が負ける感じですよ。

今回は…想像で2回戦目と3回戦目とか書いていきたいと思います。

86：全員で模擬戦（2戦目）

模擬戦1戦目は、結局引き分けに終わったので、メンバーを変更して2戦目である、今度は。

青チーム、フロントアタッカー：良彦、ヴィータ、アインハルト、スバル、ガードウイング：セイン、リオ、セレガ、センターガード：なのは、フルバック：ルーテシア。

赤チーム、フロントアタッカー：ヴィヴィオ、スバル、ノーヴェ、ガードウイング：フェイト、エリオ、ウイングバック：コロナ、フルバック：キャロ。

と、一寸変更されている。

青のフロントアタッカーと赤のガードウイング、フルバックが、コンビとして、家族として連携のレベルが高いチーム分けだ。

そして、再びメガーンがウィンドウを開き、ガリユールが銅鑼を叩く準備をしている、そのそばにはセプトが克信を抱きながら、椅子に座っているのも見える。

「それじゃ、第2戦：開始！」

「ごわーん、という銅鑼の音と共に動き出す両チーム。」

先ほどとはマッチアップの相手を変えて幅広い戦術、戦略を試す予定なので：良彦はフェイトに、ヴィータはエリオ、アインハルトはスバルに向かう。

他のポジションは、セインがコロナ、リオがノーヴェ、セレガがヴィヴィオだ、センターとフルバックは変更しようが無い為、援護射撃、支援である。

「フェイトとやんのも、久しぶりだな、全力でいくぜ」

「うん、ヨシヒコ…私も負けないよ」

お互い手の内は知っている間柄だ、普通に戦えば先ほどの1戦目の対ヴィータ同様時間が掛かるであろう事は目に見えているが、奇策が通じる相手でもない。

ある程度の距離に構え…一瞬の停滞の後、素早く動く。

フェイトの周囲に数個のスフィアが浮かび。

「プラズマランサー！」

スフィアから電撃を纏った金色の魔力弾を発射、同時に

『ソニックムーブ』

バルディッシュの声、フェイトが一瞬で消え、次に現れたのは良彦の頭上、正面からはプラズマランサー、上からはバルディッシュでフェイトが切りかかる。

プラズマランサーは『凧』で弱め、軌道を見切り『捌く』、身体すれすれを何発も魔力を減らしながらも通過する魔力弾。

バルディッシュの一撃は、多少無理な姿勢ながら、左拳で『弾き』少しだけ方向をずらして、此方は大きく『捌き』、距離をとる。

距離をとると同時…

『貫き』

良彦が高速移動、バルディッシュを構えなおすフェイトに向かい、一瞬で近づき…バルディッシュの長い柄の部分を掴み、軽く押すが、フェイトはそれに逆らわず後退。

ならばと、柄を掴んだまま其処を基点に、回し蹴り…魔力と風を纏った…を放てば、シールドで防御され、一瞬バルディッシュのコアが光る。

次の瞬間、良彦は柄を離し、離脱…良彦がいた位置に設置式のバインドが一瞬現れて、直ぐに消える。

「相変わらず、なのはといいフェイトといい、バインドの設置が上手いな」

「クロノに散々鍛えられたからね」

「ああ、そついやそつか…クロノのバインドは面倒だからな」

「そついう事、行くよ」

軽口を叩き合って、再び動き出す…バルディッシュがサイズフォ―に変形し、放たれるのは

『「ハーケンセイバー！」』

「又、厄介なもんを、ゼピュロス、モードツヴァイ」

『了解、モードエウロス』

ハーケンセイバーを魔力で絡め

「風拳・烈空！」

モードエウロスによる拳速の加速、魔力集中による、真空を作る拳打で刃を砕く。

その間に、フェイトはバルディッシュをアサルトフォームに戻し、振りかぶり。

「プラズマスマッシャー！」

直射砲撃、フェイトの変換資質である電気の属性を帯びたそれは触れれば感電で動きが鈍る。

「ちいつ、ゼピュロス！」

『了解、烈空盾』

カートリッジを一個ロードし、砲撃に対しシールドを張る：以前六課終了時の模擬戦でスバルに見せた盾、魔力のシールドの前に真空の壁を作り、電撃、炎、振動を遮断する、対フェイト、シグナムスバルへの切り札ともいえる。

ぎりぎりまで、砲撃を防ぎ、その硬直を利用し：距離をつめようとした所で、数本の鎖が地面から伸び、移動を邪魔する。

キャロのアルケミックチェーンだろう、そしてフェイトに桃色の魔力光が宿り、それに答えるようにバルディッシュがサイズフォームへと変形。

一気に距離をつめ、切りかかる。

が、此処で良彦の後から来た赤い塊が、良彦と腕を絡め、揃って一回転、フェイトの正面には回転しながらギガントハンマーモード

のアイゼンを構え、振り抜くヴィータが。

ヴィータを追いかけてきたエリオの前には、右拳に『風拳・圧』を構え、遠心力でそれを叩き込む良彦がいる。

一瞬の交錯で、お互いの相手を変えながら、良彦とヴィータには迷いが無く、フェイトにギガントハンマーを、エリオに『風拳・圧』を、叩き込む。

フェイトとエリオは、直前までの相手との間合いのあまりの差に、咄嗟に反応できず、ぎりぎりでシールドを張るが…良彦とヴィータはここぞとばかりにカートリッジロード、シールドを叩き割り、二人へと渾身の一撃を打ち込む。

フロントアタッカーの重い一撃は、高速戦闘型で装甲の薄い二人には致命的、ノックアウトまでは行っていないが、行動不能にまで追い込む。

そして、これがこの模擬戦の勝敗を分ける。

キャラがフェイトとエリオを回復する為に召喚しようとした所で、セインが地面から現れそれを邪魔して、そこになのはのディバインバスターが直撃。

ティアナはその邪魔をしようとするが、その頃には高速移動により、良彦とヴィータが接近、射撃できる状況ではなくなっていた。

リオはノーヴェ相手に防御に徹し時間を稼ぎ、セラガとヴィヴィオは、基本互角…結果数が優勢になった青組みが2戦目は勝利したのであった。

86：全員で模擬戦（2戦目）（後書き）

チーム入れ替えての2戦目、良彦ヴィータコンビ打ちと、実はコロナ相手だと強いと思うセインの活躍です。

ゴーレム無機物なので、ある程度すり抜けそうな気がしています…
そうでなくても、セインのデーパーダイバーによる、逃げと奇襲は有効な戦術の一個だと思っております。

今回は3戦目ですが、本編であるチームとはまた少し違うチームになると思います。

87：全員で模擬戦（3戦目）

さて、この合宿の目玉合同模擬戦、第3戦目、組み合わせは。

青チーム、フロントアタッカー：良彦、ヴィータ、ヴィヴィオ、
アインハルト、ガードウイング：リオ、セレガ、ウイングバック：
コロナ、フルバック：ルーテシア。

赤チーム、フロントアタッカー：スバル、ノーヴェ、ガードウイ
ング：フェイト、エリオ、セイン、センターガード：なのは、ティ
アナ、フルバック：キャロ。

という組み合わせである。

「…なあ、これかたよってね？」

「そんなことないよ、よしくとヴィータちゃん一緒だと戦力が
一気にあがるし」

「いいじゃねーか、良彦、これでどかんといけるってもんだ」

ちなみに、最終戦なので、二人のフルバックはフリードとガリユ
ーを役とする気満々らしく、キャロはフリードに跨り、ルーテシア
はガリユーをそばにしている。

「…まあ、いいか…んじゃ始めるか」

折角の模擬戦、余りうだうだ言っても仕方ないと思ったか良彦も
納得し、位置に付く。

今回銅鑼を鳴らすのはメガーヌだ、克信は疲れたのか寝てしまっ

たらしく、セプトが通常モードで観戦しており、その後ベビーベクトで克信が寝てるのが見える。

「ごわーん」という銅鑼の音が響く、そんな中克信は気持ち良さそうに寝たままだ、大物になりそうである。

開始の合図と共に、赤チーム側から2本の道が伸びる、ウィングロードとエアライナーだ。

縦横無尽に走る道を疾走してくる青髪と赤髪の姉妹。

「ヴィヴィオ、アインハルトあの二人は任せる」

「はい」

良彦は一声かけ、空からなのはへと向かう、ヴィータはフェイトだ。

リオはセイン、セレガはエリオ、コロナはティアナへと向かっていく、それぞれに防御魔法をかけるルーテシア、キャロ。

「さて、一番相手したくねーけど、久しぶりにいくか、なのは」

「それはこつちもなんだけどね、近づかれると捌ききるのきついから」

空中で距離を保ち、向かい合う良彦となのは。

なのはの周囲には、いくつものスフィアが浮かんでいる、あれ一個から誘導弾や直線射撃魔法が飛んでくるので、油断はできない。

そもそも、なのは、フェイトクラス相手に『風』での打ち消しは効かない、威力を弱め、少し時間を稼ぐ程度だ。

弾幕の間をくぐりぬけ、接近するしかないのだが、なのはは運動

神経切れてる癖に、空間把握能力は高く、普通に回避しても近づけないという厄介さ。

「とはいえ、見合いしてもしかたねーしなっ！」

ぐんつと飛行速度を上げ、接近しようとする良彦に、なのはが直ぐに対応する。

最初に進路上に数発直射射撃をうちこみ、回避予想位置に誘導弾を即座に打ち出している。

「つたく、相変わらず厄介なっ！」

正面に来た直射弾を弱め、幾つか『弾き』消して進もうとするが、その間に誘導弾が各所から良彦に向かってくる。

「よしくんはちかづけさせないよっ！」

誘導弾を『捌き』ながら体勢を立て直そうとするも、其処へショートバスター、桃色の砲撃が良彦の正面から放たれる。ぎりぎりでショートバスターを『貫き』によりかわし、進もうとする其処へ既に次の直射弾。

「本気で近づけさせねー気だろ、お前！」

「だから、そういつてるよー！」

上空、桃色の弾幕が花火のように張られ、良彦は防御で精一杯だ。他の場所もほぼ互角か、コロナが苦戦しているがフェイトの相手をしながらヴィータが少しフォローを入れている様子だ。

「ち、何時までもこのままじゃギリ貧か…なら、ゼピュロス、モードツヴァイ」

『了解、モードエウロス』

「前面に厚く壁を作る、行くぞ」

『了解、カートリッジロード』

カートリッジを2発ロードし、自分の正面に青いシールドとそれに沿わせて強い風を生み出す。

「『貫き』」

桃色の弾幕のなか、シールドと風の結界を纏った良彦が弾幕を弾きながら突進…其処へ正面から砲撃を打ち込むのは。

「くうっ…まだまだっ！」

更にカートリッジを2発ロードし、青いシールドが輝きを増して砲撃に耐える。

「レイジングハート！」

『了解、カートリッジロード』

其処へ、なのはもカートリッジロード、砲撃が太さを増してシールドを打ち砕く、が…次の瞬間なのはの上に影。

なのはが見れば、そこにいるのは良彦で、からだの数箇所地被弾した跡が見られる。

「相変わらず、射砲撃はでたらめだなっ」

上から振り下ろされる拳に、レイジングハートを向け、すぐさま対応するなのは。

「風拳・圧！」

「エクセリオンバスター！」

経験則からか、なのはの選択は超至近でのバスター、バインド系は『凧』で消される方が早いのだ。

拳と砲撃が交差する…その後に残っているのは、なのは…良彦は懐に飛び込む時に、シールドの影から飛び出し誘導弾を数発受けていた、それがダメージの大きさを分けた結果だ。

良彦はライフポイント0でノックダウン、なのはは一撃で2000ほど持っていかれるもそれまで無傷だった為残り500。

「だー、くそっ…浅かったか」

「一瞬遅かったら相打ちか、こっちが落ちてたかも、危なかった」

其処からは赤組が優勢に試合を運ぶ、なのはがフリーになったので、援護射撃がしつかりと安定し、均衡を破って行ったのだ。

結果、3戦目は赤組が勝利、ウィータもフェイトとなのは二人がかりで落とされる結果になった。

で、3戦終わってその後…大人組みは風呂でゆっくりと疲れを癒し、子供組み…ヴィヴィオ、アインハルト、コロナ、リオ、セラガ…は、全身筋肉痛でダウンしている。

「とうか、3戦程度でそれかお前ら？」

風呂上りで様子を見に来た良彦、外見的には子供組みだが、全く疲れた様子は無く、苦笑している。

「うう、なんでよくんたちは、平気なの？」

一緒に来ていたヴィータ、ルーテシアにヴィヴィオが問いかけ。

「それが年の功ってやつかな？」

「つか、後先考えねーからだろ、子供は」

ルーテシア、ヴィータが簡潔に答えるなか、筋肉痛に呻きを上げる子供達。

「ま、明日には回復してんだろ、ゆっくり休んどけ」

ぼんぼんとヴィヴィオの頭を撫で、子供達にそういつて、部屋を出て行く。

ヴィータも一緒に出て行き、ルーテシアは一応看病役として残った様子だ。

合同合宿一番の目玉、団体模擬戦はこうして終了した。

87：全員で模擬戦（3戦目）（後書き）

様々な個人的理由で遅くなりましたが、3戦目です。

格闘戦だけ、しか出来ない良彦には、射砲撃メインのなのは天敵です。

以前も書きましたが、はやてはレンジが違いすぎるので除外しますが。

今回は、オリジナルの話しか、大会関連の話し…もしくは、此方のペースを落とし、以前言っていた新作を始めるかも知れません。

88：朝の風景

模擬戦3戦を行った翌日、朝早くからランニングなどを良彦がしている、声が掛かる。

「おはよう、よしくん」

「おはようございます、良彦さん」

「おはよー、良彦さん」

「おはようございます、師匠」

「おはよう、良彦さん」

みれば、ヴィヴィオ、アインハルト、リオ、コロナ、セレガが揃って体操でもしてたのか、動きやすそうな格好で、薄っすらと汗をかいてるようだ。

「おす、朝から体操か？…てか、コロナ師匠はやめろ、普通でいいから」

「はい、良彦さん」

「まだ一寸筋肉痛だけど、少し動かした方がいいらしいから」

「なるほどな…ふむ」

ヴィヴィオの言葉に少し考え込み…。

「なら、軽く動き見てやるうか？」

「え、いいの？」

「ただ、コロナ以外は助言程度しか出来ないぞ、そもそも流派が違うから」

「それでも、高レベルの格闘型魔導師の言葉は参考になります」

ヴィヴィオ、アインハルトがそういつて、構える。

「んじゃ、ヴィヴィオとアインハルトはそのまま組み手、リオ、セレガお前らもやってみろ…コロナはまず、理論的な部分から教えるから、今回は見学な」

「はい」

「よし、それじゃセレガ行くよ」

「ん、いいよりオ」

そういつて、魔法なしでの組み手が始まる。

ヴィヴィオとアインハルト組み、お互いに打ち合いながらヴィヴィオのカウンターが決まったりするが、地力はアインハルトが上だ。リオとセレガ組み、こちらは動きの早いリオがセレガを翻弄するようみえて、セレガはしっかりその動きを見切り、カウンター…どうやらセレガもカウンターヒッターらしい。

「いいか、いまは皆の動きを、力の掛かり方とかよく見とけよ、

力の流れが大事だからな」

「はい、良彦さん」

そういわれたコロナはじっと皆を見つめている。

で、暫くして相手も変えながら続けていた組み手も終了。

「おし、んじゃ集まれ」

「ふむ、主らこれを飲むとよかるう」

と、いつの間にか来たセプト…フルサイズ…が、皆にスポーツドリンク差出。

「ありがとう、セプト」

ヴィヴィオが代表で礼をいって、皆受け取る。

「んじゃ、ヴィヴィオとセレガからな…二人ともカウンターを意識しすぎで、偶に動きが遅いときがある、その癖はなした方がいいぞ」

「えー、そんな所あつたかな？」

「…どこら辺でしょう？」

「ゼピュロス、頼む」

『了解』

ゼピュロスから組み手の画像が映し出され。

「此処とか、此処な」

それぞれの動き、微妙な物だがそれを指摘して行く。

「あつ、確かにそうかも」

「これは…否定できない」

「で、アインハルトは…やっぱ、攻撃が素直すぎるな、これは皆にもいえるが」

「素直ですか？」

「お前ら、正面からの打ち合いが多すぎる、それだと相手に読まれやすいぞ…フェイントやらを混ぜないとな」

「気をつけてみます」

「最後、リオだな…速度、威力は十分なんだが、技が一寸荒いか、もう少し一個一個の技を練習した方がいいぞ」

「はいっ！」

「総評としては、その年でそれだけできれば、まあ合格だけだな」

そついわれれば4人も嬉しそつだ。

「で、コロナどうだった…皆の動きを見て、力の流れはわかったか」

「な、なんとなくですけど…」

「んじゃ、合い気の基本な…相手の力に逆らわず利用する事、まずはこれだ…そつだな、軽くパンチしてきてみる」

「は、はい…それじゃいきます！」

ステップから結構鋭いストレートを放つコロナ…その腕をつかみ、小手をかえして、力の方向をかえれば…コロナはパンチの勢いでころつと一回転、叩きつけられる前に良彦が腕をひいて、ぽすんとお尻から落ちる。

「ふえ？」

「どうだ、いまのどうなつたか判るか？」

「ええと…パンチしたらなげられてました」

地面に矢印を書きながら…

「パンチがこうきたよな、俺はこれをこうずらしたわけだ」

矢印は真つ直ぐだったのを書き直し、先が下に向けられる。

「…力の向きが変わつたから、パンチと踏み込みの力が、投げの

力に？」

「ま、そんな感じだ…理屈はな、後は何度も練習していけば、段々と理解は深まるだろ」

「はい」

「主ら、そろそろ食事になるがいかんのか？」

と、其処へセプトが声を掛ける。

「っと、もうこんな時間か、よし飯に行くぞ」

「……はい！」「……」

朝から身体を動かした子供達は結構食べた、はずだが…それ以上に食べるのが二人ほどいたので余り目だつてなかったとか。

88：朝の風景（後書き）

思いつきり遅れましたが、最新話を書きました。

子供組みに対して少しでもだけアドバイスとコロナには基本中の基本だけを教えて、本格的には次回以降の予定です。

しばらくは、トーナメントに向けた修行の話とか入れようと思います。

また、セレガの話も書いていこうと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8696s/>

鉄槌と清風

2011年9月27日15時20分発行